

平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



調査地遠景（南西より 京都タワー展望台より撮影）



1 2区第1面地業2700 (東から)



2 2区第2面土坑2525 (西から)



1 3区第1面南西部甕列（東から）



2 3区第2面土坑8458（北西から）



1 2区土坑5699出土白磁皿



2 金属製品生産に関連する土製品

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、開発計画に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和元年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

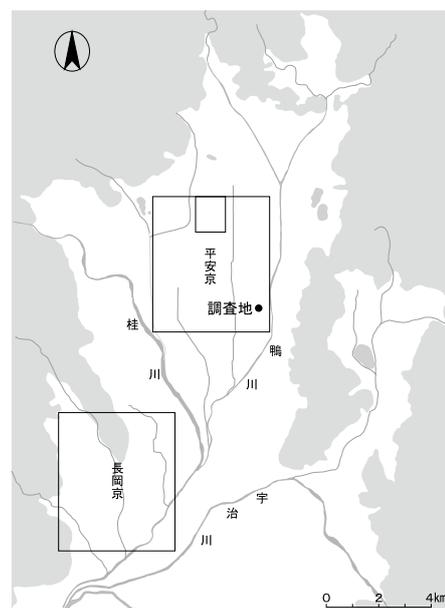
例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・御土居跡（京都市番号 14 H 203）
- 2 調査所在地 京都市下京区七条通間之町東入材木町503番地他
- 3 委 託 者 コメット有限会社 取締役 野呂安男
- 4 調査期間 1次調査：2015年5月7日～2015年11月24日
2次調査：2018年2月1日～2018年9月30日
- 5 調査面積 4,050㎡（1次調査：2,139㎡、2次調査：1,911㎡）
- 6 調査担当者 1次調査：南 孝雄・辻 裕司・近藤奈央・山下大輝・竹本 晃・李 銀眞
2次調査：山本雅和・小檜山一良・後川恵太郎
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」・「五条大橋」・「梅小路」・「京都駅」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。また、細分が必要な場合は英文字（A・B…）で枝番を付した。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 山本雅和
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・整理にあたっては下記の方々からご教示をいただいた。記して感謝を申し上げます。

五十川伸矢、伊野近富、小野映介、尾野善裕、北野信彦、國下多美樹、柴田圭子、菅田 薫、鈴木久男、竹森友子、續 伸一郎、中塚 武、中村耕治、西川寿勝、西山良平、丹羽崇史、橋本久和、早島大祐、平尾政幸、福島克彦、丸山真史、李 貞、吉川義彦、吉野秋二

（敬称略 50音順）

（調査地点図）



目 次

第1章 調査の経過	1
第2章 遺 跡	4
1. 遺跡の位置と環境	4
2. 周辺の調査	5
第3章 遺 構	9
1. 1区の調査	10
(1) 層序と遺構の概要	10
(2) 第1面の遺構	10
(3) 第2面の遺構	11
(4) 第3面の遺構	11
(5) 第4面の遺構	12
2. 2区の調査	13
(1) 層序と遺構の概要	13
(2) 第1面の遺構	13
(3) 第2面の遺構	17
(4) 第3面の遺構	20
(5) 第4面の遺構	22
3. 3区の調査	22
(1) 層序と遺構の概要	22
(2) 第1面の遺構	23
(3) 第2面の遺構	28
(4) 第3面の遺構	32
第4章 遺 物	34
1. 遺物の概要	34
2. 土器・陶磁器	35
(1) 弥生時代から奈良時代	35
(2) 平安時代前期から中期	39
(3) 平安時代後期から鎌倉時代前半	44
(4) 鎌倉時代後半から室町時代前期	54
(5) 室町時代中期から後期	65
(6) 安土桃山時代から江戸時代	68
(7) その他の土器・陶磁器	70

3. 瓦	90
(1) 平安時代前期から中期	90
(2) 平安時代後期	92
(3) 鎌倉時代から室町時代	98
(4) 江戸時代	103
4. 土製品	107
5. 石製品	116
6. ガラス製品	120
7. 金属製品	121
(1) 銅製品	121
(2) 鉄製品	126
(3) 金属滓	127
8. 木製品	128
9. 動植物遺体	131
10. その他の出土遺物	131
第5章 まとめ	133
1. 遺構の変遷	133
2. 遺構の検討	142
3. 遺物の検討	146
付章1 平安京左京八条四坊一町跡におけるトレンチ断面の観察結果	149
付章2 平安京左京八条四坊一町跡出土の金属製品及び鑄造関連資料分析調査	151
付章3 平安京左京八条四坊一町跡出土の動物遺存体	167

図 版 目 次

巻頭図版1	遺構	調査地遠景（南西より 京都タワー展望台より撮影）
巻頭図版2	遺構	1 2区第1面地業2700（東から） 2 2区第2面土坑2525（西から）
巻頭図版3	遺構	1 3区第1面南西部甕列（東から） 2 3区第2面土坑8458（北西から）
巻頭図版4	遺物	1 2区土坑5699出土白磁皿 2 金属製品生産に関連する土製品

図版 1	遺構	調査区配置図 (1 : 600)
図版 2	遺構	1 区北壁断面図 (1 : 30)
図版 3	遺構	1 区西壁断面図 (1 : 30)
図版 4	遺構	1 区遺構平面図割付図 (1 : 300)
図版 5	遺構	1 区第 1 面遺構平面図 1 (1 : 100)
図版 6	遺構	1 区第 1 面遺構平面図 2 (1 : 100)
図版 7	遺構	1 区第 2 面遺構平面図 1 (1 : 100)
図版 8	遺構	1 区第 2 面遺構平面図 2 (1 : 100)
図版 9	遺構	1 区第 3 面遺構平面図 1 (1 : 100)
図版 10	遺構	1 区第 3 面遺構平面図 2 (1 : 100)
図版 11	遺構	1 区第 4 面遺構平面図 1 (1 : 100)
図版 12	遺構	1 区第 4 面遺構平面図 2 (1 : 100)
図版 13	遺構	1 区第 1 面土坑 8 実測図 (1 : 20)
図版 14	遺構	1 区第 1 面土坑 12・土坑 115・土坑 178 遺物出土状況図 (1 : 20)
図版 15	遺構	1 区第 2 面土坑 221・土坑 274 実測図 (1 : 20)、 土坑 195・土坑 263 遺物出土状況図 (1 : 20)
図版 16	遺構	1 区第 3 面井戸 452・井戸 611 実測図 (1 : 40)、 第 4 面土坑 724・土坑 728 遺物出土状況図 (1 : 20)
図版 17	遺構	2 区北壁・東壁断面図 (1 : 30)
図版 18	遺構	2 区南壁・西壁断面図 (1 : 30)
図版 19	遺構	2 区遺構平面図割付図 (1 : 300)
図版 20	遺構	2 区第 1 面遺構平面図 1 (1 : 100)
図版 21	遺構	2 区第 1 面遺構平面図 2 (1 : 100)
図版 22	遺構	2 区第 1 面遺構平面図 3 (1 : 100)
図版 23	遺構	2 区第 1 面遺構平面図 4 (1 : 100)
図版 24	遺構	2 区第 1 面遺構平面図 5 (1 : 100)
図版 25	遺構	2 区第 1 面遺構平面図 6 (1 : 100)
図版 26	遺構	2 区第 2 面遺構平面図 1 (1 : 100)
図版 27	遺構	2 区第 2 面遺構平面図 2 (1 : 100)
図版 28	遺構	2 区第 2 面遺構平面図 3 (1 : 100)
図版 29	遺構	2 区第 2 面遺構平面図 4 (1 : 100)
図版 30	遺構	2 区第 2 面遺構平面図 5 (1 : 100)
図版 31	遺構	2 区第 2 面遺構平面図 6 (1 : 100)
図版 32	遺構	2 区第 3 面遺構平面図 1 (1 : 100)
図版 33	遺構	2 区第 3 面遺構平面図 2 (1 : 100)

- 図版34 遺構 2区第3面遺構平面図3 (1:100)
- 図版35 遺構 2区第3面遺構平面図4 (1:100)
- 図版36 遺構 2区第3面遺構平面図5 (1:100)
- 図版37 遺構 2区第3面遺構平面図6 (1:100)
- 図版38 遺構 2区第4面遺構平面図1 (1:100)
- 図版39 遺構 2区第4面遺構平面図2 (1:100)
- 図版40 遺構 2区第4面遺構平面図3 (1:100)
- 図版41 遺構 2区第1面地業2777実測図 (1:30)
- 図版42 遺構 2区第1面地業2700実測図1 (1:40)
- 図版43 遺構 2区第1面地業2700実測図2 (1:40)
- 図版44 遺構 2区第1面建物1実測図1 (1:40)
- 図版45 遺構 2区第1面建物1実測図2 (1:40)
- 図版46 遺構 2区第1面柱穴列1・柱穴列2実測図 (1:40)
- 図版47 遺構 2区第1面柱穴列3・柱穴列4実測図 (1:40)
- 図版48 遺構 2区第1面柱穴列5・柱穴列6実測図 (1:40)
- 図版49 遺構 2区第1面土坑2815・土坑2157実測図 (1:20)
- 図版50 遺構 2区第1面土坑3715・2861実測図 (1:20)
- 図版51 遺構 2区第1面土坑2223・2224実測図 (1:20)、カマド3065実測図 (1:40)
- 図版52 遺構 2区第1面井戸2333・井戸2185・井戸2017・土坑2349実測図 (1:40)
- 図版53 遺構 2区第1面土坑2137・土坑2442・土坑2501・土坑2143・土坑2752・2905
遺物出土状況図 (1:20)
- 図版54 遺構 2区第1面土坑3175・土坑2222・土坑2643・土坑2816遺物出土状況図 (1:20)
- 図版55 遺構 2区第2面土坑3720実測図 (1:20)
- 図版56 遺構 2区第2面地業4900上層実測図 (1:40)
- 図版57 遺構 2区第2面地業4900下層実測図 (1:40)
- 図版58 遺構 2区第2面土坑4910・土坑4080・土坑3542・土坑4389実測図 (1:20)
- 図版59 遺構 2区第2面井戸3207・井戸3721・井戸3507・井戸3550実測図 (1:40)
- 図版60 遺構 2区第2面カマド4840実測図 (1:40)、
土坑5040遺物出土状況実測図 (1:6)
- 図版61 遺構 2区第2面土坑2525遺物出土状況図 (1:40)
- 図版62 遺構 2区第2面土坑4829・土坑3335・土坑4017・土坑4385遺物出土状況図 (1:20)
- 図版63 遺構 2区第2面土坑4213・土坑3724・土坑4847遺物出土状況図 (1:20)
- 図版64 遺構 2区第2面土坑4130・土坑3638・土坑4420・土坑3196遺物出土状況図 (1:20)
- 図版65 遺構 2区第3面井戸4587・井戸5338・井戸5407・井戸5665実測図 (1:40)
- 図版66 遺構 2区第3面土坑5570・土坑5699・土坑5709・井戸5407遺物出土状況図 (1:20)、

土坑4638実測図（1：20）

- 図版67 遺構 2区第3面土坑5669・土坑5146遺物出土状況図（1：20）、
土坑5227断面図（1：30）
- 図版68 遺構 2区第4面建物2実測図（1：60）
- 図版69 遺構 3区北壁断面図（1：30 南北方向部分を含む）
- 図版70 遺構 3区南壁・西壁断面図（1：30）
- 図版71 遺構 3区中央セクション断面図（1：50）
- 図版72 遺構 3区遺構平面図割付図（1：300）
- 図版73 遺構 3区第1面遺構平面図1（1：100）
- 図版74 遺構 3区第1面遺構平面図2（1：100）
- 図版75 遺構 3区第1面遺構平面図3（1：100）
- 図版76 遺構 3区第1面遺構平面図4（1：100）
- 図版77 遺構 3区第1面遺構平面図5（1：100）
- 図版78 遺構 3区第1面遺構平面図6（1：100）
- 図版79 遺構 3区第2面遺構平面図1（1：100）
- 図版80 遺構 3区第2面遺構平面図2（1：100）
- 図版81 遺構 3区第2面遺構平面図3（1：100）
- 図版82 遺構 3区第2面遺構平面図4（1：100）
- 図版83 遺構 3区第2面遺構平面図5（1：100）
- 図版84 遺構 3区第2面遺構平面図6（1：100）
- 図版85 遺構 3区第3面遺構平面図（1：300）
- 図版86 遺構 3区第1面建物3実測図（1：40）
- 図版87 遺構 3区第1面柱穴列7実測図（1：40）
- 図版88 遺構 3区第1面柱穴列8・柱穴列9実測図（1：40）
- 図版89 遺構 3区第1面柱穴列10実測図（1：40）
- 図版90 遺構 3区第1面柱穴列11・柱穴列12実測図（1：40）
- 図版91 遺構 3区第1面北西部甕列平面図（1：80）
- 図版92 遺構 3区第1面北西部甕列断面図1（1：40）
- 図版93 遺構 3区第1面北西部甕列断面図2（1：40）
- 図版94 遺構 3区第1面南西部甕列平面図（1：80）
- 図版95 遺構 3区第1面南西部甕列断面図1（1：40）
- 図版96 遺構 3区第1面南西部甕列断面図2（1：40）
- 図版97 遺構 3区第1面南西部甕列断面図3（1：40）
- 図版98 遺構 3区第1面南西部甕列断面図4（1：40）
- 図版99 遺構 3区第1面南西部甕列断面図5（1：40）

- 図版100 遺構 3区第1面池7479実測図(1:40)
- 図版101 遺構 3区第1面土坑6309・土坑7135・7136実測図(1:20)
- 図版102 遺構 3区第1面井戸6379・井戸6321・井戸6375・井戸6222実測図(1:40)
- 図版103 遺構 3区第1面井戸6385・井戸7334・井戸6662・井戸6380実測図(1:40)
- 図版104 遺構 3区第1面土坑6188実測図(1:40)
- 図版105 遺構 3区第1面土坑7553・土坑7486・土坑6556・土坑7415遺物出土状況図(1:20)
- 図版106 遺構 3区第1面土坑6145・6148・土坑7627遺物出土状況図(1:20)
- 図版107 遺構 3区第1面土坑7963・土坑6801遺物出土状況図(1:20)、
土坑6152実測図(1:20)
- 図版108 遺構 3区第2面柱穴列13・柱穴列14実測図(1:40)
- 図版109 遺構 3区第2面井戸7482・土坑8053・溝9011実測図(1:60)
- 図版110 遺構 3区第2面土坑8458実測図(1:40)
- 図版111 遺構 3区第2面土坑8962・土坑9061・9062実測図(1:40)
- 図版112 遺構 3区第2面土坑9158・土坑9197・土坑9119実測図(1:20)
- 図版113 遺構 3区第2面井戸8172・井戸9215・井戸8558・井戸8204実測図(1:40)
- 図版114 遺構 3区第2面井戸8436・井戸8470・井戸8474・井戸9207実測図(1:40)
- 図版115 遺構 3区第2面土坑8019・8020遺物出土状況図(1:20)
- 図版116 遺構 3区第2面土坑8856・土坑8786・土坑8857・土坑9385遺物出土状況図(1:20)
- 図版117 遺物 古墳時代土器、2区土坑1213出土土器実測図(1:4)
- 図版118 遺物 飛鳥時代土器、3区土坑9379出土土器実測図(1:4)
- 図版119 遺物 3区土坑8598・3区土坑8709出土土器、1段階土器実測図(1:4)
- 図版120 遺物 1区井戸776・1区土坑706・3区土坑8857出土土器実測図(1:4)
- 図版121 遺物 2区土坑5709・3区土坑6801・3区井戸9297・3区土坑8841出土土器実測図
(1:4)
- 図版122 遺物 2区土坑5227出土土器実測図(1:4)
- 図版123 遺物 3区土坑6145・3区土坑6148出土土器実測図(1:8)
- 図版124 遺物 2区土坑3196・3区土坑8671・2区土坑3251・2区土坑5602出土土器実測図
(1:4)
- 図版125 遺物 3区土坑8852出土土器実測図(1:4)
- 図版126 遺物 3区井戸8917・2区井戸5407出土土器実測図(1:4)
- 図版127 遺物 1区土坑178・2区井戸4342出土土器実測図(1:4)
- 図版128 遺物 2区土坑4017・1区土坑115出土土器実測図(1:8)
- 図版129 遺物 2区土坑5699・3区南西部甕列出土土器実測図(1:4、1:8)
- 図版130 遺物 3区土坑8020・3区土坑8019・1区土坑12・2区土坑2222出土土器実測図
(1:4)

- 図版131 遺物 2区地業2700・2区土坑2525出土土器実測図(1:4)
- 図版132 遺物 2区土坑3175・2区土坑3724・3区土坑7627出土土器実測図(1:4)
- 図版133 遺物 3区土坑6556・2区土坑2137・3区土坑7553出土土器実測図(1:8)
- 図版134 遺物 3区北西部甕列(土坑7413・土坑7414)出土土器実測図(1:8)
- 図版135 遺物 3区北西部甕列(土坑7415・土坑8357)出土土器実測図(1:4、1:8)
- 図版136 遺物 2区土坑4213・3区土坑6107出土土器実測図(1:4)
- 図版137 遺物 3区井戸8551出土土器実測図(1:4)
- 図版138 遺物 2区地業4900・3区土坑6111出土土器実測図(1:4)
- 図版139 遺物 2区土坑2225・2区土坑3144・2区井戸2017・3区土坑7963出土土器実測図
(1:4)
- 図版140 遺物 3区井戸8480・3区井戸6375・3区溝7774出土土器実測図(1:4)
- 図版141 遺物 その他の出土土器実測図1(1:4)
- 図版142 遺物 その他の出土土器実測図2(1:4)
- 図版143 遺物 その他の出土土器実測図3(1:4)
- 図版144 遺物 その他の出土土器実測図4(1:4)
- 図版145 遺物 その他の出土土器実測図5(1:4)
- 図版146 遺物 その他の出土土器実測図6(1:4)
- 図版147 遺物 その他の出土土器実測図7(1:4)
- 図版148 遺物 瓦拓影及び実測図1(1:4)
- 図版149 遺物 瓦拓影及び実測図2(1:4)
- 図版150 遺物 瓦拓影及び実測図3(1:4)
- 図版151 遺物 瓦拓影及び実測図4(1:4)
- 図版152 遺物 瓦拓影及び実測図5(1:4)
- 図版153 遺物 瓦拓影及び実測図6(1:4)
- 図版154 遺物 瓦拓影及び実測図7(1:4)
- 図版155 遺物 瓦拓影及び実測図8(1:4)
- 図版156 遺物 瓦拓影及び実測図9(1:4)
- 図版157 遺物 瓦拓影及び実測図10(1:4)
- 図版158 遺物 瓦拓影及び実測図11(1:4)
- 図版159 遺物 瓦実測図12(1:4)
- 図版160 遺物 瓦拓影及び実測図13(1:4)
- 図版161 遺物 瓦実測図14(1:4)
- 図版162 遺物 瓦拓影及び実測図15(1:4)
- 図版163 遺物 瓦拓影及び実測図16(1:4)
- 図版164 遺物 瓦拓影及び実測図17(1:4)

- 図版165 遺物 土製品実測図1 (1 : 4)
- 図版166 遺物 土製品実測図2 (1 : 2)
- 図版167 遺物 土製品実測図3 (1 : 4)
- 図版168 遺物 土製品実測図4 (1 : 4)
- 図版169 遺物 土製品実測図5 (1 : 4)
- 図版170 遺物 土製品実測図6 (1 : 4)
- 図版171 遺物 土製品実測図7 (1 : 4)
- 図版172 遺物 土製品実測図8 (1 : 4)
- 図版173 遺物 土製品実測図9 (1 : 4)
- 図版174 遺物 石製品実測図1 (1 : 4)
- 図版175 遺物 石製品実測図2 (1 : 4)
- 図版176 遺物 石製品実測図3 (1 : 4)
- 図版177 遺物 石製品実測図4 (1 : 4)
- 図版178 遺物 石製品実測図5 (1 : 8)
- 図版179 遺物 石製品実測図6 (1 : 8)
- 図版180 遺物 金属製品実測図 (1 : 2)
- 図版181 遺物 金属製品(銭貨)拓影 (1 : 2)
- 図版182 遺物 木製品実測図1 (1 : 4)
- 図版183 遺物 木製品実測図2 (1 : 6)
- 図版184 遺構
- 1 1区北壁断面(南から)
 - 2 1区西壁断面(東から)
- 図版185 遺構
- 1 1区第1面全景(北から)
 - 2 1区第1面土坑8(北から)
- 図版186 遺構
- 1 1区第1面土坑12遺物出土状況(北から)
 - 2 1区第1面土坑178遺物出土状況(東から)
 - 3 1区第1面土坑115遺物出土状況(西から)
- 図版187 遺構
- 1 1区第2面全景(北から)
 - 2 1区第2面土坑274(北から)
 - 3 1区第2面土坑195遺物出土状況(北から)
- 図版188 遺構
- 1 1区第3面全景(北から)
 - 2 1区第3面井戸452(西から)
 - 3 1区第3面井戸611(北から)
- 図版189 遺構
- 1 1区第3面井戸695(北から)
 - 2 1区第3面井戸695遺物出土状況(北から)
 - 3 1区第3面井戸517遺物出土状況(北東から)

- 図版190 遺構 1 1区第4面全景（北から）
 2 1区第4面土坑728遺物出土状況（北から）
 3 1区第4面土坑724遺物出土状況（東から）
- 図版191 遺構 1 2区東壁断面（西から）
 2 2区南壁断面（北から）
- 図版192 遺構 1 2区第1面全景（南東から）
 2 2区第1面全景（北東から）
- 図版193 遺構 1 2区第1面南半部（東から）
 2 2区第1面地業2700西半部部分半裁（北西から）
- 図版194 遺構 1 2区第1面建物1（東から）
 2 2区第1面建物1（北から）
- 図版195 遺構 1 2区第1面地業2777（東から）
 2 2区第1面地業2777完掘状況（北東から）
- 図版196 遺構 1 2区第1面北半部（東から）
 2 2区第1面柱穴列4（東から）
 3 2区第1面柱穴列1（北東から）
- 図版197 遺構 1 2区第1面南西部（東から）
 2 2区第1面土坑2223・2224（北から）
- 図版198 遺構 1 2区第1面カマド3065（北西から）
 2 2区第1面土坑2945（北東から）
- 図版199 遺構 1 2区第1面井戸2333（北から）
 2 2区第1面井戸2185（北から）
 3 2区第1面土坑2349（東から）
 4 2区第1面井戸2017完掘状況（北東から）
- 図版200 遺構 1 2区第1面土坑2137遺物出土状況（東から）
 2 2区第1面土坑2501遺物出土状況（東から）
 3 2区第1面土坑2752・2903遺物出土状況（北西から）
- 図版201 遺構 1 2区第1面土坑3175遺物出土状況（北から）
 2 2区第1面土坑2222遺物出土状況（北西から）
 3 2区第1面土坑2643遺物出土状況（西から）
 4 2区第1面土坑2816遺物出土状況（東から）
- 図版202 遺構 1 2区第2面全景（南東から）
 2 2区第2面全景（北東から）
- 図版203 遺構 1 2区第2面地業4900（東から）
 2 2区第2面地業4900半裁（東から）

- 図版204 遺構 1 2区第2面土坑4910（北から）
 2 2区第2面土坑3542（東から）
 3 2区第2面井戸3507（東から）
 4 2区第2面井戸3550（北西から）
- 図版205 遺構 1 2区第2面土坑4829遺物出土状況（北から）
 2 2区第2面土坑4017遺物出土状況（西から）
 3 2区第2面土坑4804（東から）
 4 2区第2面土坑4978（北から）
- 図版206 遺構 1 2区第2面土坑4213遺物出土状況（東から）
 2 2区第2面土坑4130遺物出土状況（西から）
 3 2区第2面土坑3724遺物出土状況（東から）
 4 2区第2面土坑5040遺物出土状況（北から）
- 図版207 遺構 1 2区第3面全景（南東から）
 2 2区第3面南半部（北東から）
- 図版208 遺構 1 2区第3面北半部（東から）
 2 2区第3面北東部（北から）
- 図版209 遺構 1 2区第3面井戸4587（北から）
 2 2区第3面井戸5338（西から）
 3 2区第3面井戸5665（東から）
 4 2区第3面井戸5407遺物出土状況（南西から）
- 図版210 遺構 1 2区第3面土坑5699遺物出土状況（東から）
 2 2区第3面土坑5709遺物出土状況（北東から）
 3 2区第3面土坑5227遺物出土状況（北西から）
 4 2区第3面土坑4638（北から）
- 図版211 遺構 1 2区第4面北半部（西から）
 2 2区第4面建物2（北から）
- 図版212 遺構 1 3区北西部壁断面（南東から）
 2 3区西壁断面（北東から）
 3 3区南壁断面（北から）
- 図版213 遺構 1 3区第1面全景（北西から）
 2 3区第1面全景（南東から）
- 図版214 遺構 1 3区第1面溝7774・6288（西から）
 2 3区第1面溝6249（南東から）
 3 3区第1面柱穴列7（北から）
- 図版215 遺構 1 3区第1面北東部（西から）

- 2 3区第1面土坑7963遺物出土状況（西から）
- 3 3区第1面井戸6321（北西から）
- 図版216 遺構 1 3区第1面北西部甕列（北上から）
- 2 3区北壁2（北西部甕列）断面（南から）
- 図版217 遺構 1 3区第1面土坑7394・6229・7390検出状況（南東から）
- 2 3区第1面土坑7415遺物出土状況（南から）
- 3 3区第1面土坑7553遺物出土状況（西から）
- 図版218 遺構 1 3区第1面南西部甕列（北から）
- 2 3区第1面池7479（東から）
- 図版219 遺構 1 3区第1面土坑7135・7136（北から）
- 2 3区第1面土坑6152（北西から）
- 図版220 遺構 1 3区第1面井戸6379（南から）
- 2 3区第1面井戸6375（南東から）
- 3 3区第1面井戸6380（北東から）
- 4 3区第1面井戸6662（北から）
- 図版221 遺構 1 3区第1面土坑6556遺物出土状況（北から）
- 2 3区第1面土坑6145・6148遺物出土状況（東から）
- 3 3区第1面土坑7627遺物出土状況（西から）
- 4 3区第1面土坑6801遺物出土状況（西から）
- 5 3区第1面土坑6111遺物出土状況（南から）
- 図版222 遺構 1 3区第2面全景（北西から）
- 2 3区第2面全景（南から）
- 図版223 遺構 1 3区第2面土坑9158（東から）
- 2 3区第2面土坑9197（北から）
- 3 3区第2面土坑8962、土坑9062・9061（東から）
- 図版224 遺構 1 3区第2面井戸7482・土坑8053・溝9011（北上から）
- 2 3区第2面東部井戸群（西から）
- 図版225 遺構 1 3区第2面井戸6373断面（南東から）
- 2 3区第2面井戸8558半裁（南西から）
- 3 3区第2面井戸8474（東から）
- 4 3区第2面井戸9207（東から）
- 図版226 遺構 1 3区第2面土坑8019・8020遺物出土状況（北から）
- 2 3区第2面柱穴8026（東から）
- 3 3区第2面柱穴9228（東から）
- 4 3区第2面土坑8856遺物出土状況（東から）

- 5 3区第2面土坑9385遺物出土状況（南から）
- 6 3区第2面土坑8857遺物出土状況（北西から）
- 図版227 遺構 1 3区第3面全景（西から）
- 2 3区第3面流路9400（北東から）
- 図版228 遺構 1 3区第3面流路9400断面（南西から）
- 2 3区第3面土坑8409（南東から）
- 図版229 遺物 2区土坑1213（古墳時代）・飛鳥時代・3区土坑9379（奈良時代）出土土器
- 図版230 遺物 1区井戸776・3区土坑8857・2区土坑5709・3区土坑6801・3区井戸9297
ほか出土土器
- 図版231 遺物 2区土坑5227・2区土坑3196・3区土坑8671出土土器
- 図版232 遺物 1 3区土坑6145出土大甕
- 2 3区土坑6556出土大甕
- 3 3区土坑6148出土大甕
- 図版233 遺物 3区土坑8852出土土器
- 図版234 遺物 3区井戸8917・2区井戸5407出土土器
- 図版235 遺物 1区土坑178・2区井戸4342出土土器
- 図版236 遺物 1 3区北西部甕列（土坑8357）出土大甕
- 2 2区土坑4017出土大甕
- 3 3区土坑7553出土大甕
- 4 1区土坑115出土大甕
- 図版237 遺物 3区土坑8020・3区土坑8019・1区土坑12・2区土坑2222出土土器
- 図版238 遺物 2区土坑3175・2区土坑3724・3区土坑7627出土土器
- 図版239 遺物 3区土坑7415・2区土坑4213・3区土坑6107出土土器
- 図版240 遺物 2区土坑2225・2区井戸2017・3区井戸8480・3区井戸6375・3区溝7774
出土土器
- 図版241 遺物 1 銅銭を埋納した須恵器甕（2区土坑5040）
- 2 漆が付着した焼締陶器甕
- 3 漆布を貼り付けた焼締陶器甕
- 4 漆で補修した焼締陶器甕
- 5 焼締陶器甕底部の陶器片・粘土塊
- 図版242 遺物 1 線刻がある土師器皿
- 2 線刻がある灰釉陶器
- 3 緑彩陶器椀
- 4 線刻がある緑釉陶器
- 5 緑釉陶器火舎

- 図版243 遺物 1 白磁（輸入）
- 2 青磁・緑釉陶器・褐釉陶器（輸入）
- 図版244 遺物 瓦類1
- 図版245 遺物 瓦類2
- 図版246 遺物 瓦類3
- 図版247 遺物 瓦類4
- 図版248 遺物 瓦類5
- 図版249 遺物 瓦類6
- 図版250 遺物 土製品
- 図版251 遺物 石製品1
- 図版252 遺物 石製品2
- 図版253 遺物 金属製品
- 図版254 遺物 木製品1
- 図版255 遺物 木製品2
- 図版256 遺物 1 木製品3
- 2 動物遺存体

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	1区調査前全景（南から）	2
図3	2区調査前全景（北東から）	2
図4	3区調査前全景（北東から）	2
図5	3区機械掘削作業（北西から）	2
図6	3区遺構検出作業（北西から）	2
図7	2区遺構掘削作業（北から）	2
図8	3区遺構掘削作業（南西から）	2
図9	3区トータルステーションによる測量（北西から）	2
図10	周辺調査位置図（1：5,000）	6
図11	3区第3面土坑8409実測図（1：40）	32
図12	弥生土器実測図（1：4）	35
図13	墨が付着した土師器皿	72
図14	漆が付着した土師器皿	72

図15	墨書・朱書土器・陶磁器実測図（1：4）	89
図16	ガラス製品実測図（1：1）	121
図17	鉄製品実測図（1：4）	126
図18	銅滓	128
図19	鉄滓	128
図20	漆器碗	129
図21	遺構概要図1（平安京造営前 1：500）	134
図22	遺構概要図2（平安時代前期から中期 1：500）	135
図23	遺構概要図3（平安時代後期から鎌倉時代前半 1：500）	136
図24	遺構概要図4（鎌倉時代後半から室町時代前期 1：500）	138
図25	遺構概要図5（室町時代中期から後期 1：500）	140
図26	遺構概要図6（安土桃山時代から江戸時代 1：500）	141
図27	七条道場金光寺全図（明治年間）	143
図28	境内諸堂建物絵図（天明八年）	144

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	7
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	34

平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡

第1章 調査の経過

今回の調査は、コメント有限会社による下京区七条通間之町東入材木町における開発計画に伴う発掘調査である。

調査地は平安京左京八条四坊一町跡及び御土居跡にあたっており、これまでも周辺の調査で多数の遺構が見つかったことから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」とする）が試掘調査を実施したところ、平安時代から室町時代の遺構面が良好な状況で残されていることが確認された。これを受けて文化財保護課は、コメント有限会社に対して埋蔵文化財発掘調査の指導を行い、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を担当することとなった。

平安京左京八条四坊一町は北を七条大路、西を東洞院大路、南を塩小路、東を高倉小路に囲まれた範囲で、今回の調査地はその北半部約2分の1町の広い面積が対象となる。また、調査地東端には豊臣秀吉が築造した御土居跡が南北方向に推定されている。

調査区は文化財保護課の指導に基づき、東から西へ順に1区、2区、3区となる3箇所を設定した。1区は南北約34m、東西約11mの長方形で面積は374㎡である。2区は南北約50m、東西約

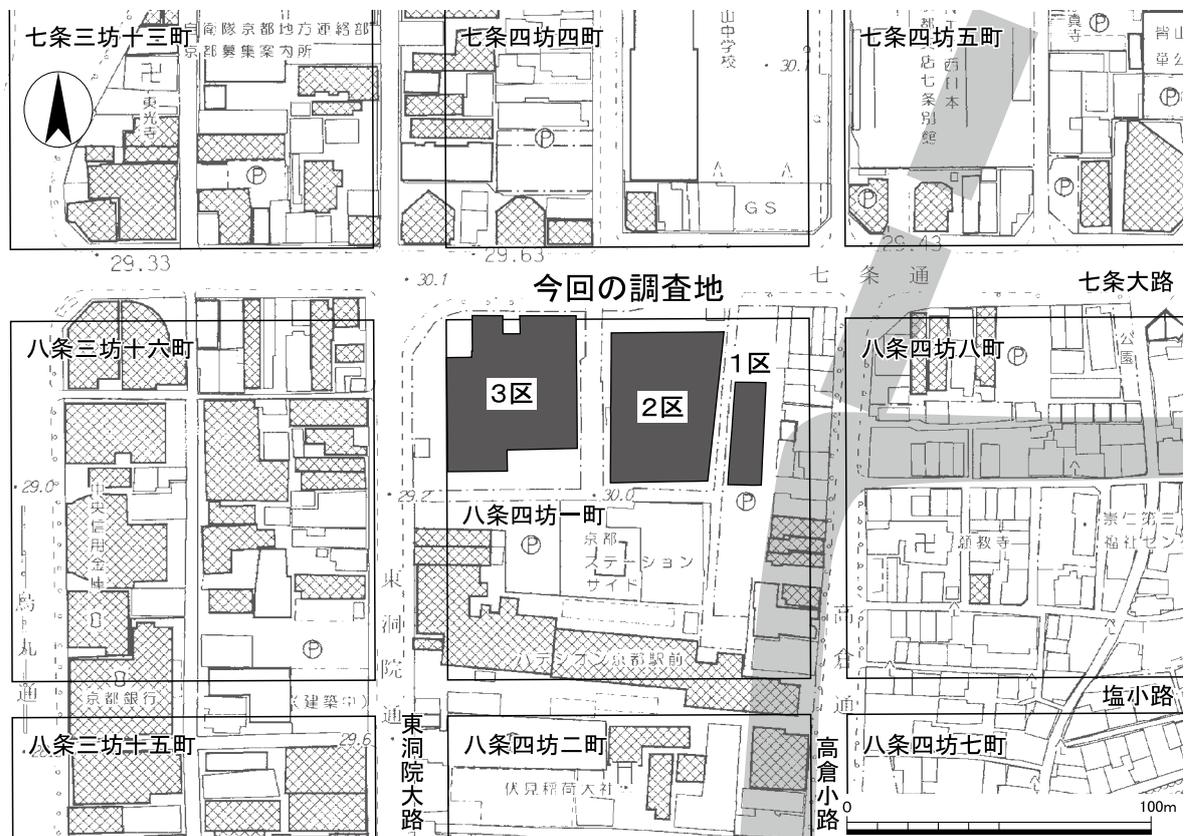


図1 調査位置図 (1:2,500)



図2 1区調査前全景（南から）



図3 2区調査前全景（北東から）



図4 3区調査前全景（北東から）



図5 3区機械掘削作業（北西から）



図6 3区遺構検出作業（北西から）



図7 2区遺構掘削作業（北から）



図8 3区遺構掘削作業（南西から）



図9 3区トータルステーションによる測量（北西から）

37mで、南辺がやや短くなる台形をしており、面積は1,765㎡である。3区は南北約52m、東西約43mの方形であるが、南東部・北西部・北部中央の攪乱・基礎部分を対象外としたため、面積は1,911㎡である。1区から3区を合わせた最終的な調査面積は4,050㎡である（図1、図版1）。

平安京の条坊復元では、3区北端部が七条大路南築地芯、3区西壁が東洞院大路東築地芯にあたる。また、1区と2区の境目付近が一町の東西中心にあたる。

調査は準備工事ののち、2015年5月7日に1区、続いて5月11日に2区の順に開始した。1区・2区とも近代の盛土や攪乱が多い江戸時代の整地土を機械掘削した後、それぞれの調査区で4面の遺構面を検出した。第1面で室町時代（14～15世紀）、第2面で平安時代後期から鎌倉時代（12～13世紀）、第3面で平安時代中期から鎌倉時代（10～13世紀）、第4面で平安時代前期以前（9世紀以前）を中心とする時期の遺構を検出している。

各遺構面では遺構検出、遺構登録、遺構の掘り下げを行い、遺物を採集した。また、遺跡の状況が明らかになった段階で写真撮影・遺構実測などの記録作業を実施した。遺構実測図の作成にはオルソ測量・トータルステーションによる測量を併用している。機械掘削土・調査に伴う人力掘削土は調査地内に積み上げて処理した。1区の調査は7月16日、2区の調査は11月24日に終了した。

2年2箇月の中断の後、3区の調査は2018年2月1日より開始した。近代の盛土や攪乱が多い江戸時代の整地層を機械掘削した後、3面の遺構面を検出した。1区・2区とは異なり、3区では第1面で鎌倉時代から江戸時代前期（13～17世紀）、第2面で平安時代中期から鎌倉時代（10～13世紀）、第3面で平安時代前期以前（9世紀以前）を中心とする時期の遺構を検出している。第2面の調査中には調査区南半部で平安時代前期の包含層を掘り下げた下面を第2-2層として精査したが、遺構の状況は第2面と共通していたため第2-2面検出遺構は第2面検出遺構に包括している。

各遺構面では1区・2区と同様に遺構検出、遺構登録、遺構の掘り下げを行い、遺物を採集した。また、遺跡の状況が明らかになった段階で写真撮影・遺構実測などの記録作業を実施した。遺構実測図の作成にはオルソ測量・トータルステーションによる測量を併用している。機械掘削土・調査に伴う人力掘削土は基本的に調査地内に積み上げて処理したが、掘削土の一部については原業者側による搬出が行われた。2018年9月30日にすべての調査を終了した（図2～9）。

なお、1区から3区の調査を通じて、適宜、文化財保護課による臨検を受け、遺跡の状況を報告した。また、長期間の中断を挟んだことから、1区・2区の調査を1次調査、3区の調査を2次調査として調査記録を作成している。

第2章 遺 跡

1. 遺跡の位置と環境

調査地は京都盆地中東部に位置し、地勢的には鴨川の主流路西側に形成された扇状地に立地している。周辺の調査では、広い範囲で北東から南西方向に流れる平安京造営前からの流路や氾濫堆積を検出しており、平安京造営後も頻繁に洪水の被害があったことが推測される。

調査地周辺の歴史的状況は次のように概観することができる。¹⁾ 調査地は『京都市遺跡地図』では平安京左京八条四坊一町跡及び御土居跡として周知されている。²⁾

平安時代の居住者についての記録はないが、高倉小路を挟んだ東隣の八条一坊八町は、仏師集団の慶派の拠点である七条仏所の推定地であり、また、平安時代末期に成立した『年中行事絵巻』には七条大路沿いに町屋が建ち並ぶ状況が描かれている。調査地の周囲では、東洞院大路・七条大路・高倉小路が、平安京の位置をほぼ踏襲して現在も道路として機能している。

鎌倉時代後半には、当地に時宗の金光寺が創建される。寺伝では正安3年(1301)年に仏師定朝の邸宅跡を運慶の三男である康弁が寄進したという。金光寺は所在地にちなんで七条道場とも呼ばれ、神奈川県藤沢市にある清浄光寺(遊行寺)と並ぶ時宗遊行派の中心寺院として明治時代まで存続した。室町時代には足利義満、義教、義政らの保護を受け、また、皇族・貴族・有力武家の参詣にあたっては踊念仏の見物が行われた。応仁の乱に先立つ康正2年(1456)には火災で焼亡するが再建され、応仁の乱に始まる戦国期の動乱をかいぐった寺観の有様は『洛中洛外図屏風上杉本』にも描かれており、境内東部の瓦葺の本堂や檜皮葺・柿葺きの堂宇、七条通に開く門などの様子を見ることができる。また、天明8年(1788)、嘉永2年(1848)の絵図には境内の建物や塔頭の配置が記されており、その詳細を知ることができる。しかし、幕末の安政5年(1858)の京都大火及び元治元年(1864)の蛤御門の変にともなう大火で焼失、寺勢は衰退したようで明治40年(1907)には東山山麓にある長楽寺に合併されて廃絶する。国の重要文化財に指定されている一遍上人立像や古文書などの宝物も長楽寺に移管された。³⁾ 近代になると京都駅に近接する利便性から、跡地には町屋や商業ビルが建ち並ぶこととなる。

なお、調査地東端には南北方向に御土居があったと推定されている。御土居は天正19年(1591)に豊臣秀吉が構築した大規模な土塁で、調査地はその東辺付近にあたる。慶長19年(1614)には、御土居のさらに東側に角倉了以・角倉素庵によって高瀬川が開削された。江戸時代になると東辺の御土居は各所で削平されるが、調査地付近では寛永18年(1641)に東本願寺別邸の涉成園の造営を契機として徳川政権による御土居の付替えが行われ、鴨川の流路に合わせて斜行していた土塁が調査地東側で直角に屈曲する形に再構築された。

2. 周辺の調査

調査地はJ R京都駅の北東約400mに位置する。J R京都駅周辺は平安京左京南東部にあっており、京都駅に近接するという立地から、すでに1970年代より大型建物や地下街建設工事などに伴う発掘調査が行われてきた。1990年代中頃から後半にはJ R京都駅ビル改築工事や周辺の再開発事業による広面積の発掘調査が実施され、また、近年ではホテル建設にともなう発掘調査も増加しており、京都市内の中でも高い密度で調査が行われている地域になる。

図10・表1は平安京左京八条四坊及び西側の八条二坊・三坊周辺で行われた発掘調査をまとめたものである。調査番号は図と表で共通する。今回の調査では金属生産に関わる遺物が出土したことから、同種類の遺物が出土した調査について広い範囲を盛り込んでいる。

この地域では平安時代前期から中期の遺構は少ない。街路では七条大路（調査31・41・42）・油小路（調査1・2）を検出したのみで、八条三坊九町で邸宅の一部と考えられる園池が見つまっているが（調査32）、井戸・溝・土坑・柱穴などの遺構の多くは八条二坊や七条大路沿いに集まる。一方、平安時代中期をさかのぼる流路を八条二坊十五町（調査9）、八条三坊一町（調査11）・二町（調査13・14）・三町（調査20・21）・六町（調査26）・七町（調査28・29）・十六町（調査42）で検出しており、また、東寄りの八条三坊十四町（調査38・39・40）・十六町（調査45）には湿地が広がっていたことが明らかとなっている。この時期の八条三坊・八条四坊には条坊制に基づいた街路・街区の整備が行われていなかった可能性が高く、市街地化は進んでいなかったと推測できる。

この地域が活況を呈するようになるのは平安時代後期になってからである。流路は埋め立てられて、街路の整備に伴い方形街区が成立した。街路では塩小路（調査33・45）・八条坊門小路（調査8・16・17・23・30・34）・八条大路（調査47）・室町小路（調査26・36）・東洞院大路（調査47）を検出している。また、建物・井戸・溝・土坑・柱穴などの遺構は八条三坊・八条四坊西半にも分布しており、広く市街地化が進んだことがわかる。

鎌倉時代から室町時代前半は遺跡が最も充実する時期で、建物・井戸・溝・土坑・柱穴などの遺構が錯綜し、出土する遺物の量も増加する。『東寺百合文書』にあるこの地域に係る検地帳の記載からは「金屋」「塗師」「蒔繪」などの職業に携わる人々が暮らしていたことがわかる。また、新たな状況としては木棺墓や土壙墓を八条二坊十四町（調査3・4・5・8）・八条三坊一町（調査11）・二町（調査13・14）・七町（27・30）で検出したことが指摘できる。

室町時代後半になると引き続き多数の遺構・遺物を認める区域（調査1・20）がある一方で、八条二坊・三坊では全体として遺構・遺物の検出が減少する。八条二坊十四町（調査7）・八条三坊三町（調査19）・六町（調査26）では耕作溝を検出しており、居住地が耕作地に変化したと推測できる。耕地化はその後も進展し、遅くとも桃山時代には全域が耕作地となった（調査20）。一方、八条四坊の高倉小路以東では、御土居の築造、高瀬川の開削が行われた桃山時代から江戸時代にかけての遺構が増加する。八条四坊八町では徳川政権によって付替えられた東西方向の御土居の土

表1 周辺調査一覧表

番号	条坊・町	調査概要	文献
1	八条二坊九町・油小路	平安～江戸の油小路路面・西側溝、平安の土坑・柱穴、鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴。	「平安京左京八条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
2	八条二坊十町・油小路	平安～室町の油小路路面・西側溝、平安後期～鎌倉の井戸・溝・土坑・欄・柱穴、室町の溝・土坑・炉。室町の鋳型・埴埴出土。	「平安京左京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
3	八条二坊十四町	平安後期の建物、鎌倉の土坑・柱穴、室町の井戸・溝・土坑・柱穴・木棺墓。室町の鋳型・埴埴・金属滓出土。	「平安京左京八条二坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
4		平安前期の溝・土坑、平安後期の溝、鎌倉の井戸、室町の土坑・木棺墓・犬墓。鋳型・埴埴出土。	「平安京左京八条二坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
5		平安前期の池状遺構、平安後期の溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・欄・柱穴・木棺墓。鋳型・埴埴・輪羽口出土。	「平安京左京八条二坊1」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
6		平安後期の溝、鎌倉～室町の井戸・土坑。鎌倉～室町の鋳型・埴埴出土。	「平安京左京八条二坊2」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
7		平安前期の土坑、平安後期～鎌倉前半の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉後半～室町前半の井戸・土坑・柱穴。鎌倉の鋳型・輪羽口出土。	「平安京左京八条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	八条二坊十四町・十五町・八条坊門小路	平安後期～室町初頭の八条坊門小路路面・側溝、平安後期の井戸・溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴・炉・埋壘・木棺墓。鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓出土。	「平安京左京八条二坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
9	八条二坊十五町	平安前期の流路、平安中期の園池、平安後期～室町の井戸・土坑・柱穴・炉。平安後期の鋳型、室町の埴埴出土。	『平安京左京八条二坊十五町』オムロン・日開調査設計株式会社 2007年
10	八条二坊十六町	平安の井戸・溝・土坑・池状遺構、鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴。鎌倉～室町の埴埴出土。	「平安京左京八条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
11	八条三坊一町	古墳～平安の流路、平安後期の建物・井戸、鎌倉前半の建物・土坑、鎌倉後半～室町の井戸・土坑・埋壘・墓。鋳型・埴埴出土。	「平安京左京八条三坊一町」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
12	八条三坊二町・西洞院大路	江戸の西洞院川、鎌倉～室町の井戸。	「平安京左京八条三坊二町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
13	八条三坊二町	平安前期～中期の流路、平安後期～鎌倉の井戸・溝・土坑・柱穴・埋壘・木棺墓・土墳墓。鎌倉の鋳型出土。	「平安京左京八条三坊二町～第2次調査～」(財)古代学協会 1985年
14		平安前期～中期の流路、平安後期～鎌倉の井戸・土坑・柱穴、室町の墓。平安中期～鎌倉の鋳型・埴埴・輪羽口出土。	『平安京左京八条三坊二町』(財)古代学協会 1983年
15		鎌倉～室町の井戸・柱穴。	「平安京左京八条三坊二町1」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
16	八条三坊二町・八条坊門小路	平安後期の八条坊門小路北側溝・井戸。	「平安京左京八条三坊二町」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
17		鎌倉の八条坊門小路北側溝・井戸。	「平安京左京八条三坊二町」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2012年
18	八条三坊三町・八条坊門小路	平安後期の土坑、鎌倉～室町前半の井戸・土坑・柱穴。鎌倉～室町の鋳型・埴埴出土。	「平安京左京八条三坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
19	八条三坊三町	平安前期の土坑・溝、平安後期の土坑、鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴・埋壘。鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口出土。	「平安京左京八条三坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
20		平安中期の流路、平安後期～鎌倉の井戸・溝・土坑・柱穴、室町の建物・井戸・溝・土坑・柱穴。鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口出土。	「平安京左京八条三坊1」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
21		平安中期の流路、鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴。室町の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓出土。	『平安京左京八条三坊三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-10』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年
22	八条三坊四町・五町・町尻小路	平安後期の建物・園池・井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町の建物・園池・井戸・溝・土坑・柱穴。	『平安京左京八条三坊四・五町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
23	八条三坊六町・八条坊門小路	平安後期～室町の八条坊門小路路面・北側溝、鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴。鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓出土。	「平安京左京八条三坊1」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
24	八条三坊六町	平安後期の土坑、鎌倉の土坑、室町の溝。	「左京八条三坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
25		鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴。鎌倉～室町の鋳型・埴埴出土。	「平安京左京八条三坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
26	八条三坊六町・十一町・室町小路	平安中期～後期の流路・井戸、平安後期～室町前半の室町小路路面・両側溝、鎌倉～室町前半の建物・堅穴状遺構・井戸・溝・土坑・柱穴・炉。鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓出土。	「平安京左京八条三坊2」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
27	八条三坊七町	平安中期～後期の井戸・土坑、鎌倉前半の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉後半～室町の井戸・溝・土坑・柱穴・埋壘・土墳墓・銭貨埋納土坑。鎌倉～室町の鋳型・砥石・金属滓出土。	『平安京左京八条三坊七町』(財)京都文化財団 1988年
28		平安前期～中期の流路・井戸・土坑、平安後期～鎌倉前半の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉後半～室町の井戸・溝・土坑・柱穴。鎌倉～室町の鋳型出土。	『平安京左京八条三坊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
29		平安前期～中期の流路、平安後期～鎌倉の井戸・土坑・柱穴、室町の井戸・溝・土坑・柱穴。鎌倉～室町の鋳型出土。	「平安京左京八条三坊1」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
30	八条三坊七町・八条坊門小路	奈良～平安の井戸、鎌倉～室町の八条坊門小路北側溝、平安後期～鎌倉の井戸・土坑・柱穴、室町の井戸・土坑・柱穴・炉・墓。	「平安京左京八条三坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
31	八条三坊九町・七条大路	平安～江戸の七条大路路面、平安の井戸・土坑・柱穴、鎌倉～室町前期の井戸・溝・土坑・柱穴。鎌倉～室町前期の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓・金属塊が出土。	『平安京左京八条三坊九町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-6』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年

番号	条坊・町	調査概要	文献
32	八条三坊九町	平安の園池・井戸・土坑、鎌倉の建物・井戸・柱穴、室町の井戸・溝・土坑。	『平安京左京八条三坊九町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-12』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
33	八条三坊九町・十町・塩小路	平安後期～室町の塩小路路面・両側溝・井戸・土坑・柱穴。平安後期～室町の鋳型・埴塀出土。	『平安京左京八条三坊九・十町一七条町の調査一』古代文化調査会 2007年
34	八条三坊十町・十一町・八条坊門小路	平安の八条坊門小路路面・両側溝。	「平安京左京八条三坊十・十一・十四町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
35	八条三坊十一町	室町の土坑。	「平安京左京八条三坊十・十一・十四町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
36	八条三坊十一町・室町小路	室町小路路面・東側溝、室町の井戸・溝・土坑・柱穴。	「平安京左京八条三坊十・十一・十四町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
37	八条三坊十四町	鎌倉末～室町の井戸・溝・土坑・柱穴。	「平安京左京八条三坊十・十一・十四町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
38		平安中期以前の湿地、平安後期～鎌倉の溝、鎌倉後半～室町前半の建物・井戸・土坑・柱穴・堅穴状遺構・埋甕。室町の漆器碗・皿多量出土。	「平安京左京八条三坊2」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
39		平安前期以前の湿地、平安後期～鎌倉の土坑、室町前半の井戸・溝・土坑。	「No.69」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
40		平安中期以前の湿地、鎌倉の井戸・溝・土坑・柱穴・堅穴状遺構、室町の井戸・土坑・柱穴。鎌倉の草履状木製品出土。	「平安京左京八条三坊2」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
41	八条三坊十六町・七条大路	平安前期～鎌倉の七条大路路面・南側溝、平安～江戸の井戸・溝・土坑・柱穴。	「平安京左京八条三坊1」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
42		古墳の流路、平安中期～鎌倉の七条大路路面・南側溝、平安中期～後期の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴。鎌倉～室町の鋳型・埴塀・輪羽口出土。	「平安京左京八条三坊2」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
43	八条三坊十六町	平安の井戸・溝・土坑・柱穴、平安末～室町の建物・井戸・溝・土坑。	「平安京左京八条三坊」『昭和61年 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
44		平安後期の井戸・土坑、鎌倉～室町前半の溝・土坑・柱穴。	「No.74」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
45	八条三坊十六町・塩小路	平安前期～後期の湿地、平安後期の塩小路路面・側溝、鎌倉～室町の建物・井戸・土坑。室町の輪羽口・金属滓出土。	『平安京左京八条三坊十五・十六町』古代文化調査会 2005年
46	八条四坊一町	平安の井戸・溝・土坑、鎌倉の井戸・溝・土坑・柱穴、室町の井戸・溝・土坑・柱穴。	『平安京跡発掘調査報告 左京八条四坊一町』関西文化財調査会 2004年
47	八条四坊四町・五町・東洞院大路・八条大路	平安時代末～鎌倉の東洞院大路路面・東側溝・八条大路北側溝・井戸・土坑、室町の八条大路北側溝・井戸・土坑。江戸の銭貨鑄造遺物出土。	『平安京左京八条四坊四・五町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-20』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
48	八条四坊七町	平安の溝・土坑、鎌倉の井戸・溝・土坑。	『平安京左京八条四坊七町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2003-11』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
49	八条四坊八町	江戸時代の御土居。	『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-11』(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2014年
50	七条四坊四町	室町の溝・土坑。	『平安京左京七条四坊四町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-6』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年

壘を検出した(調査49)。なお、今回の調査地南側では金光寺が創建される14世紀に遺構が増加し、遺物には生活用品に混じって高麗青磁や中国製陶磁器などの高級品が含まれている(調査46)。今回の調査成果とも共通するところであり注目できる。

註

- 1) 歴史的状況については次の文献を参考にした。京都市編『京都の歴史』学芸書林、1968～1976年。『京都市の地名』平凡社、1979年。『平安京提要』角川書店、1994年など。
- 2) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年。
- 3) 『長楽寺の名宝』京都国立博物館、2000年。村井康彦・大山喬平編『長楽寺蔵 七条道場金光寺文書の研究』法蔵館、2012年。

第3章 遺 構

1次調査・2次調査で検出した遺構は、1区783基、2区4320基、3区3402基で、総数は8505基になる。それぞれの調査区では各時期の遺構が複雑に重複する平安京左京域特有の状況を示し、各遺構面の調査では、目的とした時期の遺構の他に前後する時期の遺構を検出することも多かった。そこで各遺構については調査段階の検出状況にしたがい1区から3区で各遺構面に分けて報告し、調査地の歴史的な変遷については第5章1項「遺跡の変遷」で総括する。

また、検出遺構が非常に多いことから、ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構、特殊な構造をもつ遺構、各時期を代表する遺物が出土した遺構を重点的に報告する。これらの遺構の時期は表2にまとめた。なお、平安時代以降の検出遺構及び出土遺物の時期の判定は、平尾政幸氏による編年案を適用する¹⁾。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構
弥生時代 ～奈良時代	2区 土坑1213 3区 土坑8409・9379、流路9400
平安時代前期 ～中期	1区 井戸776、土坑706 2区 建物2、溝5992、井戸4587・5338、土坑5709 3区 井戸7482・8470・9207、土坑6801・8053・8598・8709・8857・9061・9062・9158、溝9011
平安時代後期 ～鎌倉時代前半	1区 井戸452・517、土坑115・178・195・724・728 2区 溝5305、井戸3207・3721・4342・5407、土坑2137・3196・3251・4017・5040・5146・5227・5570・5602 3区 柱穴列11・12、柱穴8026、南西部甕列、井戸6373・6662・8436・8474・8558・8917・9215・9297、土坑6145・6148・7135・7136・8458・8786・8841・8671・8852・8856・9119・9197・9385
鎌倉時代後半 ～室町時代前期	1区 井戸71・611・695、土坑8・12・221・263・273・274 2区 建物1、地業2700・2777・4900、柱穴列1・2・3・4・5・6、溝5845・5846、井戸2333・3507・3550・5665、土坑2143・2157・2222・2223・2224・2349・2442・2501・2525・2643・2752・2815・2816・2861・2905・2945・3175・3335・3542・3638・3715・3720・3724・4080・4130・4213・4274・4385・4389・4420・4638・4804・4829・4847・4910・4978・5669・5699、カマド3065・4840 3区 建物3、柱穴列7・8・9・13・14、柱穴9228、北西部甕列、井戸6380・6385・8172・8204・8551、土坑6107・6111・6188・6556・7415・7486・7553・7627・8019・8020・8962
室町時代中期 ～後期	2区 井戸2017・2185、土坑2225・3144 3区 柱穴列10、池7479、井戸6375・6379・7334・8480、土坑6152・6309・7963
安土桃山時代 ～江戸時代	3区 溝6249・6250・6288・7774、井戸6222・6321

1. 1 区の調査

(1) 層序と遺構の概要

層序（図版2・3・184） 調査区全域には約60cmの近代・現代盛土が広がり、一部では蛤御門の変にともなう大火の焼けた瓦などを処理した土坑や近代の建物基礎が地山にまで及ぶ。近代盛土下層は約40～60cmの厚さの江戸時代前期から後期の整地層・包含層である。この下面を第1面とした。

これらの下層は約10～15cmの厚さの室町時代の整地層であるオリーブ褐色泥砂（北壁14層）・黄灰色泥砂（北壁17層）・黒褐色砂泥（西壁10層）などである。これらの整地層を第1層として遺物を取り上げ、下面を第2面とした。

第1層の下層は約15～30cmの厚さの平安時代後期から鎌倉時代の整地層である暗褐色砂泥（北壁26層）・暗灰黄色砂泥（北壁27層・西壁16層）・黄褐色砂泥（西壁18層）などである。これらの整地層を第2層として遺物を取り上げ、下面を第3面とした。

第2層の下層は約25～30cmの厚さの平安時代中期から後期の整地層である暗灰黄色砂泥（北壁35層・西壁24層）・黄灰色砂泥（北壁36層）などである。これらの整地層を第3層として遺物を取り上げ、下面を第4面とした。

第3層の下層は約30cmの厚さの平安時代前期の整地層である暗灰黄色砂泥（北壁40層・西壁26層）・灰オリーブ色砂泥（北壁41層）・黄灰色砂泥（西壁27層）などである。これらの整地層は平安京造営前の流路埋土を母材としており、第4層として遺物を取り上げた。さらに下層の流路埋土は黒褐色シルト～細砂（北壁42層）・暗灰黄色シルト～細砂（西壁28層）などで、粗砂や礫を含みラミナが観察できる部分もある。流路底面は基盤層（地山）の暗オリーブ褐色砂礫（西壁30層）が広がる。

遺構の概要 第1面から第4面で783基の遺構を検出した。第1面では室町時代（14～15世紀）、第2面では平安時代後期から鎌倉時代（12～13世紀）、第3面では平安時代中期から鎌倉時代（10～13世紀）、第4面では平安時代前期以前（9世紀以前）を中心とする時期の遺構を検出している。各面の遺構には井戸・溝・土坑・柱穴・杭列などがある。

(2) 第1面の遺構（図版5・6・185）

土坑8（図版13・185） 中央部西寄りで見出した。北東側が攪乱されるが、平面形は東西約1.8m、南北約1.7mの隅丸方形に復元でき、深さは約0.6mである。底部の形状から2基の土坑が重複している可能性があるが境目は明瞭ではない。埋土には大きさ2～20cmの礫が詰まる。6～7段階の遺物が出土した。

井戸71 中央部西寄りで見出した石組井戸である。掘形の平面形は直径約1.5mのほぼ円形である。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は約26.7mである。大きさ15～40cmの河原石を円形

に積み上げるが、積み方は粗い。内径は約0.7mである。水溜はない。6～7段階の遺物が出土した。

土坑12（図版14・186） 中央部西壁際で検出した。平面形は直径約0.4mのほぼ円形で、深さは約0.2mである。完形の瓦器火鉢を中央に据える。蔵骨器の可能性を考えて内部の土壌を洗浄したが骨などは確認していない。7段階の遺物である。

土坑115（図版14・186） 南東部東壁際で検出した。東側は調査区外となるが、平面形は直径約1.0mに復元でき、深さは約0.8mである。完形の大型の焼締陶器甕（367）を中央に据える。甕の内部には大きさ2～15cmの礫をまばらに含む。陶棺の可能性はあるが骨や副葬品は出土していない。焼締陶器甕は常滑産で13世紀中頃の特徴を持つ。他に6C段階の遺物が出土した。

土坑178（図版14・186） 北部で検出した。東側が攪乱されるが、平面形は東西1.9m以上、南北約1.4mの不整形で、深さは約0.2mである。埋土上半部から完形品を含む土師器皿が多量に出土した。6C段階の遺物である。

（3）第2面の遺構（図版7・8・187）

土坑221（図版15） 東部中央壁際で検出した。平面形は東西約0.8m、南北約0.9mの楕円形で、深さは約0.2mである。埋土には大きさ1～20cmの礫が詰まる。6～7段階の遺物が出土した。

土坑274（図版15・187） 中央部西寄りの土坑8と重複する位置で検出した。南側が攪乱されるが、平面形は東西約0.8m、南北1.2m以上の不整形で、深さは約0.2mである。埋土には大きさ1～10cmの礫が詰まる。7段階の遺物が出土した。

土坑195（図版15・187） 北東隅で検出した。東側は調査区外となるが、平面形は東西1.0m以上、南北約1.5mの不整形で、深さは約0.2mである。埋土上半部から完形品を含む土師器皿などが出土した。6段階の遺物である。

土坑263（図版15） 北西部で検出した大型の焼締陶器甕を据え付けた土坑である。北西側を攪乱されるが、平面形は東西約1.4m、南北約1.3mのいびつな楕円形で、深さは約0.6mである。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に6～7段階の遺物が出土した。

土坑273 中央部西寄りで検出した。平面形は東西約1.2m、南北約1.1mのほぼ円形で、深さは約0.2mである。埋土上半部から完形品を含む土師器皿などが出土した。6C～7A段階の遺物である。

（4）第3面の遺構（図版9・10）

井戸452（図版16・188） 中央部東寄りで検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形の平面形は直径約2.0mの円形である。深さは検出面から約1.2mで、底部の標高は26.9mである。井戸枠は内法一辺約0.7mで、残存高は約0.6mである。一辺に4枚の縦板を並べており、最下部の横棧が残る。水溜はない。5～6段階の遺物が出土した。

井戸611（図版16・188） 南部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形の平面形は直径約1.4mの円形である。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は26.7mである。井戸枠は内法一辺約0.5mで、残存高は約0.7mである。部材の残存状況が悪いが一辺に3～4枚の縦板を並べており、最下部に一部の横棧が残る。底部中央には直径約30cm、高さ約20cmの曲物を据えた水溜がある。7段階の遺物が出土した。

井戸517（図版189） 北東部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形の平面形は一辺約1.2mの方形である。深さは検出面から約1.3mで、底部の標高は約27.0mである。部材は残存状況が非常に悪く内法は不明である。水溜はない。5～6段階の遺物が出土した。また、南辺最下部の横棧に接する形で鉄刀子（金97）が出土した。

井戸695（図版189） 中央部南寄りで検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形は大きく、平面形は東西約2.5m、南北約2.2mの方形で南東部に井戸枠を設ける。深さは検出面から約0.9mであるが、掘形検出面からは約1.5mで、底部の標高は約26.8mである。井戸枠は内法一辺約1.6mで、残存高は約0.9mである。部材の残存状況は悪いが一辺に7～8枚の縦板を並べており、最下部に加えてもう1段の横棧が残る。水溜はない。6～7段階の遺物が出土した。

（5）第4面の遺構（図版11・12・190）

井戸776 北西部で検出した井戸である。形状から方形縦板横棧組の井戸と考えられるが井戸枠は残存しない。掘形の平面形は一辺約1.4mの方形で、深さは検出面から約0.5mで、底部の標高は約26.6mである。水溜はない。土師器・須恵器など2C段階の遺物がまとまって出土した。

土坑724（図版16・190） 中央部で検出した。平面形は東西約2.0m、南北約0.6mの細長い形で、深さは約0.3mである。中央部から東部で完形品を含む5～6段階の土師器皿が出土した。墓壙の可能性はある。

土坑728（図版16・190） 南東部で検出した。平面形は東西約1.0m、南北約1.2mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。大きさ約5～20cmの礫と完形品を含む土師器皿が出土した。6B段階の遺物である。

土坑706 北東隅で検出した。平面形は直径約1.8mのほぼ円形で、深さは約1.1mである。3A段階の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などがまとまって出土した。

杭列 中央部南西寄りで検出した。直径約20cm、高さ約0.8mの円形の5基の杭痕が、約50～60cmの間隔で東西に並ぶ。柱あたりは明瞭に検出できていない。いずれの杭痕からも遺物は出土していない。

2. 2区の調査

(1) 層序と遺構の概要

層序 (図版17・18・191) 調査区全域には約30～50cmの近代・現代盛土が広がり、一部では1区と同様に蛤御門の変にともなう大火の焼けた瓦などを処理した土坑や近代の建物基礎が地山にまで及ぶ。近代盛土下層は約30～50cmの厚さの江戸時代前期からの整地層・包含層である。この下面を第1面とした。

これらの下層は約20～30cmの厚さの室町時代の整地層である黒褐色砂泥(北壁8層・南壁14層・西壁15層)・灰黄褐色砂泥(東壁10層)・暗灰黄色砂泥(東壁12層)・にぶい黄褐色砂泥(西壁13層)などである。これらの整地層を第1層として遺物を取り上げ、下面を第2面とした。

第1層の下層は約20～30cmの厚さの平安時代後期から鎌倉時代の整地層である黒褐色砂泥(北壁12層・西壁18層)・にぶい黄褐色砂泥(東壁14層)・オリーブ褐色砂泥(南壁26層)などである。これらの整地層を第2層として遺物を取り上げ、下面を第3面とした。

第2層の下層は約30～40cmの厚さの平安時代中期から後期の整地層であるにぶい黄褐色砂泥(東壁15層)・黄褐色砂泥(東壁16層)などである。これらの整地層を第3層として遺物を取り上げ、下面を第4面とした。

第3層の下層は約10～20cmの厚さの平安時代前期の整地層であるオリーブ褐色砂泥(北壁24・25層・東壁17層)・黄褐色細砂(南壁27層)・暗オリーブ褐色細砂(西壁23層)などである。これらの整地層は平安京造営前の流路埋土を母材としており、第4層として遺物を取り上げた。さらに下層の流路埋土は黄褐色細砂(南壁28層)・黄褐色シルト～細砂(南壁29層)暗灰黄色シルト～細砂(西壁24層)などで、礫を含みラミナが観察できる部分もある。流路底面は基盤層(地山)の黒褐色砂礫(北壁26層)・黄褐色砂礫(東壁18層)が広がる。

遺構の概要 第1面から第4面で4320基の遺構を検出した。第1面では室町時代(14～15世紀)、第2面では平安時代後期から鎌倉時代(12～13世紀)、第3面では平安時代中期から鎌倉時代(10～13世紀)、第4面では平安時代前期以前(9世紀以前)を中心とする時期の遺構を検出している。建物・地業・柱穴列・井戸・カマド・土坑・溝などがある。

(2) 第1面の遺構(図版20～25・192・193・196・197)

地業2777(図版41・195) 西部中央壁際で検出した。東西方向に細長い溝状の土坑が南北に並んでおり、西側は調査区外となる。検出範囲は東西3.6m以上、南北約5.9mで、攪乱を考慮すると10条の溝状の土坑が並んでいた状況を復元できる。1基の土坑の幅は0.2～0.5m、深さは0.1～0.3mで、粗密はあるが埋土には大きさ1～10cmの礫が詰まる。3基の礎石を据えた柱穴が重複する。基壇建物の基礎工事である地業と推測する。6～7段階を中心とする遺物が出土した。

地業2700(巻頭図版2、図版42・43・193) 中央部で検出した。攪乱される部分があるが、平

面形は東西約7.4m、南北約7.0mの方形である。深さは約0.4mで、埋土には多量の大きさ1～12cmの礫が詰まる。基壇建物の基礎工事である地業である。上面には複数の柱穴があり、中には礎石を据えるものもあるが建物の復元はできない。下層からは6～7段階、上層からは10段階の遺物が出土した。

建物1（図版44・45・194） 地業2700の西側に重複する位置で検出した建物である。東西約8.8m、南北約7.6mの方形に柱穴が並ぶ。地業2700を掘り込んでいる柱穴があるので、より新しい遺構であることがわかる。柱穴列内側では柱穴を検出していないことから、身舎にあたる建物中心部分は亀腹で盛り上げていたため痕跡が残っておらず、検出した柱穴列は縁の東柱跡と推測する。ただし、部分的に攪乱されることもあるが、柱穴の間隔は不揃いで礎石の有無もあり、建物の構造の詳細は不明である。それぞれの柱穴から小片ではあるが6～7段階を中心とする遺物が出土した。

柱穴列1（図版46・196） 東部中央東壁際で検出した南北方向の柱穴列で、検出長は約5.6mである。柱穴は直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.3mで、大きさ10～15cmの礎石を据えるものがある。柱穴の間隔は不揃いで約1.4～1.8mである。小片ではあるが7～8段階の遺物が出土した。

柱穴列2（図版46） 北部中央で検出した南北方向の柱穴列で、検出長は約6.3mである。柱穴は直径約0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mで、大きさ10～15cmの礎石を据えるものがある。攪乱を受けている部分もあることから、柱穴の間隔は不揃いで約1.4～1.9mである。小片ではあるが7段階の遺物が出土した。

柱穴列3（図版47） 北東部で検出した南北方向の柱穴列で、検出長は約7.7mである。柱穴が近接する部分があることから造り替えの可能性がある。柱穴は直径約0.2～0.4m、深さ0.2～0.4mで、大きさ20～30cmの礎石を据えるものがあり、柱穴2101・柱穴2095は地下式礎石である。また、柱穴2018・柱穴2102・柱穴2101・柱穴2094には直径約10cmの柱あたりの痕跡がある。柱穴の間隔は不揃いで近接する柱穴を除くと約1.5～1.9mである。小片ではあるが6～7段階の遺物が出土した。

柱穴列4（図版47・196） 北部中央で検出した東西方向の柱穴列で、攪乱を受けている部分もあるが検出長は約9.6mである。柱穴が近接する部分があることから造り替えの可能性がある。柱穴は直径約0.3～0.4m、深さ0.1～0.3mで、大きさ10～20cmの礎石を据える。攪乱を受けている部分もあることから、柱穴の間隔は不揃いで近接する柱穴を除くと1.2～1.4mである。小片ではあるが6～7段階の遺物が出土した。

柱穴列5（図版48） 南東部で検出した南北方向の柱穴列で、検出長は約6.2mである。柱穴は直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mで、大きさ15～20cmの礎石を据える。柱穴の間隔はいずれも約2.1mである。小片ではあるが6～7段階の遺物が出土した。

柱穴列6（図版48） 南部中央で検出した東西方向の柱穴列で、攪乱を受けている部分もあるが検出長は約4.2mである。柱穴は直径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mで、大きさ10～20cmの礎石を据える。攪乱を受けている部分もあるが、柱穴の間隔は約1.4mに復元できる。小片ではあるが7～8段階の遺物が出土した。

土坑2815 (図版49) 南西部で検出した。南側の一部が攪乱されるが、平面形は東西約3.3m、南北約1.2mの溝状で、深さは約0.4mである。埋土には大きさ2～25cmの礫が詰まる。7～8段階の遺物が出土した。

土坑2157 (図版49) 中央部北東寄りで検出した。平面形は東西約1.9m、南北約1.0mの楕円形で、深さは約0.3mである。埋土には大きさ2～25cmの礫が詰まる。7段階の遺物が出土した。

土坑3715・2861 (図版50) 南部中央で検出した。土坑3715と土坑2861が東西に連続するが境目は不明瞭である。土坑3715は、平面形は東西約2.2m、南北約1.0mの方形で、深さは約0.3mである。埋土には大きさ1～15cmの礫が詰まる。7～8段階の遺物が出土した。

土坑2861は、南西側が攪乱されるが、平面形は東西約1.8m、南北約1.6mの楕円形で、深さは約0.7mである。埋土には大きさ1～15cmの礫が詰まる。7～8段階の遺物が出土した。

土坑2223・2224 (図版51・197) 中央部で検出した。ほぼ同じ規模の石を詰めた土坑が東西に並列する。土坑2223は、平面形は東西約0.8m、南北約1.4mの小判形で、深さは約0.4mである。埋土上半部に大きさ1～12cmの礫が詰まる。6～7段階の遺物が出土した。

土坑2224は、平面形は東西約0.7m、南北約1.5mの小判形で、深さは約0.4mである。埋土には大きさ1～12cmの礫が詰まる。6～7段階の遺物が出土した。

土坑2945 (図版198) 中央部南西寄りで検出した。平面形は東西約2.9m、南北幅約0.7mの溝状で西端が楕円形にくぼむ。深さは溝状の部分が約0.2m、くぼむ部分が約0.3mである。溝状の部分には大きさ約25cmの石を6個並べる。7段階の遺物が出土した。

カマド3065 (図版51・198) 南東部で検出した大型のカマドである。西側が攪乱されるが、東西1.8m以上、南北約2.6mの範囲に壁体・焼土・炭が広がる。上部は削平されるが、南端部に壁体の立ち上がりが残存しており、構造材の石材が散在することから、西方向に開くU字形に複数のカマドを連結して構築していたと推測する。7～8段階の遺物が出土した。

井戸2333 (図版52・199) 北西部で検出した石組の井戸である。南東側がわずかに攪乱されるが、掘形の平面形は東西約1.8m、南北約2.2mの楕円形である。深さは検出面から約1.6mで、底部の標高は約27.0mである。底部に一辺約0.5mの方形に木枠を据え、大きさ15～50cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.8mである。水溜はない。7段階の遺物が出土した。

井戸2185 (図版52・199) 中央部東寄りで検出した石組の井戸で、上部は壊される。掘形の平面形は直径約1.6mの円形である。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は約27.4mである。底部に一辺約0.5mの方形に木枠を据え、大きさ10～20cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.8mである。水溜はない。10段階の遺物が出土した。

井戸2017 (図版52・199) 北東部で検出した縦板組の井戸である。北側が攪乱されるが、掘形の平面形は一辺約1.2mの方形に復元できる。深さは検出面から約1.6mで、底部の標高は約27.0mである。井戸枠は内法約0.8mで幅20～30cmの縦板を多角形に並べているが、残存状況が悪く構造の詳細は不明である。底面に大きさ1～5cmの小礫を敷き、中央を直径約0.5mの皿状に掘り下げる。9段階の遺物が出土した。

土坑2349（図版52・199） 西部中央で検出した。北東側が攪乱されるが、掘形の平面形は東西約2.2m、南北約1.6mの不整形な方形に復元できる。深さは約0.5mである。内法東西約1.1m、南北約0.5mの長方形に大きさ10～30cmの河原石を積み上げる。7～8段階の遺物が出土した。地下式収納施設と考えている。

土坑2137（図版53・200） 北部中央壁際で検出した。平面形は直径約0.5mの円形で、深さは約0.3mである。掘形に内接する状態で中型の須恵器甕（527）を据えるが、上半部は壊される。須恵器甕は東播産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に6B段階の遺物が出土した。

土坑2143（図版53） 中央部北東寄りで検出した。平面形は直径約0.6mの円形で、深さは約0.7mである。中型の須恵器甕を据える。上半部は壊されるが、残存している掘形の深さから口縁部まで埋めていたと考えられる。須恵器甕は播磨産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に6～7段階の遺物が出土した。

土坑2442（図版53） 北部中央で検出した。平面形は直径約0.7mの円形で、深さは約0.4mである。大型の焼締陶器甕を中央に据えるが、上半部は壊されており検出面に破片が散乱していることから下半部のみを埋めていたと考えられる。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に7段階の遺物が出土した。

土坑2501（図版53・200） 中央部で検出した。南東側が攪乱されるが、平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの楕円形に復元でき、深さは約0.6mである。大型の焼締陶器甕を中央に据えるが、上半部は壊されており検出面に破片が散乱していることから下半部のみを埋めていたと考えられる。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に7段階の遺物が出土した。

土坑2752・2905（図版53・200） 東部中央で検出した。大型の焼締陶器甕を南北方向に2基並べて据える。中央が攪乱されるが、土坑2752の平面形は直径約0.7mの円形に復元でき、深さは約0.4mである。土坑2905の平面形は直径約0.8mに復元でき、深さは約0.5mである。焼締陶器甕はいずれも常滑産で、上半部が壊されているが、土坑2905から出土した口縁部の破片は14世紀前半頃の特徴を持つ。土坑2752・2905とも他に7段階の遺物が出土した。

土坑3175（図版54・201） 北西部西壁際で検出した。北側・西側が攪乱されるが、平面形は東西約1.4m、南北約1.6mの楕円形に復元でき、深さは約0.2mである。上面近くを中心に完形品を含む7B段階の土師器皿が多量に出土した。

土坑2222（図版54・201） 中央部で検出した。周囲が攪乱されるが、平面形は東西約0.6m、南北約0.5mの隅丸方形に復元でき、深さは約0.2mである。中央に完形の瓦器壺2点（430・431）を据える。7段階の遺物である。埋納遺構である。

土坑2643（図版54・201） 南東部で検出した。平面形は東西約1.0m、南北約0.7mの楕円形で、深さは約0.3mである。上面近くを中心に完形品の土師器皿のほか瓦器・焼締陶器などが出土した。7段階の遺物である。

土坑2816 (図版54・201) 南西部で検出した。平面形は東西約1.5m、南北約1.1mのいびつな楕円形で、深さは約0.4mである。被熱した瓦がまとまって出土した。7～8段階の遺物である。

土坑2225 中央部で検出した。平面形は東西約1.3m、南北約1.0mの不整形で、深さは約0.2mである。特大の土師器皿が出土した。9B段階の遺物である。

土坑3144 西部中央で検出した。北東側が攪乱されるが、平面形は東西約0.8m、南北約0.9mの楕円形で、深さは約0.2mである。土師器皿や瓦器播鉢などが出土した。9A段階の遺物である。

(3) 第2面の遺構 (図版26～31・202)

地業4900 (図版56・57・203) 南西部で検出した。北西側が攪乱されるが、平面形は東西約3.6m、南北約4.5mの隅丸方形で西部中央に約0.5mの張り出しがある。深さは約0.7mで、埋土には多量の大きさ1～15cmの礫が詰まる。また、中ほどでは焼締陶器甕の破片を敷き詰めて面を形成する。基壇建物の基礎工事である地業である。8A段階の遺物が出土した。

土坑3720 (図版55) 中央部南東寄りの第1面地業2700の下面で検出した。北側は不明瞭になるが、平面形は東西幅0.9～1.0m、南北約5.0mの溝状で、深さは約0.2mである。埋土には多量の大きさ1～20cmの礫が詰まる。6～7段階の遺物が出土した。地業2700と一体の遺構と推測する。

土坑4910 (図版58・204) 南部中央で検出した。東側の一部が攪乱されるが、平面形は東西約1.1m、南北約2.1mの小判形で、深さは約0.1mである。埋土には直径1～12cmの礫が詰まる。7段階の遺物が出土した。

土坑4080 (図版58) 中央部で検出した。平面形は東西約1.1m、南北約1.2mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。上面近くの中央部に直径約0.8mの円形に大きさ1～8cmの礫を敷き詰める。6～7段階の遺物が出土した。

土坑3542 (図版58・204) 中央部北東寄りで検出した。平面形は東西約1.0m、南北約0.7mの楕円形で、深さは約0.2mである。上面近くの中央部に大きさ1～15cmの礫が詰まる。6～7段階の遺物が出土した。

土坑4389 (図版58) 中央部東寄りで検出した。平面形は東西約0.8m、南北約0.9mの方形で、深さは約0.6mである。埋土上半部に大きさ2～20cmの礫や瓦片が詰まる。6～7段階の遺物が出土した。

井戸3207 (図版59) 西部中央で検出した方形縦板横棧組の井戸である。北端の一部が攪乱されるが、掘形の平面形は東西約2.0m、南北約2.0mの隅丸方形である。深さは検出面から約1.5mで、底部の標高は27.1mである。井戸枠は内法一辺約0.7mで、残存高は約0.4mである。部材の残存状況が悪く細部の構造は不明である。東西方向を約0.2m狭めて作り直している。6段階の遺物が出土した。

井戸3721 (図版59) 中央部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。堀形は2段で上段の堀形は北東部が攪乱されるが、平面形は東西約2.4m、南北約2.4mの隅丸方形に復元できる。深さは約0.6mである。下段の堀形の平面形は東西約1.3m、南北約1.3mの隅丸方形である。深さは下段

の堀形の検出面から約1.4mで、底部の標高は26.4mである。井戸枠は内法一辺約0.7mで、残存高は約0.6mである。部材の残存状況が悪いが一辺に5～6枚の縦板を並べており一部の横棧が残る。底部中央には直径約50cm、高さ約40cmの曲物を据えた水溜がある。6段階の遺物が出土した。

井戸3507 (図版59・204) 西部中央で検出した石組の井戸である。掘形の平面形は直径約1.8mの円形である。深さは検出面から約1.7mで、底部の標高は約26.9mである。底部に大型の焼締陶器甕の上半部を倒立した状態で据え、大きさ10～30cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.8mで上部はやや広がる。7段階の遺物が出土した。

井戸3550 (図版59・204) 東部中央で検出した石組の井戸である。南側と東側がわずかに攪乱されるが、掘形の平面形は直径約1.4mの円形に復元できる。深さは検出面から約1.5mで、底部の標高は約27.4mである。底部に一辺約0.6mの方形に木枠を据え、大きさ10～30cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.8mで上部はややすぼまる。水溜はない。7段階の遺物が出土した。

井戸4342 北西部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。東側・南側が攪乱されるが、掘形の平面形は東西約1.9m、南北約2.5mの隅丸方形である。井戸枠は内法一辺約0.8mであるが、部材の残存状況は非常に悪い。完形の土師器皿のほか瓦器・須恵器・焼締陶器・中国製陶磁器など6段階の遺物がまとまって出土した。

カマド4840 (図版60) 南部中央で検出した。全体的に残存状況が悪いが、東西約2.8m、南北約2.0m、深さ約0.4mの楕円形に掘りくぼめた土坑東部に1基の壁体を構築する。平面形は東西約1.4m、南北約1.5mの楕円形に復元でき、焚口は西側を向く。壁体の立ち上がりの残存高は約0.2mである。大型の竈である。6～7段階の遺物が出土した。

土坑5040 (図版60・206) 南西部で検出した。建物基礎と重複するため周囲が攪乱されており平面形・深さなどは不明である。須恵器甕の破片と銅銭がまとまって出土していることから、須恵器甕に銅銭を埋納した遺構であったと推測する。銅銭は緡銭の状態で癒着したものが多く、全部で1049枚を採集した。6段階の遺構である。

土坑2525 (巻頭図版2、図版61) 中央部で検出した大型の焼締陶器甕を据えた土坑である。平面形は東西約3.0m、南北約4.4mの隅丸方形、深さ約1.0mで、東西4列、南北2列に計8点の甕を据える。甕を据えたそれぞれの土坑は直径約0.8m、深さ約0.2～0.4mで北列の甕2点は倒立している。甕は大部分が壊されているが、遺構全体の深さや出土した破片量から完形の状態を検出面より下部に据えられていたと考える。焼締陶器甕はいずれも常滑産で13世紀後半の特徴を持つ。他に7段階の遺物が出土した。

土坑4274 北部中央で検出した大型の焼締陶器甕を据えた土坑である。平面形は東西約3.0m、南北約1.8mの不整形、深さは約0.3mで、北列で東西5点、南列で東西4点の計9点の甕を据えたと考えられるが、残存状況は悪い。甕を据えたそれぞれの土坑は直径約0.6～0.8m、深さ約0.1～0.2mである。焼締陶器甕はいずれも常滑産であるが時期の確定はできていない。他に6～7段階の遺物が出土した。

土坑4804 (図版205) 南東部で検出した大型の甕を据えたと考えられる土坑である。平面形は

不整形で、やや不揃いながら東西2列、南北2列に4点の甕を据えた土坑である。甕を据えたそれぞれの土坑は直径約0.5～0.8m、深さ約0.2～0.3mで、甕の底部の破片が少量と6～7段階の遺物が出土した。

土坑4978(図版205) 南部中央で検出した大型の甕を据えたと考えられる土坑である。平面形は東西約1.9m、南北約2.3mの隅丸方形、深さ約0.1mで、東西2列、南北3列に6点の甕を据えた土坑である。甕を据えたそれぞれの土坑は直径約0.7～0.8m、深さ約0.4mであるが、甕の破片はほとんど出土していない。7～8段階の遺物が出土した。

土坑4829(図版62・205) 南東部東壁際で検出した。平面形は東西約1.0m、南北約1.0mの隅丸方形で、深さは約0.4mである。大型の焼締陶器甕を中央に据えるが、底部以外は壊されており、残存している掘形の深さから下半部のみを埋めていたと考えられる。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に6～7段階の遺物が出土した。

土坑3335(図版62) 北西部で検出した。平面形は東西約0.8m、南北約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。大型の焼締陶器甕を北西隅寄りに据えるが、残存状況は悪い。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に6～7段階の遺物が出土した。

土坑4017(図版62・205) 西部中央で検出した。平面形は東西約1.0m、南北約1.1mの楕円形で、深さは約0.7mである。大型の焼締陶器甕(366)を中央に据えており、残存している掘形の深さから口縁部近くまで埋めていたと考えられる。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部まで復元することができた。12世紀末から13世紀初頭の特徴を持つ。他に6段階の遺物が出土した。

土坑4385(図版62) 中央部で土坑2525と重複して検出した。平面形は東西約1.2m、南北約1.1mの不整形で、深さは約0.3mである。大型の焼締陶器甕を西寄りに据えるが、残存状況は悪い。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に7段階の遺物が出土した。

土坑4213(図版63・206) 中央部北東寄りで検出した。平面形は東西約0.5m、南北約0.6mの不整形で、深さは約0.5mである。8A段階の完形品の土師器皿が多量に出土した。

土坑3724(図版63・206) 東部中央で検出した。平面形は東西約1.8m、南北約1.3mで、深さは約0.7mである。西部は2段に落ち込む。完形品の土師器皿のほか瓦器・中国製磁器など7C段階の遺物がまとまって出土した。

土坑4847(図版63) 南部中央で検出した。東側が攪乱されるが、平面形は東西約1.0m、南北約1.4mの楕円形に復元でき、深さは約0.2mである。上面近くを中心に完形品の土師器皿や瓦器・焼締陶器・中国製磁器などが出土した。6C～7A段階の遺物である。

土坑4130(図版64・206) 中央部東寄りで検出した。平面形は長径約0.6m、短径約0.4mの楕円形で、深さは約0.3mである。上面近くで完形に近い中国製白磁碗などが出土した。6～7段階の遺物である。

土坑3638(図版64) 東部中央で検出した。平面形は東西約0.5m、南北約0.7mの小判形で、深

さは約0.3mである。埋土中央を直径約0.2mの円形に掘りくぼめて、その上面に瓦器羽釜を据える。他に土師器皿・焼土塊などが出土した。7段階の遺物である。

土坑4420 (図版64) 東部中央で検出した。北側と東側の一部が攪乱されるが、平面形は東西約0.8m、南北1.4m以上の小判形に復元でき、深さは約0.1mである。上面近くを中心に完形品の土師器皿や瓦器・焼締陶器などが出土した。6C～7A段階の遺物である。

土坑3196 (図版64) 北西部西壁際で検出した。平面形は東西約0.6m、南北約0.8mの不整形で、深さは約0.3mである。完形品の土師器皿や瓦器など6A段階の遺物がまとまって出土した。

土坑3251 北西部で検出した。平面形は直径約0.7mの円形で、深さは約0.3mである。土師器皿のほか須恵器・灰釉系陶器・中国製磁器などが出土した。6A～B段階の遺物である。

(4) 第3面の遺構 (図版32～37・207・208)

溝5845・5846・5305 西部で検出した。攪乱される部分があるが断続的に3条の溝が南北方向に延びる。溝5845は、北側は調査区外となるが、規模は南北11.3m以上、東西幅0.6～0.7m、断面形はU字形で、深さは約0.5mである。6～7段階の遺物が出土した。溝5846は、規模は南北約8.4m、東西幅約0.4～0.7m、断面形は浅いU字形で、深さは約0.1mである。7段階の遺物が出土した。溝5305は、規模は南北約15.5m、東西幅1.3～1.7m、断面形は浅いU字形で、深さは約0.2mである。6B段階の遺物が出土した。

溝5992 南半部中央で検出した南北方向の溝である。南側は調査区外となるが、規模は南北22.0m以上、東西幅0.5～0.6m、断面形は浅いU字形で、深さは約0.1mである。3段階の遺物が出土した。この溝と平行・直交する調査区南東部の他の溝からも2～3段階の遺物が出土しており併存していたことがわかる。

井戸4587 (図版65・209) 北西部で検出した曲物と木枠を合わせた井戸である。東側が攪乱されるが、掘形の平面形は東西1.4m以上、南北約1.8mの隅丸方形である。深さは検出面から約1.1mで、底部の標高は約27.2mである。中央部に直径約50cm、残存高約40cmの曲物を据え、周囲は一辺約0.6mの方形に木枠を組む。曲物・木枠とも残存状況は悪い。水溜はない。四隅に直径約10cmの柱跡がある。3～4段階の遺物が出土した。

井戸5338 (図版65・209) 北東部で検出した木枠をそなえた井戸である。北側・南側が大きく攪乱されるが、掘形の平面形は東西約2.4m以上、南北2.0m以上の隅丸方形と考えられる。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は約27.3mである。深さ約0.7mで掘形に段を作り、中心部分に一辺約0.7mの方形に木枠を据えた痕跡がある。水溜はない。3段階の遺物が出土した。

井戸5407 (図版65・66・209) 北東部で検出した石組の井戸で上部は壊されている。掘形の平面形は東西約1.5m、南北約1.8mの楕円形である。深さは検出面から約1.1mで、底部の標高は約27.3mである。大きさ10～30cmの河原石を隅丸方形に積み上げる。内径は約0.6mで、底部中央に直径約0.3m、深さ約0.1mの水溜がある。埋土上部では完形の瓦器羽釜など6B段階の遺物がまとまって出土した。

井戸5665 (図版65・209) 東部中央で検出した板組と石組を合わせた井戸である。掘形の平面形は東西約1.6m、南北約1.8mの隅丸方形である。深さは検出面から約1.4mで、底部の標高は約26.9mである。下半部は2重の板組で、中央には幅5～10cmの板材を円形に組み合わせており、内径は約0.6m、残存高は約0.2mである。この外側には幅10～15cmの縦板を一辺約0.9mの方形に組み合わせており、残存高は約0.4mである。上半部は大きさ15～50cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.8mで上部はやや広がる。水溜はない。6～7段階の遺物が出土した。

土坑4638 (図版66・210) 西部中央壁際で検出した。平面形は東西約0.8m、南北約1.2mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。底面には長軸の直交方向に板を敷き並べる。底板上面の一部には人骨と考えられる骨片が残ることから木棺と推測する。他に6～7段階の遺物が出土した。

土坑5570 (図版66) 北東部で検出した。北側に別の遺構が重複するが、平面形は直径約0.3mの円形で、深さは約0.4mである。底部近くから完形の土師器皿などが出土した。埋納遺構の可能性はある。4～5段階の遺物である。

土坑5699 (図版66・210) 東部中央壁際で検出した。平面形は直径15cmの円形で、深さは約20cmである。中国製白磁皿12点が重なった状態で出土した。木質はほとんど残っていないが、白磁皿を収納した円筒形の木製容器を埋めた埋納遺構の可能性はある。他に6～7段階の遺物が出土した。

土坑5709 (図版66・210) 東部中央で検出した。平面形は直径約0.5mの円形で、深さは約0.3mである。埋土中ほどに完形の土師器皿が重なった状態で出土した。埋納遺構の可能性はある。3B段階の遺物である。

土坑5602 中央部北東寄りで検出した。南側の一部が攪乱されるが、平面形は東西約1.2m、南北約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.5mである。焼締陶器壺のほか土師器・瓦器・須恵器・灰釉系陶器・中国製磁器などが出土した。6段階の遺物である。

土坑5669 (図版67) 中央部で検出した。平面形は東西約0.8m、南北約0.7mの楕円形で、深さは約0.2mである。大型の焼締陶器甕を中央に据えるが、残存状況は悪い。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に7段階の遺物が出土した。

土坑5146 (図版67) 西部中央で検出した。北側が攪乱されるが、平面形は直径約0.9mの円形に復元でき、深さは約0.5mである。大型の焼締陶器甕を中央に据えるが、残存状況は悪い。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に6段階の遺物が出土した。

土坑5227 (図版67・210) 南東部で検出した。平面形は東西約3.5m、南北約7.2mで、深さは約0.9mの大規模な土坑である。埋土は炭を含んでおり、多量の5B段階の土師器皿のほか土製品の炉壁など多様な遺物が出土した。

(5) 第4面の遺構 (図版38～40)

建物2 (図版68・211) 北部中央で検出した南北棟の掘立柱建物である。身舎は桁行3間×梁行2間で庇はない。規模は柱穴の芯々間で南北約6.2m、東西約3.8mで、柱間は桁行7尺・梁行6.5尺である。柱穴掘形の平面形は楕円形もしくは隅丸方形で、規模は一辺0.6～0.8m、深さは0.2～0.4mである。ほぼ中央に直径約20cmの柱あたりがある。柱の抜き取り痕跡はない。2段階の遺物が出土した。

北東部柱穴群 建物2の周囲では柱筋の並びが不明瞭ながら、掘形・柱あたりを確認できる柱穴を多数検出した。礎石や据え付け石を備えた柱穴はほとんどない。掘形の平面形は円形・楕円形・隅丸方形で、規模は一辺0.4～1.0m、深さ0.2～0.3mでばらつきがある。柱あたりの直径は約20～30cmである。これらの柱穴から建物2以外にも掘立柱建物や塀があったことが推測できる。

土坑1213 北東部で検出した。北辺・西辺は不明瞭であるが、東西約3.8m、南北約3.7mの範囲に広がる不整形な落ち込みである。埋土は上層がシルト層、下層が砂礫層で、平安京造営前の流路内に形成された遺構である。6世紀を中心とする遺物が出土した。

3. 3区の調査

(1) 層序と遺構の概要

層序 (図版69～71・212・228) 調査区全域には約30～60cmの近代・現代盛土が広がり、一部では1区・2区と同様に蛤御門の変にともなう大火で焼けた瓦などを処理した土坑や近代の建物基礎が地山にまで及ぶ。近代盛土下層は約50～80cmの厚さの江戸時代前期から後期の整地層・包含層である。江戸時代の土層は西側ほど厚くなる。この下面を第1面とした。

これらの下層は約10～20cmの厚さの鎌倉時代から室町時代の整地層である暗褐色砂泥(北壁2の4層)・灰褐色砂泥(北西部西壁11層・北東部東壁8層)・にぶい黄褐色砂泥(南壁12層・西壁10層)などである。これらの整地層を第1層として遺物を取り上げ、下面を第2面とした。

第1層の下層は約20～30cmの厚さの平安時代中期から鎌倉時代の整地層である灰黄褐色泥砂(北壁2の9層)・黄褐色泥砂(北壁2の10層)・黒褐色泥砂(北西部西壁12層・北東部東壁9層・南壁17層)・暗オリーブ褐色泥砂(中央セクション1層)などである。これらの整地層を第2層として遺物を取り上げ、下面を第3面とした。また、調査区南半部では平安時代前期の遺構を追及するため、第2-2層(中央セクション2層)として部分的な掘下げを行い下面を第2-2面として精査したが、遺構の状況は第2面と共通していたため第2-2面検出遺構は第2面検出遺構に包括した。なお、調査区南西部では第2層下面は基盤層(地山)の黄褐色砂礫(中央セクション12層)となる。

第2層の下層は約10～30cmの厚さの平安時代前期の整地層であるオリーブ褐色泥砂(北壁2の

11層・北東部東壁11層・中央セクション7層）・褐色細砂（北壁2の12層・中央セクション8層）・にぶい黄褐色泥砂（北西部西壁14層・中央セクション5層）・オリーブ褐色泥砂（中央セクション6層）などである。これらの整地層は平安京造営前の流路9400埋土を母材としており、第3層として遺物を取り上げた。

さらに下層には調査区中央の広い範囲に流路9400が広がる。埋土はオリーブ褐色シルト～細砂（中央セクション9層・10層・11層）などで、最深部では厚さ約0.8mになる。流路底面は基盤層の（地山）の黄褐色砂礫（中央セクション12層）が広がる。

遺構の概要 第1面から第3面で3402基の遺構を検出した。第1面では鎌倉時代から江戸時代前期（13～17世紀）、第2面では平安時代中期から鎌倉時代（10～13世紀）、第3面では平安時代前期以前（9世紀以前）を中心とする時期の遺構を検出している。各面の遺構には建物・柱穴列・溝・甕列・池・井戸・土坑・柱穴などがある。

（2）第1面の遺構（図版73～78・213・215）

建物3（図版86） 南部中央で検出した。北辺・東辺は復元できていないが、南辺・西辺に礎石を据えた柱穴が並ぶことから建物と判断した。南辺の柱穴は3基がほぼ東西に並び、検出長は約3.3mである。柱穴は直径0.4～0.5m、深さ0.1～0.2mで、大きさ約20cmの礎石を据える。柱穴の間隔は東から約2.0mと約1.2mである。西辺の柱穴は7基がほぼ南北に並び、検出長は約5.9mである。柱穴は直径0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mで、大きさ15～20cmの礎石を据える。柱穴の間隔は0.9～1.0mである。それぞれの柱穴から小片ではあるが6～7段階の遺物が出土した。

柱穴列7（図版87・214） 北半部東西中央で検出した南北方向の柱穴列で、検出長は約11.5mである。柱穴が近接して重なっていることから、少なくとも2時期の重複がある。柱穴は直径約0.2～0.4m、深さ約0.1～0.2mで、大きさ10～20cmの礎石を据えるものが多い。攪乱を受けている部分もあることから柱穴の間隔は不揃いで近接する柱穴を除くと約1.0～1.4mである。小片ではあるが6～7段階の遺物が出土した。敷地境界を区画する柵または塀と推測する。

柱穴列8（図版88） 北西部で検出した南北方向の柱穴列で、検出長は約8.7mである。柱穴は直径約0.2～0.3m、深さ約0.1～0.2mで、大きさ15cm程度の礎石を据えるものが多い。攪乱を受けている部分もあることから柱穴の間隔は不揃いである。それぞれの柱穴から小片ではあるが6～7段階の遺物が出土した。なお、この柱穴列は柱穴列10とT字形に接続する可能性がある。

柱穴列9（図版88） 南部中央南壁際で検出した東西方向の柱穴列で、検出長は約5.8mである。柱穴が近接する部分があることから造り替えの可能性がある。柱穴は直径約0.3～0.5m、深さ約0.1mで、大きさ15～20cmの礎石を据えるものがある。柱穴の間隔は不揃いで約1.2～1.8mである。それぞれの柱穴から小片ではあるが6～8段階の遺物が出土した。なお、この柱穴列は建物3の南辺柱列とほぼ平行しており間隔は約2.1mである。

柱穴列10（図版89） 北西部で検出した東西方向の柱穴列で、西側は調査区外へ延びるが、検出長は10.7m以上である。柱穴が近接して重なっていることから、少なくとも2時期の重複がある。

北側の柱穴列は東西6.5m以上、南北幅約0.5m、深さ約0.2mの溝底面に柱穴が並んでおり、土堀の基礎の可能性がある。柱穴は直径約0.4mの円形もしくは楕円形、深さ約0.1～0.3mで、大きさ15～30cmの礎石を据えるものが多い。柱穴の間隔は不揃いで0.7～2.1mであるが、柱穴7544・7548、柱穴7492・7444・7462は約1.7m間隔になる。それぞれの柱穴から小片ではあるが7～9段階の遺物が出土した。なお、この柱穴列は南側の柱穴列及び北西部甕列を壊している。

南側の柱穴列は北側の柱穴列にともなう溝の南肩上面に柱穴が並ぶ。柱穴は直径約0.3～0.4m、深さ約0.1～0.2mで、大きさ15～20cmの礎石を据えるものがある。柱穴の間隔は不揃いで約0.8～1.8mである。それぞれの柱穴から小片ではあるが7段階を中心とする遺物が出土した。

柱穴列11 (図版90) 南西部で検出した南北方向の柱穴列で、検出長は約4.5mである。柱穴は直径約0.3～0.5m、深さ約0.1～0.2mで、大きさ15～30cmの礎石を据える。柱穴の間隔は短く不揃いで約0.7～1.0mである。それぞれの柱穴から小片ではあるが6～8段階の遺物が出土した。

柱穴列12 (図版90) 南西部南壁際で検出した東西方向の柱穴列で、検出長は約4.4mである。柱穴が近接して重なっていることから、少なくとも2時期の重複があると考えられるが、柱穴列としては不明瞭である。柱穴は直径約0.2～0.4m、深さ約0.1～0.2mで、礎石はない。柱穴の間隔は不揃いで、約1.0～2.1mである。それぞれの柱穴から小片ではあるが6～7段階を中心とする遺物が出土した。

溝7774 (図版214) 北西部で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外となるが、規模は東西12.3m以上、南北幅0.7～1.0m、断面形は逆台形で、深さは0.4～0.5mである。土師器・焼締陶器・磁器など11B～C段階の遺物が出土した。

溝6249 (図版214) 北部西寄りで検出した東西方向の溝である。溝7774の北側に平行する。東端・西端が攪乱されるが、規模は東西7.0m以上、南北幅0.6～0.8m、断面形は逆台形で、深さは約0.3mである。北肩の一部に棧瓦・軒棧瓦を並べて護岸を施す。18～19世紀の遺物が出土した。

溝6250 北部西寄りで検出した東西方向の溝である。溝6249のさらに北側に平行する。東端が攪乱されるが、規模は東西6.3m以上、南北幅0.5～0.7m、断面形はU字形で、深さは0.2～0.3mである。11～12段階の遺物が出土した。

溝6288 (図版214) 北部中央で検出した東西方向の溝である。溝7444の東延長にあたる。東端が土坑と重複するが、規模は東西約6.2m、南北幅約1.2m、断面形はU字形で、深さは約0.6mである。18～19世紀の遺物が出土した。

北西部甕列 (図版91～93・216・217) 北西部壁際で検出した大型の焼締陶器甕を40基以上並べ据えた遺構である。²⁾ 攪乱される部分が多いが、検出範囲は東西約12.0m、南北約6.8mで、北西側は調査区外へ広がる。おおまかに東西・南北方向に並ぶが、方向や間隔が不揃いな箇所がある。甕は直径約0.7～0.9m、深さ0.2～0.4mの浅い土坑に据え付けられており、底部が残存するものが多い。甕内部の埋土には炭・焼土が多く含まれる。産地不明の須恵質の甕が含まれているが大部分は常滑産である。土坑7415出土の甕底部内から8A段階の土師器皿が出土したことから、この時期(1350～1380年頃)に甕列が廃絶したことがわかる。数多くの大型の甕を並べ据えていること

から、酒を醸造した甕倉であったと推測する。

南西部甕列（巻頭図版3、図版94～99・218）南西部で検出した大型の焼締陶器甕を並べ据えた遺構である。³⁾攪乱される部分が少なく北西部甕列よりも構成がわかりやすい。甕を据えた土坑の大きさから北半部に大型の甕、南半部に中型の甕を並べたことがわかる。大型の甕は東西4列・南北3列の12基が並んでおり、検出範囲は東西約4.8m、南北約3.6mである。甕は直径約0.9～1.1m、深さ約0.1～0.2mの底部が平坦な浅い土坑に据え付けられているが、甕の底部が残存する土坑はない。

中型の甕は東西10列・南北8列に並んでおり、検出範囲は東西約9.2m、南北約7.4mで、西側は調査区外に広がる可能性がある。ただし、南端の甕列は11基、また、甕列東端中央の4基分には据え付け跡がないので復元できる甕の据え付け穴は77基になる。甕は直径約0.6～0.8m、深さ約0.2～0.5mの土坑に据え付けられており、北西部の1基（土坑6735）と北東部の5基（土坑6704・6899・6448・6458・6460）の6基にのみ底部が残存する。いずれも常滑産である。

大型の甕列の東側・南側にも甕を据えた可能性がある大小の土坑があることから、さらに多くの甕が並んでいた可能性がある。甕の据え付け土坑から小片ではあるが5～6段階を中心とする遺物が出土した。数多くの大型・中型の甕を並べ据えていることから、北西部甕列と同様の酒を醸造した甕倉であったと推測する。

池7479（図版69・100・218）北西部壁際で検出した。北側・西側は調査区外となる。検出規模は東西4.0m以上、南北4.8m以上で、池底は北西に向けて傾斜しており、最深部は検出面から約0.2mである。汀は北東から南西方向に延び、わずかに南東側へ弯曲する。汀斜面には大きさ2～15cmの石がまばらに敷かれており、池底西部には2基の景石を据える。景石は池底を少し掘りくぼめて据えており、汀上面には灰黄褐色泥土を重ねる。西側の景石は長辺約50cm、短辺約30cm、高さ約50cmで直立する。東側の景石は長辺約50cm、短辺約20cm、高さ約20cmで長軸を西側の景石に揃えている。石質はいずれもチャートである。北壁埋土には他の石材が露出しており、さらに多くの景石があったことがわかる。汀は北西部甕列の焼締陶器甕を壊している。洲浜を薄く覆う黒褐色砂泥（北壁1の7層）からは9段階の遺物が出土した。景石の向きや洲浜の石の密度からみると視点場となる建物は北西側にあったと推測できる。

土坑6309（図版101）北東部で検出した。東側が攪乱されるが、平面形は東西1.7m以上、南北約1.1mの隅丸長方形に復元でき、深さは凹凸があるが最深部で約0.5mである。上面近くには大きさ2～15cmの礫や土器・埴の破片をまばらに含む。9段階の遺物が出土した。

土坑7135・7136（図版101・219）中央部南寄りで検出した。やや筋交いの位置で2基が南北に並ぶ。北側の土坑7135は、平面形は東西約0.7m、南北約0.6mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。埋土には大きさ3～10cmの礫が多量に詰まる。5～6段階の遺物が出土した。

南側の土坑7136は、平面形は直径約1.0mの円形で、深さは約0.2mである。埋土には大きさ5～10cmの礫が詰まる。5～6段階の遺物が出土した。

井戸6379（図版102・220）東部中央で検出した石組の井戸である。掘形の平面形は直径約1.9

mの円形である。深さは検出面から約1.5mで、底部の標高は約27.0mである。底部に一辺約0.8mの方形に木枠を据え、大きさ15～50cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.9mで上部はやや広がる。水溜はない。10段階の遺物が出土した。

井戸6321 (図版102・215) 北東部で検出した石組の井戸と考えられる遺構である。南西側が攪乱されるが、掘形の平面形は直径約1.5mの円形に復元できる。深さは検出面から約1.3mで、底部の標高は約26.8mである。最上部に大きさ15～30cmの河原石を円形に積み上げるが残存状況は悪い。石組の内径は約0.7mに復元できる。木枠の痕跡や水溜はなく、埋土は検出面から深さ約0.7mの位置で小礫を敷いた面がある。また、下部は深さ約0.9mで掘形に段を作り、中心部分を内径約0.6m、深さ約0.4m掘り下げている。石組部分の埋土から13段階の遺物が出土した。

井戸6375 (図版102・220) 東部中央東壁際で検出した円形の板組と石組を合わせた井戸である。掘形の平面形は長径約2.5m、短径約2.3mの楕円形である。深さは検出面から約1.4mで、底部の標高は約26.9mである。下半部は幅約20cmの板材を円形に組み合わせており、内径は約1.1m、高さは約0.7mである。上半部は大きさ20～50cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約1.2mで上部はやや広がる。水溜はない。10段階の遺物が出土した。

井戸6222 (図版102) 中央部北西寄りで検出した塼積みの井戸である。掘形の平面形は直径約1.0mの円形である。深さは1.6m以上であるが作業の安全のため底部まで掘り下げしていない。井戸枠は1段に9枚の塼を円形に組み合わせており、内径は約0.7mである。内部に墓石(石66)が投棄された状態で出土した。19世紀の遺構である。

井戸6385 (図版103) 中央部東寄りで検出した石組の井戸である。掘形の平面形は東西約2.2m、南北約2.1mの隅丸方形である。深さは検出面から約1.6mで、底部の標高は約27.0mである。大きさ15～30cmの河原石を方形に積み上げるが、積み方は乱雑で南半部上部は壊されている。木枠の痕跡や水溜はなく、石組下端からさらに約0.3m掘り下げている。6～7段階の遺物が出土した。

井戸7334 (図版103) 西部中央で検出した石組の井戸である。掘形の平面形は直径約1.6mの円形である。深さは検出面から約1.7mで、底部の標高は約26.6mである。底部に一辺約0.7mの方形に木枠を据え、大きさ15～30cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.9mである。水溜はなく、木枠下端からさらに約0.3m掘り下げている。9段階の遺物が出土した。

井戸6662 (図版103・220) 中央部で検出した石組の井戸である。掘形の平面形は長径約1.8m、短径約1.6mの楕円形である。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は約27.3mである。底部に一辺約0.6mの方形に木枠を据え、大きさ10～30cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.8mで、掘形にも礫を詰める。水溜はない。6段階の遺物が出土した。

井戸6380 (図版103・220) 東部中央で検出した石組の井戸である。掘形の平面形は直径約1.7mの円形である。深さは検出面から約1.3mで、底部の標高は約27.1mである。大きさ10～30cmの河原石を円形に積み上げる。内径は約0.7mで上部はやや広がる。木枠の痕跡や水溜はなく、石組下端からさらに約0.4m掘り下げている。6～7段階の遺物が出土した。

土坑6188 (図版104) 中央部南寄りで検出した大型の甕を据えたと考えられる遺構である。平面形は東西約3.7m、南北約2.5mの隅丸方形で、深さ約0.2mの土坑に、東西4列、南北2列の甕を据えた土坑が並ぶ。土坑は直径0.9~1.0m、深さ0.2~0.4mで、南列西から2基目のみ深さ約0.1mである。常滑産の甕の破片と6~7段階を中心とする遺物が出土した。

土坑7553 (図版105) 北西部甕列内で検出した。南西側が攪乱されるが、平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの楕円形で、深さは約0.6mである。大型の焼締陶器甕(528)を中央に据えており、残存している掘形の深さから下半部を埋めていたと考えられる。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部まで復元することができた。12世紀末から13世紀初頭の特徴を持つ。他に7段階の遺物が出土した。

土坑7486 (図版105) 東部中央壁際で検出した。平面形は長径約1.0m、短径約0.9mの楕円形で、深さは約0.4mである。大型の焼締陶器甕を中央に据えるが残存状況は悪い。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。他に7段階の遺物が出土した。

土坑6556 (図版105・221) 東部で検出した。平面形は一辺約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。中型の瓦器甕(526)の破片が折り重なって出土、口縁部まで復元できたことから完形の状態で据えていたことがわかる。大和産で13世紀頃の特徴を持つ。他に7段階の遺物が出土した。

土坑7415 (図版105) 北西部甕列内で検出した。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの楕円形で、深さは約0.5mである。大型の焼締陶器甕(538)を中央に据えており、残存している掘形の深さから下半部を埋めていたと考えられる。焼締陶器甕は常滑産で、口縁部まで復元することができた。12世紀後半の特徴を持つ。内部の埋土からは8A段階の遺物が出土した。

土坑6145・6148 (図版106・221) 西部中央で検出した大型の焼締陶器甕・須恵器甕を並べて据えた遺構である。平面形は東西約2.4m、南北約1.1mの隅丸方形で、深さ約0.2mである。この土坑内に甕を据えた2基の土坑が東西に並ぶ。いずれも甕の輪郭に合わせた形状で直径約0.8m、深さ0.4mである。西側の土坑6145には常滑産の大型の甕(211)の下半部が残存する。口縁部の破片が出土しなかったため時期の確定はできていない。東側の土坑6148には産地不明の須恵器の大型の甕(212)の下半部が残存しており、内部に落ち込んだ破片を接合して口縁部まで復元することができた。他に5~6段階の遺物が出土した。

土坑7627 (図版106・221) 中央部北西寄りで検出した。東側の一部が攪乱されるが、平面形は東西約1.4m、南北約1.2mの不整形な方形で、深さは約0.2mである。多量の土師器皿が出土した。7C段階の遺物である。

土坑7963 (図版107・215) 北部中央で検出した。平面形は直径約0.5mの円形で、深さは約0.3mである。埋土は炭・灰・焼土を含む。大型の瓦器火鉢(675)が出土した。9A段階の遺物である。

土坑6801 (図版107・221) 南東部で検出した。西側を攪乱されるが、平面形は南北約0.7m、

東西約0.6mの不整形で、深さは約0.4mである。土師器小皿・大皿が重なった状態で出土した。埋納遺構の可能性がある。4C段階の遺物である。

土坑6152（図版107・219） 西部中央で検出した。掘形の平面形は東西約1.6m、南北約2.1mのややいびつな隅丸方形である。深さは検出面から約0.7mで、底部の標高は約27.7mであることから井戸ではない。内法一辺約0.9mの方形に大きき10～40cmの石材を積み上げており、石材には軸石（石70）が転用されていた。10段階の遺物が出土した。

土坑6107 東部中央で検出した。他の遺構に攪乱されるが、平面形は東西約1.1m、南北約1.2mの不整形で、深さは約0.1mである。8A段階の土師器皿のほか瓦器鍋・羽釜、灰釉系陶器鉢などが出土した。

土坑6111（図版221） 東部中央で検出した。北側・東側や南部が攪乱されるが、平面形は東西3.0m以上、南北3.0m以上の隅丸方形で、深さ約0.2mである。常滑産の焼締陶器甕の破片が多量に出土した。8A段階の遺物である。

（3）第2面の遺構（図版79～84・222）

柱穴列13（図版108） 北部中央で検出した東西方向の柱穴列で、検出長は約6.3mである。柱穴が近接する部分があることから造り替えの可能性がある。柱穴は直径約0.2～0.4m、深さ約0.1～0.2mで、大きき15～25cmの礎石を据えるものが多い。攪乱を受けている部分もあることから柱穴の間隔は不揃いである。それぞれの柱穴から小片ではあるが5～7段階の遺物が出土した。第1面溝7444南側に平行する位置にあたる。

柱穴列14（図版108） 北西部で検出した東西方向の柱穴列で、西側は調査区外へ延びるが、検出長は7.9m以上である。柱穴は直径約0.3～0.5m、深さ約0.1～0.2mで、大きき15～25cmの礎石を据える。柱穴8074・8073には底面にも礎石がある。柱穴の間隔はやや不揃いで約1.9～2.2mである。それぞれの柱穴から小片ではあるが6～7段階を中心とする遺物が出土した。第1面柱穴列10と重複する位置にあたる。

柱穴9228（図版226） 北西部で検出した柱穴列14を構成する柱穴である。被熱により変色した大きき約20cmの礎石（石67）を据える。6～7段階の遺構である。

柱穴8026（図版226） 北西部で検出した。被熱により変色・破損した大きき約30cmの礎石（石68）を据える。6段階の遺構である。

井戸7482・土坑8053・溝9011（図版109・224） 西部で検出した一体の遺構である。井戸7482は曲物を2段以上据える井戸である。掘形の平面形は東西約1.0m、南北約1.2mの隅丸方形である。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は約27.0mである。下段の曲物は直径約50cm、高さ約30cm、上段の曲物は直径約60cm、残存高約10cmである。水溜はない。4段階の遺物が出土した。

土坑8053は井戸7482南半部を包み込む形状で南側に広がり、南西部は溝9011につながる。南端が攪乱されるが、東西約2.0m、南北約1.8mで、深さは約0.2mである。底面は固く締まっており、

粗密があるが大きさ5～15cmの礫を敷き詰める。4段階の遺物が出土した。

溝9011は土坑8053南西部から南に延び、直角に屈曲して西側は調査区外へ延びる。検出長は南北約6.0m、東西5.7m以上である。断面形は台形で幅約0.5m、深さは約0.4mである。底面は南北部分はわずかに南へ、東西部分はわずかに西へ傾斜する。4段階の遺物が出土した。

これら3基の遺構は時期が同じであることから、土坑8053が井戸横の洗い場、溝9011が排水溝であったと推測する。

土坑8458（巻頭図版3、図版110）北東部東壁際で検出した。中心部分の平面形は東西約1.2m、南北約2.2mの長円形で、西部に括れがある。深さは括れの北部で約0.4m、南部で約0.2mである。括れの北部には直径約30cmの太い柱材を据える。南側に傾いており、先端は腐食のため先細る。東西両側には長径約0.6m、短径約0.3mの長円形の浅い土坑がある。括れの南部には大きさ40cm×25cm、40cm×40cmの石を平坦な面を上にして南北に並べる。北側の石の上には柱根2点を東西に並べて置く。また、北端・南端の壁際から小さな板片が出土した。5段階の遺物が出土した。

土坑8962（図版111・223）中央部東寄りで検出した。北側以外の周囲が攪乱されるため平面形は不明である。深さは約0.2mである。埋土には大きさ2～10cmの礫が多量に詰まる。6～7段階の遺物が出土した。

土坑9062・9061（図版111・223）いずれも東部中央で検出した。土坑9062の南側に土坑9061が接する。土坑9062は東部が攪乱されるが、平面形は東西0.9m以上、南北約1.0mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。埋土には直径2～10cmの礫が詰まる。2～3段階の遺物が出土した。

土坑9061は北西側・南西側が攪乱されるが、平面形は東西約1.4m、南北約1.0mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。埋土には上面近くを中心に大きさ1～5cmの礫が詰まる。3段階の遺物が出土した。

土坑9158（図版112・223）東部中央で検出した。北東側が大きく攪乱されるが、平面形は東西1.6m以上、南北約1.0mの隅丸方形に復元でき、深さは約1.5mである。上面近くには大きさ5～15cmの河原石をまばらに含む。4段階の遺物が出土した。

土坑9197（図版112・223）南西部で検出した。平面形は直径約1.2mの円形で、深さは約0.5mである。上面近くには大きさ5～30cmの河原石を含んでおり、円形に並ぶところもあるが井戸ではない。5～6段階の遺物が出土した。

土坑9119（図版112）南西部で検出した。平面形は直径約0.6mの円形で、深さは約0.1mである。上面近くには大きさ5～10cmの河原石を含む。出土遺物はない。

井戸8172（図版113）中央部北西寄りで検出した石組の井戸である。掘形の平面形は東西約2.0m、南北約1.5mの小判形である。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は約27.3mである。底部に一辺約0.5mの方形に木枠を据え、大きさ15～30cmの河原石を円形に積み上げる。内径は最下部で約0.6mで上部はやや広がる。水溜はない。7～8段階の遺物が出土した。

井戸9215（図版113）北西部で検出した。掘形の平面形は東西約1.9m、南北約2.1mの隅丸方形である。深さは検出面から約0.9mで、底部の標高は約27.0mである。底部に一辺約0.7mの方形

に幅広の木杵を据え、大きさ20～40cmの河原石を方形に並べる。水溜はない。6段階の遺物が出土した。

井戸8558 (図版113・225) 中央部で検出した石組の井戸である。掘形の平面形は直径約1.5mの円形である。深さは検出面から約1.4mで、底部の標高は約26.9mである。下半部は内径約0.4mの円筒形で、縦板を円形に組んでいた可能性がある。上半部は大きさ15～25cmの河原石を円形に積み上げる。内径は最下部で約0.5mで上部はやや広がる。水溜はない。5段階の遺物が出土した。

井戸8204 (図版113) 中央部北西寄りで検出した。東側が攪乱されるが、掘形の平面形は東西約2.7m、南北約2.0mの楕円形に復元できる。深さは検出面から約1.3mで、底部の標高は約26.8mである。底部に一辺約0.9mの方形に縦板を並べ、長辺約40cmの河原石を四隅に据える。水溜はない。6～7段階の遺物が出土した。

井戸8436 (図版114) 北東部で検出した円形板組の井戸である。北西側が攪乱されるが、掘形の平面形は直径約1.8mの円形である。深さは検出面から約1.2mで、底部の標高は約26.9mである。井戸杵は幅約10cmの板材を円形に組み合わせしており、内径は約0.7m、残存高は約0.8mである。水溜はない。5～6段階の遺物が出土した。

井戸8470 (図版114) 北東部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形の平面形は一辺約1.3mの方形である。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は約26.9mである。井戸杵は内法一辺約0.7m、残存高は約0.6mである。一辺に縦板を3～4枚並べており、最下部ともう1段の横棧が残る。底部中央に直径約0.4m、深さ約0.2mの水溜がある。4段階の遺物が出土した。

井戸8474 (図版114・225) 北東部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。南側を大きく攪乱されるが、掘形の平面形は直径約2.1mの円形に復元できる。深さは検出面から約0.5mで、底部の標高は約27.3mである。井戸杵は内法一辺約0.8mに復元でき、残存高は約0.4mである。残存する北辺には縦板を3枚並べており最下部の横棧が残る。水溜は不明である。出土遺物は少ないが重複する遺構との関係から5段階の遺構と推測する。

井戸9207 (図版114・224) 北西部で検出した曲物を据える井戸である。掘形の平面形は一辺約1.2mの方形である。深さは検出面から約0.7mで、底部の標高は約27.0mである。直径約70cm、高さ約40cmの大型の曲物を中央に据え付け、上部に一辺約0.8mの方形に横棧を組む。水溜はない。2～3段階の遺物が出土した。

井戸6373 (図版225) 東部中央で検出した方形縦板組の井戸である。北側が攪乱されるが、掘形の平面形は一辺約1.6mの隅丸方形に復元できる。深さは検出面から約0.9mで、底部の標高は約26.9mである。井戸杵の残存状況は悪く構造の詳細は不明である。埋土中心で節を抜いた細い竹を検出した。井戸を埋め立てるにあたって「息抜き」として竹を設置したと推測する。5～6段階の遺物が出土した。「息抜き」の事例としては古い。

井戸9297 南東部で検出した方形縦板組の井戸である。掘形の平面形は一辺2.2mのほぼ方形で、深さは約0.9mである。井戸杵は内法一辺約1.1mであるが、部材の残存状況は悪い。土師器皿のほか須恵器など4C～5A段階の遺物がまとまって出土した。

井戸8917 南部中央で検出した方形縦板組の井戸である。掘形の平面形は東西約1.8m、南北約2.3mの楕円形で、深さは約1.3mである。井戸枠は内法一辺約1.0mであるが、部材の残存状況は悪い。底面中西寄りに直径約40cmの曲物を据えた痕跡がある。土師器皿のほか瓦器・須恵器など6 B段階の遺物がまとまって出土した。

井戸8551 中央部北寄りで検出した。方形縦板組の井戸と考えられるが残存状況は悪い。平面形は東西約1.7m、南北約1.4mの隅丸長方形で、深さは約1.4mである。土師器皿のほか瓦器・焼締陶器・灰釉系陶器・施釉陶器など8 A段階の遺物がまとまって出土した。

井戸8480 北東部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。西側・東側が攪乱されるが、掘形の平面形は一辺約1.2mの隅丸方形に復元でき、深さは検出面から約0.9mである。井戸枠は内法一辺約0.6mで、一部の縦板と最下段の横棧が残る。土師器皿のほか瓦器・焼締陶器・中国製磁器など9 C段階の遺物がまとまって出土した。

土坑8019・8020 (図版115・226) 西部中央壁際で検出した。攪乱により分断されていたため北側を土坑8019、南側を土坑8020としたが一体の遺構である。北側が攪乱され西側は調査区外となる。平面形は不整形で括れる箇所があり、底面にも凹凸があることから複数の土坑が重なっているようだが、それぞれの輪郭は検出できなかった。土器の広がる範囲は南北約3.5m、東西約1.7mで、最も深い部分で深さは約0.4mである。上面近くを中心に完形品を含む7 A～B段階の土師器皿が多量に出土した。

土坑8856 (図版116・226) 南東部東壁際で検出した。南西側が攪乱され東側は調査区外となる。平面形は東西1.9m以上、南北1.7mの隅丸方形で、深さは約0.6mである。埋土には二次焼成を受けた多量の瓦と炭を含む。6 B段階の遺物が出土した。

土坑8786 (図版116) 中央部南東寄りで検出した。部分的に攪乱されるが、平面形は東西約1.5m、南北約1.0mの隅丸方形である。大ききさ15～25cmの平坦な石を並べており、墓壇の可能性を考えたが確実な痕跡はない。6段階の遺物が出土した。

土坑8857 (図版116・226) 南東部東壁際で検出した。周囲が攪乱され東側は調査区外となるため平面形は不明である。深さは約0.1mである。3 A～B段階の土師器皿がまとまって出土した。

土坑9385 (図版116・226) 中央部南東寄りで検出した。平面形は長径約0.6m、短径約0.5mの楕円形で、深さは約0.2mである。完形の瓦器椀が出土した。埋納遺構の可能性はある。6段階の遺物である。

土坑9379 南東部で検出した。周囲が攪乱されるため平面形は不明であるが、東西2.6m以上、南北1.8m以上で、深さは約0.2mである。土師器・須恵器の椀皿類など奈良時代の遺物がまとまって出土した。

土坑8598 中央部で検出した。南側が攪乱されるが、平面形は東西約2.6m、南北2.6m以上の隅丸方形で、深さは約0.2mである。土師器・須恵器の椀皿類など1 C段階の遺物がまとまって出土した。

土坑8709 中央部で検出した。北側が大きく攪乱されるが、平面形は東西約3.4m、南北2.4m

以上の不整形で、深さは約0.2mである。土師器・須恵器の椀皿類など1 C段階の遺物がまとめて出土した。土坑8598と土坑8709は攪乱に分断されるが向き合う位置に近接しており、一体の遺構であった可能性がある。

土坑8841 南東部で検出した。東端が攪乱され西部は井戸9297と重複するが、平面形は東西3.0m以上、南北約1.8mの隅丸長方形で、深さは約0.2mである。土師器皿のほか瓦器・白色土器・須恵器・灰釉系陶器・中国製磁器など5 A段階の遺物がまとめて出土した。

土坑8671 南東部で検出した。平面形は長径約2.2m、短径約0.9mのいびつな楕円形で、深さは約0.3mである。土師器皿のほか瓦器など6 A段階の遺物がまとめて出土した。

土坑8852 南東部で検出した。平面形は東西約1.8m、南北約2.0mの楕円形で、深さは約1.0mである。土師器皿のほか瓦器・須恵器・中国製磁器など6 B段階の遺物がまとめて出土した。

(4) 第3面の遺構 (図版85・227)

流路9400 (図版71・85・227・228) 北部・南部以外の調査区内ほぼ全面で検出した東西方向の流路である。検出長34m、幅約30m、深さ0.7～1.1mである。北肩は比較的傾斜が強く、南肩は緩やかで2段に落ちる。東部では上端が南に広がるが、最深部はわずかに北に振る方位を取る。埋土は大きく2段階に分かれ、下半は厚さ約0.8mの自然堆積層、上半は厚さ約0.2mの土器片が混じる遺物包含層(第3層)になる。下半の堆積層の炭化物の年代測定を行ったところ4世紀半ばから6世紀初めに堆積したことが判明した。流路下面の基盤層である砂礫層から弥生土器、埋土上半

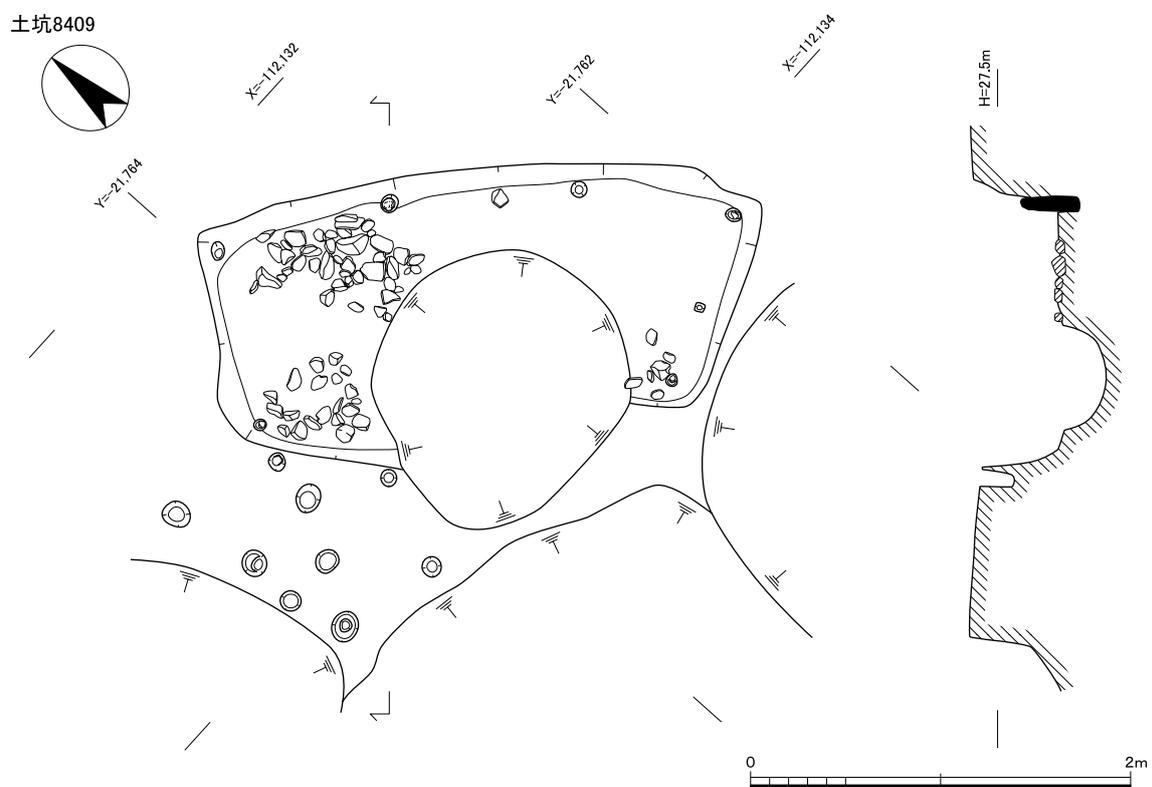


図11 3区第3面土坑8409実測図 (1 : 40)

からは6世紀中頃から1段階の遺物が多く出土した。埋土下半からは遺物は出土していない。

土坑8409（図版228、図11） 中央部北西寄りの第2面土坑6387底面で検出した。流路9400埋土内にあたる。中央を井戸に攪乱されるが、平面形は北西から南東方向に長い方形で、長辺約2.9m、短辺約1.5mである。深さは検出面から約0.5mである。底面の北西寄りに大きさ10～20cmの河原石がまばらにある。壁際には直径5～10cmの杭跡が7箇所があり、木質が残存するものもある。また、遺構西側にも杭跡がある。確認できた樹種は5点がヒノキ科・ヒノキ属、1点がスギである。遺物は出土していないが、流路9400埋土内で検出したこと、条坊制の東西・南北方向とは異なる主軸を持つことから、機能は不明であるが、平安京造営前の遺構と推測する。

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年。

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B

- 2) 図版92・93の甕列断面図は、それぞれの据え付け穴の中心部分をつないで作成した。
 3) 図版95～99の甕列断面図は、それぞれの据え付け穴の中心部分をつないで作成した。

第4章 遺物

1. 遺物の概要

1次調査では整理用コンテナに964箱、2次調査では609箱、合計1,573箱の遺物が出土した。出土遺物には土器・陶磁器、瓦、土製品、石製品、ガラス製品、金属製品、木製品、動植物遺体などの種類がある。出土遺物では土器・陶磁器、瓦が9割以上を占め、その他の種類の遺物は少ない。

調査では弥生時代から江戸時代の遺物が出土したが、新しい時代の遺構埋土・包含層に、より古い時代の遺物が混入する状況がみられた。時代別の出土量では、平安時代後期から鎌倉時代の遺物が6割以上を占め、次いで室町時代の遺物が約2割、残りがこれら以外の時代の遺物となる。周辺の調査では多く出土する江戸時代の遺物の割合が少ないが、これは近代に大きく攪乱を受けたこ

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～奈良時代	弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石製品		弥生土器6点、土師器18点、須恵器28点、土製品8点、石製品1点、金属製品4点		
平安時代前期 ～中期	土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、二彩陶器、緑彩陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品		土師器57点、黒色土器6点、白色土器2点、須恵器24点、灰釉陶器12点、二彩陶器1点、緑彩陶器3点、緑釉陶器26点、輸入陶磁器1点、瓦21点、土製品4点、石製品6点、金属製品10点、木製品2点		
平安時代後期 ～鎌倉時代前半	土師器、瓦器、白色土器、須恵器、焼締陶器、灰釉系陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品		土師器187点、瓦器39点、白色土器7点、須恵器14点、焼締陶器19点、灰釉系陶器14点、緑釉陶器1点、輸入陶磁器51点、瓦64点、土製品61点、石製品24点、金属製品66点、木製品21点		
鎌倉時代後半 ～室町時代前期	土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、灰釉系陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、ガラス製品、金属製品、木製品		土師器181点、瓦器35点、須恵器4点、焼締陶器78点、灰釉系陶器3点、施釉陶器7点、輸入陶磁器30点、瓦33点、土製品35点、石製品21点、ガラス製品5点、金属製品28点、木製品5点		
室町時代中期 ～後期	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品		土師器42点、瓦器9点、焼締陶器3点、施釉陶器5点、輸入陶磁器10点、瓦4点、土製品9点、石製品7点、金属製品2点、木製品4点		
安土桃山時代 ～江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品		土師器13点、瓦器1点、焼締陶器2点、磁器2点、輸入陶磁器2点、瓦29点、土製品1点、石製品12点、金属製品1点		
合計		1712箱	1431点 (118箱)	41箱	1553箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けをしたため、出土時より139箱多くなっている。

とによるものと考えている。

以下では種類ごとに出土遺物の概要を報告する。今回の調査では、これまでの京都市内では出土例がない、あるいは類例にとほしい遺物が多数出土したことからできるだけ多くの遺物の報告に努めた。なお、平安時代以降の出土遺物の時期の判定は、平尾政幸氏による編年案を適用する¹⁾。

2. 土器・陶磁器

土器・陶磁器には土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・白色土器・二彩陶器・緑釉陶器・施釉陶器・中国製輸入陶磁器などがある。土器類は瓦とともに出土遺物の大部分を占める。以下では、弥生時代から奈良時代、平安時代前期から中期（1～4段階）、平安時代後期から鎌倉時代前半（5～6段階）、鎌倉時代後半から室町時代前期（7～8段階）、室町時代中期から後期（9～10段階）、安土桃山時代から江戸時代以降（11段階～）に大別して、各時期を代表する遺構から出土した土器を紹介する。

（1）弥生時代から奈良時代

弥生時代（図12 1～6）

弥生時代の土器には、壺（1）・甕（2～4）・高杯（5）・器台（6）がある。多くが小破片で、高杯（5）以外は新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土した。

1は大型の壺の頸部で、口縁部は体部から緩やかに外反して開き、外面に薄く突帯を貼り付ける。調整は、外面はハケののちナデ、内面はナデで、突帯に櫛描列点文を施す。色調はにぶい橙色である。弥生時代中期に属する。

2は、口縁部は体部から外反して開き、端部は立ち上がり受口となり、内傾する面を作る。調整は、頸部外面・口縁部内外面はヨコナデ、頸部内面はナデで、肩部外面・口縁部外面に櫛描刺突文を施す。色調はにぶい橙色である。弥生時代後期に属する。

弥生時代

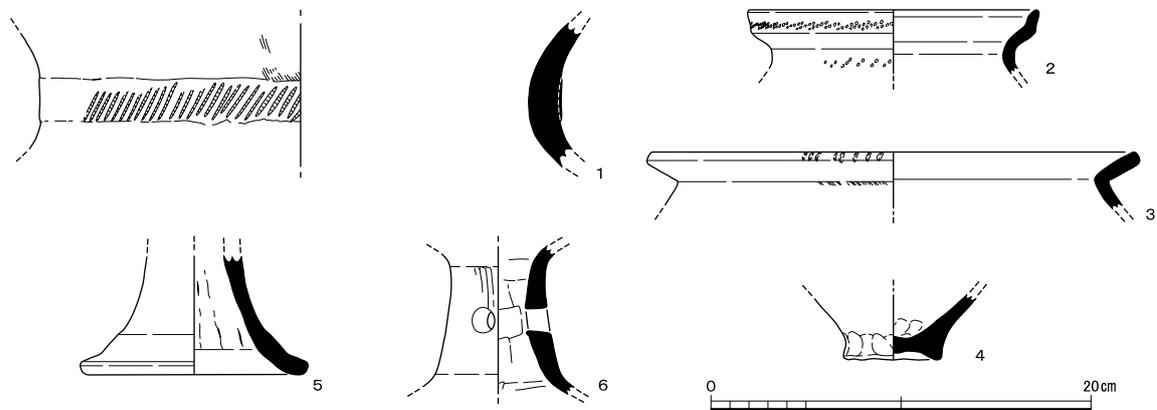


図12 弥生土器実測図（1：4）

3は、口縁部は「く」字形に強く屈曲して開き、端部に緩い面を作る。調整は、肩部外面はハケののちナデ、肩部内面・口縁部内外面はヨコナデで、端部に刻目を施す。色調はにぶい橙色である。弥生時代後期に属する。

4は、やや上げ底の底部から体部が直線的に開く。調整は、底部内外面はオサエ、体部外面はハケ、内面はナデである。弥生時代中期から後期に属する。

5は、全体に厚めで、脚部は緩やかに外反して開き、端部は丸く収める。調整は、脚部外面は表面の損傷により不明、内面はシボリ、端部内外面はヨコナデである。色調は橙色である。弥生時代中期から後期に属するものか。流路9400下面の砂礫層から出土した。

6は、脚部・杯部とも中央部から緩やかに外反して開く。調整は、表面の損傷により不明瞭であるが、外面はタテ方向のミガキ、内面はケズリで、柱状部の3方に円形の透穴を穿孔する。色調はにぶい橙色である。弥生時代後期に属する。

古墳時代（図版117 7～29）

古墳時代の土器には、土師器椀（15）・高杯（16）・壺（7）・甕（8・9・17）・鍋（18）・把手（19・20）、須恵器杯蓋（10・21～23）・杯身（11・24～26）・高杯（12・13）・器台（14）・壺（29）・甕（27・28）などがある。新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土したものが多いが、2区土坑1213からは古墳時代後期の土師器・須恵器が一括して出土した。

7は直口壺である。口縁部は球形の体部から強く屈曲して外開き気味に直立し、端部はわずかに肥厚する。調整は、肩部外面はハケ、内面はナデ、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケののちナデである。色調は橙色である。古墳時代中期に属する。

8は、口縁部は強く「く」字形に屈曲して開き、端部はわずかに肥厚する。調整は、肩部外面はハケのちヨコナデ、内面はケズリ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色である。庄内式併行期に属する。

9は、口縁部は「く」字形に屈曲して開き、端部をつまみ上げて面を作る。調整は、肩部外面はハケ、内面はオサエののちナデ、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケののちヨコナデである。色調はにぶい橙色である。古墳時代後期に属する。

10は、天井部は丸く、口縁部は沈線を境にして緩やかに垂下する。調整は、天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面・口縁部内外面は回転ナデである。天井部内面の仕上げのナデはない。色調は灰色である。古墳時代後期（MT 85型式）に属する。

11は、平底で受部は短く外上方に張り出し、立ち上がり部は外反気味に内傾する。調整は、底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面はナデ、体部・受部・立ち上がり部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。3区土坑8878から流路9400にめり込む状態で出土した。古墳時代後期（TK 10型式）に属する。

12は有蓋高杯の脚部である。全体に緩やかに外反して開き、4方に長方形の透穴を穿孔する。調整は、内外面とも回転ナデである。色調は灰色である。古墳時代中期（TK 23型式）に属する。

13は無蓋高杯の脚部である。全体に薄めで、裾部は柱状部から外反して開き、3方に縦長の三角

形の透穴を穿孔する。透穴上半は切れ込み状となる。調整は、杯部内面、脚部内外面は回転ナデで、柱状部上半外面にカキメを施す。色調は暗灰色である。古墳時代後期（TK 43型式）に属する。

14は鉢形器台の杯部である。体部は内弯して開き、口縁端部は面を作る。調整は、内外面とも回転ナデで、口縁部外面に1条の沈線と櫛描波状文を施す。色調は灰色である。古墳時代後期に属する。

2区土坑1213出土土器（図版117・229 15～29）土師器碗（15）・高杯（16）・甕（17）・鍋（18）・把手（19・20）、須恵器杯蓋（21～23）・杯身（24～26）・壺（29）・甕（27・28）などが出土した。

15は、半球形で口縁端部はわずかに内傾する面を作る。調整は、体部外面はハケののちナデ、内面は板ナデののちナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色である。

16は、厚めで裾部は柱状部から屈曲して開き、端部に直立する面を作る。調整は、柱状部外面は縦方向のナデ、内面はシボリとナデ、裾部内外面はヨコナデである。色調は橙色である。

17は長胴甕の口縁部である。口縁部は「く」字形に屈曲して開き、端部は丸くおさめる。調整は、体部内外面はハケ、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケののちヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

18は、半球形の体部から口縁部が屈曲して開き、端部上端をつまみ上げて面を作る。調整は、体部内外面はハケ、口縁部内外面はヨコナデである。外面の1箇所には黒斑がある。色調は黄橙色である。

19・20は鍋または甑の把手である。平面形は半円形で、内弯気味に外上方に開く。調整は、手づくねによるオサエで、19は2箇所に細長い穴を穿孔する。色調はいずれも黄橙色である。

21～23は、天井部は平坦あるいは丸みを帯び、口縁部は沈線を境にして緩やかに垂下して、端部に小さな面を作る。調整は天井部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。21の天井部内面には同心円文の当具痕が残る。色調は21は暗灰色、22・23は灰色である。

24～26は、平底で受部は水平あるいは外上方に短く張り出し、立ち上がり部は内傾して、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面はナデ、体部・受部・立ち上がり部内外面は回転ナデである。26には底部内面の仕上げのナデはない。また、24には底部外面に「一」形のヘラ記号をつける。色調はいずれも灰色である。

27・28は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は肥厚する。調整は、肩部外面は平行タタキののちカキメ、内面は同心円文タタキ、口縁部内外面は回転ナデである。色調はいずれも灰色である。

29は、平底で体部は扁球形である。調整は、底部外面はオサエ、内面はオサエののちナデ、体部外面は回転ナデののち不連続なカキメ、内面は回転ナデで下部にオサエの痕跡が残る。色調は灰色である。

古墳時代後期（TK 10型式）に属する。

飛鳥時代 (図版118・229 30～40)

飛鳥時代の土器には、土師器碗・杯・甕・鍋、須恵器杯蓋 (30・32)・杯身 (31・33～35)・鉢 (37～39)・壺 (36)・甕 (40) などがある。新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土したものが多く、また、土師器は小破片のため須恵器のみを図示した。

30は、小型で口縁部は天井部から丸みを帯びて垂下し、端部に面を作る。調整は、天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は不明、口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。

31は、小型で受部・立ち上がり部は短い。調整は、底部外面は回転ヘラケズリ、内面は不明、体部・受部・立ち上がり部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。

32は宝珠つまみが付く蓋である。天井部は平坦で端部・受部は短く垂下する。調整は、天井部外面はヘラ切りののちつまみを接合するヨコナデ、内面はナデ、口縁部・受部は回転ナデである。色調は灰色である。

33～35は、平底の底部から口縁部が屈曲して直線的に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。色調はいずれも灰色である。30～34は飛鳥時代 (TK 217型式) に属する。35はこれらよりも少し新しい。

36は短頸壺である。体部は肩が張り、口縁部は短く屈曲して立ち上がる。調整は、体部・口縁部内外面とも回転ナデである。色調は灰色である。

37は、円盤形の底部から口縁部が直線的に立ち上がる形で、口縁端部は内傾する面を作る。調整は、内外面とも回転ナデである。色調は灰白色である。

38は、鉄鉢形で、口縁部は内弯して端部に内傾する面を作る。調整は、底部外面は回転ケズリののち回転ナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。外面に1条の沈線を施し、内面には対応するオサエ痕が残る。色調は灰色である。

39は、大型の碗形で、内弯気味に開き端部は内傾する面を作る。調整は内外面とも回転ナデである。器台の杯部の可能性がある。色調は灰色である。

40は、球形の体部に細長い把手が付く。調整は、体部外面は平行タタキののちカキメ、内面は同心円文タタキである。把手は手づくねによるオサエで、内面には接合の際のオサエ痕が残る。色調は灰白色である。

奈良時代

奈良時代の土器は、3区土坑9379から一括して出土した。この土坑以外は新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土した。

3区土坑9379出土土器 (図版118・229 41～52) 土師器碗皿類 (41～46)・高杯・鉢 (49)・甕 (47)・鍋 (48)、須恵器杯蓋 (50)・杯身 (51・52)・壺・甕などが出土した。

41は平底の皿で、口縁部は外反気味に開き、端部は屈曲・肥厚する。調整は、底部外面・口縁部外面下半はケズリ、底部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

42～44は平底の杯で、口縁部は屈曲して開き、端部は屈曲・肥厚する。調整は、底部外面・口縁部外面下半はケズリ、底部内面はナデ。口縁部内外面はヨコナデである。色調は橙色である。

45は平底の皿で、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は底部外面・口縁部外面下半はケズリ、底部内面はナデ。口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

46は高台が付く杯で、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。高台は貼付けである。調整は、底部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで、底部内面・口縁部内面に暗文を施す。色調は浅黄橙色である。

47は、口縁部は緩やかに外反して開き、端部上端をつまみ上げる。調整は、肩部外面はハケ、内面はナデ、口縁部外面はハケののちヨコナデ、内面はハケである。色調は浅黄橙色である。

48は、体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開く。調整は体部外面はハケ、内面は同心円文タタキののちナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

49は、厚めで口縁部は直線的に開き、端部はわずかに内弯する。調整は圧痕が著しいオサエで、口縁端部など一部をヨコナデする。色調は灰黄褐色である。用途不明品である。

50は扁平な宝珠つまみが付く蓋である。天井部はやや丸みを持ち、端部は短く垂下する。調整は、天井部外面はヘラ切りののちつまみを接合するヨコナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。

51は、平底の底部から口縁部が強く屈曲して直線的に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰白色である。

52は高台が付く杯で、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。高台は貼付けである。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。

平城宮Ⅲ段階に属する。

(2) 平安時代前期から中期

3区土坑8598出土土器（図版119 53～57） 土師器碗皿類（53～56）・鉢・甕、黒色土器碗、須恵器杯蓋・杯身（57）・鉢・壺・甕、緑釉陶器碗などが出土した。多くは小破片である。

53～55は平底の杯で、口縁部は内弯気味に開き、端部はわずかに肥厚する。調整は、53が底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ、54・55が底部・口縁部外面はケズリ、底部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から橙色である。

56は平底の皿で、口縁部は内弯気味に開き、端部はわずかに肥厚する。調整は、底部外面はオサエ、内面は不明、口縁部内外面はヨコナデである。色調は橙色である。

57は、平底の底部から口縁部が強く屈曲して直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰白色である。

1 C段階に属する。

3区土坑8709出土土器（図版119 58～64） 土師器碗皿類（58・59）・鉢・甕（60・61）、黒色土器甕、須恵器杯蓋・杯身（62・63）・鉢・壺（64）・甕などが出土した。

58・59は平底の皿で、口縁部は屈曲して開き、端部はわずかに肥厚する。調整は、底部外面・口縁部外面下半はケズリ、底部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から橙色である。

60・61は、口縁部は屈曲して開き、端部は肥厚する。調整は、肩部外面はハケののちナデ、口縁部内外面はヨコナデで、肩部内面は60はナデ、61はハケである。色調は60はにぶい橙色、61は浅黄橙色で、外面に大きな黒斑がある。

62は高台が付く杯で、口縁部は屈曲して内弯気味に開く。高台は貼付けである。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。

63も高台が付く杯と推測する。口縁部は外反して開き、端部は丸くおさめる。調整は、口縁部内外面とも回転ナデである。色調は灰色である。

64は、平底で高台が付き、体部は倒卵形である。高台は貼付けである。調整は底部内外面はナデ、体部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。

1 C段階に属する。

1 段階の土器 (図版119・230 66～81) これら2つの土坑以外からも、特に3区南部の包含層(第2層・第3層)や土坑などを中心に1段階の土器が出土した。また、新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土した破片も多い。土師器碗皿類(65～68)・鉢(69・70)・把手(71・72)、須恵器杯蓋(73～75)・杯身(76～78)・壺蓋(79)・壺(80・81)などがある。

65はやや平底の碗で、口縁部は内弯して開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部・口縁部外面はケズリののちナデ、底部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色で、口縁部外面に大きな黒斑がある。3区土坑8938から出土した。

66は平底の杯で、口縁部は内弯気味に開き、端部はわずかに肥厚する。調整は、底部・口縁部外面はケズリ、底部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデである。色調は橙色である。3区土坑8588から出土した。

67は高台が付く杯で、口縁部は外上方に直線的に開き、端部はわずかに肥厚する。高台は低い貼付けである。調整は、底部内外面はナデ、口縁部外面はケズリ、口縁部内面・口縁端部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。2区土坑5403から出土した。

68は平底の皿で、口縁部は屈曲して開き、端部は肥厚する。調整は、底部外面・口縁部外面下半はケズリ、底部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデであるが、外面のケズリは表面の損傷のため不明瞭である。色調は橙色である。3区第2層から出土した。

69は大型の鉢で、体部・口縁部は内弯して開き、端部は肥厚する。調整は、体部・口縁部外面はケズリ、内面はヨコナデ、口縁端部内外面はヨコナデである。内面に2段に暗文を施す。色調は橙色である。3区第2層から出土した。

70は高台が付く大型の鉢で、体部は内弯気味に開き、口縁部は屈曲して外反し、端部は肥厚する。調整は底部内外面はナデ、体部外面はオサエとナデ、内面は板ナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。2区柱穴4205から出土した。

71・72は鍋または甑の把手である。平面形は半円形で、内弯気味に外上方に開く。調整は、手づくねによるオサエである。色調はいずれも灰白色で、3区第2層から出土した。

73は扁平な宝珠つまみが付く蓋である。天井部はやや丸みを持ち、端部は屈曲して短く垂下する。調整は、天井部外面はヘラ切りののちつまみを接合するヨコナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。3区第2層から出土した。

74は、天井部は平坦で、端部は屈曲して短く垂下する。焼け歪みによって変形している可能性がある。調整は、天井部外面はヘラ切りののちナデ、天井部内面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。3区第3層から出土した。

75は扁平な宝珠つまみが付く大型の蓋である。天井部はやや丸みを持ち、端部は屈曲して短く垂下する。調整は、天井部外面はヘラ切りののちつまみを接合するヨコナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰白色である。3区土坑8367から出土した。

76は、平底の底部から口縁部が屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰白色である。3区第2層から出土した。

77は高台が付く杯で、口縁部は強く屈曲して直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。高台は貼付けである。底部は焼け歪みにより少し変形する。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。3区第2層から出土した。1段階より古い時期に属する可能性がある。

78は高台が付く大型の杯で、高台は貼付けである。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰白色である。3区第3層から出土した。

79は小型の壺蓋である。平坦な天井部から口縁部は屈曲して追加する。宝珠つまみが付いたと推測する。調整は、天井部外面は自然釉のため不明、天井部内面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。3区土坑8102から出土した。

80は、倒卵形の体部の両側に板状で円形の穿孔があるつまみが付く。調整は、体部内外面は回転ナデ、つまみは丁寧なナデで、口縁部の接合部にカキメを施す。色調は灰色である。3区土坑6386から出土した。

81は、平底で体部は内弯して立ち上がる。調整は、底部外面は板ナデ、内面はナデ、体部内外面は回転ナデである。底部外面には焼成時の粘土塊が溶着する。色調は灰白色である。3区柱穴8827から出土した。

1区井戸776出土土器（図版120・230 82～90）土師器碗皿類（82～85）・甕（86・87）・その他（88・89）、黒色土器碗、須恵器鉢・壺（90）・甕、灰釉陶器碗・緑釉陶器碗などが出土した。

1段階に比べて土師器碗皿類は、全体的に器高が低くなり、また、器壁が薄くなる。82は平底の皿で、口縁部は内弯気味に開き、端部はつまみ上げる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面は不明、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

83～85は、わずかに丸底気味の杯で、口縁部は内弯気味に開き、端部はつまみ上げる。調整は、

底部外面・口縁部外面下半はオサエののちナデ、底部内面はナデ、口縁部内面・口縁端部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

86は、大型で口縁部は外反して開き、端部は肥厚する。調整は、口縁部内外面下半はナデ、口縁端部はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

87は、口縁部は緩やかに外反して開き、端部はわずかに肥厚する。調整は、口縁部内外面はヨコナデで、外面に粘土紐の接合痕が残る。色調は浅黄橙色である。

88は、底面中央を上方に押し上げる。小破片のため器形は不明である。調整は、底部外面はナデののちオサエ、内面はナデである。色調は浅黄橙色である。

89は高台が付く壺形の個体である。高台は貼付けで、高く直線的に開き、端部は肥厚する。底部は平底で、体部は内弯して立ち上がる。調整は、高台部内外面はヨコナデ、底部外面はナデ、内面は不明、体部外面はナデ、内面はハケである。体部外面の一部に粘土紐の接合痕が残る。色調は浅黄橙色である。

90は小型の瓶子で、底部は平底で、体部は倒卵形である。調整は、底部外面は糸切り痕、底部内面・体部内外面は回転ナデで、内面にはロクロ目が残る。色調は灰白色である。

2 C段階に属する。

1 区土坑 706 出土土器 (図版120 91～103) 土師器椀皿類 (91～94)・甕 (95)、黒色土器椀、須恵器杯身 (96)・鉢 (97)・壺 (98～100)・甕、灰釉陶器皿 (101・102)・椀・緑釉陶器椀 (103) などが出土した。

土師器椀皿類は、さらに器高が低くなり、器壁が薄くなる。91は平底の皿で、口縁部は屈曲して、端部はつまみ上げる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面は不明、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

92～94は平底の杯で、口縁部はわずかに内弯気味に開き、端部をつまみ上げる。調整は、底部外面・口縁部外面下半はオサエののちナデ、底部内面はナデ、口縁部内面・口縁端部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色からにぶい橙色である。

95は、大型で口縁部は外反して開き、端部は肥厚する。調整は、口縁部内外面下半はナデ、口縁端部はヨコナデである。口縁部内面にうすく煤が付着する。色調はにぶい橙色である。

96は高台が付く杯で、高台は貼付けである。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面は不明、口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。

97は、平底で体部は屈曲して直線的に開き、口縁部は小さく「く」字形に屈曲して、面を作る。調整は、底部外面は糸切りののちナデ、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。いわゆる籐型の須恵器鉢である。

98は小型の瓶子で、体部は倒卵形で、口縁部は外反して端部に面を作る。調整は体部内外面・口縁部内外面は回転ナデで、内面にはロクロ目が残る。色調は灰色である。

99は短頸壺で、球形の体部から口縁部は短く屈曲して立ち上がる。調整は、体部・口縁部内外面とも回転ナデである。色調は黒褐色である。

100は、平底で高台が付く底部で、体部は屈曲して内弯気味に開く。高台は貼付けである。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面は不明、体部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。

101は、口縁部は浅く開き、端部は外反して丸くおさめる。高台は貼付けである。調整は、底部外面は回転ヘラケズリののちナデ、口縁部外面下半は回転ヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデで、内面は施釉のため不明である。施釉は薄く、斑の部分がある。色調は、胎土は灰白色、施釉部分はオリーブ灰色である。

102は段皿で、口縁部は浅く開き、端部は外反して端部は丸く収める。調整は、口縁部内外面は回転ナデで、内外面に施釉する。色調は、胎土・施釉部分とも灰白色である。

103は、平底の底部で体部は内弯して開く。調整は、底部は削り出し高台で、他の部分は施釉のため不明である。色調は、胎土はにぶい黄橙色、施釉部分はオリーブ灰色である。洛北産の緑釉陶器碗である。

3 A段階に属する。

3区土坑8857出土土器（図版120・230 104～118）土師器碗皿類（104～115）・鉢・甕、黒色土器碗（116・117）・甕、白色土器碗、須恵器杯身・碗（118）・壺・甕、緑釉陶器碗などが出土した。

土師器碗皿類は、皿と杯の区別が不明瞭となる。104～109は平底の皿で、口縁部は強く屈曲して端部はつまみ上げる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰黄色から橙色である。

110～115は平底の杯で、口縁部は強く屈曲して端部はつまみ上げる。調整は、底部外面・口縁部外面下半はオサエののちナデ、底部内面はナデ、口縁部内面・口縁端部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色からにぶい橙色である。

116・117は、平底の底部から口縁部は内弯して高く立ち上がり、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部外面はナデ、内面はナデののち粗いミガキ、口縁部外面はオサエ、内面はナデののちミガキ、口縁端部内外面はヨコナデである。内面及び口縁端部外面に炭素が沈着する。色調は、胎土はにぶい黄橙色である。

118は、平底で口縁部は内弯して開き、端部はやや肥厚して丸くおさめる。調整は底部外面は糸切り、そのほかは回転ナデで、全体にロクロ目が残る。色調は灰色である。

3 A～B段階に属する。

2区土坑5709出土土器（図版121・230 119～126）土師器皿（119～126）、黒色土器碗、灰釉陶器壺が出土した。土師器皿は8点でいずれも完形品である。黒色土器碗・灰釉陶器壺はともに破片で1点ずつである。祭祀にともなう遺物と推測する。

119～126は形態が揃っている。平底の皿で、口縁部は強く屈曲して端部はつまみ上げる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色からにぶい橙色である。

3 B段階に属する。

3区土坑6801出土土器（図版121・230 127～131）土師器皿（127～131）のみが出土した。土師器碗皿類は、小皿（127・128）・大皿（129～131）にまとまるようになる。全体的に器高が高くなり、また、器壁が厚くなる。127・128は、口縁部は強く屈曲して端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。

129～131は、口縁部は緩やかに外反して開く。129は器高が低い。底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。

4 C段階に属する。

（3）平安時代後期から鎌倉時代前半

3区井戸9297出土土器（図版121・230 132～152）土師器皿（132～151）・台付碗・鉢・甕、²⁾黒色土器碗・甕、瓦器盤、白色土器碗・高杯、須恵器杯身（152）・碗・鉢・壺・甕、灰釉系陶器碗・壺、白磁碗、青磁碗、褐釉盤などが出土した。出土土器の中では土師器皿類の占める割合が格別に増加している。

土師器皿には受皿（132）・小皿（133～143）・大皿（144～151）がある。132は、口縁部は鋭角に屈曲して内傾する。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

133～143は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。136・141～143のように外反する個体もある。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色から淡黄色である。

144～151は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。144は器高が高い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色から淡黄色である。

152は、平底の底部から口縁部が強く屈曲して直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。全体に薄く自然釉がかかる。色調は灰色である。混入品の可能性がある。

4 C～5 A段階に属する。

3区土坑8841出土土器（図版121 153～165）土師器受皿（153）・小皿（154～156）・大皿（157～159）・鉢・甕（160）、瓦器碗・鉢（162）、白色土器盤（161）・碗・高杯、須恵器鉢（163）・壺・甕、灰釉系陶器碗（164）・壺、白磁碗、青白磁合子身（165）などが出土した。

153は、口縁部は鋭角に屈曲して内傾する。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は明黄褐色である。

154～156は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。156は外反気味である。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙

色からにぶい橙色である。

157～159は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。159は外反気味である。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色と灰白色の個体がある。

160は、直立気味の肩部から口縁部は緩やかに外反して端部を小さくつまみ上げる。調整は、肩部外面はナデ、内面はオサエ、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケののちヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

161は、口縁部は直線的に開き、端部はわずかに外反する。調整は、口縁部内外面ともヨコナデである。色調は白色である。

162は、厚めで平底の底部から口縁部は内弯して開き、端部は直立する。底部の3箇所に不整形な円錐形の脚を接合する。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部外面はオサエ・ナデののち粗いミガキ、内面はナデののち密なミガキ、口縁部内外面はヨコナデである。底部内面に斜格子状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。

163は、体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して内弯して端部は玉縁となる。調整は、体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。内外面にロクロ目が残る。色調は灰色である。

164は、口縁部は内弯して開き端部は丸くおさめる。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。内面に薄く自然釉薬がかかる。色調は灰色である。

165は、体部外面は花卉形で、立ち上がり部は小さく内傾する。調整は、型成形で、施釉のため詳細は不明である。内外面に施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は明青灰色である。

5 A段階に属する。

2区土坑5227出土土器（図版122・231 166～210）土師器受皿（166・167）・小皿（168～185）・大皿（186～200）・鉢・甕（160）、瓦器椀（202）・羽釜（203）・鍋・盤、白色土器盤・椀・高杯（201）、須恵器鉢・壺・甕、焼締陶器壺（204）・甕、灰釉系陶器椀（205）・鉢・壺、緑釉陶器椀（206）、白磁椀（207～209）・壺、青磁椀・壺、青白磁椀・合子蓋（210）、褐釉盤・壺、鉄釉壺などが出土した。土器・陶磁器以外にも多様な遺物がまとまって出土した。上・中・下の3層に分けて遺物を採集したが、顕著な時期差は看取できなかったため一括して掲載する。

166・167は、口縁部は鋭角に屈曲して内傾する。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれも浅黄橙色である。中層から出土した。

168～185は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。169は器高が高い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色から淡黄色である。169・175・177には煤が付着する。168～181が中層、182～185が下層から出土した。

186～200は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色から淡黄色である。186の内外面には黒漆が付着する。195底部は焼成後、歪な円形に穿孔する。186が上層、187

～200が中層から出土した。

201は、柱状部は円柱形で下半は中空となる。裾部側が太くなり、杯部側には段を作る。調整は、柱状部は中空部分に芯棒を通し、外面は下方向の細かいケズリで面取り、杯部は内外面ヨコナデ、裾部外面は不明、内面はナデである。色調は白色である。

202は、体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部内外面はナデ、体部外面はオサエののち粗いミガキ、内面はナデののち密なミガキで、口縁部内外面はヨコナデである。底部内面におそらく螺旋状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。楠葉産で、楠葉型Ⅱ－1期に属する³⁾。

203は、小型で球形の体部・口縁部に長い鏝がめぐる。欠損しているが、体部下半の3箇所を脚を接合する。調整は、体部・口縁部外面及び鏝部はヨコナデののちミガキ、体部・口縁部内面はヨコナデである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は暗灰色である。

204は、平底で体部は直線的に開く。調整は底部外面はナデ、底部内面・体部内外面は回転ナデである。外面の一部に煤が付着する。色調は灰褐色である。輸入品の可能性がある。

205は、大型で体部は屈曲して内弯気味に開く。底部に断面三角形の高台を貼り付ける。調整は、底部外面は不明、底部内面・体部内外面は回転ナデである。体部内面に薄く自然釉がかかる。色調は、胎土は灰黄褐色、施釉部分は灰白色である。

206は、小型で口縁部は内弯気味に開き、端部はわずかに外反して片口を作る。底部に断面三角形の高台を貼り付ける。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。全面に薄く施釉するが、発色は悪い。色調は、胎土・施釉部分とも暗灰色である。緑釉陶器生産の最終段階の製品である⁴⁾。

207～209は、断面台形の削り出し高台を持つ底部である。調整は、底部外面はケズリ、内面は施釉のため不明で、207・208は底部内面に沈線、209は6弁の花文を陰刻する。底部外面以外を施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は白色から灰白色である。

210は、体部外面は花卉形で、口縁部は垂下して端部は内傾する。調整は、型成形で、外面は施釉のため不明、内面は回転ナデである。外面に厚く施釉し、内面の施釉はわずかである。色調は、胎土は白色、施釉部分は明緑灰色である。

5 B段階に属する。

3区土坑6145・土坑6148出土土器（図版123・232 211・212） 2個体の大型甕を並べて据え付けていた。土坑6145からは、他に土師器皿、瓦器盤、須恵器甕などの破片が少量出土している。5～6段階に属する。

土坑6148からは、他に土師器皿・鉢、別個体の須恵器甕、褐釉陶器壺などの破片が少量出土している。5～6段階に属する

211は大型の焼締陶器甕で、上半部は欠損する。底部は平底で、体部は内弯気味に立ち上がる。調整は、底部外面は未調整、内面はオサエ、体部外面はタタキ、内面はナデで指先の圧痕及び粘土

紐接合痕が明瞭に残る。色調は灰色である。常滑産で赤羽・中野編年の3型式に属する⁵⁾。

212は大型の須恵器甕で、上半部の破片が内部に落ち込む形で出土した。底部は丸底であるが、焼け歪みによりひしゃげている。体部は直線的に外上方へ開き肩部が張り出し、口縁部は強く外反して端部に面を作る。調整は、底部・体部外面は平行タタキ、底部内面はナデ、体部内面は同心円文タタキののち板ナデ、口縁部外面は平行タタキののち回転ナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。肩部外面・口縁部内面・底部内面には自然釉がかかる。底部の3箇所⁵⁾に焼成時に窯内に置いた粘土塊・須恵器甕片の痕跡があり、一部は溶着している。色調は灰色である。播磨産と推測する。平安時代後期に属する。

2区土坑3196出土土器（図版124・231 213～225） 土師器受皿（213・214）・小皿（215～220）・大皿（221～224）、瓦器椀（225）、須恵器壺・甕などが出土した。

213・214は、口縁部は鋭角に屈曲して内傾する。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。

215～220は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

221～224は、口縁部は直線気味に開き、端部を丸くおさめる。224は内弯気味に立ち上がる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

225は、体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部内外面はナデ、体部外面はオサエののち粗いミガキ、内面はナデののち密なミガキで、口縁部内外面はヨコナデである。底部内面に螺旋状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。楠葉産で、楠葉型Ⅱ-2期に属する。

6A段階に属する。

3区土坑8671出土土器（図版124・231 226～235） 土師器小皿（227～230）・大皿（231・232）・小鉢（226）・鉢、瓦器椀（233～235）、須恵器壺・甕、白磁椀などが出土した。

227～230は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。全体的に器高が低くなる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

231・232は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。232は器高がやや高い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は231がにぶい黄橙色、232がにぶい橙色である。

226は、厚い丸底で、口縁部は外反して開き端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエの後ナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

233～235は、体部は内弯して開き、口縁部は外反して端部を丸くおさめる。底部に断面台形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、体部外面はオサエののち粗いミ

ガキで指頭圧痕が残る。体部内面はナデののち粗いミガキ、口縁部内外面はヨコナデである。底部内面には不明瞭な乱れた螺旋状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。233は炭素の沈着が弱い。色調は、胎土は灰白色である。和泉産で、和泉型Ⅲ-1～Ⅲ-2期に属する。

6 A段階に属する。

2区土坑3251出土土器（図版124 240～244）土師器小皿（236～239）・大皿（240・241）、瓦器椀（242・243）、須恵器鉢（244）・壺・甕、灰釉系陶器椀、白磁椀、青磁壺、褐釉壺などが出土した。

236～239は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から浅黄橙色である。

240・241は、口縁部は直線気味に開き、端部を丸くおさめる。240はやや内弯気味に立ち上がる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれも浅黄橙色である。

242・243は、体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、体部外面はオサエののち粗いミガキ、内面はナデののちミガキで、口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデののちミガキである。242は体部外面のミガキがない。底部内面に崩れた螺旋状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。楠葉産である。

244は、外上方に直線的に開き、端部は上下方につまみ出して面を作る。調整は、体部・口縁部は回転ナデである。色調は灰白色である。東播産である。

6 A～B段階に属する。

2区土坑5602出土土器（図版124 245）土師器小皿・大皿、瓦器椀・鍋釜類・盤、須恵器鉢・甕、焼締陶器壺（245）・甕、灰釉系陶器椀、白磁壺、青白磁合子などが出土した。

245は、肩部・口縁部は欠損する。平底で体部は倒卵形である。調整は、底部外面は未調整、内面はナデ、体部外面は丁寧なナデ、内面はオサエののちナデで、圧痕及び粘土紐接合痕が明瞭に残る。外面全面・内面下半部に自然釉がかかる。色調は、胎土は灰色である。常滑産である。

6段階に属する。

3区土坑8852出土土器（図版125・233 246～277）土師器受皿・小皿（246～255）・大皿（256～261）・台付皿（262）、瓦器皿（263）・椀（264～269）・鍋釜類・盤（270）、須恵器鉢（271）・壺（272）・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀・鉢・壺、白磁椀（273）・壺（274）、青磁皿（275）・椀（276）、青白磁合子身（277）、緑釉陶器壺（磁州窯製）などが出土した。土師器は、従来の赤色系胎土のものに白色系胎土のものが加わる。

246～255は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。247は口縁部全体に煤が付着する。

257～261は赤色系土師器大皿で、口縁部は直線気味に開き、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

256は白色系土師器大皿で、平底の底部から口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は丸く収める。器高が高い。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は白色である。

262は、杯部は赤色系大皿と同じ形態で、底部に高い高台を貼り付ける。杯部口縁部は内弯気味に開き、口縁端部は丸くおさめる。高台部は外開きの円筒状で、端部は丸くおさめる。調整は、杯部底部内外面はナデ、口縁部内外面及び高台部内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色である。

263は、口縁部は内弯気味に開く。器高が高い。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデののちミガキである。底部内面にジグザグ状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。楠葉産で、楠葉型Ⅲ－1期に属する。

264～269は、体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、体部外面はオサエ、内面はナデののちミガキで、口縁部内外面はヨコナデののちミガキである。267・268は口縁部外面のミガキがない。底部内面に崩れた螺旋状の暗文を施し、全面に炭素が沈着するが、外面の沈着は薄くなる。色調は、胎土は灰白色である。楠葉産である。264は2次焼成を受けて淡橙色に変色した破片が接合した。

270は、口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は水平方向の幅広い面を作る。調整は、底部外面は不明、内面はナデ、口縁部外面はオサエののちナデ、内面はヨコナデののち粗いミガキで、口縁部内外面はヨコナデである。口縁部外面には指頭圧痕が残る。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。

271は、外上方に直線的に開き、端部上端をつまみ上げて面を作り、一端をつまみ出して片口を作る。調整は、体部・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。東播産である。

272は、体部は内弯気味に開き、底部に高く分厚い高台を貼り付ける。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、内面はナデ、体部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。体部外面最下部に「×」形のヘラ記号をつける。全面に薄く自然釉がかかる。色調は灰色である。

273は、器壁が薄く、体部は直線的に開き、口縁部は外反する。調整は、施釉のため不明瞭であるが、底部内面に沈線がめぐり、体部外面は回転ケズリである。内外面に施釉する。色調は、胎土・施釉部分とも灰白色である。

274は、体部は内弯気味に開き、高い高台を削り出す。調整は、底部・体部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデでロクロ目が残る。底部外面以外に施釉する。高台接地面には離れ砂が付着する。色調は、胎土は灰色、施釉部分は灰白色である。

275は、分厚い底部から口縁部はわずかに外反して開き、低い高台を削り出す。調整は、底部外

面は回転ケズリ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。外面の高台内以外に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は暗オリーブ灰色である。

276は、体部・口縁部は内弯して開き、高台を削り出す。調整は、底部・体部外面は回転ケズリ、底部・体部内面及び口縁部内外面は回転ナデである。内外面に施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は灰オリーブ色である。

277は、体部外面は花卉形で、立ち上がり部は内傾する。内部に小杯などを貼り付ける。調整は、型成形で、施釉のため詳細は不明である。底部外面に「×」形のヘラ記号をつける。内外面に施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は明緑灰色である。

6 B段階に属する。

3区井戸8917出土土器（図版126・234 278～288） 赤色系土師器受皿（278）・小皿（279～282）・大皿（283～285）、白色系土師器大皿、瓦器椀・鍋釜類（286）・火鉢、白色土器盤、須恵器鉢（287・288）・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀、白磁椀・鉢・壺、青磁椀・壺、青白磁椀、褐釉陶器壺などが出土した。

278は、口縁部は鋭角に屈曲して内傾する。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

279～282は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。279の立ち上がりは浅い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。281は内面に煤が付着する。

283～285は、口縁部は直線気味に開き、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

286は片口の付く鍋である。体部は緩く屈曲して直立気味に立ち上がり、口縁部を半月形に穿孔して、片口を貼り付ける。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、体部はオサエ、内面は横方向のハケ、口縁部内外面はヨコナデである。片口部はオサエののちナデである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は暗灰色である。

287は、小型で体部は内弯気味に開き、口縁部はわずかに肥厚して片口を作る。調整は、底部外面は糸切り、底部内面は不明、体部・口縁部内外面は回転ナデである。底部内面・体部下半内面は使用により摩耗する。口縁端部に重ね焼き痕が残る。色調は灰色である。東播産である。

288は、体部・口縁部は外上方に直線的に開き、端部上端をつまみ上げて面を作り、一端をつまみ出して片口を作る。調整は、体部・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰白色である。東播産である。

6 B段階に属する。

2区井戸5407出土土器（図版126・234 289～311） 赤色系土師器小皿（289～296）・大皿（297～299）、白色系土師器受皿、瓦器皿（300・301）・椀（302・303）・鍋釜類（304～307）・火鉢、須恵器鉢（308）・甕、焼締陶器壺・甕、灰釉系陶器椀、白磁椀（309・310）・壺、青磁椀（311）、

青白磁皿、褐釉陶器壺などが出土した。

289～296は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。292・295の立ち上がりは浅い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

297～299は、口縁部は直線気味に開き、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

300・301は、口縁部は300は内弯気味、301は外反気味に開く。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。底部内面に鋭いジグザグ状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。楠葉産である。

302・303は、体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部内外面はナデ、体部外面はオサエ、内面はナデののちミガキで、口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデののちミガキである。底部内面に矮小化した螺旋状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、いずれも胎土は灰白色である。楠葉産で、楠葉型Ⅲ－1期に属する。

304～307は羽釜である。土坑上層にまとめて埋められていた。304～306は丸底、307は平底で、体部は内弯して立ち上がり、口縁部は内傾する。体部上端に水平方向の広い鏝を貼り付ける。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、体部外面はオサエ、内面は横方向のハケ、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。305は体部内面はヨコナデ、306は底部内面はハケののちヨコナデである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。いずれも底部・体部外面に煤が付着しており、305は2次焼成により外面が淡橙色に変色して一部が剥離する。

308は、外上方に直線的に開き、端部上端をつまみ上げて面を作る。片口は不明である。調整は、体部・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。東播産である。

309は、体部は内弯気味に開き、口縁部は外方につまみ出す。調整は、体部外面は回転ケズリ、体部内面・口縁部内外面は回転ナデである。内外面に施釉する。色調は、胎土は浅黄橙色、施釉部分は灰白色である。

310は、口縁端部外面に玉縁を作る。調整は、施釉のため不明である。内外面に施釉する。色調は、胎土は灰黄色、施釉部分は灰白色である。

311は、口縁部は外上方に直線的に開く。調整は施釉のため不明で、口縁部内面に片切彫で施文する。色調は、胎土は灰色、施釉部分はオリーブ灰色である。

6 B段階に属する。

1区土坑178出土土器(図版127・235 312～338) 赤色系土師器小皿(312～325)・大皿(327～334)、白色系土師器小皿(326)・大皿(335～337)、瓦器椀・鉢(338)・鍋釜類・火鉢・壺・甕、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀、白磁鉢・壺、青磁椀などが出土した。

312～325は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。全体的に器高が低くなる。325

は器壁が分厚い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。314・317は口縁端部の一部に煤が付着する。

327～334は、口縁部は直線気味に開き、端部を丸くおさめる。全体的に器壁が薄い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

326は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。形態・調整とも赤色系土師器小皿と共通する。色調は灰白色である。

335～337は、平底の底部から口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。335は器高が高い。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

338は輪花椀である。平底で口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。外面から縦方向にヘラ状工具を押し当てて輪花を成形する。調整は、底部内外面はナデ、口縁部外面下半はオサエ、内面はヨコナデののち粗いミガキ、口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデののち粗いミガキである。底部内面中央に小さな5弁の花文、縁辺に内向きの5弁の花文の暗文を施す。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。楠葉産である。

6 C段階に属する。

2区井戸4342出土土器（図版127・235 339～365）赤色系土師器小皿（340～348）・大皿（349～355）、白色系土師器受皿（339）・大皿（356）・鉢、瓦器椀（357）・鍋釜類・盤（358）・火鉢・甕、須恵器鉢（359）・甕、焼締陶器鉢（360）・甕（361・362）、白磁椀・壺、青磁皿（363・364）・椀（365）、褐釉陶器壺などが出土した。

340～348は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。340～343は内弯気味に立ち上がる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。342・343は口縁端部の一部に煤が付着する。

349～355は、口縁部は直線気味に開き、端部を丸くおさめる。352は器高が低い。また、355は器高が高い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

339は、やや小型で、口縁部は鋭角に屈曲して内傾する。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は白色である。

356は、平底の底部から口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

357は、体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。調整は、体部外面はオサエ、内面はナデののちミガキで、口縁部内外面はヨコナデののちミガキである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。楠葉産で、楠葉型Ⅲ-1期に属する。

358は、口縁部は外反気味に開き、端部は丸みをおびた幅広い面を作る。調整は、口縁部外面はオサエののちナデ、内面はヨコナデののち粗いミガキで、口縁端部内外面はヨコナデである。口縁部外面には指頭圧痕が残る。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。

359は、体部は緩く屈曲して外上方に直線的に開き、口縁端部上端をつまみ上げて面を作る。片口は不明である。調整は、底部外面は糸切り、内面はナデ、体部・口縁部内外面は回転ナデである。口縁端部に重ね焼き痕が残る。色調は灰色である。東播産である。口縁部外面に銅の小さな付着物がある。

360は、口縁部は内弯気味に開き、端部は小さく外反する。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。内外面に自然釉がかかる。色調は、胎土は灰白色、自然釉部分は灰オリーブ色から明褐色である。産地は不明である。

361・362は、口縁部は外反して開き、361は口縁端部上端をつまみ上げて、362は上下方につまみ出して面を作る。調整は、肩部外面は回転ナデ、内面はオサエののちナデ、口縁部内外面は回転ナデである。いずれも外面及び口縁部内面に自然釉がかかる。色調は、胎土は361がにぶい赤褐色、362がにぶい橙色で、自然釉部分はいずれも灰オリーブ色である。いずれも常滑産で赤羽・中野編年の4型式（1220～1250）から5型式（1250～1275）に属する。

363・364は、分厚い底部から口縁部は外反して開き、底部外面中央を上げ底状に削り出す。調整は、底部外面は回転ケズリで、他の部分は施釉のため不明である。363は底部内面に文様を描く。底部外面以外に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明オリーブ灰色である。

365は、体部・口縁部は内弯して開き、断面台形の高台を削り出す。調整は、底部外面は回転ケズリ、他の部分は施釉のため不明である。底部内面中央と口縁部内面に沈線がめぐる。底部外面以外に施釉する。色調は、胎土は灰黄色、施釉部分はオリーブ黄色である。

6C段階に属する。

2区土坑4017出土土器（図版128・236 366） 大型甕を据え付けていた。他に赤色系土師器皿、須恵器甕、灰釉系陶器碗、青磁碗などの破片が少量出土している。6段階に属する。

366は大型の焼締陶器甕である。底部は平底で、体部は丸みをおびて肩が張る倒卵形で、口縁部は端部上端をつまみ上げて面を作る。調整は、底部外面は未調整、内面はナデ、体部外面はタタキのち部分的にナデ、内面はオサエののち板ナデで、指先の圧痕及び粘土紐接合痕が明瞭に残る。口縁部内外面はナデ、口縁端部はヨコナデである。色調は灰褐色である。常滑産で、赤羽・中野編年の4型式（1190～1220）に属する。

1区土坑115出土土器（図版128・236 367） 大型甕を据え付けていた。他に赤色系土師器皿、白色系土師器皿、瓦器碗・鍋釜類、須恵器鉢、白磁碗などの破片が出土している。6C段階に属する。

367は大型の焼締陶器甕である。底部は平底で、体部はやや肩が張るようになり、口縁部は端部上下端をつまみ出して面を作る。調整は、底部外面は未調整、内面はナデ、体部外面はタタキのち部分的にナデ、内面はオサエののち板ナデで、指先の圧痕及び粘土紐接合痕が残る。口縁部外面

はナデ、内面は横方向の指ナデで、口縁端部はヨコナデである。色調は暗黄灰色である。常滑産で、赤羽・中野編年の5型式（1220～1250）に属する。

2区土坑5699出土土器（巻頭図版4、図版129 368～379）白磁皿12点を重ねた状態で埋納していた。他に赤色系土師器皿、白色系土師器皿、瓦器鍋釜類・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀、青磁椀などが出土した。6～7段階に属する。

368～379は、368が一番上、379が一番下の順で重ねられていた。底部は厚く内面中央は盛り上がり、断面台形の高台を削り出す。口縁部は薄く内弯して、端部は丸くおさめる。調整は、底部・口縁部外面は回転ケズリ、底部・口縁部内面は回転ナデである。底部外面以外に厚く施釉する。高台接地面に離れ砂が付着する個体がある。色調は、胎土・施釉部分とも白色である。いずれも高台内に墨書がある。368～370・372～375は「上」、371は「二」と「・」、376は井桁、377・378は文様、379は文字のようだが判読できない。

3区南西部甕列出土土器（図版129 380～383）ほとんどの甕が抜き取られていたが、4基の土坑に据え付けた甕の底部が残されていた。掘形から赤色系土師器皿、白色系土師器皿などの小片が出土しているが、図示できる個体はない。6～7段階に属する。焼締陶器甕はいずれも底部の破片のため型式の特定は難しい。

380は、土坑6703に据え付けられた大甕の底部である。底部は平底で、体部は外上方に広く開くことから肩が張る形態であったと推測する。調整は、底部外面は未調整、外縁はオサエ、内面はオサエののちナデ、体部外面はタタキののちナデ、内面はオサエののちナデで、指先の圧痕及び粘土紐接合痕が残る。色調はにぶい赤褐色である。常滑産である。

381は、土坑6460に据え付けられた大甕の底部である。底部は平底で、体部は外上方に開く。調整は、底部外面は未調整、内面はナデ、体部外面はナデ、内面はオサエののちハケ目状になる板ナデで、指先の圧痕が部分的に残る。色調はにぶい赤褐色である。常滑産である。

382は、土坑6458に据え付けられた大甕の底部である。底部は平底で、体部は外上方に開くが、焼け歪みにより変形する。調整は、底部外面は未調整、内面はナデ、体部外面はナデ、内面はオサエののちナデ・板ナデである。成形段階のタタキの痕跡はあまり残っていない。底部外面に焼成時に窯内に置いた粘土塊の一部が溶着する。色調はにぶい褐色である。常滑産である。

383は、土坑6704に据え付けられた大甕の底部である。底部は平底で、体部は外上方に開くが、焼け歪みにより変形する。調整は、底部外面は未調整、内面はオサエ、体部外面はナデ、内面はオサエののちナデ・板ナデである。成形段階のタタキの痕跡はあまり残っていない。底部外面に焼成時に窯内に置いた粘土塊の一部が溶着する。色調はにぶい赤褐色である。常滑産である。

（4）鎌倉時代後半から室町時代前期

3区土坑8020出土土器（図版130・237 384～404）土坑8019と接続しており、同時期の遺構である。赤色系土師器小皿（384～393）・大皿（394～399）、白色系土師器小皿（402）・大皿（400・401）、瓦器椀（403）・鍋釜類（404）・火鉢、須恵器鉢・壺・甕、焼締陶器甕、白磁椀、青磁

椀などが出土した。

384～393は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。全体的に口径が小さく、器高が低くなる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から浅黄橙色である。386は口縁端部の一部に煤が付着する。

394～399は、口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味になる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。

400・401は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。全体的に底部は丸底気味になり、口径は小さくなる。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

402は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

403は、体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。調整は、体部外面はオサエ、内面はナデののちミガキで、口縁部内外面はヨコナデののちミガキである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。楠葉産で、Ⅲ-1～Ⅲ-2期に属する。

404は羽釜である。口縁部は直立して、断面台形の鏝を貼り付ける。調整は、体部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。

7 A～B段階に属する。土坑8019と接続する同時期の遺構である。

3区土坑8019出土土器（図版130・237 405～428）赤色系土師器小皿（406～411）・大皿（414～422）、白色系土師器受皿・小皿（413）・大皿（423～425）・小型椀（405）・小型羽釜・鉢、瓦器皿（412）・椀・鍋釜類（426）・火鉢、須恵器鉢（427）・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀・鉢、白磁椀・鉢・合子、青磁皿・椀（428）・鉢、褐釉陶器盤・壺、鉄釉陶器壺などが出土した。

405は、扁平な半球形で、口縁部は内傾して端部に面を作る。調整は、底部・口縁部外面は丁寧なナデ、内面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

406～411は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。406は器壁が厚い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は橙色からにぶい黄橙色である。

414～421は、口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味になる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

422は、器高が高く、器壁が厚い。口縁部はわずかに内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は丁寧で、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は橙色である。形態・調整・色調の特徴から奈良周辺で生産された土師器皿である。⁶⁾

413は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。口縁端部の一部に煤

が付着する。

423～425は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。全体的に底部は丸底気味になり、口径は小さくなる。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

412は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。口縁端部にのみ炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色で、口縁端部のみ灰色である。

426は羽釜である。体部は内弯して立ち上がり、口縁部は直立して、断面台形の鏝を貼り付ける。全体的に形態が扁平となる。調整は、体部外面はオサエ、内面は横方向のハケ、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。

427は、体部は緩く屈曲して外上方に直線的に開き、口縁端部上端をつまみ上げて、玉縁状になる。片口は不明である。調整は、底部外面は糸切りののちナデ、内面はナデ、体部・口縁部内外面は回転ナデである。口縁端部に重ね焼き痕が残る。底部・体部下半内面は使用により摩耗する。色調は灰白色である。東播産である。

428は、体部は内弯して開き、断面方形の高台を削り出す。調整は、底部外面は回転ケズリ、他の部分は施釉のため不明である。底部内面中央に沈線がめぐり、体部外面は蓮弁を削り出す。底部外面以外に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分はオリーブ灰色である。

7 A～B段階に属する。土坑8020と接続する同時期の遺構である。

1区土坑12出土土器（図版130・237 429） 完形の瓦器火鉢（429）を埋置していた。他に赤色系土師器皿の小片が出土したのみである。7段階に属する。

429は、やや上げ底気味の平底で、3箇所上台形の低い脚を貼り付ける。体部は内弯して開き、口縁部は内傾して丸くおさめる。調整は、底部外面・体部外面は表面が剥離しており不明、底部内面はナデ、体部内面はオサエののちナデ、口縁部外面はヨコナデののちミガキ、内面はヨコナデである。口縁部外面に菊花形のスタンプ文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰黄色、表面は灰色である。

2区土坑2222出土土器（図版130・237 430・431） 完形の瓦器壺2点（430・431）を埋納していた。他に赤色系土師器皿、白色系土師器皿、瓦器鍋釜類、焼締陶器甕、白磁碗・鉢、青磁碗・壺などが出土した。7段階に属する。

430・431は、平底で、体部はやや肩が張る扁平な球形で、口縁部は強く外反して端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ・ナデ、内面はナデ、体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。体部外面に縦方向のジグザグ状の粗い暗文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。

2区地業2700出土土器（図版131 432～448） 地業の集石に混じって、赤色系土師器小皿（433・434、437～439）・大皿（435・436）、白色系土師器受皿（432）・小皿・中皿（440）・大皿、瓦器碗・鍋釜類（441・442）・火鉢（443・444）、焼締陶器鉢（445）・播鉢（446）・甕（447）、白

磁椀、青磁椀、青花椀（448）などが出土した。出土遺物は6～7段階と9～10段階に分けることができる。

432は、小型化が進み、口縁部は小さく立ち上がる。調整は、底部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は白色である。

433・434は、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。

435・436は、口縁部の小破片である。外反気味に開き、端部は尖り気味になる。調整は、内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。

437～439は、小型化が進み、器壁が薄く、器高は低い。調整は、437・438は手づくねののち内面・口縁端部をヨコナデして底面中央を浅く押し上げる。439は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は、437・438はにぶい橙色、439は明黄褐色である。

440は、口縁部が浅く開く。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

441は羽釜である。口縁部は内傾して、断面方形の鏝を貼り付ける。調整は、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。

442は鍋である。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して受口になる。調整は、体部外面はオサエののちナデ、内面は板ナデで、口縁部内外面はヨコナデである。外面に炭素を沈着させるが弱い。色調は、胎土は灰白色、外面のみ暗灰色である。

443は、丸みを帯びた肩部から、口縁部は屈曲して立ち上がり、端部をつまみ出して面を作る。肩部には透かし孔がある。調整は、肩部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。口縁部外面に四つ菱形のスタンプ文を施す。2次焼成のため変色しており、色調は橙色である。

444は、底部から屈曲する体部下半部の破片である。器壁は厚く、外面に3条の突帯を成形する。調整は、体部外面はヨコナデ、内面はオサエとヨコナデである。突帯の間は上段は反花、下段は雲気文形のスタンプ文を密に施す。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。

445は、浅い椀形で、口縁部は内弯して開き、端部に面を作る。調整は、口縁部内外面は回転ナデで、端部のナデは強い。口縁部外面に部分的に薄く自然釉がかかる。色調は赤褐色である。備前産である。

446は、口縁部は内弯気味に開き、端部は外上方につまみ出す。5条一組以上の播目をつける。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。色調は浅黄橙色である。信楽産である。

447は、口縁部は外反して開き、口縁端部を上下方に広げて面を作る。調整は、肩部外面はナデ、内面はオサエののちナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰黄褐色である。常滑産で赤羽・中野編年の5型式（1250～1275）に属する。

448は、半球形で器壁は薄い。調整は、施釉のため不明である。口縁部外面に呉須で花文を描く。色調は、胎土は白色、文様はくすんだ青色である。漳州窯産である。

432～434は6段階、435・436・441・442・447は7段階（土師器皿は7 B段階）、437～440、443～446、448は9～10段階（土師器皿は10 B段階）に属する。

2区土坑2525出土土器（図版131 449～468）赤色系土師器小皿（450）・大皿（451・452）、白色系土師器小皿（449）・大皿・鉢、瓦器椀・鍋釜類（453）・火鉢・甕、須恵器鉢・甕、焼締陶器壺・甕（454～465）、灰釉系陶器椀（466）、施釉陶器椀・壺、白磁椀・鉢・壺（467）・水滴（468）・合子、青磁椀、青白磁椀・壺・合子、褐釉陶器盤・壺などが出土した。

450は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

451・452は、口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味になる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。452は内面にうすく煤が付着する。

449は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

453は鍋である。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して受口になる。調整は、体部外面はオサエののちナデ、内面はハケで、口縁部内外面はヨコナデである。全面に炭素を沈着させる。色調は、胎土は灰色である。

8個体の焼締陶器大甕を据え付けた遺構であるが、破片が入り混じって出土したため元の配列を復元することはできない。破片は大部分が常滑産でわずかに備前産がある。口縁部と体部のタタキを掲載する。454は、口縁部は内傾して、端部は強く外反して垂下する。調整は、口縁部内外面はヨコナデで、端部のナデは強い。色調は灰赤色である。胎土などの特徴から常滑産と推測する。

455～461は、肩部は内傾し、口縁部は強く屈曲して外反して開き、口縁端部を上下方に広げて面を作る。肩部の傾きから肩部が張る形態と推測する。調整は、肩部外面はナデ、内面はオサエののちナデ、口縁部内外面はヨコナデで、端部のナデは強い。456～461は外面に自然釉がかかる。色調は、胎土はにぶい赤褐色からにぶい黄橙色で、自然釉部分は灰オリーブ色である。いずれも常滑産で赤羽・中野編年の5型式（1250～1275）から6型式（1250～1300）に属する。

462～465は、体部・肩部の破片で、外面に文様のあるタタキを施す。462は平行タタキ、463～465は格子文状のタタキである。いずれも常滑産である。

466は、小型で平底の底部から口縁部が内弯して開く。調整は、体部外面は糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。口縁端部にのみ自然釉がかかる。色調はにぶい黄橙色である。

467は、体部・口縁部外面は五角形で、口縁端部は水平方向に開き、周縁を切り落として五角形に成形する。調整は、ロクロ成形ののち全体を五角形に整えたようであるが、施釉のため詳細は不明である。内外面に施釉する。色調は胎土・施釉部分とも白色である。

468は、球形の体部に把手を貼り付ける。口縁部はなく、頂部に円孔を成形する。調整は、回転ナデで外面に細かい花文を陽刻する。外面と円孔縁に施釉する。色調は胎土・施釉部分とも白色である。

7 B段階に属する。

2区土坑3175出土土器（図版132・238 469～489） 赤色系土師器小皿（469～478）・大皿（479～486）、白色系土師器小皿・大皿（487～489）、瓦器皿・椀・鍋釜類・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕などが出土した。

469～478は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から浅黄橙色である。474は口縁端部の一部に煤が付着する。

479～486は、口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味になる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から浅黄橙色である。

487～489は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。489は口径が大きい。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

7 B段階に属する。

2区土坑3724出土土器（図版132・238 490～507） 赤色系土師器小皿（490～494）・大皿（495～498）、白色系土師器小皿・大皿（499～501）・小型羽釜（502）・鉢（503・504）、瓦器鍋釜類・火鉢（774）、須恵器鉢（505）・甕、焼締陶器甕、白磁椀・壺・不明品（506）、青磁椀・鉢（507）、青白磁椀、褐釉陶器盤などが出土した。なお、瓦器火鉢774については後述する。

490～494は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。490・491・493は口縁部が屈曲気味に開く。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から浅黄橙色である。493は口縁端部の一部に煤が付着する。

495～498は、口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味になる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色からにぶい黄橙色である。

499～501は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。499・500は器高が低くなる。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

502は、体部は扁平な半球形で、口縁部外面に断面方形の小さい鏝を貼り付ける。調整は、体部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。色調は灰白色である。

503・504は、底部から体部が屈曲して直線的に開き、口縁端部を外上方につまみ出す。調整は、底部内外面・体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。内外面に粘土紐接合痕が明瞭に残る。色調は褐灰色である。用途不明品である。

505は、体部は外上方に開き、口縁端部は緩い玉縁状になる。片口は不明である。調整は、体部・口縁部内外面は回転ナデで、体部最下部外面はケズリである。底部・体部下内面は使用により摩耗する。色調は黄灰色である。東播産である。

506は、逆向きの半裁円錐台形で底部はない。口縁部は外上方に開き、大きな切り込みを入れて4弁に成形する。調整は、施釉のため詳細は不明である。色調は胎土・施釉部分とも白色である。器台などの使用法を推測するが、用途不明品である。

507は、平底で断面台形の高台を削り出す。体部は内弯気味に低く開き、口縁部は屈曲して端部を上方につまみ出す。調整は、底部外面は回転ケズリ、他の部分は施釉のため不明である。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色である。

7 C段階に属する。

3区土坑7627出土土器（図版132・238 508～525） 赤色系土師器小皿（508・509）・大皿（518～521）、白色系土師器小皿（510～517）・大皿（522～525）、瓦器鍋釜類・火鉢、須恵器甕、焼締陶器甕、白磁椀、褐釉陶器壺などが出土した。白色系土師器皿には底部中央を上方へ押し上げる、いわゆる「ヘソ皿」が見られるようになる。

508・509は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。底部はわずかに上げ底気味である。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。

510～515はヘソ皿である。底部中央を上方へ押し上げ、口縁部は外上方へ開く。510・511は口縁部は内弯気味、514・515は口縁部は外反気味である。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。押し上げに伴う爪の圧痕が残る個体がある。色調は灰白色である。

516・517は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸くおさめる。底部はわずかに上げ底気味である。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

518～521は、口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味になる。全体的に器壁が厚く、器高が高い。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から浅黄橙色である。

522～525は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。522～524は器高が低くなる。調整は、底部外面はオサエののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

7 C段階に属する。

3区土坑6556出土土器（図版133・232 526） 大型甕を据え付けていた。他に赤色系土師器皿、瓦器火鉢、白磁皿などの破片が少量出土している。7段階に属する。

526は大型の瓦器甕で、上半部の破片が内部に落ち込む形で出土した。底部は広い平底で、体部は内弯して開き、口縁部は直立して端部は水平方向につまみ出して面を作る。調整は、底部内外面はナデ、体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで、体部外面上半は表面が剥離しており詳細は不明である。炭素の沈着は弱い。色調は灰色である。大和産と推測する。

2区土坑2137出土土器（図版133 527） 中型甕を埋置していた。他に赤色系土師器皿、瓦器

椀・鍋釜類、須恵器鉢、灰釉系陶器壺、青磁椀、褐釉陶器盤などの破片が出土した。6 B段階に属する。

527は須恵器甕で、上半部は欠損する。丸底で体部は長球形である。調整は、底部・体部外面は綾杉文状になる平行タタキ、内面は不定方向のナデで、円形の当具痕が残る。色調は灰色である。東播産である。

3区土坑7553出土土器（図版133・236 528） 大型甕を据え付けていた。他に赤色系土師器皿、白色系土師器皿、瓦器椀・鍋釜類、須恵器鉢、焼締陶器播鉢・壺、白磁椀、青磁皿・椀などの破片が出土している。7段階に属する。

528は大型の焼締陶器甕で、上半部と下半部は直接接合しない。底部は平底で、体部はやや肩が張り、肩部は内傾して、口縁部は端部上下端をつまみ出して面を作る。調整は、底部外面は未調整、内面はナデ、体部外面はタタキののちナデ、内面はオサエののち板ナデで、指先の圧痕及び粘土紐接合痕が残る。指先の圧痕は肩部内面に顕著で、外面の一部にもオサエの痕がある。口縁部外面はナデ、内面はオサエののちナデで、口縁端部はヨコナデである。色調は灰黄褐色である。常滑産で、赤羽・中野編年の4型式に属する。

3区北西部甕列出土土器（図版134・135・236・239 529～538） 南西部甕列よりも多くの甕が残されていた。

529・530は、北西部壁際に並んで据え付けられた大甕である（土坑7413・7414）。底部は掘形内に遺存しており、体部・口縁部は土坑内に落ち込んでいた破片から復元した。

529は、底部は平底で、体部は肩が張り、肩部は外反気味に内傾して、口縁部は強く屈曲して外反して開き、口縁端部を上下方に広げて面を作る。調整は、底部外面は未調整、内面はオサエののちナデ、体部外面はタタキののちナデ、内面はオサエののちナデで、指先の圧痕及び粘土紐接合痕が残る。口縁部内外面はオサエののちナデで、口縁端部はヨコナデである。体部はやや焼け歪む。色調は灰黄褐色である。

530は、形態・調整とも529と共通する。530には文様のあるタタキが残る。529・530はともに常滑産で、赤羽・中野編年の6型式に属する。

531～533は、北西部甕列の大甕を廃棄した土坑8357から出土した。531・532は口縁部、533は底部の破片であるが、焼け歪みが著しい。

538は、北西部壁際に据え付けられた大甕である（土坑7415）。底部は掘形内に遺存しており、体部・口縁部は土坑内に落ち込んでいた破片から復元した。底部は平底で、体部は丸みをおびて肩が張る倒卵形で、口縁部は屈曲して外反し、口縁端部上端をわずかにつまみ上げる。調整は、底部外面は未調整、内面はナデ、体部外面はタタキののち部分的にナデ、内面はオサエののち板ナデである。口縁部内外面はナデ、口縁端部はヨコナデである。肩部外面にヘラ描きがある。色調は灰褐色である。常滑産で、赤羽・中野編年の2型式～3型式に属する。

534～537は、538内部から出土した。534・535は、赤色系土師器小皿で、口径が小さくなり、口縁部は屈曲して外反し、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内

外面はヨコナデである。色調は534がにぶい褐色、535がにぶい橙色である。

536は赤色系土師器大皿で、器壁が薄くなり、口縁部は外反気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

537は白色系土師器大皿で、器壁が薄くなり、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

534～537は8 A段階に属する。北西部甕列の廃絶時期を示す遺物である。

2区土坑4213出土土器（図版136・239 539～571）赤色系土師器小皿（539～548）・大皿（549～568）、白色系土師器ヘソ皿・小皿・大皿（569～571）、瓦器鍋釜類、須恵器甕、焼締陶器甕などが出土した。土師器皿の割合が圧倒的に多い。

539～548は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。539は口縁部が内弯気味に開く。底部が上げ底気味の個体が多い。全体的に口径が小さくなり、歪みが大きくなる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は赤みが弱くなり、浅黄橙色から灰白色である。

549～568は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。全体的に器壁が薄くなり、歪みが大きくなる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は赤みが弱くなり、浅黄橙色から灰白色である。

569～571は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

8 A段階に属する。

3区土坑6107出土土器（図版136・239 572～588）赤色系土師器小皿（572）・大皿（577・578）、白色系土師器ヘソ皿（573～576）・小皿・中皿（579）・大皿（580～584）・小型羽釜（585）、瓦器皿・椀・鍋釜類（586・587）・甕、須恵器甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀・鉢（588）、施釉陶器椀、白磁椀、青磁椀などが出土した。

572は、口縁部は屈曲して外反し、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

577・578は、口縁部は外反気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は577がにぶい橙色、578が浅黄橙色である。

573～576は、底部中央を上方へ押し上げ、口縁部は外上方へ開く。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

579は、口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。口縁端部に煤が付着する。

580～584は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。全体的に器壁が薄く、口径が小さくなる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

色調は灰白色である。

585は、体部は扁平な半球形で、口縁部外面に断面方形の小さい鏝を貼り付ける。調整は、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

586は鍋である。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して受口になる。調整は、体部外面はオサエののちナデ、内面はハケで、口縁部内外面はヨコナデである。外面に炭素を沈着させるが弱い。色調は灰白色である。

587は羽釜である。体部・口縁部は直立して、断面方形の鏝を貼り付ける。調整は、体部外面はオサエ、内面はハケ、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。外面に炭素が沈着する。色調は、胎土・内面は灰白色、外面は灰色である。

588は、体部は内弯気味に開き、底部に高く分厚い高台を貼り付ける。調整は、底部外面はヘラ切りののちオサエ、内面はナデ、体部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。自然釉はほとんどない。色調は灰白色である。

8 A段階に属する。

3区井戸8551出土土器(図版137 589～603) 赤色系土師器小皿・大皿(591・592)、白色系土師器ヘソ皿(589・590)・小皿・大皿(593・594)・椀・鉢、瓦器椀・鍋釜類(596～598)・火鉢(599)、須恵器鉢・甕、焼締陶器播鉢(601)・甕(602・603)、灰釉系陶器椀・鉢(600)、施釉陶器椀(595)、白磁椀・壺などが出土した。

591・592は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。歪みが大きい。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は591が灰白色、592が浅黄橙色である。

589・590は、底部中央を上方へ押し上げ、口縁部は外上方へ開く。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

593・594は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。594は口縁端部の一部に煤が付着する。

595は、平底で体部は屈曲して内弯気味に開き、口縁部は丸くおさめる。調整は、底部外面は糸切り、他の部分は施釉のため不明である。底部外面以外に灰釉を施釉するが、外面の大部分は剥落する。底部周縁外面の3箇所に焼成時に窯内に置いた粘土塊の一部が溶着する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は浅黄色である。瀬戸美濃産である。

596・597は羽釜である。596は、口縁部は内傾して、断面台形の鏝を貼り付ける。調整は、体部外面はオサエ、内面はハケ、口縁部外面・鏝部はヨコナデ、口縁部内面はハケののちヨコナデである。炭素の沈着はほとんどない。色調は、胎土は灰黄色である。体部外面・鏝部下面に煤が付着する。

597は、体部・口縁部は直立して、幅広い鏝を貼り付ける。調整は、底部外面は型成形、内面はナデ、体部外面はオサエ、内面はハケ、口縁部外面・鏝部はヨコナデ、内面はハケである。外面に

炭素が沈着する。色調は、胎土・内面は灰色、外面は暗灰色である。体部外面・鏝部下面に煤が付着する。

598は鍋である。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して受口になる。調整は、体部外面はオサエ、内面はハケで、口縁部内外面はヨコナデである。外面に炭素を沈着させる。色調は、胎土・内面は灰色、外面は暗灰色である。体部外面に煤が付着する。

599は、平底で3箇所低い脚を貼り付ける。体部は内弯して開き、口縁部は内傾して平坦な面を作る。調整は、脚部はナデで外面にヘラ状工具の圧痕がある。底部外面は一部が剥離するがナデ、内面はオサエののちナデ、体部外面は粗いミガキ、体部内面はオサエののちナデ、口縁部外面はミガキ、内面・端面はヨコナデである。口縁部外面に菊花形のスタンプ文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は灰白色である。

600は、体部は外上方に開き、口縁端部は屈曲して肥厚する。片口は不明である。調整は、体部・口縁部内外面は回転ナデである。自然釉薬ほとんどない。色調は灰白色である。

601は、体部は内弯して開き、口縁端部は外形する広い面を作る。調整は、底部外面はナデ、体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。内面に10条一組の播目をつけ、体部下半は使用によりわずかに摩耗する。備前産で、重根編年のⅢA～ⅢBに属する⁷⁾。

602・603は大甕の口縁部で、口縁部は屈曲してわずかに外反気味に開き、端部は玉縁となる。調整は、肩部外面はオサエののちナデ、内面は板なで、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれも暗灰色である。備前産で、重根編年のⅢA～ⅢBに属する。

8A段階に属する。

2区地業4900出土土器（図版138 604～627）赤色系土師器小皿（604・605）・大皿（609・610）、白色系土師器小皿（606～608）・大皿（611・612）、瓦器碗・鍋釜類・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器播鉢・甕（613～627）、白磁碗・壺、青磁碗、青白磁壺、褐釉陶器盤・壺などが出土した。

604・605は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は、いずれも橙色である。

609・610は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれもにぶい橙色である。

606～608は、底部中央を上方へ押し上げ、口縁部は外上方へ開く。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

611・612は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。全体的に器壁が薄く、口径が小さくなる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色である。

焼締陶器甕の破片は管理用コンテナで30箱以上出土した。常滑産よりも備前産の割合が多い。

613～615は、口縁部は外反して、端部は外側へ折り曲げ、巻き込む。調整は、肩部外面は自然釉のため不明、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は、胎土は灰色、自然釉部分は灰オリーブ色である。にぶい褐色の破片もある。備前産で、重根編年のⅡAに属する。

616～621は、口縁部は直立気味で、端部は玉縁を作る。調整は、肩部内外面は板ナデ、口縁部内外面はヨコナデである。616～619は外面に自然釉がかかる。色調は、胎土はにぶい褐色から灰色で、自然釉部分は暗オリーブ色である。備前産で、ⅡB～ⅢB（1300～1400）に属する。

622は、口縁部は直立し、端部は外反して垂下する。調整は、口縁部外面はオサエののちナデ、内面はヨコナデ、口縁端部内外面はヨコナデである。色調は灰赤色である。胎土などの特徴から常滑産と推測する。

623～627は、肩部は内傾もしくは直立、口縁部は屈曲して外反して開き、口縁端部を上下方に広げて面を作る。調整は、肩部外面は板ナデ、内面は板ナデで、626は外面はタタキである。口縁部内外面はヨコナデで、端部のナデは強い。627は外面にうすく自然釉がかかる。色調は、胎土は灰赤色から灰色である。いずれも常滑産で赤羽・中野編年の5型式～6型式に属する。

8A段階に属する。

3区土坑6111出土土器（図版138 628～645） 赤色系土師器小皿・大皿、白色系土師器小皿・大皿、瓦器鍋釜類・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕（628～645）、白磁椀・壺、青磁椀、青白磁壺・合子、褐釉陶器壺などが出土した。

焼締陶器大甕の破片が大量に出土した。大部分が常滑産でわずかに信楽産がある。備前産は確認できていない。口縁部と体部のタタキを掲載する。

628～635は、肩部は内傾もしくは直立、口縁部は屈曲して外反して開き、口縁端部を上下方に広げて面を作る。調整は、肩部外面はナデ、内面はオサエののちナデ、口縁部内外面はヨコナデで、端部のナデは強い。631～635は外面に自然釉がかかる。色調は、胎土はにぶい赤褐色から灰褐色で、自然釉部分は灰オリーブ色である。いずれも常滑産で赤羽・中野編年の5型式～6型式に属する。

636～645は、体部・肩部の破片で、外面に文様のあるタタキを施す。636・637は平行タタキ、638～643は格子文状、644は花文状、645は入子枳文状のタタキである。いずれも常滑産である。

8A段階に属する。

（5）室町時代中期から後期

2区土坑2225出土土器（図版139・240 646） 赤色系土師器小皿・大皿、白色系土師器ヘソ皿・小皿・中皿・大皿（646）、焼締陶器甕、白磁椀、青磁椀、褐釉陶器壺などが出土した。

646は、口径24cmを超える特大の土師器皿である。器高は低く、口縁部は浅く外反して、端部をつまみ上げる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色である。

9B段階に属する。

2区土坑3144出土土器（図版139 647～651） 赤色系土師器小皿（647・648）・大皿、白色系土師器ヘソ皿・小皿・大皿（649・650）、瓦器鍋釜類・火鉢・播鉢（651）、焼締陶器甕、白磁椀・壺などが出土した。

647・648は、底部は上げ底気味で、口縁部は屈曲して外反し、端部は丸くおさめる。全体的に口径が小さくなり、歪みが大きい。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

649・650は、口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。全体的に口径が小さくなる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は白みが弱くなり浅黄橙色である。649は底部内面に煤が付着する。

651は、平底で体部は外上方に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はナデ、内面は不明、体部外面はオサエののちナデ、内面はヨコナデ、口縁部内外面はヨコナデである。全面に薄く炭素が沈着する。内面に4条1組の播目をつけ、底部内面・体部内面下半は使用により摩耗する。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。

9 A段階に属する。

2区井戸2017出土土器（図版139・240 652～671）赤色系土師器小皿（652～655）・大皿（656）、白色系土師器ヘソ皿（657・658）・小皿（659～662）・中皿（663～666）・大皿（667・670）、瓦器鍋釜類（671）・火鉢、焼締陶器甕、施釉陶器椀・皿（672）・鉢・壺、青磁皿（673）・椀（674）などが出土した。

652～655は、底部は上げ底気味で、口縁部は屈曲して外反し、端部は丸くおさめる。全体的に口径が小さくなり、歪みが大きい。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。全体的に調整が粗くなる。色調は赤みが弱くなり、にぶい黄橙色から灰黄褐色である。653は口縁端部の一部に煤が付着する。

656は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

657・658は、底部中央を上方へ押し上げ、口縁部は外上方へ開く。口縁部は657は外反気味、658は内弯気味である。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は白みが弱くなり浅黄橙色である。

白色系土師器皿は、小皿から大皿で器高が低く口径が大きい皿が増加して、口径に複数のまとまりが見られるようになる。また、色調は全体的に白みが弱くなる。659～662は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は659・660が浅黄橙色、661・662は灰白色である。

663～666は、底部は小さく、口縁部は浅く外反して、端部をつまみ上げる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれも灰白色である。664は口縁端部の一部に煤が付着する。

667・668は、口径が大きく、口縁部は浅く外反して、端部をつまみ上げる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はいずれも灰白色である。

669・670は、口径がさらに大きく、口縁部は浅く外反して、端部をつまみ上げる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は669は浅黄橙色、

670は灰白色である。

671は鍋である。体部は内弯気味に開き、口縁端部をつまみ出して大きな片口を作る。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、体部外面はオサエののちナデ、内面はハケで、口縁部端部はヨコナデである。外面に炭素を沈着させるが弱い。色調は、胎土・内面は灰白色、外面は灰色である

672は、口縁部は直線的に開き、端部を内側につまみ出す。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。口縁部下半におろし目をつける。口縁部上半内外面に灰釉を施す。色調は、胎土は灰白色、施釉部分はオリーブ黄色である。瀬戸美濃産である。

673は、口縁部は外反して開き、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面は回転ケズリで、他の部分は施釉のため不明である。底部外面以外に施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分はオリーブ黄色である。

674は、体部は内弯して開き、断面台形の高台を削り出す。調整は、底部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデで、体部内外面は施釉のため不明である。底部内面に重ね焼き痕が残る。底部内外面以外に施釉する。色調は、胎土はにぶい橙色、施釉部分はオリーブ黄色である。

9 B段階に属する。

3区土坑7963出土土器（図版139 675） 口縁部を欠損するが、瓦器火鉢（675）が出土した。赤色系土師器皿、白色系土師器皿、瓦器火鉢、焼締陶器播鉢・甕、施釉陶器椀、白磁壺、青磁椀などが出土した。9 A～B段階に属する。

675は、平底で、3箇所獣脚形の高い脚を貼り付ける。体部下半は器壁は厚く、屈曲して外面に4条の突帯を成形する。体部上半は内弯して、大きな透かし穴を開ける。調整は、底部外面はナデ、内面はオサエののちナデ、体部下半外面はヨコナデ、内面はナデで、体部上半外面はミガキ、内面はナデである。突帯の間は上段は桐、中段は反花、下段は花菱のスタンプ文を密に施す。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。

3区井戸8480出土土器（図版140・240 676～695） 赤色系土師器小皿（676～681）・大皿、白色系土師器へソ皿・小皿（682・683）・中皿（684・685）・大皿（686～688）、瓦器鍋釜類・火鉢（689・690）、焼締陶器播鉢（691・692）・甕、施釉陶器皿、白磁椀、青磁皿（694）・椀（695）・蓋（693）などが出土した。

676～681は、底部は上げ底気味で、口縁部は屈曲して外反し、端部は丸くおさめる。全体的に口径がさらに小さくなる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色から灰黄色である。

682・683は、口縁部は屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。全体的に器高は低くなる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は682はにぶい橙色。683はにぶい黄橙色である。682は口縁端部の一部に煤が付着する。

684・685は、口縁部は浅く外反して、684は端部をつまみ上げ、685は丸くおさめる。全体的に器高は低くなる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで

ある。684は焼成後に底部中央を1箇所小さい円形に穿孔する。色調は684はにぶい橙色、685は浅黄色である

686～688は、口縁部は浅く外反して、端部をわずかにつまみ上げる。全体的に器高は低くなる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色から浅黄橙色である。

689は、体部上半は内弯して、口縁部は屈曲して直立する。体部上半に大きな透かし穴を開け、屈曲部外面に1条の突帯を成形する。調整は、体部外面はミガキ、内面はナデ、口縁部外面は縦方向の深い刻み目、内面はナデののち粗いミガキ、口縁端部はヨコナデである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。

690は、平底で3箇所に脚を貼り付けるが欠落する。体部は内弯して開き、口縁部は内傾して平坦な広い面を作る。体部最下部に1条、口縁部外面に2条の突帯を成形する。調整は、脚部はかきやぶりによる接合で、底部内外面はナデ、体部・口縁部外面は表面の損傷のため不明、内面及び口縁端部はヨコナデである。口縁部外面の突帯の間に4弁の花形のスタンプ文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土はにぶい橙色、表面は灰色である。

691は、体部は内弯気味に開き、口縁端部はわずかに外反して丸くおさめる。調整は、体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。内面に1条ずつの播目を粗い間隔でつけ、体部内面下半は使用により摩耗する。色調はにぶい橙色である。信楽産で、畑中編年の2期古段階に属する。

692は、口縁端部は上下方に広げて幅広い面を作る。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。内面に5条一組の播目をつける。色調は褐色である。備前産で、重根編年のIVBに属する。

693は、口縁部は外反気味に開き、端部を丸くおさめる。調整は、施釉のため不明である。口縁部外面に浅い沈線が1条めぐり、口縁部内外面に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明オリーブ灰色である。

694は、体部は内弯して開き、口縁部は外反して端部は丸くおさめる。調整は、施釉のため不明である。体部・口縁部内外面に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色である。

695は、丸みを帯びた天井部から口縁部は屈曲して垂下し、端部に小さな鋭い面を作る。調整は、施釉のため不明である。口縁端部以外の内外面に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色である。

9C段階に属する。

(6) 安土桃山時代から江戸時代

3区井戸6375出土土器(図版140・240 696～707) 赤色系土師器小皿(696)・大皿、白色系土師器中皿(697～701)・大皿(702・703)・甕(704)、瓦器小型壺(705)・火鉢、焼締陶器播鉢・壺・甕、施釉陶器碗・皿・壺、白磁皿(706・707)、青磁碗などが出土した。

696は、矮小化して歪となり、口縁端部は尖る。調整は、外面は手づくねのオサエ、内面はナデである。色調はにぶい黄橙色である。

白色系土師器は、器高がさらに低くなり、口径は中皿と大皿にまとまるようになる。697～701は、丸底気味で口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。697は外反気味である。701は焼成後に底部中央の2箇所小さい円形に穿孔し、内面に煤が付着する。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色から灰白色である。697は口縁端部の一部に煤が付着する。

702・703は、口縁部は浅く外反して、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

704は羽釜の可能性はある。体部は球形で、口縁部は「く」字形に屈曲して内弯気味に開き、端部は内側につまみ出す。調整は、体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。

705は、非常に小型で「つぼつぼ」と呼ばれる器形である。体部はしもぶくれの球形で、口縁部は内傾して尖る。調整は、底部内外面はナデ、体部・口縁部外面はナデ、内面はヨコナデである。外面に炭素が沈着するが弱い。色調は暗灰色である。

706・707は、底部は平底で、口縁部は内弯して開き、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面は回転ケズリで、体部外面下半は回転ナデ、他の部分は施釉のため不明である。底部内面に1条の浅い沈線を施す。706は内面に曲線文を描く。底部外面・体部外面下半以外に施釉する。色調は、胎土・施釉部分とも灰白色である。

10C段階に属する。

3区溝7774出土土器（図版140・240 708～715）土師器皿（708・709）、瓦器火鉢、焼締陶器播鉢（710）・壺（711）・甕、施釉陶器椀・鉢・壺、磁器椀（712・713）、青花椀、焼塩壺（714・715）などが出土した。

708・709は、口縁部はわずかに内弯して開き、端部は丸くおさめる。底部外縁に圈線がめぐる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。

710は、体部は直線的に開く。調整は、底部外面は未調整、体部外面はオサエののちナデである。体部内面に5条一組に播目をつけ、底部・体部内面は使用痕により摩耗する。色調はにぶい褐色である。丹波産で、長谷川編年のⅧ期に属する。

711は、平底で体部は屈曲して直立する。調整は、底部外面はヘラ切り、底部内面・体部内外面は回転ナデである。体部下半外面に乱雑に沈線を施す。色調はにぶい褐色である。

712・713は、底部は厚く、断面台形の高台を削り出す。体部は内弯して、口縁部は薄くわずかに外反する。調整は、底部外面は回転ケズリ、ほかは施釉のため不明である。高台接地面に離砂が付着する。底部外面以外に厚く施釉する。高台接地面に離れ砂が付着する個体がある。色調は、胎土は白色、施釉部分は明緑灰色である。肥前産青磁である。

714は焼塩壺の蓋である。天井部中央は凹み、口縁部は屈曲して垂下し、端部は丸くおさめる。全体に分厚い。調整は、天井部外面はナデ、内面は布目、口縁部内外面はヨコナデである。色調は

橙色である。

715は焼塩壺の身である。底部は丸みを帯びた平底で、体部は屈曲して直立する。全体に分厚い。調整は、底部外面・体部外面はナデ、内面は布目である。色調は橙色である。

11 B～C段階に属する。

(7) その他の土器・陶磁器

上記の遺構出土土器以外で、重要と判断した土器・陶磁器を以下に掲載する。所属時期については型式の特徴を優先し、それ以外のものについては共伴する出土土器の年代、遺構の層位に基づいて記述した。一部の遺物は写真のみを掲載する。

土師器(図版141・242、図13・14 726～748・901～907・916・917) 726～728はミニチュアといえる非常に小型の鉢である。726は、器壁が分厚く、口縁部は内弯して立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は、内外面ともナデである。色調はにぶい橙色である。3区土坑9064から出土した。7段階に属する。

727は、器壁が薄く、体部は扁球形で、口縁部は内傾して尖る。調整は、底部・体部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。3区土坑7453から出土した。7段階に属するので「つぼつぼ」とは別物と推測する。

728は、薄い平底の底部から、口縁部が外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面・口縁部内外面はナデ、口縁端部はヨコナデである。色調はにぶい橙色である。3区土坑8422から出土した。5段階に属する。

729・730は穿孔がある皿である。729は小皿である。口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。焼成後に底部の4箇所小さい円形に穿孔する。配置から見て十字形の5箇所に穿孔があったと推測する。色調は浅黄橙色である。2区土坑4638から出土した。6段階に属する。

730は大皿である。口縁部は直線気味に開き、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。焼成後に体部下半の1箇所に小さい円形に穿孔する。色調はにぶい黄橙色である。3区井戸6385掘形から出土した。6段階に属する。

731は出土例が少ない浅い皿である。丸底気味の底部から口縁部は短く立ち上がる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。1区土坑580から出土した。6 B段階に属する。

732は完形の大皿である。口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は浅黄橙色である。3区井戸9208枠内から出土した。5 B段階に属する。埋納品の可能性がある。

733～738は底部に糸切り痕がある他地域産の製品である。733～736は、底部は大きく、口縁部は短く立ち上がり端部は丸くおさめる。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。733は、色調は灰白色で、2区第2層から出土した。734は、色調は灰白色で、内

面の広い範囲に黒斑がつく。2区柱穴3281から出土した。6～7段階に属する。735は、色調はにぶい橙色、736は、色調は橙色で、ともに1区土坑239から出土した。6～7段階に属する。

737・738は、底部は小さく、口縁部は浅く開き端部は丸くおさめる。737は、色調は灰白色で、内外面の広い範囲に黒斑がつく。3区土坑6653から出土した。9段階以前に属する。738は、色調は淡橙色で、2区土坑4261から出土した。5段階に属する。

739は耳皿である。底部に断面三角形の高い輪高台を貼り付ける。口縁部は端部を折り曲げ、さらに両側が強く内傾する。調整は、底部内外面はナデ、高台部・口縁部内外面はヨコナデである。色調は淡黄橙色である。2区土坑3722から出土した。6段階に属する。

740は丸底の椀である。口縁部は内弯し、端部に小さな面を作る。調整は底部・体部外面はハケ、口縁部外面はハケののちヨコナデ、内面全面は使用痕による摩耗で極めて平滑である。内外面にまだらに煤が付着する。色調はにぶい橙色である。2区柱穴3079から出土した。7段階に属する。

741・742は小型の羽釜である。体部は扁平な半球形で、口縁部外面に断面方形の小さい鏝を貼り付ける。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。741は、色調は浅黄橙色で、2区土坑3725から出土した。7段階に属する。742は、色調はにぶい黄橙色で、内外面に煤が付着する。3区井戸6992から出土した。7段階に属する。

743は羽釜である。球形の体部から口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚する。肩部外面に幅の広い鏝を貼り付ける。調整は、体部内外面はナデ、口縁部内外面及び鏝部はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色である。1区土坑493から出土した。5～6段階に属する。

744～748は粗製の鉢である。今回の調査では各時代の遺構から破片が出土しており、3区土坑9379の49、2区土坑3724の503・504がこれにあたる。

744は、口縁部は外傾して、端部は内側につまみ出す。調整は、口縁部外面はナデ、内面は布目である。色調はにぶい黄橙色で、胎土は粗く砂粒を多く含む。3区土坑8922から出土した。1段階に属する。

745は、器壁が分厚く、口縁部は直立気味で、端部に面を作る。調整は粗雑で、口縁部内外面はオサエで指先の圧痕が多く残る。色調はにぶい橙色で、胎土は粗く砂粒を多く含む。3区柱穴8912から出土した。1段階に属する。

746は、半球形の体部から口縁部は屈曲して開き、端部はわずかにつまみ上げる。調整は、体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで、外面に粘土紐接合痕が明瞭に残る。色調はにぶい橙色である。口縁部は被熱する。3区土坑7824から出土した。6段階に属する。

747は、円筒形の体部から口縁部はわずかに屈曲して開き、端部はつまみ出す。調整は、体部・口縁部内外面はナデで、口縁端部はヨコナデで、名外面に粘土紐接合痕が明瞭に残る。色調はにぶい黄橙色で、体部内面は灰色である。2区土坑5090から出土した。6段階に属する。

748は、大型で口縁部は外反して開き、端部をつまみ上げる。調整は、口縁部外面はナデ、内面はハケ、口縁部内外面はヨコナデである。色調はにぶい黄橙色である。口縁部外面にうすく煤が付着する。3区土坑7826から出土した。5～6段階に属する。



図13 墨が付着した土師器皿

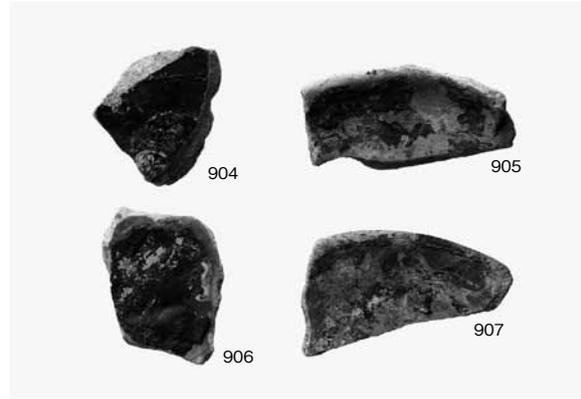


図14 漆が付着した土師器皿

901～903は内面に墨が付着した皿である。墨汁の取り皿に使用したと推測する。901は3区井戸8043から出土した。6段階に属する。902・903は2区柱穴3079から出土した。7段階に属する。

904～907は内面に漆が付着した皿である。漆の取り皿に使用したと推測する。904は3区第2層から出土した。5～6段階の遺物である。905は3区土坑9150から出土した。5～6段階に属する。906は3区柱穴7289から出土した。5～6段階に属する。907は3区柱穴8364から出土した。6段階に属する。

916・917は線刻がある皿である。916は白色系ヘソ皿の口縁部内面に、焼成前に茎に連なる葉っぱを線刻する。3区土坑7799から出土した。9段階に属する。

917は大皿の口縁部外面に、焼成前に茎に連なる葉っぱを線刻する。2区土坑5728から出土した。5段階に属する

黒色土器（図版141 722～725） 722は小型椀である。平底で、体部は内弯気味に開く。調整は、底部・体部内外面とも密なミガキである。内外面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。3区土坑7700から出土した。5～6段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。

723は椀である。体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部内外面はナデ、体部・口縁部外面はオサエのち粗いミガキ、内面はナデのち密なミガキで、口縁端部はヨコナデである。底部内面に「*」形の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土も黒色である。3区土坑6113から出土した。7段階の遺構であるが、4段階の遺物である。

724は鉢である。口縁部は内弯気味に直立し、端部を外側につまみ出す。調整は、内外面とも密なミガキである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。2区土坑5633から出土した。3段階に属する。

725は甕である。口縁部は体部から「く」字形に屈曲して開き、端部は肥厚する。調整は、体部外面はナデ、内面は板ナデ、口縁部内外面はヨコナデである。体部内面・口縁部内外面に炭素が沈着する。色調は、胎土はにぶい褐色である。体部外面の一部に煤が付着する。3区土坑6113から出土した。7段階の遺構であるが、2～3段階の遺物である。

白色土器（図版141 716～721） 716～719は台付皿である。口縁部は浅く開き、端部は丸くお

さめる。口縁部下半外面に高い高台を貼り付ける。調整は底部外面は糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。色調は灰白色からにぶい黄橙色である。716は2区井戸5407から出土した。6段階に属する。717～719は2区土坑5333から出土した。5段階に属する。

720は高杯の杯部である。柱状部は円柱形で、口縁部は内弯して開き、端部は丸くおさめる。調整は、杯部の底部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。色調は灰白色で、表面は部分的に黄灰色になる。2区土坑1251から出土した。3～4段階に属する。

721は蓋である。天井部に半球形つまみを貼り付け、3箇所小さな円形に穿孔する。調整は天井部内外面は回転ナデ、つまみ部はヨコナデである。色調は白色である。3区土坑8545から出土した。6A段階に属する。

瓦器 (図版142・143 749～779) 749は小型の皿である。口縁部は浅く開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。ミガキ・暗文はない。全面に炭素を沈着させる。色調は、胎土は灰色である。1区土坑202から出土した。6～7段階に属する。

750は小型の受皿である。平面形は歪で、口縁部は小さく立ち上がる。底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。ミガキ・暗文はない。全面に炭素を沈着させるが弱い。色調は、胎土は灰色である。2区土坑4200から出土した。7段階に属する。

751・752はミニチュアといえる非常に小型の鉢である。751は、口縁部は内弯して立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はナデ、底部内面・口縁部内外面はヨコナデである。ミガキ・暗文はない。全面に炭素を沈着させる。色調は、胎土は暗灰色である。2区柱穴3111から出土した。6～7段階に属する。752は、口縁部は外反して開く。調整は、口縁部内外面はヨコナデののちミガキである。全面に炭素を沈着させる。色調は、胎土は灰色である。2区柱穴2637から出土した。6～7段階に属する。

753は受皿が溶着した皿である。底部外面に受皿が密着する。調整は、皿の底部内面はナデで、底部内面に鋭いジグザグ状の暗文を施す。色調は、被熱により変色して浅黄橙色である。2区土坑2261から出土した。6段階に属する。受皿の使用例がわかる遺物である。

754は受皿である。口縁部は鋭角に屈曲して内傾する。調整は、底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。底部内外面にジグザグ状の暗文を施す。全面に炭素を沈着させる。色調は、胎土は灰白色である。2区柱穴4184から出土した。6段階に属する。

755は小型の鉢である。口縁部は外反して開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はオサエ、底部内面・口縁部内外面はヨコナデである。ミガキ・暗文はない。部分的に炭素を沈着させるが弱い。色調は、胎土は灰白色である。3区井戸8242から出土した。6～7段階に属する。

756～758は小型の椀である。体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。756は丸くおさめる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部・体部外面はオサエ、内面はナデののち粗いミガキ、口縁部内外面はヨコナデである。底部内面に

756は崩れた螺旋状、757は螺旋状、758はジグザグ状の暗文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、いずれも胎土は灰色である。756は2区土坑3501から出土した。6段階に属する。757は2区第2面検出中に出土した。室町時代以前に属する。758は2区土坑3188から出土した。6段階に属する。

759は輪花椀である。やや上げ底で口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。外面から縦方向にヘラ状工具を押し当てて6弁の輪花を成形する。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部外面下半はオサエ、内面はヨコナデののち粗いミガキ、口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデののち粗いミガキである。底部内面中央に11弁の花文の暗文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰色である。楠葉産である。2区柱穴4436から出土した。7段階に属する。

760は椀である。口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面・口縁部外面下半はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部外面はヨコナデののち粗いミガキ、内面はヨコナデである。内面は底部から口縁部に向けて放射状に細かい暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は暗灰色である。楠葉産である。2区土坑4147から出土した。7段階に属する。

761は完形の椀である。体部・口縁部は内弯して開き、端部は小さくつまんで内面に浅い凹線がめぐる。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。調整は、底部外面はオサエ、内面はナデ、体部外面はオサエ、内面はナデののちミガキで、口縁部内外面はヨコナデののちミガキである。底部内面に崩れた螺旋状の暗文を施し、全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色である。楠葉産である。3区土坑9385枠内から出土した。6段階に属する。埋納品の可能性がある。

762～764は小型の壺である。762は、口縁部は外反して端部はつまみ出す。調整は、体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。体部外面に縦方向の粗い暗文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。3区土坑7140から出土した。6～7段階に属する。

763は、体部は下膨れで、口縁部は緩やかに外反して端部をわずかにつまみ出す。体部に注口を貼り付ける。調整は、体部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。注口は外側から穿孔する。外面に炭素が沈着するが弱い。色調は胎土・内面は灰白色、外面は暗灰色である。2区柱穴2356から出土した。6～7段階に属する。

764は、体部はやや肩が張る扁平な球形で、口縁部は屈曲して内傾し端部は玉縁状になる。調整は、体部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。体部外面に縦方向のジグザグ状の粗い暗文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。肩部外面に花卉状、口縁部外面に太い1条の暗文を施す。外面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土・内面は灰白色、外面は暗灰色である。2区柱穴2038から出土した。7段階に属する。

765は播鉢である。口縁部は外上方に開き、端部は外形する面を作る。調整は、口縁部外面はケズリ、口縁部内面・端部外面はヨコナデである。体部内面に18条一組の浅い播目をつける。内外面

に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。和泉産である⁸⁾。3区土坑6306から出土した。9段階に属する。

766・767は羽釜である。766は、体部は内弯して立ち上がり、口縁部は直立して、断面台形の鏝を貼り付ける。調整は、体部外面はオサエ、内面は横方向のハケ、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。2区土坑3638から出土した。7段階に属する。

767は、体部は下膨れで、3箇所にも円柱形の脚を貼り付ける。脚の先端は外反する。口縁部は内傾して、断面台形の鏝を貼り付ける。口縁部は欠損する。調整は、脚部はナデ、底部外面はオサエ、内面はナデ、体部外面はオサエ、内面は横方向のハケ、口縁部内外面・鏝部はヨコナデである。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。3区土坑8430から出土した。6段階に属する。

768～779は火鉢である。768は、口縁部は強く屈曲して幅広い面を作り、上面に2条の突帯を形成する。調整は、体部内外面はミガキ、口縁部上下面はヨコナデで、上面突帯内側はミガキである。突帯の間は花柄のスタンプ文を施す。全面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。2区井戸3550から出土した。10段階に属する。

769は、平底で3箇所にも円錐形の脚を貼り付ける。口縁部は外反気味に開き、端部は丸みをおびた幅広い面を作る。調整は、脚部はオサエ・ナデ、底部内外面はナデ、口縁部外面はオサエののちナデ、口縁部内面・端面はヨコナデである。外面に炭素が沈着するが弱い。色調は、胎土・内面は灰白色、外面は灰色である。底部内面中央に焦げ痕がある。3区井戸8128から出土した。5～6段階に属する。

770は、平底で3箇所にも台形の低い脚を貼り付ける。体部は内弯して開き、口縁部は直立して丸くおさめる。調整は、底部内外面はナデ、体部外面はナデののちミガキ、内面はオサエののちナデ、口縁部外面はヨコナデののちミガキ、内面はヨコナデである。口縁部外面に菊花形のスタンプ文を施す。全面に炭素が沈着するが、口縁部内面は被熱して白くなる。色調は、胎土は灰色である。2区土坑2952から出土した。8段階に属する。

771は、体部は内弯して大きな透かし穴を開ける。口縁部は拡張して端部に幅広い面を作り、外面に2条の突帯を成形する。調整は、体部外面はヨコナデののち粗いミガキ、内面はナデで、口縁部内外面ヨコナデで、端面はヨコナデののちミガキである。突帯の間は「□に×」形に直線を組み合わせたスタンプ文を施す。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。2区土坑3715から出土した。10段階に属する。

772は、平面形が方形で、隅部の破片のため大きさは不明である。平底で4隅にも台形の脚を貼り付ける。口縁部は短く直立して、外面に分厚い鏝を接合する。調整は、底部内外面はナデ、口縁部外面はナデ、口縁部内面・鏝部はヨコナデである。全面に炭素が沈着するが弱く、また、2次焼成を受けている。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色と浅黄橙色である。1区土坑17から出土した。6段階に属する。

773は、平面形が長方形で、隅部の破片のため大きさは不明である。平底で四隅に獣脚形の高い脚を貼り付ける。体部はやや外向きに直立し、口縁部は拡張して端部に幅広い面を作り、外面に2条の突帯を成形する。調整は、底部内外面はナデ、体部内外面はヨコナデ、口縁部内外面はヨコナデで、端面はミガキである。突帯の間は七宝形に十字を組み合わせたスタンプ文を施す。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色である。3区第1面検出中に出土した。室町時代以前に属する。

774は、平底で3箇所⁹⁾に台形の低い脚を貼り付ける。体部はやや外向きに直立し、口縁は丸みをおびた面を作る。外面から縦方向に工具を押し当てて6弁の輪花を成形する。調整は、底部内外面はナデ、脚部・体部内外面はナデののち横方向の粗いミガキ、口縁部内外面・端面はヨコナデののちミガキである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は暗灰色である。2区土坑3724から出土した。7C段階に属する。

775～779は火鉢体部の破片で、外面にスタンプ文を施す。775は花菱文、776は雁金文、777は唐草文、778は円形文、779は亀甲繫文である。

775は3区井戸8128から出土した。6段階に属する。776は2区土坑2710から出土した。7段階に属する。777は2区井戸2333から出土した。7段階に属する。778は2区地業2700から出土した。7段階に属する。779は2区土坑2173から出土した。9～10段階に属する。

焼締陶器 (図版144・241 780～799・908～915) 780は小型の蓋である。天井部は平坦で、口縁部は屈曲して短く垂下する。調整は、天井部・口縁部内外面は回転ナデである。色調はにぶい黄橙色である。備前産である。3区土坑8374から出土した。5B段階に属する。

781～783は壺である。781は、体部は肩が張る扁平な球形で、口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はケズリ、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。体部外面にヘラ記号がある。色調は灰赤色である。備前産である。3区土坑7457から出土した。6～8段階に属する。

782は、口縁部は緩やかに外反して端部は玉縁になる。調整は、体部・口縁部内外面は回転ナデで、肩部外面に櫛描波状文を施す。色調は灰赤色である。備前産である。1区井戸71から出土した。6～7段階に属する。

783は、平底で体部は内弯する。調整は、底部外面はナデ、底部内面は回転ナデ、体部外面下半はケズリ、体部外面上半・内面は回転ナデである。底部外面に「二」形のヘラ記号がある。色調はにぶい赤褐色である。3区土坑6485から出土した。7段階に属する。

784～787は拵鉢・捏鉢である。784は、体部・口縁部はわずかに内弯気味に開き、端部は外反して丸くおさめる。調整は、底部外面は未調整、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。内面に3条以上一組の拵目をつけ、体部内面は使用により摩耗する。色調は灰白色である。信楽産で、畑中編年の2期中段階に属する。3区土坑7852から出土した。9段階に属する。

785は、体部・口縁部はわずかに内弯気味に開き、端部は外反して丸くおさめる。調整は、体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。内面に拵目はなく、体部内面は使用により摩耗する。色調は橙色である。信楽産で、畑中編年の1期中段階⁹⁾に属する。2区柱穴3079から出土した。7段

階に属する。

786は、平底で体部・口縁部は内弯して立ち上がり、端部をつまみ出して片口を作る。調整は、底部外面は未調整、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。内面に6条一組の播目をつけ、体部内面は使用により摩耗する。色調は灰色である。備前産で、重根編年のⅢBに属する。2区井戸4870から出土した。7段階に属する。

787は、体部・口縁部は外上方に開き、端部はわずかに内側につまみ出す。調整は体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。内面に播目はなく、使用痕も観察できない。色調は黄灰色である。常滑産の可能性もある。2区土坑2905から出土した。7段階に属する。

788～790は、体部・肩部の破片で、外面にヘラ記号がある。788は2条の沈線に重ねて2箇所には竹管文、789は2条の曲線、790は「×」形である。いずれも常滑産である。

788は2区井戸5665から出土した。6～7段階に属する。789は1区土坑683から出土した。室町時代に属する。790は2区地業4900から出土した。8A段階に属する。

791～799は、体部・肩部の破片で、外面に文様のあるタタキを施す。791・792は巴文、793は銭文、794は幾何学文、795・796は入子柘文状、797・798は鳥、799は細かい花卉状である。いずれも常滑産である。

791は1区土坑246から出土した。6段階に属する。792は2区柱穴4127から出土した。6～7段階に属する。793は3区第1層から出土した。室町時代以前に属する。794は2区第2面検出中に出土した。室町時代以前に属する。795は2区第3面検出中に出土した。鎌倉時代以前に属する。796は2区溝5007から出土した。6段階に属する。797は2区土坑4870から出土した。7段階に属する。798は3区土坑8150から出土した。5段階に属する。799は2区井戸4870から出土した。7段階に属する。

908は内面に漆が付着した大型の甕である。漆の貯蔵に使用したと推測する。常滑産で、2区土坑4560から出土した。6段階に属する。

909は外面に布を貼り付けた大型の甕である。肩部に漆を浸み込ませた細長い布を縦方向に貼り付けているが、亀裂などの破損はなく、目的は不明である。常滑産で、3区土坑8204から出土した。6～7段階に属する。

910は補修痕がある大型の甕である。漆を浸み込ませた円形の布を亀裂部分に貼り付ける。常滑産で、3区井戸7333から出土した。7～8段階に属する。

911～915は底部に粘土塊・陶器片が溶着した大型の甕である。これらは焼成段階の焼台に使用され、溶着したまま流通・使用された。911は常滑産で、1区土坑10から出土した。6～7段階に属する。912は常滑産で、3区土坑7037から出土した。6段階に属する。913は常滑産で、3区第2層から出土した。6～7段階の遺物である。914は備前産で、2区土坑4935から出土した。7段階に属する。915は備前産で、2区土坑4935から出土した。7段階に属する。

灰釉陶器・灰釉系陶器（図版145・242 800～814・918・919）800は小型の灰釉陶器蓋である。天井部は平坦で、口縁部は屈曲して短く垂下する。調整は、天井部・口縁部内外面はロクロナ

デである。天井部・口縁部外面に施釉する。色調は、胎土は灰黄色、施釉部分は灰オリーブ色である。3区井戸8400から出土した。2段階に属する。

801は小型の灰釉系陶器皿である。口縁部は浅く開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面は糸切り、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。自然釉はほとんどない。色調は灰白色である。3区第1層から出土した。室町時代以前に属する。

802は灰釉系陶器小皿である。口縁部は屈曲して開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。自然釉はほとんどない。色調は灰白色である。内面全面にうすく朱が付着する。1区土坑235から出土した。6段階に属する。

803は灰釉系陶器の椀である。底部は厚く、口縁部は屈曲して外上方に開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。内面全面に自然釉がかかる。色調は灰色である。2区柱穴3107から出土した。6段階に属する。

804は灰釉系陶器皿である。口縁部は浅く内弯して開き、端部は丸くおさめる。底部に断面半円形の高台を貼り付ける。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。自然釉はほとんどない。色調は灰白色である。3区土坑7246から出土した。6段階に属する。

805は灰釉陶器皿である。口縁部は浅く開き、端部は外反する。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。口縁部内面に釉薬がかかる。色調は灰白色である。内面全面にうすく朱が付着する。3区土坑6699から出土した。5段階の遺構であるが、3段階の遺物である。

806は灰釉陶器皿である。口縁部は浅く開き、端部は外反する。底部に断面台形の高台を貼り付ける。調整は、底部外面・口縁部外面は回転ケズリ、底部・口縁部内面・口縁部端内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。口縁部内面に釉薬がかかる。色調は灰白色である。2区土坑4423から出土した。5～6段階の遺構であるが、3段階の遺物である。

807は灰釉陶器三足盤である。やや丸底の底部から口縁部は屈曲して開き、端部は水平方向に張り出す。底部に獣脚形の足を貼り付ける。調整は、底部外面は回転ケズリ、内面は施釉のため不明、口縁部内外面は回転ナデで、脚部は細かいケズリで成形する。内面全面に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は灰オリーブ色である。2区井戸5984から出土した。2～3段階に属する。

808は灰釉系陶器皿である。器壁が厚く、口縁部は内弯して端部に面を作る。調整は、底部外面はケズリ、口縁部外面は細かいケズリで輪花を成形する。底部・口縁部内面は釉薬のため明瞭ではないが、型により輪花を成形する。残存部分の状況から9弁に復元できる。口縁端部はケズリにより面を作る。内面全面に厚く自然釉薬がかかる。色調は、胎土は灰白色、自然釉部分は白色から灰オリーブ色である。3区柱穴9375から出土した。時期不明の遺構であるが、5～6段階の遺物である。

809は灰釉系陶器椀である。体部・口縁部は内弯して開き、端部は外反する。底部に高い高台を貼り付ける。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデで、高台部はヨコナ

デである。自然釉はほとんどない。色調は灰白色である。3区土坑7826から出土した。6段階に属する。

810は灰釉系陶器碗である。体部は屈曲して開き、口縁部はやや外反して、端部を丸くおさめる。底部に低い高台を貼り付ける。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。高台接地面には靱殻の圧痕がある。口縁部内面に厚く自然釉がかかる。色調は、胎土は灰白色、自然釉部分はオリーブ黄色である。2区土坑4261から出土した。5段階に属する。

811は灰釉系陶器の鉢である。体部は内弯して立ち上がり、口縁部は屈曲して外反する。一端をつまみ出して片口を作る。調整は、底部外面は糸切りののちナデ、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。内面全面と口縁部外面にうすく自然釉がかかる。色調は灰白色である。2区柱穴5610から出土した。6段階に属する。

812は灰釉系陶器の鉢である。体部・口縁部は外上方に直線的に開き、端部はわずかに外反する。一端をつまみ出して片口を作る。底部に低い高台を貼り付ける。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。内面・口縁部端部にわずかに自然釉がかかる。色調は灰白色である。2区第2層から出土した。6段階の遺物である。

813は灰釉系陶器鉢である。体部・口縁部は内弯気味に開き、端部は丸くおさめる。外面から縦方向にヘラ状工具を押し当てて6弁の輪花を成形する。底部に高い高台を貼り付ける。調整は、底部内外面はナデ、体部・口縁部内外面は回転ナデである。内面前面にうすく自然釉がかかる。色調はにぶい黄橙色である。底部内面の広い範囲に朱が付着する。3区土坑9153から出土した。6C～7A段階に属する。

814は灰釉陶器壺である。器壁は薄く、体部は長球形である。底部に厚い高台を貼り付ける。調整は、底部外面体部外面下半は回転ケズリ、体部外面上半・底部内面・体部内面は回転ナデである。体部外面に施釉する。色調は、胎土・内面は灰白色、施釉部分はオリーブ黄色である。2区土坑5138から出土した。3段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。

918・919は線刻がある灰釉陶器壺である。918は肩部外面に沈線や花文を線刻する。2区南壁から出土した。5～6段階の遺物である。

919は肩部外面に突帯を貼り付け、花文を線刻する。1区井戸7から出土した。江戸時代の遺構であるが、5～6段階の遺物である。

二彩陶器・緑彩陶器・緑釉陶器 (図版145・242 815～830・920～932) 815は二彩陶器壺である。口縁部は外反気味に開く。口縁部下半の厚みが異なっているので多口瓶の肩部の口縁と推測する。調整は、口縁部外面は回転ナデ、内面はシボリののちナデである。内外面に緑釉を垂らし掛けし、全面に透明釉を施釉する。色調は、胎土は白色、緑釉部分は濃緑色、透明釉部分は淡黄色である。3区土坑7283から出土した。6～7段階の遺構であるが、1段階あるいはそれ以前の遺物である。今回の調査で出土した二彩陶器はこの1点のみである。

816～820は皿である。816は、平底で口縁部は浅く開き、端部は外反する。削り出し高台であ

る。調整は、底部外面は回転ケズリののちミガキ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデののちミガキである。全面に施釉する。色調は、胎土は土師質で白色、施釉部分は淡黄色である。洛北産である。3区第2層から出土した。2段階の遺物である。

817は、口縁部は内弯気味に開き、端部はわずかに外反する。底部に低い高台を貼り付ける。調整は、底部外面は糸切り、内面は施釉のため不明、口縁部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。全面に厚く施釉する。色調は、胎土は須恵質で灰色、施釉部分は濃緑色である。洛西産である。3区土坑9062から出土した。2～3段階に属する。

818は、口縁部は浅く開き、端部は屈曲する。底部に断面方形の高台を削り出す。調整は、底部外面、口縁部外面は回転ケズリ、底部内面・口縁部内面・口縁部内外面は回転ナデである。全面を刷毛で施釉する。色調は、胎土は土師質で灰白色、施釉部分は黄緑色である。洛北産である。2区井戸5984から出土した。2～3段階に属する。

819は、口縁部は内面に段を形成して直線的に開き、端部はわずかに外反する。底部に断面方形の高台を貼り付ける。調整は、底部外面は回転ケズリ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデののちミガキ、内面の段はケズリ、高台部はヨコナデである。内外面に施釉する。色調は、胎土は須恵質で灰色、施釉部分は淡緑色である。猿投産である。2区第3面検出中に出土した。1～2段階の遺物である。

820は、口縁部は内面に段を形成して直線的に開き、端部はわずかに外反する。形状から三足盤と推測する。調整は、口縁部内外面は回転ナデののちミガキである。内外面に施釉しており艶がある。色調は、胎土は須恵質で灰白色、施釉部分は淡緑色である。猿投産である。2区第2面検出中に出土した。1～2段階の遺物である。

821～825は椀である。821は、平底で体部・口縁部は内弯して開き、端部は鋭く外反する。削り出し高台である。調整は、底部・体部外面は回転ケズリののちミガキ、底部内面・体部内面・口縁部内外面は回転ナデののちミガキである。全面に施釉する。色調は、胎土は土師質で灰白色、施釉部分は黄緑色である。洛北産である。2区第3面検出中に出土した。2段階の遺物である。

822は、体部・口縁部は内弯して開き、端部は外反する。底部に高い高台を貼り付ける。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。全面に施釉するが、全体の半分が被熱のため変色する。色調は、胎土は土師質で浅黄橙色、施釉部分は緑色、変色部分は浅黄橙色である。東濃産である。2区井戸5338から出土した。3段階に属する。

823は、体部・口縁部は内弯して開き、端部はわずかに外反する。底部に高い高台を貼り付ける。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。全面に施釉する。胎土は土師質で浅黄橙色、施釉部分は濃緑色である。東濃産である。3区土坑6115から出土した。7段階の遺構であるが3段階の遺物である。

824は、体部は浅く開き、口縁部は稜を形成して外反する。底部外面に断面方形の高台を貼り付ける。調整は、底部・体部外面は回転ケズリ、底部内面・体部内面・口縁部内外面は回転ナデのの

ちミガキ、高台部はヨコナデである。全面に施釉する。色調は、胎土は須恵質で灰色、施釉部分は緑色である。猿投産である。2区第1層から出土した。2段階の遺物である。

825は、大型で、口縁部は外反して開く。調整は、口縁部内外面は回転ナデのちミガキである。内外面に施釉しており艶がある。色調は、胎土は須恵質で灰色、施釉部分は淡緑色である。猿投産である。3区柱穴8600から出土した。2段階に属する。

826は鉢である。口縁部は直線的に開き、端部は肥厚する。調整は、口縁部内外面は回転ナデのちミガキである。外面にうすく施釉するが、被熱により変色する。色調は、胎土は須恵質で淡黄色、施釉部分はオリーブ黄色である。猿投産か。2区柱穴5833から出土した。5段階の遺構であるが、2～3段階の遺物と推測する。

827は合子身である。口縁部は直立し、立ち上がり部は短く内傾する。調整は、口縁部・立ち上がり部内外面は回転ナデのちミガキである。内外面に施釉する。色調は、胎土は須恵質で黄灰色、施釉部分はオリーブ灰色である。猿投産である。3区土坑9062から出土した。2～3段階に属する。

828は壺である。口縁部は屈曲して外反する。調整は、肩部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。肩部外面・口縁部内外面に施釉する。色調は、胎土は須恵質で灰白色、施釉部分は黄緑色である。猿投産か。2区柱穴3739から出土した。1～2段階に属する。

829・830は脚部の破片である。829は、樽形の体部に貼り付けた板状の脚部で下部は外反して開く。調整は、体部内面は回転ナデ、脚部はケズリである。外面全面に施釉しており、一部は銀化する。色調は、胎土は須恵質で灰白色、施釉部分は淡緑色である。猿投産か。3区土坑8069から出土した。4～5段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。

830は、獣脚形に成形する。調整は、体部内面は施釉のため不明、脚部は細かいケズリである。脚部接地面以外に施釉する。色調は、胎土は須恵質で白色、施釉部分は淡緑色である。猿投産か。2区柱穴3487から出土した。7段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。

920～922は釉薬の濃淡で柄を付ける緑彩陶器碗である。いずれも小片である。色調は、緑彩部分は緑色、それ以外は淡黄色である。920は3区柱穴7709から出土した。6～7段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。921は3区井戸6379から出土した。10段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。922は3区土坑8542から出土した。2段階に属する。

923～928は線刻のある破片である。923は透かし孔のある香炉蓋で、天井部のつまみの周囲に花文を線刻する。猿投産で、2区柱穴5402から出土した。6段階の遺構であるが、2段階の遺物である。

924は碗で、口縁端部内面に花文を線刻する。猿投産で、2区柱穴3613から出土した。5段階の遺構であるが、2段階の遺物である。

925は碗で、底部内面中央の圏線の周囲に花文を線刻する。猿投産で、3区第1面検出中に出土した。2段階の遺物である。

926は皿で、口縁端部内面に蝶文を線刻する。洛西産で、2区土坑5356から出土した。3～4段

階に属する。

927は椀か皿で、底部内面に花文を線刻する。猿投産で、1区井戸517から出土した。5段階の遺構であるが、2段階の遺物である。

928は椀で、底部内面に花文を線刻する。猿投産で、3区土坑6192から出土した。5段階の遺構であるが、2段階の遺物である。

929～932は火舎である。形態や胎土からみて2個体以上があったことは確実である。929は肩部、930・931は透かし部、932は底部に近い体部の破片である。929は2区土坑3904から出土した。5～6段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。930は2区第3層から出土した。1～2段階の遺物である。931は2区溝5991から出土した。3段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。932は2区第2面検出中に出土した。1～2段階の遺物である。

須恵器 (図版146・241 831～837) 831～833は皿である。831は、小型で、口縁部は浅く開く。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。2区土坑4234から出土した。7段階に属する。

832は、口縁部は屈曲して開く。調整は、底部外面はヘラ切りののちナデ、底部内面はナデ、口縁部内外面は、回転ナデである。底部内面は使用痕により摩耗しており、底部内面・口縁部内面に焦げ痕がある。色調は灰白色である。2区井戸5966から出土した。2～3段階に属する。

833は、上げ底気味の平底で口縁部は浅く開き、端部はわずかに外反する。削り出し高台である。調整は、底部外面は回転ケズリ、内面はナデののちミガキ、口縁部内外面は回転ナデののちミガキである。色調は灰色である。緑釉陶器の素地にあたる。2区柱穴3464から出土した。6段階の遺構であるが、2～3段階の遺物である。

834・835は椀である。834は、小型で体部は内弯して開き、口縁部は外反する。底部に高台を貼り付ける。調整は、底部外面はケズリ、内面は自然釉のため不明、口縁部内外面は回転ナデである。底部内面にうすく自然釉がかかる。色調は灰色である。3区土坑8630から出土した。5～6段階に属する。

835は、平底で体部・口縁部は内弯して開き、端部は丸くおさめる。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。色調は灰色である。2区柱穴4131から出土した。5～6段階に属する。

836は短頸壺である。肩部は張り出し、口縁部は短く直立して面を作る。調整は、肩部・口縁部内外面は回転ナデである。肩部外面にうすく自然釉がかかる。色調は灰色である。3区の攪乱から出土した。1～2段階の遺物である。

837は甕である。肩部は張り出し、口縁部は外反して、端部を上下方につまみ出して面を作る。調整は、肩部外面はタタキ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。色調は暗灰色である。2区土坑5040に据え付けられていた銅銭を埋納した甕で、内面には銅銭や緑青が厚く付着する。東播産である。6段階の遺物である。

施釉陶器 (図版146 838～847) 838は播鉢である。口縁端部は上下方に広げて幅広い面を作

る。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。内面に4条一組の播目をつけ、口縁端部に灰釉を施す。色調は、胎土は褐灰色、施釉部分は暗褐色である。瀬戸美濃産である。2区柱穴3623から出土した。6～7段階に属する。

839は香炉である。平底で粘土粒を貼り付け脚とする。体部は強く内弯し、口縁部は外反する。調整は、底部外面は糸切り、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。体部外面・口縁部内外面に灰釉を施す。色調は、胎土は灰黄色、施釉部分はオリーブ黄色である。瀬戸美濃産である。2区柱穴2080から出土した。遺構の時期は不明であるが、7～8段階の遺物である。

840は小型の皿である。口縁部は内弯して浅く開き、端部をつまみ出して片口を作る。調整は、底部外面はヘラ切りで外周をケズリ、底部内面・口縁部内外面はヨコナデである。底部内面におろし目をつける。口縁端部に灰釉を施す。色調は、胎土は灰黄色、施釉部分は灰オリーブ色である。瀬戸美濃産である。3区井戸6570から出土した。9段階に属する。

841はミニチュアといえる非常に小型の椀である。体部・口縁部は内弯して開き、端部は丸くおさめる。削り出し高台である。調整は、底部外面は回転ケズリ、他は施釉のため不明である。底部外面以外に鉄釉を施す。色調は、胎土はにぶい黄橙色、施釉部分はにぶい赤褐色である。瀬戸美濃産である。1区土坑510から出土した。6段階に属する。

842は椀である。体部・口縁部は内弯して開き、端部は丸くおさめる。削り出し高台である。調整は、底部外面は回転ケズリ、他は施釉のため不明である。底部外面以外に鉄釉を施す。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は黒褐色である。瀬戸美濃産である。2区土坑8169から出土した。9段階に属する。

843は小型の壺である。器壁は薄く、平底で体部は球形である。形状から茶入と推測する。調整は、底部外面は回転ケズリ、底部内面・体部内外面は回転ナデである。体部外面と底部・体部内面に鉄釉を施すが、内面は部分的である。色調は、胎土はにぶい黄橙色、施釉部分はにぶい赤褐色である。瀬戸美濃産である。2区土坑3037から出土した。8段階に属する。

844は小型の花瓶である。分厚い平底で、脚部は外反して立ち上がり、体部は下膨れで、肩部に紐状の粘土粒を貼り付ける。調整は、底部外面は糸切り、脚部・体部外面は回転ナデ、内面は不明である。体部外面に灰釉を施す。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は淡黄色である。瀬戸美濃産である。2区第2面検出中に出土した。室町時代の遺物である。

845は浄瓶である。頸部は円筒形で、外面に鏝を貼り付ける。調整は頸部内外面・鏝部は回転ナデである。頸部外面に厚く灰釉を施す。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は浅黄色である。瀬戸美濃産である。3区井戸8480から出土した。9段階に属する。

846は大型の壺の脚部と推測する。脚部は内傾して、端部は内側につまみ出して内弯する面を作る。調整は、脚部内外面は回転ナデである。脚部外面に厚く灰釉を施す。色調は、胎土は灰黄色、施釉部分は灰オリーブ色である。瀬戸美濃産である。2区土坑2320から出土した。7段階に属する。

847は大型の壺である。平底で、体部はやや肩が張る球形で、口縁部は高く外反して開き、両側

に紐状の耳を貼り付ける。調整は、底部外面はナデ、底部内面・体部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。口縁部外面に2条の凹線・5条の波状文を施す。体部・口縁部外面・口縁端部内面に鉄釉を施す。底部外面には離れ砂が付着する。色調は、胎土はにぶい褐色、施釉部分は明オリーブ褐色である。瀬戸美濃産である。3区土坑6387から出土した。幕末の遺構であるが、室町時代の遺物である。

施釉陶器（輸入）（図版146・243 848～854、940～944） 848・849は椀である。848は、口縁部が広く開く朝顔形で、端部は丸くおさめる。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。内外面に厚く鉄釉を施しており、濃淡がある。色調は、胎土は灰白色、施釉部分はにぶい褐色と黒色が混じる。3区井戸7896から出土した。9段階に属する。

849は、口縁部が小さく屈曲する天目形で、端部は丸くおさめる。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。内外面に厚く鉄釉を施しており、禾目状になる。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は褐色である。1区井戸71から出土した。6～7段階に属する。

850は小型の壺である。器壁は薄く、体部は球形で肩部外面に稜を作り、口縁部は屈曲する。形状から茶入と推測する。調整は、体部内外面は回転ナデである。体部外面に鉄釉を施し、内面の一部にも釉が垂れる。色調は、胎土は灰褐色、施釉部分は黒色である。3区土坑6157から出土した。7段階に属する。

851は盤である。底部は上げ底気味で、口縁部は内弯気味に開く。調整は、底部外面は未調整、口縁部外面は回転ナデ、底部・口縁部内面は施釉のため不明である。底部内面に鉄釉で漢字を書き、全面に褐釉を施す。漢字は「願得」と判読でき、漢詩の一部と推測する。色調は、胎土は灰黄褐色、施釉部分は灰黄色、文字は灰黄褐色である。2区第3面検出中に出土した。6段階の遺物である。

852・853は壺である。852は、肩部は内傾し、口縁部は短く端部は玉縁となる。調整は、肩部・口縁部内外面は回転ナデである。肩部外面・口縁部内外面に鉄釉を施す。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は黒色である。3区土坑8940から出土した。7段階に属する。

853は、器壁が分厚く、内傾する肩部に環形の耳を貼り付ける。調整は、肩部内外面は回転ナデで、耳は手づくねで成形する。外面にうすく灰釉を施す。色調は、胎土はにぶい橙色、施釉部分は灰白色である。中国南部産の製品である。¹⁰⁾ 1区井戸201から出土した。8段階に属する。

854は鉢である。体部は内弯して、口縁部は緩やかに外反して開き端部に面を作る。底部に高い高台を貼り付ける。調整は、体部・口縁部内外面は回転ナデ、高台部はヨコナデである。体部外面に1条の沈線と円形浮文、端面に2条の沈線と刻目を施す。体部上半・口縁部内外面にうすく灰釉を施す。色調は、胎土はにぶい橙色、施釉部分は灰白色である。中国南部産の製品である。2区土坑2755から出土した。7段階に属する。

940は盤である。口縁部は外反して開く。調整は施釉のため不明である。内外面に鉄釉で唐草文を描き、緑釉を施す。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は緑色である。2区柱穴3346から出土した。7段階に属する。

941・942は壺である。外面に弧文を線刻したのち緑釉を施す。色調は、胎土は暗灰色、施釉部分は緑色である。941は3区井戸8496から出土した。5段階に属する。942は3区井戸8558から出土した。5段階に属する。

943は壺である。器壁は薄く、外面に花文を陽刻する。内外面に鉄釉を施す。色調は、胎土はにぶい黄橙色、施釉部分は黄褐色である。2区土坑4837から出土した。7段階に属する。

944は壺である。外面に耳を貼り付け、花文と思われる文様を線刻する。外面に鉄釉を施す。色調は、胎土は暗灰色、施釉部分は黄褐色である。3区土坑9350から出土した。5段階に属する。

焼締陶器（輸入）（図版146 855） 855は鉢である。体部は直立気味に外形する。調整は、体部内外面は回転ナデである。外面に浮文・突帯・植物文様などを貼り付ける。施釉はない。色調はにぶい黄橙色である。中国南部産の製品である。2区第2層から出土した。室町時代の遺物である。

青白磁（輸入）（図版147 856～862） 856は蓋である。天井部は平坦で、口縁部は長く垂下する。調整は、天井部外面は型押し、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。天井部外面に渦巻文を陽刻する。天井部外面・口縁部外面に施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色である。3区土坑7447から出土した。5～6段階に属する。

857は合子身である。体部外面は花卉形で、立ち上がり部は小さく内傾する。調整は、型成形で、底部外面はナデ、底部内面は施釉のため不明、体部・立ち上がり部内外面は回転ナデである。底部内面・体部外面に施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明青灰色である。2区土坑2200から出土した。6段階に属する。

858は小型の皿である。口縁部は浅く開き、端部を切り落として花卉を成形する。低い削り出し高台である。調整は、底部外面は回転ケズリ、口縁部外面は施釉のため不明、内面は型押しである。底部内面に花卉、口縁部内面に花卉の筋を陽刻する。底部外面以外に厚く施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は明青灰色である。2区土坑2398から出土した。7段階に属する。

859は皿である。口縁部は浅く開く。調整は、口縁部外面は回転ナデ、内面は型押しである。口縁部内面に雷文と細かい花卉を陽刻する。口縁部端部以外に施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は明青灰色である。2区柱穴2954から出土した。7段階に属する。

860～862は壺である。860は、体部は円筒形で肩部は内傾し、口縁部は短く立ち上がる。調整は、体部外面は型押し、体部内面・口縁部は施釉のため不明である。体部外面に幅広の唐草文、肩部に珠文を陽刻する。内外面に厚く施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は明青灰色である。2区第1面検出中に出土した。5～6段階の遺物である。

861は、肩部はゆるやかに内湾し、外面に耳を付ける。調整は、肩部外面は型押し、内面は施釉のため不明である。肩部外面に花文を陽刻する。内外面に厚く施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は明青灰色である。2区第2面検出中に出土した。5～6段階の遺物である。

862は、体部は直立気味に開く。梅瓶形の壺と推測する。調整は、体部内外面は回転ナデで、内面にロクロ目が明瞭に残る。体部外面は雲気文を陰刻する。体部外面に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色である。2区土坑2815から出土した。8段階の遺構であるが、5

～6段階の遺物である。

白磁（輸入）（図版147・243 863～872・933～938） 863は合子蓋である。体部外面は花卉形で、口縁部は垂下して端部は面を作る。調整は、型成形で、外面は施釉のため不明、内面は回転ナデである。天井部内外面・口縁部外面に施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は白色である。3区第2層から出土した。平安時代の遺物である。

864は合子身である。体部外面は平面形を2段の八角形に成形し、立ち上がり部は平面形は円形で短く直立する。調整は、外面は型成形で、体部内面・立ち上がり部内外面は回転ナデである。底部外面以外に施釉する。色調は胎土・施釉部分とも白色である。2区柱穴3249から出土した。5～6段階に属する。

865は小型の皿である。口縁部は浅く開く。低い削り出し高台である。調整は、底部外面は回転ケズリ、口縁部外面は施釉のため不明、内面は型押しである。内面に大きく花文を陽刻する。底部外面以外に施釉する。色調は胎土・施釉部分とも白色である。2区柱穴2218から出土した。7段階の遺構であるが、平安時代の遺物の可能性がある。

866は托である。体部は扁平な半球形で、口縁部は突帯から直線的に開く。調整は、施釉のため不明である。内外面に厚く施釉する。色調は胎土・施釉部分とも白色である。1区北壁から出土した。1～2段階の遺物である。

867～869は椀である。867は、体部は内弯気味で、外面から縦方向にヘラ状工具を押し当てて花卉を成形する。削り出し高台である。調整は、底部内面は型押し、底部外面は回転ケズリ、他は施釉のため不明である。底部内面に双魚文を陽刻する。底部外面以外に施釉する。色調は胎土・施釉部分とも白色である。3区土坑6653から出土した。7～8段階の遺構であるが、平安時代の遺物である。

868は、体部は内弯し、口縁部はわずかに外反する。高い削り出し高台である。調整は、底部・体部外面は回転ケズリ、内面・口縁部外面は施釉のため不明である。底部外面以外に施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は灰白色である。3区井戸6944から出土した。9～10段階に属する。

869は、体部は内弯し、口縁部は外反して、小さな切込みにより花卉を成形する。高い削り出し高台である。調整は、底部・体部外面は回転ケズリ、内面・口縁部外面は施釉のため不明である。底部外面以外に施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は灰白色である。2区土坑4130から出土した。6～7段階に属する。

870は蓋である。体部は半球形で、端部外側に幅の広い鏝を成形する。調整は、体部外面は回転ケズリ、体部内面・鏝部は回転ナデである。体部・鏝部外面に施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は灰白色である。2区柱穴2440から出土した。6C段階に属する。

871・872は壺である。871は、口縁部は外反して開き、端部に工具を押し当てて5弁の花弁を成形する。調整は、口縁部内外面は回転ナデで、内面にロクロ目が明瞭に残る。内外面に施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は明緑灰色である。2区土坑3716から出土した。6段階に属する。

872は、底部はとても分厚く、体部は倒卵形である。断面方形の高台を削り出す。調整は、底部・

体部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデでロクロ目が明瞭に残る。体部外面を施釉する。色調は、胎土は白色、施釉部分は灰白色である。底部外面に竹のような絵を墨で描く。2区溝5305から出土した。6段階に属する。

933～939は鉄釉で文様を描く。933～937は椀、938は壺である。933は2区第2層から出土した。室町時代以前に属する。934は2区土坑4142から出土した。6～7段階に属する。935は3区井戸8413から出土した。5段階に属する。936・937は3区井戸9301から出土した。4～5段階に属する。938は3区第1層から出土した。室町時代以前に属する。

青磁（輸入）（図版147・243 873～885・939） 873は合子身である。体部は扁平で、口縁部・立ち上がり部は短く直立する。調整は、立ち上がり部内外面は回転ナデ、それ以外は施釉のため不明である。立ち上がり部以外を施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色である。2区第1面検出中に出土した。6～7段階の遺物である。

874～876は皿である。底部は上げ底気味で、口縁部は外反する。調整は、底部外面は回転ケズリ、それ以外は施釉のため不明である。底部内面に文様を陰刻する。底部外面以外に施釉する。874・875・876の順に小型化し、文様が簡略化される。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明オリーブ灰色から灰オリーブ色である。874は1区土坑206から出土した。6段階に属する。875は2区柱穴4524から出土した。6段階に属する。876は3区土坑7312から出土した。7～8段階に属する。

877は鉢である。口縁部は屈曲して外反し、端部は丸くおさめる。断面三角形の高台を削り出す。調整は、底部外面は回転ケズリ、それ以外は施釉のため不明である。高台接地面以外に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は灰オリーブ色である。2区溝5846から出土した。7段階に属する。

878～881は椀である。878～880は、体部は内弯して、口縁部はわずかに外反する。880は断面台形の高台を削り出す。調整は施釉のため不明である。878・879は外面に蓮弁を陽刻、880は外面に蓮弁を線刻する。内外面に施釉する。878・879・880の順に小型化し、文様が簡略化される。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明オリーブ灰色から明緑灰色である。878は2区第1面検出中に出土した。6段階に属する。879は1区土坑480から出土した。7段階に属する。880は2区土坑4278から出土した。7段階に属する。

881は、底部は分厚く、体部は内弯して、口縁部は外反する。高い高台を削り出す。調整は、底部外面は回転ケズリ、それ以外は施釉のため不明である。底部外面以外に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明オリーブ灰色である。3区土坑7499から出土した。10段階に属する。

882は香炉である。口縁部は直立し、端部は肥厚して面を作る。口縁部外面に低い突帯が2条めぐる。調整は、口縁部内外面は回転ナデである。内外面に施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色である。1区第1面遺構検出中に出土した。室町時代の遺物である。

883は壺である。口縁部は外面に稜を成形してすぼまり、端部に面を作る。調整は施釉のため不明である。内外面に施釉するが、表面は被熱する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色で

ある。2区土坑3065から出土した。7段階に属する。

884は大型の花瓶である。口縁部は屈曲して開き、端部に工具を押し当てて花卉を成形する。調整は施釉のため不明である。内外面に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明緑灰色である。2区第1層から出土した。室町時代の遺物である。

885は大型の壺である。底部に接する部分で、体部は分厚く、屈曲して開く。外面に片切彫で蓮弁を陰刻する。内外面に厚く施釉する。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明オリーブ灰色である。3区土坑7457から出土した。6～7段階に属する。

939は水注の口部である。先すぼまりの円筒形で端部は斜めに切り落とす。上部に細工した粘土を貼り付けて龍頭を表現する。外面に厚く施釉し、鉄釉で眼を描く。色調は、胎土は灰白色、施釉部分は明オリーブ灰色である。2区第1面検出中に出土した。室町時代以前の遺物である。

墨書・朱書土器 (図15 886～900) 886は土師器皿である。底部内面に平仮名とも見える墨書があるが判読できない。3区井戸6543から出土した。5B～6A段階に属する。

887は土師器皿である。底部内外面に墨書があるが断片的で判読できない。2区土坑2063から出土した。7段階に属する。

888は土師器皿である。底部外面に墨書があり「佛」の一部の可能性はある。3区土坑9158から出土した。4段階に属する。

889は白色土器鉢である。底部内面に漢字とも見える墨書があるが判読できない。口縁部外面全面にうすく墨が付着する。3区溝6249から出土した。19世紀の遺構であるが、5～6段階の遺物である。

890は白色土器盤である。口縁部内面に「と」の墨書がある。2区溝5845から出土した。6～7段階の遺構であるが、2～3段階の遺物である。

891は須恵器杯身である。底部外面に墨書があるが判読できない。2区溝5845から出土した。2～3段階に属する。

892は灰釉陶器椀である。底部外面に「大」の墨書がある。2区井戸5829から出土した。4～5段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。

893は灰釉陶器椀である。底部外面に「東」の墨書がある。2区井戸5699から出土した。2～3段階に属する。

894は灰釉系陶器椀である。底部外面に墨書があるが判読できない。3区柱穴9339から出土した。3～4段階に属する。

895は灰釉陶器椀である。底部外面に「若」の墨書がある。3区井戸6950から出土した。2段階に属する。

896は灰釉陶器椀である。底部外面に「北」の墨書がある。3区井戸6108から出土した。7段階の遺構であるが、2～3段階の遺物である。

897は施釉陶器椀である。底部外面に「大黒」と読める墨書がある。3区柱穴7442から出土した。6段階に属する。中国製の可能性がある。

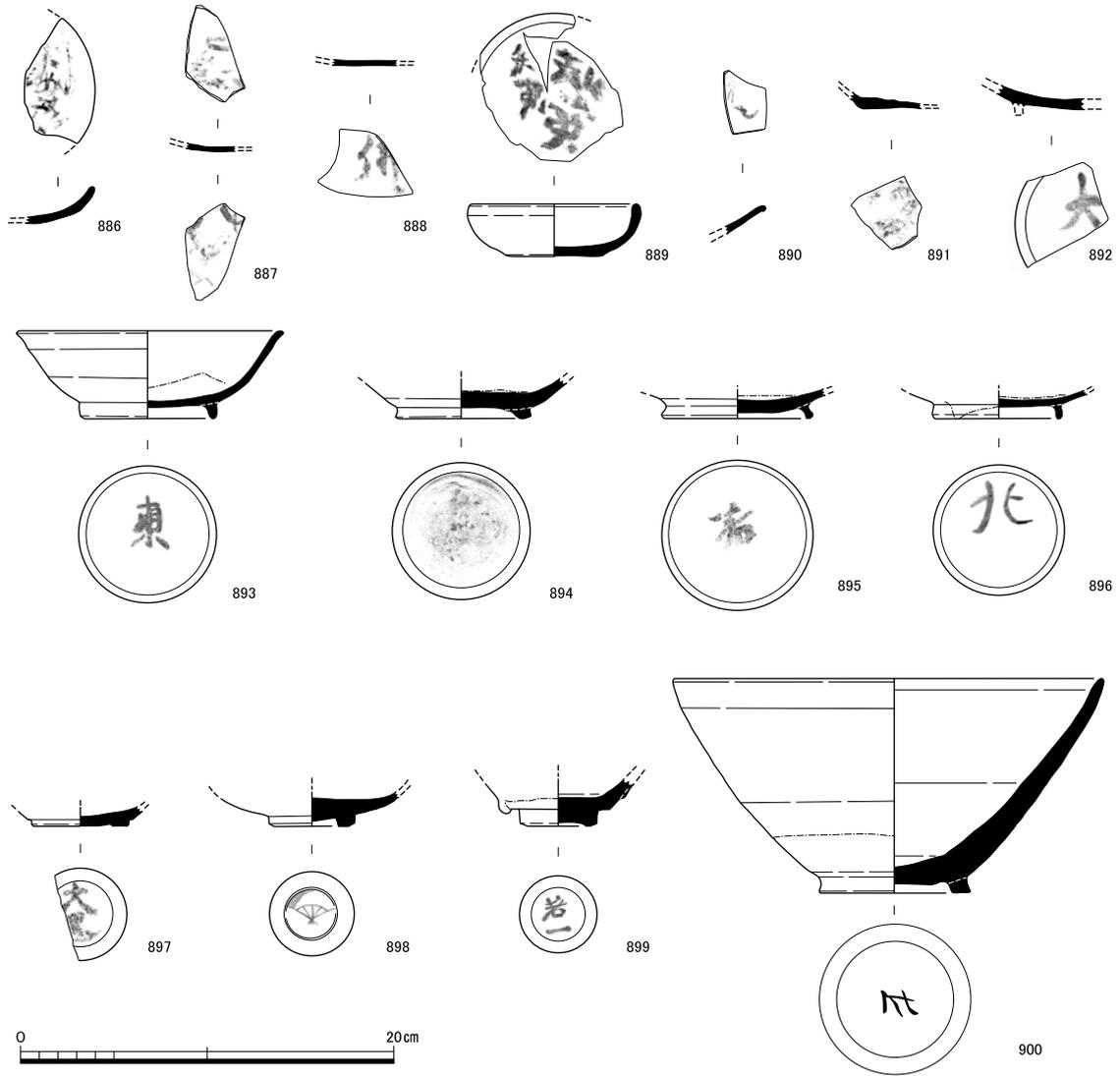


図15 墨書・朱書土器・陶磁器実測図（1：4）

898は白磁皿である。底部外面に高台の輪郭を見たとて扇形を墨書する。2区土坑2324から出土した。7段階に属する。2区土坑5699から出土した白磁皿と同じ型式である。

899は中国製施釉陶器碗である。底部外面に「若一」の朱書がある。2区柱穴2914から出土した。7段階に属する。

900は大型の施釉陶器鉢である。灰釉を施釉する。底部外面に記号の朱書がある。2区土坑3079から出土した。7段階に属する。

3. 瓦

瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鳥衾・鬼瓦・雁振瓦・輪違瓦・菊丸瓦・道具瓦などがある。以下では、平安時代前期から中期（1～3段階）、平安時代後期（4～5段階）、鎌倉時代から室町時代（6～10段階）、江戸時代（11～14段階）に大別して各時期の瓦を紹介する。なお、新しい時代の遺構埋土・包含層から出土した瓦が多いが、瓦当文様や製作技法の特徴に基づき所属時期を確定している。

（1）平安時代前期から中期

軒丸瓦（図148・244 瓦1～瓦9） 9種を確認した。瓦1は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。間弁は左右に開き、蓮弁端に接する。外区は珠文がめぐる。外縁は高い。調整は、瓦当部側面はヨコ方向のナデ、裏面はナデ・ケズリである。色調は灰色である。西寺S J 101型式で、今回の調査で出土した唯一の平安時代前期に属する軒丸瓦である。河内牧野瓦窯産。3区井戸8348から出土した。3段階の遺構である。

瓦2は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。子葉は大きく、間弁はない。外区は珠文がめぐる。調整は、瓦当部側面は縦方向のナデである。色調は灰色である。平安宮朝堂院より同文の瓦が出土している。3区土坑9061から出土した。3段階の遺構である。

瓦3は複弁4葉蓮華文軒丸瓦である。子葉は大きく、間弁は撥形である。外区は珠文がめぐる。調整は、瓦当部側面はナデである。色調は暗灰色である。3区土坑8088から出土した。3段階の遺構である。

瓦4は文様は不明瞭であるが、複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は大きく1+6で、蕊帯がめぐる。調整は、瓦当部裏面はオサエである。1区柱穴687から出土した。6段階の遺構である。

瓦5は単弁10弁蓮華文軒丸瓦である。子葉は大きく輪郭線を配し、蓮弁の間は弧線につながる。外区は珠文が粗くめぐる。調整は、瓦当部側面は横方向のケズリである。色調は灰色である。仁和寺円堂院より同文の瓦が出土している。3区流路9400から出土した。

瓦6は複弁4葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は1+4。子葉は大きく、弁端に雁行形を配する。間弁は撥形に大きく開く。外区は珠文がめぐる。調整は、瓦当部側面は横方向のケズリ、裏面には布目が残り下端部はケズリである。平瓦部凸面は縦方向のナデである。色調は灰白色である。池田瓦窯産。3区土坑6717から出土した。3段階の遺構である。

瓦7は単弁6弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は中央に1個のみで、圏線は太く高い。蓮弁は扁平な楕円形で子葉はない。成形台による一本造り技法である。調整は、瓦当部側面はナデ、裏面は布目である。色調は灰色である。池田瓦窯産。3区機械掘削中に出土した。

瓦8は瓦当が楕円形の単弁9弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は不明瞭であるが同範瓦から1+4。子葉はなく、弁端は界線と接する。間弁は三角形でまばらに配する。外区は珠文がめぐるが不揃いである。調整は、瓦当部側面はケズリ、裏面は布目である。オウセンドウ廃寺より同文の瓦が出土

している。3区土坑9061から出土した。3段階の遺構である。

瓦9は瓦当面に木目が浮き出し文様は不明瞭であるが、単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は1+6。子葉は細長い。外区は唐草文がめぐる。調整は、瓦当部側面はナデ、裏面はナデである。色調は暗灰色である。讃岐産である。2区土坑5371と土坑5380から出土した破片が接合した。3～4段階の遺構である。平安時代後期に属するか。

軒平瓦（図149・244 瓦10～瓦20）11種を確認した。瓦10は唐草文軒平瓦である。中心飾りは不明で、唐草は3転する。主葉は大きく反転し、支葉は巻き込む。外区は珠文がめぐる。曲線顎である。調整は、顎部凸面は横方向のケズリ、裏面は縦方向のケズリ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目である。色調は灰色である。3区井戸9301から出土した。4～5段階の遺構である。

瓦11は唐草文軒平瓦である。主葉は大きく反転して巻き込む。外区に珠文がめぐる。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目である。色調は灰色からにぶい橙色である。芝本瓦窯産である。3区井戸8400から出土した。2段階の遺構である。

瓦12は唐草文軒平瓦である。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込み先端は丸くなる。外区は珠文がめぐる。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、裏面は横方向のナデ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目である。色調は灰色である。東寺TJ202型式。3区第2層から出土した。

瓦13は唐草文軒平瓦である。中心に「大伴」銘を配する。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込み先端は丸くなる。外区は珠文がめぐる。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は縦方向のケズリ、裏面はケズリののちナデ、瓦当部凹面は横方向のケズリののちナデ、平瓦部凹面は布目ののちナデである。色調は灰白色である。2区溝1061から出土した。3～4段階の遺構である。

瓦14は唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形で「修」銘の逆字を配する。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、裏面は縦方向のナデである。色調はにぶい黄橙色である。平安京左京北辺四坊より同文の瓦が出土している。3区土坑9062から出土した。2～3段階の遺構である。

瓦15は文様の大部分が欠損するが、唐草文軒平瓦である。中心に「修」銘を配する。外区に珠文がめぐる。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のナデ、裏面はナデである。色調はにぶい橙色から灰白色である。池田瓦窯産である。3区土坑9062から出土した。2～3段階の遺構である。

瓦16は唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形で、両側に唐草が展開する。外区に珠文がめぐる。調整は、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目である。被熱のため色調は灰白色である。池田瓦窯産である。3区土坑6776から出土した。4段階の遺構である。

瓦17は唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形で、唐草は3転する。主葉は緩やかに反転し、支葉は巻き込む。外区に珠文がめぐる。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、

裏面はオサエののち縦方向のナデ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目である。色調は、胎土はにぶい橙色、表面は灰色である。池田瓦窯産である。3区土坑6536から出土した。4段階の遺構である。

瓦18は唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形で、唐草は3転する。主葉は緩やかに反転し、支葉は先端が分かれるものがある。外区に珠文がめぐり。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、側面はナデである。色調は灰色である。栗栖野瓦窯産である。3区柱穴8731から出土した。2～3段階の遺構である。

瓦19は唐草文軒平瓦である。主葉は複線で大きく反転し、支葉は巻き込む。外区に珠文がめぐり。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面はナデ、裏面は縦方向のナデ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目である。色調は、胎土はにぶい橙色、表面は暗灰色である。大日廃寺より同文の瓦が出土している。3区井戸9207から出土した。2～3段階の遺構である。

瓦20は唐草文軒平瓦である。主葉は複線で大きく反転し、支葉は巻き込む。外区に珠文がめぐり。段顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、裏面・平瓦部凸面は縄タタキ、瓦当部・平瓦部凹面は布目である。色調は灰色である。池田瓦窯産である。3区井戸9301から出土した。4～5段階の遺構である。

ヘラ記号・朱彩（図版160 瓦114・瓦120） 瓦114は丸瓦の破片である。調整は凸面は縦方向のナデ、凹面は布目である。凸面に「木工」の刻印がある。色調は暗灰色である。3区土坑9062から出土した。2～3段階の遺構である。

瓦120は平瓦の破片である。調整は、凸面・長端面は縦方向のナデ、凹面は横方向のナデである。凸面に部分的に厚く朱が付着する。色調は、瓦は灰色、朱彩色部分はにぶい赤褐色である。2区第1面遺構検出中に出土した。

（2）平安時代後期

軒丸瓦（図版150・151・245 瓦21～瓦42） 22種を確認した。瓦21は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子の配置は不明。子葉は棒状、間弁は線状である。瓦当裏面に溝をつくり丸瓦を挿入して接合する。調整は、瓦当部裏面はナデ、瓦当部凸面は縦方向のナデである。色調は灰色である。山城産である。3区第1層から出土した。

瓦22は複弁6葉蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は互いに接し、蓮弁・子葉は凸線である。外区に珠文がめぐり。瓦当裏面に溝をつくり丸瓦を挿入して接合する。調整は、瓦当部裏面はナデである。色調は灰色である。山城産である。3区土坑8545から出土した。6段階の遺構である。

瓦23は単弁10弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は不明である。子葉は細長く、間弁は撥形で連続する。外区に珠文がめぐり。調整は、瓦当部側面は横方向のケズリののちナデ、裏面下半部はケズリ、上半部はオサエである。色調は灰色である。山城産である。3区機械掘削中に出土した。

瓦24は単弁8弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は不明で、子葉は平坦である。瓦当裏面に溝をつくり丸瓦を挿入して接合する。調整は、瓦当部側面・裏面はナデ、瓦当部凸面は縦方向のナデである。

色調は、胎土はにぶい橙色、表面はオリブ黒色である。山城産である。2区土坑4814から出土した。6～7段階の遺構である。同範瓦が他に1点ある。

瓦25は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。凸形中房で、蓮子は1+6で、蕊帯がめぐる。子葉は盛り上がる。外縁は高い。調整は、瓦当部側面は横方向のナデ、裏面はナデ、丸瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面は布目ののちナデである。色調は灰色である。播磨神出瓦窯産である。2区井戸5523から出土した。5～6段階の遺構である。同範瓦が全部で6点ある。

瓦26は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。中房は大きく、蓮子は1+8。子葉は幅広い。調整は、瓦当部側面は横方向のナデ、裏面はオサエである。色調は灰色で、瓦当部裏面に自然釉がかかる。播磨三本松瓦窯産である。3区井戸9308から出土した。5～6段階の遺構である。

瓦27は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。中房は不明。子葉は少し盛り上がる。外縁は高い。調整は、瓦当部側面は横方向のナデ、裏面はナデである。色調は灰色である。播磨神出窯・三本松窯産である。2区第2面遺構検出中に出土した。

瓦28は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。中房は大きく、蓮子は不揃いである。子葉は互いに接する。調整は、瓦当部裏面はナデである。色調は灰色である。播磨産である。2区土坑2117から出土した。7段階の遺構である。

瓦29は単弁6葉蓮華文軒丸瓦である。中房は大きく、蓮子は不明である。子葉は小さく棒状である。調整は、瓦当部側面は横方向のケズリ、裏面はケズリである。色調は灰色である。播磨産である。3区第2層から出土した。

瓦30は単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁はたがいに接し、子葉は少し盛り上がる。間弁は撥形である。外区に珠文がめぐる。瓦当裏面に溝をつくり丸瓦を挿入して接合する。調整は、瓦当部裏面はオサエ、瓦当部・丸瓦部凸面は縦方向の粗いナデ、凹面は布目である。色調は灰色で、瓦当面に自然釉がかかる。播磨産である。3区井戸6543から出土した。5～6段階の遺構である。

瓦31は重圏文軒丸瓦である。圏線は2重で、蓮子は1+8。外縁は高い。調整は、瓦当部側面はナデ、裏面はナデである。色調は灰白色である。播磨産である。神出遺跡より同文の瓦が出土している。表採品のため出土遺構は不明である。

瓦32は巴文軒丸瓦である。左巻き3巴文で、尾部は長く周縁に接する。調整は、瓦当部側面はナデ、裏面は縄タタキである。色調は灰色である。讃岐産である。鳥羽殿金剛心院SM3B型式と同文である。1区土坑460から出土した。8～9段階の遺構である。

瓦33は巴文軒丸瓦である。右巻き2巴文で、尾部は互いに接して界線となる。外区に大きい珠文がめぐる。範傷が多い。瓦当部裏面に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。調整は、瓦当部側面はナデ、裏面はナデである。色調は黄灰色である。山城産である。3区柱穴8478から出土した。5段階の遺構である。

瓦34は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で、尾部は互いに接して界線となる。外区に珠文がめぐる。調整は、瓦当部裏面下半部はナデ、上半部はオサエ、瓦当部凸面は横方向のナデ、丸瓦部凸面は縦方向のナデである。色調は灰色である。播磨産である。2区第1面遺構検出中に出土した。

瓦35は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で、尾部は互いに接して界線となる。外区に密に珠文がめぐる。調整は、瓦当部側面はナデ、裏面はオサエである。色調は灰色である。山城産である。3区土坑7312から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦36は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で、尾部は互いに接して界線となる。外区に小さい珠文がめぐる。調整は、瓦当部側面はナデ、裏面はナデ、瓦当部凸面・丸瓦部凸面は縦方向のナデである。色調は灰色である。山城産である。2区井戸2319から出土した。6～7段階の遺構である。

瓦37は巴文軒丸瓦である。右巻きの3巴文で、尾部は長い。外区に珠文がめぐる。調整は、瓦当部裏面はナデ、瓦当部凸面・丸瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面はナデである。色調は灰色である。山城産である。3区井戸8558から出土した。5段階の遺構である。

瓦38は巴文軒丸瓦である。左巻きの3巴文で、尾部は長く周縁に接する。調整は、瓦当部裏面・瓦当部凸面は横方向のナデである。色調は灰色である。2区土坑3040から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦39は巴文軒丸瓦である。右巻きの3巴文で、尾部は短い。中心に文様割付の支点がある。調整は、瓦当部側面・裏面下半部は横方向のナデ、裏面上半部はナデである。色調は灰色である。2区土坑3040から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦40は巴文軒丸瓦である。右巻きの3巴文で、尾部は短い。調整は、瓦当部側面・裏面は横方向のナデ、瓦当部凸面は縦方向のち横方向のナデ、丸瓦部凸面は縦方向のナデである。色調は灰色である。播磨産である。1区第3層から出土した。

瓦41は巴文軒丸瓦である。右巻きの3巴文で、尾部は長い。瓦当部裏面に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。調整は、瓦当部側面はナデ・オサエ、裏面はオサエ、瓦当部凸面は横方向のナデである。色調は灰白色である。山城産である。2区土坑4814から出土した。6～7段階の遺構である。

瓦42は巴文軒丸瓦である。左巻きの3巴文で、尾部は長い。瓦当中心部に大きな範傷がある。調整は、瓦当部側面は横方向のナデ、裏面はオサエ、瓦当部凸面はオサエ、丸瓦部凸面は横方向のナデである。色調は灰色である。山城産である。2区第1面遺構検出中に出土した。

丸瓦 (図151 瓦43) 先端部を欠損する丸瓦である。調整は、凸面は縦方向のナデ、凹面は布目で糸切り痕が残る。長端面は縦方向のナデである。玉縁部凸面は横方向のナデ、凹面はケズリ、小口面はケズリで凸面側を面取りする。凸面のほぼ全体に直線を組み合わせた線刻がある。色調は灰色である。2区井戸5829から出土した。5段階の遺構である。

軒平瓦 (図152～154・246 瓦44～瓦71) 28種を確認した。瓦44は唐草文軒平瓦である。唐草は中心に向けて展開し、中心には紡錘形の小葉を上下に配する。主葉は連続して大きく反転し、支葉は強く巻き込む。両側に房が付く。曲線顎。瓦当部の成形は半折り曲げ技法である。調整は、瓦当部凸面・凹面は横方向のケズリ、側面はケズリ、平瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面は布目である。山城栗栖野窯産である。3区井戸9301から出土した。4～5段階の遺構である。同文瓦が他に2点ある。

瓦45は唐草文軒平瓦である。唐草は中心に向けて展開する。主葉は緩やかに反転して、支葉は巻き込む。外区に潰れた珠文がめぐる。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のナデ、側面はケズリ、瓦当部凹面端部は幅広い横方向のケズリ、平瓦部凸面はオサエののちナデ、凹面は布目である。色調は暗灰色である。山城栗栖野窯産である。3区井戸8460から出土した。5～6段階の遺構である。同文瓦が他に1点ある。

瓦46は唐草文軒平瓦である。唐草文は中心から両側に展開するが均整ではない。主葉は緩やかに反転し、支葉は巻き込む。主葉・支葉は細い。瓦当部の成形は半折り曲げ技法である。調整は、瓦当部凸面・凹面は横方向のケズリ、側面はケズリ、平瓦部凸面はオサエののちナデ、凹面は布目である。平瓦部凸面に「十」形のヘラ記号がある。色調は灰色である。山城産である。3区土坑8297から出土した。5段階の遺構である。

瓦47は唐草文軒平瓦である。文様は不明瞭であるが、中心に大きな半載花文を配し、唐草が外に向けて反転する。瓦当部の成形は折り曲げ技法である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、裏面は横方向のナデ、側面はケズリ、平瓦部凸面は糸切りののちオサエ、凹面は布目である。色調は灰白色である。山城産である。2区第3面検出中に出土した。

瓦48は唐草文軒平瓦である。主葉は緩やかに反転し、支葉は巻き込む。外区に珠文がめぐる。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、側面は縦方向のケズリ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は布目である。色調は灰色である。讃岐産である。東寺より同文の瓦が出土している。2区機械掘削中に出土した。

瓦49は剣巴文軒平瓦である。巴文の間に剣頭文が2つ並ぶ。巴文は頭部が中央で互いに接合し、尾部は周囲に接する。段顎である。瓦当部の成形は半折り曲げ技法である。調整は、瓦当部凸面は横方向のナデ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凹面は縦方向のナデである。色調は暗灰色である。山城産である。2区第3面遺構検出中に出土した。

瓦50は剣頭文軒平瓦である。剣頭文を垂直に配する。段顎である。瓦当部の成形は折り曲げ技法である。調整は、瓦当部凸面は横方向のナデ、側面はケズリ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凸面はオサエののち縦方向のナデ、凹面は布目ののちナデである。色調は暗灰色である。山城産である。2区土坑2950から出土した。7段階の遺構である。

瓦51は剣頭文軒平瓦である。剣頭文はやや緩い。瓦当部の成形は折り曲げ技法である。調整は、瓦当部凸面は横方向のナデ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目ののちナデである。色調は暗灰色である。山城産である。2区土坑2960から出土した。7段階の遺構である。

瓦52は剣頭文軒平瓦である。剣頭文7つを配するが、端部は割付が乱れる。段顎である。瓦当部の成形は半折り曲げ技法である。調整は、瓦当部凸面はオサエ、側面はケズリ、瓦当部凹面・平瓦部凹面は糸切りののち縦方向のナデ、凸面はナデである。平瓦部凸面にヘラ記号がある。色調は暗灰色である。山城産である。2区第2層から出土した。同範瓦が他に1点ある。

瓦53は唐草文軒平瓦である。主葉は緩やかに反転し、支葉は離れる。外区凹面側に珠文、凸面側に鋸歯文を配する。段顎である。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のケズリ、側面はケズリ、平

瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面は布目である。色調は灰色である。産地不明である。2区柱穴4580から出土した。7～8段階の遺構である。同文瓦が他に2点ある。

瓦54は唐草文軒平瓦である。唐草は中心に向けて3転する。主葉は緩やかに反転し、支葉は強く巻き込む。界線は二重である。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、側面は縦方向のケズリ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目で糸切り痕が残る。色調は灰色である。和泉井上神社より同文の瓦が出土している。2区井戸4342から出土した。6段階の遺構である。同範瓦が他に1点ある。

瓦55は唐草文軒平瓦である。主葉は大きく反転し、支葉は巻き込む。直線顎である。調整は、瓦当部凸面・凹面は横方向のケズリ、側面は縦方向のケズリ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は糸切り痕である。色調は灰白色である。2区土坑2227から出土した。8～9段階の遺構である。

瓦56は半載花文軒平瓦である。文様の詳細は不明。曲線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、側面はナデ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は布目である。色調は灰色である。讃岐産である。2区土坑2606から出土した。6～7段階の遺構である。

瓦57は半載花文軒平瓦である。文様の詳細は不明であるが瓦56とは異なる。曲線顎である。調整は瓦56と同じである。色調は灰色である。讃岐産である。2区第2層から出土した。

瓦58は重弧文軒平瓦である。弧線は太く2条以上ある。直線顎である。調整は、凸面は糸切りのちナデ、凹面・側面は横方向のナデである。色調は灰色である。阿波産である。3区土坑8297から出土した。5段階の遺構である。

瓦59は唐草文軒平瓦である。中心飾りは背向C字形状で、唐草文は両側に2転する。主葉は離れて大きく反転し、支葉は強く巻き込む。曲線顎である。瓦当部の成形は包み込み技法である。調整は、瓦当部凸面・裏面・側面は横方向のナデ、平瓦部凸面は縦方向のち横方向のナデ、平瓦部凹面は横方向のナデである。色調は灰色である。播磨神出窯産である。2区土坑3133から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦60は唐草文軒平瓦である。主葉は連続せず大きく反転し、支葉は強く巻き込む。曲線顎である。瓦当部の成形は包み込み技法である。調整は、瓦当部裏面は横方向のナデ、平瓦部凸面はタタキ、瓦当部凹面・平瓦部凹面は横方向のナデである。色調は灰色である。播磨産である。鳥羽殿金剛心院HH1型式である。2区土坑4460から出土した。5～6段階の遺構である。

瓦61は宝相華文軒平瓦である。支葉は離れる。曲線顎である。瓦当部の成形は包み込み技法である。調整は、瓦当部凸面・裏面・側面・瓦当部凹面とも横方向のナデである。色調は灰色である。播磨三本松窯産である。3区第1面遺構検出中に出土した。

瓦62は唐草文軒平瓦である。中心飾りは下向きの花文で、唐草は外側に展開する。主葉は緩やかに反転し、支葉は強く巻き込む。調整は、瓦当部凸面・凹面は横方向のナデである。色調は灰色である。播磨産である。吉田南遺跡より同文の瓦が出土している。2区溝5007から出土した。6～7段階の遺構である。

瓦63は唐草文軒平瓦である。主葉は緩やかに反転するが支葉は直線的である。曲線顎である。瓦

当部の成形は包み込み技法である。調整は、瓦当部凸面・裏面・側面・瓦当部凹面とも横方向のナデ、平瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面は布目である。色調は灰色である。播磨神出窯産である。2区土坑3040から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦64は唐草文軒平瓦である。主葉は緩やかに反転し、支葉は巻き込む。曲線顎である。瓦当部の成形は包み込み技法である。調整は、瓦当部凸面・裏面・側面・瓦当部凹面とも横方向のナデ、平瓦部凸面は縦方向のナデである。色調は灰色である。播磨神出窯産である。2区第2面遺構検出中に出土した。

瓦65は連巴文軒平瓦である。右巻き3巴文五つを配し、頭部が中央で互いに接合する。ほぼ直線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は布目である。生乾き段階に付いた指痕が文様を破損している。色調は灰色である。讃岐丸山瓦窯産である。2区土坑2692と土坑4812から出土した破片が接合した。8段階の遺構である。同範瓦が全部で4点ある。

瓦66は連巴文軒平瓦である。右巻き3巴文五つを配し、一部の尾部は長く伸びて隣の巴に接する。ほぼ直線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のナデ・ケズリ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は布目である。色調は灰色である。讃岐丸山瓦窯産である。2区土坑2606から出土した。6～7段階の遺構である。同範瓦が全部で3点ある。

瓦67は連巴文軒平瓦である。右巻き3巴文四つを配し、頭部が中央で互いに接合、尾部は長く伸びて隣の巴に接する。ほぼ直線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のナデ・ケズリ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のナデ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は布目である。色調は暗灰色である。讃岐産である。2区土坑2692と土坑4812から出土した破片が接合した。土坑2692は8段階、土坑4812は6段階の遺構である。同範瓦が他に1点ある。

瓦68は連巴文軒平瓦である。右巻き3巴文を配する。大きな範傷がある。ほぼ直線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリののちナデ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は布目である。色調は灰色である。讃岐産である。2区土坑3718から出土した。7段階の遺構である。

瓦69は連巴文軒平瓦である。右巻き3巴文を配する。平瓦部との接合は逆向きの角度となる。調整は、瓦当部凸面は縦方向のケズリ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は横方向のケズリののちナデである。色調は暗灰色である。讃岐産である。2区第2面検出中に出土した。

瓦70は連巴文軒平瓦である。右巻き3巴文を配する。尾部は短く、巴の中心に文様割付の支点がある。直線顎である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凸面は縄タタキ、凹面は布目ののちナデである。色調は灰色である。讃岐産である。2区土坑2692から出土した。8段階の遺構である。

瓦71は剣頭文軒平瓦である。段顎である。瓦当部の成形は折り曲げ技法である。調整は、瓦当部凸面は横方向のケズリ、裏面はオサエ、側面はケズリ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部

凸面はオサエ、凹面は布目ののちナデである。色調は灰色である。山城産である。3区土坑8856から出土した。6B段階の遺構である。

平瓦（図154 瓦72～瓦75） 瓦72～瓦75は大きさ・形態は共通する。小振りで弯曲は弱い。

瓦72は、調整は、凸面は平行タタキ、凹面は糸切り痕と重ね置きによる平行タタキ痕が残る。長端面は縦方向のケズリののちナデ、広端面・狭端面は横方向のケズリののちナデである。広端面に「○」に「+」の刻印がある。色調は灰色である。

瓦73は、調整は、凸面はケズリ、凹面はナデで、それぞれ糸切り痕が残る。長端面は縦方向のケズリののちナデ、広端面・狭端面は横方向のケズリののちナデである。広端面に「○」に「+」の刻印がある。色調は灰色である。

瓦74は、調整は、凸面は縄タタキののちナデ、凹面はナデで糸切り痕が残る。長端面は縦方向のケズリののちナデ、広端面は横方向のケズリののちナデである。広端面凹面側に短い2本線のヘラ記号がある。弱く二次焼成を受けており、色調は灰色である。

瓦75は、調整は、凸面は縄タタキ、凹面は布目で糸切り痕が残る。長端面は縦方向のケズリののちナデ、広端面は横方向のケズリののちナデである。二次焼成を受けており、色調はにぶい橙色である。瓦72～瓦75はいずれも山城産で、3区土坑8856から出土した。6B段階の遺構である。他にも数個体分の破片が出土している。

ヘラ記号・刻印（図160 瓦115～瓦119） 瓦115は丸瓦の破片である。調整は、凸面は縄タタキののちナデ、凹面は布目ののちナデ、長端面は縦方向のケズリである。凸面に斜め方向の2本線のヘラ記号がある。色調は灰色である。2区土坑2855から出土した。8～9段階の遺構である。

瓦116は平瓦の破片である。調整は、凸面は格子タタキ、凹面は布目である。凹面に「○」形の刻印がある。凸面は2次調整を受けており葺土が付着する。色調は、凸面は灰白色から橙色、凹面は暗灰色である。1区土坑480から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦117は丸瓦玉縁部の破片である。小口面に山形に3本線の刻印がある。2区土坑3066から出土した。7段階の遺構である。

瓦118は平瓦の破片である。小口面に「○」に「+」の刻印がある。3区土坑6973から出土した。6～7段階の遺構である。

瓦119は平瓦の破片である。凸面に同心円タタキがある。調整は、凸面はタタキののちナデ、凹面はナデである。色調は灰白色である。3区土坑6111から出土した。8段階の遺構である。

（3）鎌倉時代から室町時代

軒丸瓦（図155・247 瓦76～瓦85） 10種を確認した。瓦76は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で、蓮子は1+8。蓮弁に輪郭線が重複する。外区に珠文がめぐる。調整は、瓦当部側面・裏面はナデ、瓦当部凸面・丸瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面は布目ののち接合部をオサエである。色調は灰色である。播磨産である。3区井戸7881から出土した。9～10段階の遺構である。鎌倉時代の東寺再建時の瓦である。

瓦77は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で尾部は互いに接して界線となる。外区に密に珠文がめぐり。調整は、瓦当部裏面はナデ、瓦当部凸面・丸瓦部凸面は縦方向のナデである。表面に炭素が沈着する。色調は暗灰色である。2区土坑2185から出土した。10段階の遺構である。

瓦78は巴文軒丸瓦である。右巻きの3巴文で、尾部は長い。外区に密に珠文がめぐり。調整は、瓦当部側面・裏面は横方向のナデである。瓦当面に離砂が付着する。色調は灰白色である。2区土坑2128から出土した。7段階の遺構である。

瓦79は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で尾部は互いに接して界線となる。外区に珠文がめぐり。調整は、瓦当部側面は横方向のナデ、裏面は接合のためのカキヤブリ痕があることから飾瓦の可能性はある。表面に炭素が沈着する。色調は灰色である。2区井戸2333から出土した。7段階の遺構である。

瓦80は巴文軒丸瓦である。左巻きの3巴文で、尾部は長い。外区に珠文がめぐり。調整は、瓦当部側面・裏面下半部は横方向のナデ、上半部はナデである。色調は灰色である。1区土坑98から出土した。8～9段階の遺構である。

瓦81は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で尾部は互いに接して界線となる。外区に密に小さい珠文がめぐり。調整は、瓦当部側面はナデ、裏面は横方向のナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。2区井戸2449から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦82は巴文軒丸瓦である。左巻きの2巴文で、尾部は長く周縁に接する。調整は、瓦当部裏面はナデ、瓦当部凸面は横方向のナデ、丸瓦部凸面は縦方向のナデである。表面に炭素が沈着する。色調は灰色である。2区攪乱から出土した。

瓦83は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で尾部は互いに接して界線となる。中心に珠文を1個配する。調整は、瓦当部側面は横方向のナデ、裏面はナデ、瓦当部凸面・丸瓦部凸面は縦方向のナデである。色調は灰色である。2区土坑2185から出土した。7段階の遺構である。同範瓦が他に1点ある。

瓦84は巴文軒丸瓦である。左巻きの3巴文で、尾部は長い。調整は、瓦当部側面は横方向のナデ、裏面はナデ、丸瓦部凹面は横方向のナデである。色調は灰色である。1区土坑103から出土した。7段階の遺構である。

瓦85は巴文軒丸瓦である。左巻きの3巴文で、尾部は長い。調整は、瓦当部裏面はナデ、瓦当部凸面は横方向のナデ、丸瓦部凸面は縦方向のナデである。色調はにぶい橙色から灰色である。1区井戸71から出土した。6～7段階の遺構である。

丸瓦（図155 瓦86・瓦87） 瓦86は玉縁部を欠損する丸瓦である。調整は、凸面は縦方向のちヨコ方向のナデ、凹面は粗い布目である。長端面は縦方向のケズリで、小口面はケズリで凸面側を面取りする。色調は灰白色である。2区土坑2405から出土した。6～7段階の遺構である。

瓦87は全容がわかる唯一の個体である。調整は、凸面は縦方向のナデ、凹面は布目で吊り紐痕が残る。長端面は縦方向のケズリで、小口面はナデで凸面側を面取りする。玉縁部凸面は横方向のナ

デ、凹面はケズリ、小口面はナデで凸面側を面取りする。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。2区井戸3550から出土した。7段階の遺構である。

軒平瓦（図156・247 瓦88～瓦97）10種を確認した。瓦90・瓦91は出土点数が多いことから金光寺創建期の瓦の可能性がある。瓦96・瓦97は、中でも新しく室町時代に属する。

瓦88は唐草文軒平瓦である。唐草は3転するが各单位は離れる。主葉は大きく反転するが、支葉の巻き込みは弱い。外区に珠文がめぐる。曲線顎である。瓦当部は顎部を貼り付けて成形する。調整は、瓦当部凸面は横方向のナデ、裏面は横方向のケズリ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリ、平瓦部凹面は布目ののちナデである。色調は灰色である。播磨三本松窯産である。3区土坑6099から出土した。6段階の遺構である。瓦76と同じく鎌倉時代の東寺再建時の瓦である。

瓦89は唐草文軒平瓦である。唐草は外側へ10転する。主葉は細く連続して緩やかに反転する。外区に珠文がめぐる。段顎である。瓦当部は顎部を貼り付けて成形する。瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリののちナデ、平瓦部凸面はオサエ、凹面は布目ののちナデである。瓦当部裏面に凹型成形台の圧痕が残る。色調は灰色である。法勝寺より同文の瓦が出土している。2区土坑2855から出土した。8～9段階の遺構である。

瓦90は唐草文軒平瓦である。唐草は2転し、支葉は離れる。段顎で瓦当貼付け成形である。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、側面はケズリののちナデ、平瓦部凹面はナデである。瓦当部裏面に凹型成形台の圧痕が残る。表面にうすく炭素が沈着する。色調は灰色である。3区井戸6380から出土した。7段階の遺構である。

瓦91は唐草文軒平瓦である。中心飾りは下向きの五葉で、唐草は2転し、支葉は離れる。段顎である。瓦当部は顎部を貼り付けて成形する。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、側面はケズリののちナデ、瓦当部凹面は横方向のケズリののちナデ、平瓦部凸面・凹面はナデである。瓦当部裏面に凹型成形台の圧痕が残る。表面にうすく炭素が沈着する。色調は灰色である。1区土坑115から出土した。7段階の遺構である。同範瓦が全部で8点ある。

瓦92は唐草文軒平瓦である。中心飾りは変形の花菱文で、唐草は3転する。主葉は連続して強く反転する。段顎である。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、側面はケズリ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凸面はナデ、凹面は布目ののちナデである。色調は灰色である。2区土坑2486から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦93は唐草文軒平瓦である。中心飾りは5弁の半載花文である。段顎で瓦当貼付け成形である。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凸面はナデ、凹面は布目ののちナデである。瓦当部裏面に凹型成形台の圧痕が残る。色調は暗灰色である。1区土坑8から出土した。7～8段階の遺構である。同範瓦が全部で4点ある。

瓦94は唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きの三葉で、唐草は二重で2転する。段顎である。瓦当部は顎部を貼り付けて成形する。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、側面はケズリ、瓦当部凹面は横方向のケズリののちナデ、平瓦部凸面はナデ、凹面は布目ののちナデである。瓦当部裏面に凹型成形台の圧痕が残る。色調は灰色である。3区土坑7483から出土した。7段階の遺

構である。同範瓦が全部で3点ある。

瓦95は連珠文軒平瓦である。珠文は11個に復元できる。段顎で瓦当貼付け成形である。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、側面はケズリのナデ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面は布目ののちナデである。色調は灰色からにぶい橙色である。1区土坑614から出土した。7段階の遺構である。同文瓦が他に1点ある。

瓦96は唐草文軒平瓦である。「大」字を配する。唐草は各单位は離れ、主葉は大きく反転し、支葉は強く巻き込む。段顎で瓦当貼付け成形である。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、瓦当部凹面端部は横方向のケズリ、平瓦部凸面・凹面はナデである。瓦当部裏面に凹型成形台の圧痕が残る。表面にうすく炭素が沈着する。色調は灰色である。3区土坑8172から出土した。8～9段階の遺構である。

瓦97は唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きの三葉で、唐草は2転する。段顎である。瓦当部は顎部を貼り付けて成形する。調整は、瓦当部凸面・裏面は横方向のナデ、側面はナデ、瓦当部凹面・平瓦部凹面はナデ、平瓦部凸面はナデである。色調は灰色である。3区溝7774から出土した。11B～C段階の遺構である。

宝珠(図156 瓦98) 中実で先端を欠損する。調整は、宝珠上半部は縦方向、下半部は横方向の細かいケズリで全体をナデで仕上げる。基部側面は横方向のケズリ、底面はナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表面は黒色である。2区土坑2173から出土した。9～10段階の遺構である。

鳥衾(図156・248 瓦99) 瓦当と体部を鋭角に接合する。右巻きの3巴文で、尾部は長い。外区に珠文を配する。調整は、瓦当部裏面はナデ、接合部は横方向の強いナデ、筒状部外面下半部は横方向のナデ、上半部は縦方向のナデ、内面は布目ののちオサエである。部分的に炭素が沈着する。色調は灰色である。3区井戸7386から出土した。7～8段階の遺構である。

鬼瓦(図156・248 瓦100・瓦101) 瓦100は端部の破片で、外区に珠文が並び、輪郭を線刻する。調整は、瓦当面は型成形、側面・裏面はナデである。全面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表面は黒色である。2区第1面遺構検出中に出土した。

瓦101は端部の破片で、外区に大粒の高い珠文が並び、輪郭を線刻する。調整は、瓦当面は型成形、側面は縦方向のナデ、裏面はナデである。色調は黄灰色である。2区土坑2960から出土した。7段階の遺構である。

雁振瓦(図157・158・248 瓦102～瓦106) 棟の最上部に使用する雁振瓦である。

瓦102～瓦104は形態・調整は共通する。分厚く、中央部ではほぼ直角に屈曲し、凹面両側に鈍い稜を作る。広端面側は凹面中央を幅広く舌形に面取りし、狭端面側は玉縁を作る。凸面は縦方向のナデ、凹面は布目で糸切り痕が残る、面取りは横方向のケズリののちナデである。長端面は縦方向のナデで角を面取り、広端面はケズリののちナデ、玉縁部凸面は横方向のナデ、小口面は横方向のケズリである。表面に炭素が沈着する。いずれも部分的に被熱しており、色調は灰色からにぶい橙色である。3点とも2区土坑2816から出土した。7～8段階の遺構である。他にも数個体分の破

片が出土している。

瓦105・瓦106は分厚くやや大型で、中央部の屈曲は鈍角である。広端面側は凹面を幅広く面取りし、狭端面側は玉縁を作る。調整は、凸面は縦方向のナデ、凹面は布目で糸切り痕が残り、面取りは横方向のケズリののちナデである。長端面は縦方向のナデで角を面取り、広端面はケズリののちナデ、玉縁部凸面は横方向のナデである。表面に炭素が沈着する。いずれも部分的に被熱しており、色調は灰色からにぶい橙色である。瓦105は1区土坑98から出土した。8～9段階の遺構である。瓦106は2区土坑2324から出土した。6～7段階の遺構である。

輪違瓦 (図159・248 瓦107～瓦110) 棟を飾る輪違瓦である。丸瓦と比較して薄手で、断面形の弯曲が緩い。

瓦107は狭端面側がすぼまる。調整は、凸面は縄タタキののち縦方向のナデ、凹面は布目で抜き縄痕が残り、周縁部は面取り状の幅狭いケズリである。長端面はナデ、狭端面はケズリである。色調は黄灰色である。1区土坑614から出土した。7段階の遺構である。

瓦108は形態・調整は瓦107と共通する。凹面にヘラによる切断用の分割線が残る。色調は灰色である。3区土坑6653から出土した。9段階を中心とする遺構である。

瓦109は分割線により割折られた狭端面側の破片である。調整は、凸面は横方向のナデ、凹面は布目で、周縁部は面取り状の幅狭いケズリである。狭端面はケズリである。色調は灰色である。3区土坑6653から出土した。9段階を中心とする遺構である。

瓦110は平面形が先端の欠けた三角形状で、断面形の弯曲が非常に弱い。調整は、凸面は横方向のナデ、凹面は布目で糸切り痕が残る。長端面・狭端面はケズリ、広端面はナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。1区第2面遺構検出中に出土した。

隅瓦 (図159 瓦111) 一端を斜め方向に切断、隅切りした丸瓦である。調整は、凸面は縄タタキののちナデ、凹面は布目で糸切り痕が残る。長端面・隅切り面はケズリののちナデである。色調は灰色である。下棟に接する部分に使用されたと推測する。1区井戸71から出土した。6～7段階に属する。

丸瓦 (図159 瓦112) 玉縁部を欠損する丸瓦である。調整は、凸面は縦方向のナデ、凹面は刺子上の痕跡がある粗い布目、長端面は縦方向のケズリののちナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。2区土坑2816から出土した。7～8段階の遺構である。

平瓦 (図159・160 瓦113・瓦121・瓦122) 瓦113は狭端面を欠損する平瓦である。調整は、凸面は縦方向のナデ、凹面は横方向のナデで糸切り痕が残る。長端面は縦方向のナデ、広端面は横方向のナデである。全体が強く2次焼成を受けており、色調はにぶい橙色である。2区土坑2816から出土した。7～8段階の遺構である。

瓦121は焼けた瓦である。調整は、凸面はケズリののちナデ、凹面は粗い布目、長端面は縦方向のケズリである。全体が強く2次焼成を受けており、色調は褐灰色からにぶい橙色である。3区土坑6513から出土した。5～6段階の遺構である。

瓦122は焼けた瓦である。調整は、凸面は平行タタキののち長端面側をナデ、凹面は布目で糸切り痕が残る。長端面は縦方向のケズリである。全体が強く2次焼成を受けており、色調は橙色である。2区土坑5028から出土した。6段階の遺構である。

(4) 江戸時代

鬼瓦 (図161 瓦123～瓦126) 瓦123は鬼面文である。下部の台部分は范型で上部は粘土貼付け成形である。髪・耳・眉・目・鼻・上顎が残り、角は欠落する。調整は、顔面はナデで仕上げる。髪・眉は櫛状工具で細かい波状に表現する。耳は成形した粘土塊を貼り付け耳穴は円筒形の穴を開ける。目は瞼を線刻して瞳は円筒形の穴を開ける。鼻孔は円筒形の穴を開ける。上顎は唇と歯を表現する。鬼面の外側に大粒の珠文を貼り付ける。側縁はケズリののちナデ、裏面はオサエである。全体が強く2次焼成を受けており、色調はにぶい橙色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦124は枳形文である。成形は范型で、中央に幅広い枳形、周縁に波状の文様を配する。裏面に取付け把手の痕跡がある。調整は、前面は周縁の文様は片切彫で角を面取り、側縁はミガキ、裏面はナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。3区井戸3136から出土した。江戸時代後期の遺構である。

瓦125は獅子文である。成形は范型で、片耳・鼻・上顎以外は残る。足部に波文を配する。裏面に取付けの「U」字形の穿孔がある。調整は、たてがみ・眉・尾・爪はヘラで細部を表現する。目は瞼を線刻して瞳は円筒形の穴を開ける。波文はヘラで波濤を上書きする。側縁・裏面はナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は黒色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦126は花文であるが、破片のため全容は不明である。成形は范型で、立体的な花卉が重なる。調整は、花卉は片切彫を加えて花卉を重複させる。裏面はナデである。2次焼成を受けており、色調は灰白色から暗灰色である。3区井戸7789から出土した。江戸時代後期の遺構である。

軒丸瓦 (図162・249 瓦127～瓦131) 瓦127は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で尾部は互いに接して界線となる。外区に珠文がめぐる。凹面玉縁側に引っ掛けを貼り付ける。調整は、瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、丸瓦部凸面は縦方向のミガキ、凹面は布目、長端面は縦方向のケズリののちナデである。引っ掛け部はナデ、玉縁部凸面は横方向のナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。1区土坑610から出土した。6～7段階の遺構であるが混入品である。

瓦128は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文で尾部は長く伸びる。外区に珠文がめぐる。調整は、瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、丸瓦部凸面は縦方向の丁寧なミガキ、凹面は布目である。丸瓦部凸面に「深草田中□」の刻印がある。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。3区機械掘削中から出土した。

瓦129は小型の上がり藤文軒丸瓦である。藤文は簡略化する。剥離剤の雲母が少量付着する。調

整は、瓦当周縁はミガキ、瓦当部側面・裏面はナデ、丸瓦部凸面は縦方向のミガキ、凹面は布目ののちナデ、長端面はケズリののちナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は灰色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦130は菊文軒丸瓦である。花卉は細く、16弁に復元できる。調整は、瓦当周縁はミガキ、瓦当部裏面はナデ、丸瓦部凸面は横方向のミガキ、凹面は布目ののちナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。2区機械掘削中に出土した。

瓦131は蛇の目文軒丸瓦である。調整は、瓦当中心はナデ、周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、丸瓦部凸面は縦方向のミガキである。2次焼成を受けており、色調は灰色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

鳥衾（図162・249 瓦132） 瓦当と体部を鋭角に接合する。右巻きの3巴文で、尾部は互いに接して界線となる。外区に珠文がめぐる。筒状部外面下半部に波頭文を陰刻する。剥離剤の雲母が付着する。調整は、瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部裏面はナデ、接合部は横方向のナデ、筒状部外面は縦方向のミガキ、内面は布目ののちナデである。表面に炭素が沈着する。部分的に2次焼成を受けており、色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

菊丸瓦（図162・249 瓦133～瓦135） 瓦133は丸瓦部が3つ連結する。いずれも単弁の8弁で、花卉は細い。中心部で抉りのある板状の体部と接合する。調整は、瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、体部は上面・下面・側面はナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。3区機械掘削中に出土した。

瓦134は、単弁の8弁で、花卉は細い。剥離剤の雲母が付着する。調整は、瓦当周縁は粗いミガキ、瓦当部裏面はナデ、丸瓦部凸面は縦方向のナデである。表面に炭素が沈着する。2次焼成を受けており、色調はにぶい橙色から暗灰色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦135は小型で、単弁の8弁で、花卉は細い。剥離剤の雲母が付着する。調整は、瓦当部側面・裏面はナデ、丸瓦部凸面は縦方向のミガキである。2次焼成を受けており、色調は灰白色である。3区井戸6192から出土した。江戸時代後期の遺構である。

軒平瓦（図163・249 瓦136～瓦141） 瓦136は唐草文軒平瓦である。中心飾りは花文と葉文で外側に唐草文が展開する。花文は8弁、葉文は5葉で葉脈を表現する。唐草は強く巻き込む。瓦当下弦中央は舌形に垂下する。剥離剤の雲母が付着する。調整は、瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面はミガキ、裏面はナデ、瓦当部凸面は横方向のミガキ、平瓦部凸面はナデ、凹面は縦方向のミガキである。2次焼成を受けており、色調はにぶい橙色から灰色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦137は唐草文軒平瓦である。中心飾りは花文で外側に唐草文が展開する。花文は8弁で蕊を陰刻する。唐草文は強く巻き込み、支葉は葉文状になる。瓦当下弦中央は垂下する。瓦当面に「○」に「極」字の刻印がある。調整は、瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、平瓦部凸面はナデ、凹面は横方向のミガキである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表

面は黒色である。3区土坑6189から出土した。5～6段階の遺構であるが混入品である。

瓦138は唐草文軒平瓦である。中心飾りは花文で両側に唐草が展開する。花文は8弁で、唐草が接する。唐草は中心側は強く巻き込むが、外側は波線状になる。調整は、瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、平瓦部凸面はナデ、凹面は横方向の粗いミガキである。表面に炭素が沈着する。2次焼成を受けており、色調は灰白色から暗灰色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦139は唐草文軒平瓦である。中心飾りは三葉文で両側に唐草が2転する。三葉文は繋がって長円形状になる。唐草は強く巻き込み、支葉は二股になる。瓦当面に刻印の痕跡がある。調整は、瓦当周縁はミガキで角を小さく面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、平瓦部凸面はナデ、凹面は横方向の粗いミガキである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦140は唐草文軒平瓦である。中心飾りは巴文で両側に唐草が2転する。巴文は左巻き3巴文で尾部は短い。唐草の主葉は連続せず緩やかに反転する。支葉は小さい。剥離剤の雲母が付着する。調整は、瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、平瓦部凸面はナデ、凹面は横方向のミガキである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表面は黒色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦141は唐草文軒平瓦である。中心飾りは三葉文で両側に唐草が2転する。唐草は強く巻き込み、支葉は二股になる。調整は、瓦当周縁はミガキで角を小さく面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、平瓦部凸面は横方向のナデ、凹面は縦方向の粗いミガキである。表面に炭素が沈着する。2次焼成を受けており、色調は灰白色から暗灰色である。2区井戸3136から出土した。江戸時代後期の遺構である。

螭羽瓦 (図163 瓦142) 平瓦長側面端部に粘土板を接合する。調整は、平瓦部凸面・凹面はナデ、螭羽部内面・端面はナデである。外面に蕨手文を施文する。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。3区井戸7240から出土した。江戸時代中期から後期の遺構である。

丸瓦 (図163 瓦143) 全容がわかる唯一の個体である。調整は、凸面は縦方向の粗いミガキ、凹面は布目の後ナデで周縁をケズリである。長端面は縦方向のケズリ、小口面はケズリののちナデである。玉縁部凸面は横方向のナデ、凹面はケズリ、小口面はケズリののちナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。2区土坑2305から出土した。8～9段階の遺構であるが混入品である。

棧瓦 (図163 瓦144) 全容がわかる唯一の個体である。調整は、上面はミガキ、下面はナデ、長側面・小口面はケズリののちミガキで角を面取りする。小口面に「○」に「極」字の刻印がある。3区井戸9192から出土した。江戸時代後期の遺構である。

刻印 (図163 瓦145) 平瓦の破片である。凸面の3箇所刻印がある。1つは「瓦師副棟梁木野由次郎」とある。あと2箇所は判読できない。3区井戸6654から出土した。江戸時代後期の遺

構である。

軒棧瓦(図164・249 瓦146～瓦151) 瓦146は軒丸瓦部は巴文、軒平瓦部は唐草文である。巴文は右巻きの3巴文で尾部は短い。軒平瓦部は中心飾りが削り取られており、両側に唐草が3転する。唐草は強く巻き込む。瓦当周縁はミガキで角を小さく面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、棧瓦部上面はミガキ、下面はナデである。表面に炭素が沈着する。部分的に二次焼成を受けており、色調は、胎土は灰白色、表面はにぶい橙色から暗灰色である。2区井戸3136から出土した。江戸時代後期の遺構である。

瓦147は軒丸瓦部は巴文、軒平瓦部は唐草文である。巴文は右巻きの3巴文であるが欠損しており詳細は不明である。軒平瓦部は中心飾りは花菱文で両側に唐草が2転する。花菱文は4弁で蕊を陽刻する。唐草は強く巻き込む。瓦当下弦中央は短く舌形に垂下する。剥離剤の雲母が多く付着する。調整は、瓦当周縁はミガキで角を小さく面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、棧瓦部上面はミガキ、下面はナデである。2次焼成を受けており、色調はにぶい橙色である。3区の蛤御門の変の火災処理土坑から出土した。

瓦148は軒棧瓦の軒丸瓦部分である。右巻き3巴文で尾部は長く伸びる。瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデである。接合部にカキヤブリ痕がある。表面に炭素が沈着する。部分的に二次焼成を受けており、色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。3区土坑6189から出土した。5～6段階の遺構であるが混入品である。

瓦149は大型の軒棧瓦の軒丸瓦部分である。右巻き3巴文で尾部は長く伸びる。外区に珠文がめぐる。瓦当周縁はミガキで角を面取り、瓦当部側面・裏面はナデである。棧瓦部上面はミガキ、下面はナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。3区機械掘削中に出土した。

瓦150は軒丸瓦部分を欠損する。軒平瓦部は中心飾りは左巻き3巴文で両側に唐草が2転する。剥離剤の雲母が多く付着する。調整は、瓦当周縁はミガキで角を小さく面取り、瓦当部側面・裏面はナデ、棧瓦部上面はミガキ、下面はナデである。表面に炭素が沈着する。色調は、胎土は灰白色、表面は暗灰色である。

瓦151は軒丸瓦部分を欠損する。軒平瓦部は中心飾りは上向きの三葉文で両側に唐草が2転する。剥離剤の雲母が付着する。調整は瓦150と共通する。瓦150・瓦151は3区溝6249の肩口に護岸材として並べられていた。江戸時代後期の遺構である。

4. 土製品

土製品には埴輪・カマド・土馬・土塔・製塩土器・硯・土錘・窯道具・鋳型・埴塙・鞆羽口・炉壁・塼などがある。所属時期については型式の特徴を優先し、それ以外のものについては共伴する出土土器の年代、遺構の層位に基づいて記述した。

円筒埴輪（図版165・250 土1～土4）土1は体部の破片で、長方形の透孔と縦方向の剥離痕がある鱗付円筒埴輪である。調整は、外面はタテ方向のハケ、内面はナデで粘土紐接合痕が残る。土2は底部の破片で、調整は、外面はタテ方向のハケののち接地面外周をケズリ、内面はナデで粘土紐接合痕が残る。土1・土2は同一個体と推測する。いずれも焼成は土師質で表面はあまり摩耗していない。色調はにぶい黄橙色である。3区第2層から出土した。古墳時代前期の遺物である。

土3は体部の破片で、タガが1条残る。調整は、外面はタテハケ、内面はナナメハケで、タガは指先でつまみながら圧着させる。焼成は土師質で表面は摩耗する。色調は灰白色である。3区土坑6145から出土した。5～6段階の遺構であるが、古墳時代前期から中期の遺物である。

土4は体部の破片である。調整は、外面はタテハケ、内面はナナメハケである。焼成は土師質で表面はあまり摩耗していない。色調はにぶい橙色である。3区土坑7040した。古墳時代後期から飛鳥時代の遺構であるが、古墳時代前期から中期の遺物である。

カマド（図版165 土5・土6）土5は上端の破片で、わずかに内傾して端部に面を作る。調整は、外面はハケののちナデ、内面・端面はナデである。色調は明褐灰色である。3区土坑6497から出土した。6～7段階の遺構であるが、古墳時代後期から飛鳥時代の遺物である。

土6は焚口基部の破片で、体部は奥に向けて内弯し、焚口の外縁に短い鏝を付ける。調整は、体部外面はオサエののちハケ、内面はハケ、鏝部はナデで焚口の輪郭をケズリで仕上げる。色調はにぶい黄橙色である。3区第1面検出中に出土した。古墳時代後期から飛鳥時代の遺物である。

製塩土器（図版165 土7・土8）土7・土8は、地面に突き刺す柱状部の破片である。土7は中心に空隙が残り、先端は先細る。土8は中実で太く、上端には杯部の接合痕が残る。調整はいずれも手づくねである。外面の一部に煤が付着する。色調は、土7はにぶい黄橙色、土8はにぶい橙色である。土7は2区柱穴3851から出土した。6～7段階の遺構であるが、古墳時代後期から飛鳥時代の遺物である。土8は2区地業4900から出土した。8A段階の遺構であるが、古墳時代後期から飛鳥時代の遺物である。

土錘（図版165 土9～土11）土9・土10は中空で、両端がすぼまる円筒形である。調整は、芯材に粘土を巻き付けて成形し、ナデで仕上げる。色調はいずれもにぶい橙色である。漁労に使用したと推測する。土9は2区土坑1218から出土した。2～4段階の遺構である。土10は2区井戸5407から出土した。6段階の遺構である。

土11は中実で、中央に幅広い括れがあり、一部が欠損する。調整は全面丁寧なナデである。色調はにぶい橙色である。筵などの編物の錘と推測する。2区第2面検出中に出土した。

窯道具（図版165・250 土12～土14）土12は、粘土紐を「の」形に巻いて環形にする。調整

は不明である。土13は平坦な紐状で、一端が欠損する。調整はナデである。土14は円盤形で、1箇所に小さな粘土粒を貼り付ける。調整は表裏面・側面ともケズリである。いずれも2次焼成を受けて固く焼け締まる。色調は、土12は浅黄橙色、土13は灰白色、土14はにぶい橙色である。製品の焼締陶器に付着していた可能性がある。土12は3区第3層から出土した。土13は3区土坑6386から出土した。5段階の遺構である。土14は3区井戸7637から出土した。10～11段階の遺構である。

土馬(図版165 土15) 胴体から脚の破片で、頭部・尾部・脚先はすべて欠損する。調整は、オサエののちナデである。色調はにぶい橙色である。3区土坑6565から出土した。7段階の遺構であるが、1～2段階の遺物である。

土塔(図版165・250 土16・土17) 不整形な擬宝珠形で、底部中央に空隙がある。調整は、合わせ型で成形したのちオサエ・ナデを施すが粗い。色調は、土16は褐灰色、土17はにぶい橙色である。土16は3区第2層から出土した。5～6段階の遺物である。土17は3区土坑8433から出土した。5段階の遺構である。

円盤形土製品(図版165 土18～土24) 土18は信楽産焼締陶器甕、土19は東播産須恵器甕、土20は緑釉陶器碗底部、土21・土22は土師器皿、土23は瓦器盤または火鉢を円形に打ち欠き整形する。土24は平瓦を円形に打ち欠き、中央に穿孔する。小型のものはおはじき、大型のものは蹴る・打つなどの遊びに使用したと推測する。土18は3区溝6249から出土した。江戸時代の遺構である。土19は2区土坑2525から出土した。7 B段階の遺構である。土20は2区井戸3550から出土した。10段階の遺構である。土21は2区土坑3793から出土した。6～7段階の遺構である。土22は3区土坑9333から出土した。5段階の遺構である。土23は2区土坑2764から出土した。8段階の遺構である。土24は2区柱穴2420から出土した。6段階の遺構である。

転用硯(図版165 土25～土27) 土25は須恵器杯蓋を転用する。天井部内面は使用痕により摩耗し、うすく墨痕が残る。色調は灰色である。3区井戸6372から出土した。6～7段階の遺構である。

土26は須恵器甕を転用する。周囲を丁寧に打ち欠き、猿面硯形に成形する。内面のほぼ全面は使用痕により摩耗する。墨痕はない。色調は灰白色である。3区井戸8460から出土した。5段階の遺構である。

土27は常滑産焼締陶器甕を転用する。割れた破片のまま使用する。破片の内面中央が使用痕により摩耗し、墨痕が残る。2区土坑3507から出土した。7段階の遺構である。

硯(図版165・250 土28～土34) 土28は瓦質の方形硯で、海部を欠損する。陸部底面は浅く削り込み、側面は外開きに立ち上がり、縁部の幅は狭い。陸部はわずかに中軸が盛り上がる。調整はケズリである。あまり使用痕で摩耗していない。色調は黄灰色である。2区柱穴5363から出土した。5～6段階の遺構である。

土29～土31は須恵器風字硯である。土29は、縁部は低く立ち上がり、陸部・海部の境に突帯を貼り付ける。調整は、外面・縁部上面はケズリ、縁部内側はナデ、陸部はオサエである。陸部は使

用痕により摩耗し、わずかに墨痕が残る。色調は灰色である。2区溝4177から出土した。6～7段階の遺構であるが、2～3段階の遺物である。

土30は、陸部は浅く窪み、外面に板状の脚を貼り付ける。調整は外面・側面・脚部はケズリである。陸部は使用痕により摩耗する。2区地業2700から出土した。7段階の遺構であるが、2～3段階の遺物である。

土31は、縁部は低く、陸部は平坦で、外面に板状の脚を貼り付ける。調整は外面・側面・縁部・脚部はケズリである。縁部側面に波状文、陸部上面に複雑な細かい文様を線刻する。陸部は使用痕により平滑となる。色調は暗灰色である。2区土坑2645から出土した。7～8段階の遺構であるが、2～3段階の遺物である。

土32～土34は須恵器円面硯である。土32は、縁部が短く立ち上がり、脚部に長方形の透孔を穿孔する。調整は内外面とも回転ナデで、脚部外面に縦方向の沈線を付ける。色調は灰色である。2区第2面検出中に出土した。奈良時代から2段階の遺物である。

土33は、縁部が高く立ち上がり、外面に獣脚を貼り付ける。調整は内外面とも回転ナデである。擦面は使用痕により摩耗する。色調は灰色である。3区第2層から出土した。奈良時代から2段階の遺物である。

土34は、脚部に長方形の透孔を穿孔する。調整は内外面とも回転ナデで、脚部の端部内側はケズリである。色調は灰色である。3区第2層から出土した。奈良時代から2段階の遺物である。

鑄型（巻頭図版4、図版166 土35～土50）総数50点が出土した。土35～土47は、部位が不明のものもあるが、いずれも刀装具の鑄型である¹¹⁾。大きさは4～6cm角程度で、外面は丸くおさめてナデで仕上げる。砂粒を多く含む粗型の真土を塗り重ねるが、真土が厚い個体と薄い個体がある。多くの個体で剥離剤の雲母が付着する。

土35～土37は兜金の鑄型である。土35は型合わせの突起が1箇所残る。2区第1面検出中に出土した。土36は亀裂が入り損傷する。湯口と合印の欠込みが1箇所残る。2区土坑3810から出土した。6段階の遺構である。土37は湯口が残る。2区井戸4400から出土した。6段階の遺構である。

土38・土39は足金物の鑄型である。土38は湯口と型合わせの突起が2箇所残る。2区土坑3435から出土した。6～7段階の遺構である。土39は湯口と型合わせの突起が1箇所残る。2区柱穴3465から出土した。6段階の遺構である。

土40は責金の鑄型である。型合わせの突起が1箇所残る。2区溝4177から出土した。6～7段階の遺構である。

土41は鞘尻の鑄型である。合印の欠込みが1箇所残る。3区土坑8019から出土した。7A～B段階の遺構である。

土43は座金物の鑄型である。2区土坑3779から出土した。4～5段階の遺構である。

土45・土46は縁金物の鑄型である。土45は湯口が残る。2区溝5007から出土した。6～7段階の遺構である。土46は2区第2面検出中に出土した。

土42・土44・土47は不明品である。土42は湯口が残る。2区土坑2525から出土した。7B段階の遺構である。土44は湯口と合印の欠込みが2箇所残る。3区土坑8069から出土した。4～5段階の遺構である。土47は合印の欠込みが1箇所残る。2区第2面検出中に出土した。

土48は、今回の調査で出土した唯一の内型である。全容は不明であるが、隅丸方形の砂粒を多く含む粗型に真土を塗り重ねて段を作る。鑄造製品は不明である。3区土坑8019から出土した。7段階の遺構である。

土49・土50は鏡の鑄型である¹²⁾。円盤形の粗型に真土を塗り重ねる。土49は、直径約14cmに復元できる。粗土は砂粒を多く含む。真土の厚さは約4mmで、断面三角形の鏡縁のくぼみがめぐるが、文様の痕跡はない。剥離剤の痕跡はない。鏡縁から直径10～11cmの小型鏡を鑄造したことがわかる。2区土坑3765から出土した。4～5段階の遺構である。

土50は、直径約22cmに復元でき、中央に円形の穿孔がある。粗土は砂粒と粉殻を多く含む。真土の厚さは約3mmで、鏡縁や文様の痕跡はない。剥離剤の痕跡はない。真土が薄く平坦なことから鏡面側の鑄型と推測する。2区土坑3279から出土した。6段階の遺構である。

金属滓が付着した土師器皿(図版167 土51～土56) 小破片を含めて総数71点が出土した。すべて破片である。厳密には金属滓が付着した土師器皿は69点で、須恵器壺・不明品に付着する個体が各1点ずつある。金属滓が付着した5段階の土師器皿は土51のみで、他は7～9段階の土師器皿である。ただし、被熱により変形・変色している破片なので赤色系土師器皿・白色系土師器皿の判別は難しい。

土51は、内面にうすく金属滓が付着し、被熱により灰色に変色する。外面には火ぶくれがある。3区土坑6111から出土した。8A段階の遺構であるが、5段階の遺物である。

土52は、底部内面・割目残面に銅滓が厚く付着し、外面は黒く変色する。白色系土師器皿である。3区土坑7335から出土した。8～9段階の遺構である。

土53は、口縁部内面に銅滓が付着し、外面は被熱により灰色に変色して、別の土師器皿片が溶着する。白色系土師器皿である。3区土坑7335から出土した。8～9段階の遺構である。

土54は、口縁部内面に銅滓が付着し、外面は被熱により灰色に変色する。赤色系土師器皿である。3区土坑7721から出土した。8段階の遺構であるが、7段階の遺物である。

土55は、底部・口縁部内面・口縁端部外面に銅滓が付着し、外面は被熱により灰色に変色する。白色系土師器皿である。3区井戸8551から出土した。8段階の遺構である。

土56は、底部内面にうすく銅滓が付着し、口縁部内面、底部・口縁部外面は灰色に変色する。白色系土師器皿である。3区井戸8551から出土した。8段階の遺構である。井戸8551からは銅滓が付着した土師器皿の破片42点がまとまって出土した。

埴塼(巻頭図版4、図版167 土57～土69) 小破片を含めて総数72点が出土した。破片が多く全容がわかる個体は少ないが、円筒形の個体は土69のみで、他は半球形の椀形である。椀形の埴塼は小型品と大型品がある。いずれも砂粒を多く含む。

土57～土60は、いずれも内面に金属滓が付着しており、分析の結果、銀を溶かした埴塼である

ことが判明した。土57は2区土坑3930から出土した。6～7段階の遺構である。土58は片口を作る。2区第1面遺構検出中に出土した。土59は2区柱穴3881から出土した。5～6段階の遺構である。土60は2区土坑3805から出土した。7段階の遺構である。

土61・土62は小型品である。土61は口径約4.5cmに復元できる。底部内面に銅滓がうすく付着し、外面は被熱する。2区土坑4325から出土した。6～7段階の遺構である。

土62は完形品で片口はない。底部・口縁部内面に銅滓が付着し、外面は被熱する。2区土坑4328から出土した。6段階の遺構である。

土63～土66は大型品である。土63は、底部・口縁部内面に銅滓が付着し、底部外面は被熱により部分的に溶融する。3区土坑7424から出土した。6～7段階の遺構である。

土64はほぼ完形品で片口はない。底部・口縁部内面に厚く銅滓が付着し、外面は被熱する。2区土坑4638から出土した。6～7段階の遺構である。

土65は片口部の破片である。口縁部内面に厚く銅滓が付着し、外面は被熱する。2区第2面遺構検出中に出土した。

土66は、底部内面に銅滓が厚く付着し、一部は割目断面・外面にも及んでいることから、作業中に破損したものと推測する。3区土坑8088から出土した。5段階の遺構である。

土67は、金属滓の付着や被熱痕がないことから未使用品と推測する。3区土坑9333から出土した。5段階の遺構である。

土68は、口縁部がわずかに屈曲して開き、円形の穿孔がある。金属滓の付着や被熱痕がないことから未使用品と推測するが、埴埴ではない可能性もある。3区土坑8804から出土した。6段階の遺構である。

土69は、上げ底気味で分厚く、体部・口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内面に付着物はなく、外面は被熱により溶融する。3区土坑6537から出土した。7～8段階の遺構である。

鞆羽口（巻頭図版4、図版167 土70～土74） 小破片を含めて総数21点が出土した。破片が多く全容がわかる個体は少ないが、いずれも先端がすぼまる円筒形で、先端部が欠損する個体が多い。直径8cmを越える大型品と直径約5cmの小型品に分けることができる。いずれも砂粒を多く含む。

土70は先端部から基部までが残存する唯一の個体である。大型品で、先端部は銅滓が厚く付着し、外面は被熱により変色する。調整は、基部外面・端面はナデである。2区土坑5227から出土した。5 B段階の遺構である。

土71は大型品で、内面に段を作る。調整は、外面はナデである。2区土坑5227から出土した。5 B段階の遺構である。

土72は大型品で、先端部は穿孔と鋭角に丸みがある面を作る。調整は、外面はナデ、内面は粗いナデである。2区井戸4287から出土した。6段階の遺構である。

土73は小型品で、先端部は銅滓が厚く付着し、外面は被熱により変色する。内面に段を作る。調

整は、外面はナデ、内面は粗いナデである。2区第1面遺構検出中に出土した。

土74は小型品で、被熱痕がないことから未使用品と推測する。調整は、内外面ともナデである。2区井戸5829から出土した。5段階の遺構である。

炉壁（巻頭図版4、図版168・169 土75～土94）多数の破片が出土した。土75を除き¹³⁾ 鑄造生産に関わる遺物と推測する。破片が多く全容がわかる個体が少ないこともあり、部位や使用法はよくわからない。いずれも砂粒を多く含む。

土75は、被熱により平瓦が2枚溶着した状態で、部分的に粘土塊も付着する。瓦窯の窯体の破片と推測する。2区井戸3550から出土した。7段階の遺構である。

土76は、内弯して上端に波形の切れ込みがある。調整は、外面・切れ込み部はナデ、内面は粗い横方向のナデである。2区土坑4778から出土した。6段階の遺構である。

土77は、内弯気味で内面に低い稜がある。内面にうすく真土状の粘土を塗り重ねる。調整は、外面は粗いナデ、内面は横方向のナデである。1区土坑201から出土した。6～7段階の遺構である。

土78は、上部は外反気味、下部は内弯気味で、底部に近い部分の破片と推測する。内面に段、側面に穿孔がある。調整は、外面・穿孔部分はナデ、内面は指ナデである。1区土坑476から出土した。6～7段階の遺構である。

土79は、体部は内弯気味に開く。内面に段、側面に円形の穿孔がある。調整は、外面・穿孔部分はナデ、内面はヨコ方向のナデである。2区土坑3835から出土した。6段階の遺構である。

土80は、平面形は円弧形で、底部はやや分厚くなり、小口面は垂直である。側面に2箇所の円形の穿孔が隣接する。調整は、外面・底面・側面はナデ、内面はオサエののちナデである。2区土坑5794から出土した。5～6段階の遺構である。

土81は、わずかに上げ底気味の底面の破片と推測する。内外面にうすく粘土を上塗りする。調整は、内外面ともナデである。2区土坑4815から出土した。8段階の遺構である。

土82は、底部の破片と推測する。調整は、外面はナデ、内面はオサエののちナデである。外面に煤が付着する。2区土坑3544から出土した。6～7段階の遺構である。

土83は、側面がやや外形する。調整は、上下面・側面ともナデである。1区井戸695から出土した。6～7段階の遺構である。

土84は、器壁がうすく、外面は緩やかに彎曲する。内面に断面三角形の大きな稜がある。調整は、外面は粗いナデ、内面は縦方向のナデである。2区土坑4190から出土した。6段階の遺構である。

土85は、平板で4箇所に円形の穿孔がある。調整は、上下面・穿孔部ともナデである。片面に煤が付着する。2区土坑2525から出土した。7 B段階の遺構である。

土86は、体部は屈曲して開く。底面に3箇所の円形の穿孔がある。調整は、底部・体部外面はケズリののちナデ、内面は板ナデ、穿孔部分は不明である。底部外面に2条の圈線を施す。1区井戸201から出土した。6～7段階の遺構である。

土87は、平面形は円形で、密に7箇所に円形の穿孔がある。調整は上下面とも粗いナデである。

2区第2面検出中に出土した。

土88は円盤形で、細長い穿孔により梁を作る。調整は、下面・側面・穿孔部分はケズリ、上面はナデである。2区土坑4814から出土した。6～7段階の遺構である。

土89は円筒形の破片である。調整は、外面は粗いナデ、内面は横方向のナデである。2区柱穴4605から出土した。4～5段階の遺構である。

土90は円筒型の破片で、外面が剥離する。調整は、内面は横方向のナデである。2区土坑4770から出土した。6～7段階の遺構である。

土91は完形品で、平面形は円弧形で全周の3分の1である。底部はやや分厚く、体部は直立し、小口面は垂直である。側面に11箇所の円形の穿孔がある。調整は、外面・底面・小口面・上端面はナデ、内面はオサエののちナデである。内面は穿孔による粘土のはみ出しが残る。2区土坑3845から出土した。6～7段階の遺構である。

土92は完形品で、平面形は円弧形で全周の3分の1である。体部は直立し、小口面はわずかに傾く。穿孔はない。調整は、外面・底面・小口面・上端面はナデ、内面はオサエののちナデである。内面は被熱により暗灰色に変色する。2区土坑5227から出土した。5 B段階の遺構である。

土93は円筒形で、体部は直立し、上端部内面に段を作る。小口面は垂直で、側面に円形の穿孔がある。内面にうすく真土状の粘土を塗り重ねる。調整は、外面・上端面・小口面はナデ、内面上端部は横方向のナデ、下部はナデである。胎土に籾殻を多く含む。2区土坑5227から出土した。5 B段階の遺構である。

土94は円筒形で、体部は直立し、上端部内面に小さな段を作る。小口面は垂直で、側面に円形の穿孔がある。内面にうすく真土状の粘土を塗り重ねる。調整は、外面・上端面・小口面はナデ、内面は横方向のナデである。胎土に籾殻を多く含む。区土坑5227から出土した。5 B段階の遺構である。

埴(図版170～173 土95～土119) 多数の破片が出土したが、一括して廃棄された状態では出土していない。方形で円形の穿孔をもつ、いわゆる「有孔埴」及びその類型で、敷埴は土119以外は確認していない。¹⁴⁾

土95は分厚い大型品で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。調整は、上面・下面・小口面は細かい縄タタキ、長側面は縄タタキののちナデである。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。3区井戸6152から出土した。9～10段階の遺構である。

土96は長方形の板状の大型品で、大きな円形の穿孔が1箇所残る。調整は、上面は粗い縄タタキ、下面は縄タタキののちナデ、長側面・小口面はナデである。色調は黄灰色である。3区土坑7336から出土した。9段階の遺構である。

土97は長方形の板状の大型品で、大きな円形の穿孔が2箇所残る。調整は、上面・下面はナデ、長側面・小口面はケズリである。色調は灰色である。3区井戸7881から出土した。9～10段階の遺構である。

土98は長方形の板状で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。調整は、上面・下面・長側面はケズリ

ののち丁寧なナデ、小口面はケズリである。色調は灰白色である。3区井戸6641から出土した。6～7段階の遺構である。

土99は幅広い板状の大型品で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。上面はやや凹面となる。調整は、上面・下面は板ナデ、長側面はナデ、小口面はケズリである。上面に炭素を沈着させるが、重ね焼き痕が残る。色調は、胎土は灰白色である。3区井戸6641から出土した。6～7段階の遺構である。

土100は板状の破片で、穿孔は不明である。上面はやや凹面となる。調整は、上面は粗い縄タタキののち周縁をナデ、下面はケズリののちナデ、長側面・小口面は縄タタキののちナデである。色調は灰色である。3区土坑6653から出土した。9段階を中心とする遺構である。

土101はブロック状で、円形の穿孔が1箇所残る。上面・下面は深い凹面を作る。調整は、上面はナデののち凹面をケズリ、下面はナデののち凹面をケズリのちナデ、長側面は縄タタキののちナデ、小口面はオサエである。色調は暗灰色である。3区土坑8172から出土した。7～8段階の遺構である。

土102はブロック状で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。上面は凹面となる。調整は、上面・長側面・小口面はケズリののち丁寧なナデ、下面は丁寧なナデである。色調はにぶい黄橙色である。3区井戸6641から出土した。6～7段階の遺構である。

土103は薄い板状の大型品で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。上面はわずかに凹面となる。調整は、上面は縄タタキ、下面はナデまたは未調整、長側面・小口面は縄タタキである。色調はにぶい黄橙色から灰白色である。3区土坑6906から出土した。6～7段階の遺構である。

土104はブロック状の小型品で、円形の穿孔が2箇所残る。上面・下面は凹面となる。調整は、上面・下面は縄タタキで周縁をナデ、長側面は縄タタキののちナデである。色調は灰色である。3区土坑8146から出土した。6～7段階の遺構である。

土105は分厚いブロック状の小型品で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。上面・下面はわずかに凹面となる。調整は、上面・下面は縄タタキののちナデ、長側面は縄タタキののち丁寧なナデ、小口面はナデである。色調は灰白色である。2区井戸3550から出土した。7段階の遺構である。

土106はブロック状の小型品で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。上面・下面は凹面となる。調整は、上面・下面は縄タタキで周縁をナデ、長側面・小口面は縄タタキののちナデである。色調は灰色で、小口面付近は灰白色・にぶい橙色になる。2区土坑4935から出土した。7段階の遺構である。

土107はブロック状で、円形の穿孔が1箇所残る。上面・下面は深い凹面を作る。調整は、上面：下面は縄タタキののちナデ、長側面は縄タタキである。下面には斜め方向に指先による記号がある。色調は灰色である。3区第1面遺構検出中に出土した。

土108は分厚い板状の大型品で、円形の穿孔の痕跡が1箇所残る。上面はわずかに凹面となる。調整は、上面は縄タタキ、長側面は縄タタキののちナデである。上面には斜め方向にヘラ記号がある。色調は灰色である。3区井戸6379から出土した。10段階の遺構である。

土109は分厚いブロック状の大型品で、大きな円形の穿孔が2箇所残る。上面はわずかに凹面となる。調整は、残存する5面とも粗い縄タタキで、長側面の片面のみタタキののちナデである。下面・小口面に指先による記号がある。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。2区井戸3550から出土した。7段階の遺構である。

土110は全容がわかる唯一の個体である。分厚いブロック状の大型品で、大きな円形の穿孔が2箇所ある。上面はわずかに凹面となる。調整は、上面は粗い縄タタキ、下面・長側面・小口面は粗い縄タタキののちナデである。上面に指先による鋭い記号がある。色調は、胎土は浅黄橙色、表面は灰色である。2区井戸2333から出土した。7段階の遺構である。

土111は板状の破片で、円形の穿孔の痕跡が1箇所残る。調整は、上面はナデ、下面は布目、側面はケズリである。色調は灰白色で、表面の一部のみ灰色である。2区土坑2431から出土した。7段階の遺構である。

土112は板状の破片で、穿孔は不明である。調整は、上面・下面は糸切り、側面はケズリである。色調は灰白色である。3区井戸6051から出土した。9段階の遺構である。

土113は分厚い板状で、穿孔は不明である。調整は、上面は非常に粗い縄タタキののちナデ、下面はナデまたは未調整、縄タタキののちナデである。色調は灰白色である。2区井戸2045から出土した。7～8段階の遺構である。

土114は板状で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。上面は凹面となる。調整は、残存する5面とも丁寧なナデである。色調は灰白色である。2区井戸2333から出土した。7段階の遺構である。

土115は薄い板状の破片で、穿孔は不明である。調整は、上面は縄タタキ、下面はナデで指先の痕が明瞭に残る。色調は灰色である。2区土坑2855から出土した。8～9段階の遺構である。

土116は分厚い角部の破片である。調整は、上面はナデ、側面はケズリである。色調はにぶい橙色である。2区土坑4620から出土した。7段階の遺構である。

土117は分厚い板状で、小さな円形の穿孔が1箇所残る。調整は、上面は板ナデ、下面は糸切りののち布目、長側面・小口面はケズリである。色調は、上面は灰色、下面は灰白色からにぶい橙色である。2区土坑2682から出土した。8段階の遺構である。

土118はブロック形で、大きな円形の穿孔が1箇所残る。上面は凹面、下面はわずかに凹面となる。調整は、上面はナデ、下面は糸切りののちナデ、長側面はケズリののちナデ、小口面はナデである。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。2区井戸2333から出土した。7段階の遺構である。

土119は板状で、わずかに外反するが敷罫である。調整は、上面・下面はナデ、側面はケズリである。表面に炭素を沈着させる。色調は、胎土は灰色、表面は暗灰色である。2区第2層から出土した。

5. 石製品

石製品には石包丁・石製銚具・碁石・温石・石鍋・硯・砥石・石臼・石塔・墓石・建築部材・礎石・軸石などがある。所属時期については型式の特徴を優先し、それ以外のものについては共伴する出土土器の年代、遺構の層位に基づいて記述した。

石包丁（図版174・251 石1） 杏仁形で半分が欠損する。刃部は片刃で、背部は丸くおさめる。石質は黒色の粘板岩である。3区第2面から出土したが、弥生時代の遺物である。

石製銚具（図版174・251 石2～石6） 石2～石4は丸軋である。石2は完形品だが、潜穴の周辺に欠損が目立つ。表面・側面は丁寧に研磨し、裏面にはわずかに鋸目が残る。石質は黒色の緻密な粘板岩である。2区土坑4620から出土した。2段階の遺構である。

石3は完形品だが、亀裂が多い。下部に長方形の透孔がある。表面・側面は丁寧に研磨し、裏面も平滑に仕上げる。石質は灰緑色の凝灰岩である。3区土坑8039から出土した。5～6段階の遺構であるが、1～3段階の遺物である。

石4は小型で、一部が欠損する。表面・側面は丁寧に研磨し、裏面も平滑に仕上げる。石質は黒色の黒曜石である。2区柱穴5159から出土した。7段階の遺構であるが、1～3段階の遺物である。

石5・石6は巡方である。石5は角部の破片で透孔が残る。表面・側面は丁寧に研磨し、裏面も平滑に仕上げる。石質は灰緑色の凝灰岩である。3区第2層から出土したが、1～3段階の遺物である。

石6は角部の破片で、潜穴がないことから未製品と推測する。表裏面・側面は粗く研磨するが、鋸目が残る。石質は黒色の粘板岩である。3区第1面検出中に出土したが、1～3段階の遺物である。

碁石（図版174 石7～石9） いずれも扁平な円盤形で、石7・石8は研磨の痕跡がなく、平面形はややいびつである。石9は平面形を円形に整えるが、研磨は粗い。石質はいずれも黒色の粘板岩である。石7は2区土坑3466から出土した。6～7段階の遺構である。石8は1区第2面から出土した。石9は2区土坑4098から出土した。7段階の遺構である。

滑石製品（図版174・251 石10～石14） いずれも滑石製の用途不明品である。石10は扁平な円柱形で、上部が笠形に広がる。表面の加工痕は粗い。石鍋の破損部分を補修した部材の可能性もある。2区土坑5820から出土した。6段階の遺構である。

石11は円盤形の完形品で、中央に穿孔する。表面の加工は粗い。紡錘車の可能性がある。1区井戸195から出土した。6～7段階の遺構である。

石12は歪んだ円盤形で、半分を欠損するが、上部がわずかに笠形に広がる。表面の加工は粗く、鉄釘を打ち込む。上面には部分的に朱が付着する。2区土坑2318から出土した。6段階の遺構である。

石13は棒状の完形品で、一端がやや細くなり、端面は両側とも平坦に仕上げる。表面の加工は粗

い。2区柱穴5371から出土した。3～4段階の遺構である。

石14は、石鍋の鏝の部分の破片を再加工する。14箇所に穿孔があり、そのうち4箇所は途中でとまる。3区土坑9062から出土した。2～3段階の遺構であるが混入品である。

温石（図版174・251 石15～石19） いずれも滑石製石鍋の破片を再加工している。石15は口縁部の破片で、両側を切り落とし、鏝を削り落として、1箇所に穿孔する。1区井戸668から出土した。5～6段階の遺構である。

石16は大型品の体部の破片で、非常に分厚い。3辺を切り落として研磨するが、石質が悪く表面は穴だらけである。2区第1層から出土した。6段階の遺構である。

石17は体部の破片で、4辺を切り落とし、表裏面を再加工して、1箇所に穿孔する。3区土坑8852から出土した。6 B～C段階の遺構である

石18は大型品の底部の破片で、周縁及び体部の立ち上がりを削り落とすが、石質が悪く表面は穴だらけである。3区井戸7852から出土した。8～9段階の遺構である。

石19は口縁部の破片で、片側を切り落とし、鏝を粗く削り落とす。3区土坑8160から出土した。6段階の遺構である。

石鍋（図版174・251 石20～石25） いずれも滑石製で完形品はない。¹⁵⁾ 石20は小型で、縦向きの耳が付く。2区土坑5227から出土した。5 B段階の遺構である。

石21は小型で、体部・口縁部・鏝を丁寧に削り出して6弁の輪花形に仕上げる。内面は極めて平滑で炭化物が付着する。2区土坑2397から出土した。7～8段階の遺構である。

石22は小型で、鏝は低い。2区土坑4314から出土した。7段階に属する。

石23は中型で、体部は内弯して立ち上がる。2区土坑2755から出土した。7段階の遺構である。

石24は中型で、体部は屈曲して直立気味に開く。外面は縦方向に細かく削る。2区第2面から出土した。

石25は大型で、体部は直線的に大きく開く。外面は粗く面取りしたのち縦方向に細かく削る。2区土坑2874から出土した。7段階の遺構である。

硯（図版175・252 石26～石32） 石26は長方形の小型品で、縦半分を欠損する。陸部底面は削り込み、側面は外開きに立ち上がる。表面は研磨するが、一部に鋸目が残る。陸部は使用痕により楕円形に凹む。石質は黒色の粘板岩である。1区井戸668から出土した。5～6段階の遺構である。

石27は長方形の小型品で、陸部側を欠損する。底面は平坦で、側面は外開きに立ち上がり、海部は独立した小判形のくぼみとなる。表面の仕上げは粗い。石質は暗灰色の粘板岩である。2区土坑2525から出土した。7段階の遺構である。

石28はやや台形で、海部側を大きく欠損する。底面は平坦で、側面はわずかに外開きで立ち上がるが、縁部はすべて欠損する。表面の仕上げは粗く、一部に鋸目が残る。陸部は使用痕により楕円形に凹む。石質は暗灰色の粘板岩である。2区第3面検出中に出土した。

石29は小判形の小型品で、ほぼ完形である。底面は平坦で、側面は外開きに立ち上がり、上面は

陸部・海部を丸みのある入隅形に成形する。陸部は使用痕によりわずかに凹む。石質は灰色の粘板岩である。1区第1面検出中に出土した。

石30はやや台形で、ほぼ完形である。陸部底面は浅く割り込み、側面は外開きに立ち上がるが、縁部はすべて欠損する。海部は浅く、陸部に穴を穿つ。石質は灰色の粘板岩である。1区土坑580から出土した。6B段階の遺構である。

石31は長方形で、陸部を欠損する。底面は平坦で、側面は直立するが、縁部はすべて欠損する。上面は研磨するが、他の表面の仕上げは粗い。陸部は使用痕により凹む。石質は暗灰色の粘板岩である。石32は長方形で、海部を欠損する。陸部底面は凹面に成形し、側面はわずかに外開きで立ち上がる。上面は研磨するが、他の表面の仕上げは粗い。石質は灰赤色の粘板岩である。石31・石32はともに2区井戸2319から出土した。7段階の遺構である。

不明石製品（図版175 石33・石34） 石33は上面が弯曲する棒状で、底面と一方の端面は平坦に仕上げ、もう一端及び両側は欠損する。上面には黒漆を塗る。用途不明品である。石質は灰赤色の砂岩である。2区柱穴2079から出土した。7～8段階の遺構である。

石34は板状の破片である。底面は平坦で、側面は直立する。上面は細長い凸部を成形する。表面は全面を研磨する。用途不明品である。石質は赤褐色の緻密な粘板岩である。3区土坑7749から出土した。6～7段階の遺構である。

砥石（図版175・252 石35～石48） 石35は方柱形で、両端及び底面が欠損する。上面は使用痕により浅い凹面となる。石質はにぶい橙色の粘板岩である。2区土坑2185から出土した。10段階の遺構である。

石36は板状の破片で、上面は使用痕により浅い凹面となる。石質は淡黄色の粘板岩である。2区土坑4142から出土した。6～7段階の遺構である。

石37は方柱形で、両端が欠損する。側面の4面とも使用痕により平滑となる。石質は白色の凝灰岩である。2区土坑4334から出土した。6～7段階の遺構である。

石38は方柱形で、一端が欠損する。側面の3面が使用痕により平滑となる。石質は灰色の緻密な砂岩である。2区土坑4460から出土した。6段階の遺構である。

石39は扁平な長方形で、一端が欠損する。上下面は使用痕により平滑となる。石質は灰白色の粘板岩である。2区井戸4250から出土した。6段階の遺構である。

石40は割材を利用した不整形な板状である。上下面は使用痕により平滑となる。石質は灰色の肌理の粗い砂岩である。2区土坑3278から出土した。6段階の遺構である。

石41～石48は、断面半円形の溝状のくぼみを持つ玉を研磨した砥石である。石41は扁平な自然石の片面に平行する2条のくぼみを持つ。石質は閃緑岩である。3区井戸6264から出土した。江戸時代の遺構である。

石42は扁平な石材の上下面に各3条の溝、石43は底面が曲面の石材の上面に1条のくぼみを持つ。ともに一方の側面は鋸目が残り、くぼみは浅く途切れている。石質はにぶい橙色の粘板岩である。石42は3区池7479から出土した。9段階の遺構である。石43は3区溝6250から出土した。江

江戸時代の遺構であるが、室町時代以前の遺物である。

石44～石47は、いずれも扁平な石材で、上面もしくは上下両面に1条から4条のくぼみを持つ。くぼみは浅く途切れている。石質は淡黄色の軟質の粘板岩である。石44・石45は2区土坑2525から出土した。7B段階の遺構である。石46・47は3区土坑7776から出土した。元は同一個体で2つに割れてから別々に玉の砥石として使用している。9段階の遺構である。

石48は角柱形で、両端が欠損する。側面の2面が使用によりくぼんでおり、その内の1面に2条のくぼみを持つ。くぼみは浅く途切れている。石質は凝灰岩である。2区第2層から出土した。

石臼（図版176 石49～石52） 石49～石51は茶臼である。石49は茶臼の受部の破片で、中心側・両側の3面を切断して成形する。切断面は鋸目が残し、表面の仕上げは茶臼成形段階のままである。用途不明品である。石質は灰色の変成岩である。2区土坑2816から出土した。7～8段階の遺構である。

石50は茶臼の下臼で、周囲に受部を成形し、中央を穿孔する。底面及び穿孔下半部は打ち欠いたままで、他の表面は研磨する。擦目は8分割で溝は浅い。石質は暗灰色の斑レイ岩である。3区機械掘削中に出土した。所属時期は不明である。

石51は茶臼の下臼で、受部は欠損し、中央を穿孔する。底面及び穿孔下半部は打ち欠いたままで、他の表面は研磨する。擦目は8分割で溝はやや深い。底面に「□□菴」の墨書がある。石質は灰色の緻密な砂岩である。2個体に分かれて3区土坑6215・土坑6216から出土した。江戸時代の遺構である。

石52は石臼の下臼で、半分を欠損する。上面は平坦で、中央を穿孔する。表面の仕上げは粗い。また、擦目は8分割で粗い。石質は花崗岩である。1区井戸71から出土した。江戸時代の遺構である。

石塔（図版177 石53～石55） 石53・石54は一石五輪塔の破片で、石53は空輪・風輪の部分、石54は火輪・水輪の部分である。石53は欠損が多く、仕上げは粗い。石質は砂岩である。3区第1層から出土した。江戸時代以前に属する。石54は仕上げは丁寧で、それぞれ「ラ」「バ」の種字を刻み、一部に金泥が残る。石質は暗灰色の斑レイ岩である。1区土坑344から出土した。12段階の遺構である。

石55は五輪塔の水輪である。側面の仕上げは丁寧で、上下の部材と重ね合わせる部分を浅く窪める。石質は花崗岩である。3区土坑6220から出土した。江戸時代の遺構である。

不明石材（図版177 石56～石61） 石56～石58は凝灰岩の破片である。石56・石57は小破片であるが、1面もしくは2面を平滑に仕上げ、石56は角を丸く面取りする。石57は平滑な面が被熱により赤橙色に変色する。ともに3区流路9400から出土した。5段階に属する。石58は直方体で6面すべてが平滑である。3区土坑6289から出土した。6段階の遺構である。

石59～石61は断面が不整形な多角形の角柱形で、いずれも両端が欠損する。石59は小型で断面は不整形な八角形に復元できる。全面が被熱により灰色、赤橙色に変色する。1区土坑406から出土した。6段階の遺構である。石60・石61は表面が被熱により黒色、赤橙色に変色し、一部は剥

離する。石60は3区井戸8204から出土した。7段階の遺構である。石61は2区地業4900から出土した。8A段階の遺構である。なお、石58～石61の石質は不明である。

石56～石61は用途不明品であるが、火災の痕跡を示すものが多いことなどから、建築部材の一部であったと推測する。

建築部材（図版177・178 石62～石65） いずれも方柱形で両端が欠損する。石62は上面に歪な箱形の溝を加工する。石質は花崗岩である。石63・石64は2面を平坦に仕上げる。石質は花崗岩である。石62・石63は3区井戸6222、石64は3区井戸6654から出土した。いずれも19世紀の遺構である。建物基壇の建築部材と推測する。

石65は2面を平坦に仕上げるが、表面は被熱により黒く変色する。石質は花崗岩である。3区井戸7896から出土した。9～10段階の遺構である。建物基壇の建築部材と推測する。

墓石（図版179 石66） 完形品で、上面・前面・両側面を肺炭に仕上げ、上面に隅丸長方形の水溜を加工する。石質は黒斑がある花崗岩である。3区井戸6222から出土した。19世紀の遺構である。

礎石（図版179 石67・石68） 石67は小ぶりで上面は窪む。上面の周縁部は被熱により赤橙色に変色する部分がある。柱材が焼失した際の痕跡と推測する。石質は黒斑がある花崗岩である。3区柱穴9228に据え付けられていた。8段階の遺構である。

石68は自然石の平坦な面を上面としている。上面の周縁部は被熱により一辺約18cmのススの痕跡、その外側は赤橙色に変色する部分がある。柱材が焼失した際の痕跡と推測する。石質は花崗岩である。3区柱穴8028に据え付けられていた。6段階の遺構である。

軸石（図版179 石69～石71） 椀形の窪みを加工する扉の軸石である。石69は4分の1片の破片で、上面・側面を粗く成形し、くぼみは丁寧にする。石質は花崗岩である。3区井戸6375の石組に転用されていた。10段階以前に属する。

石70は半分の破片で、くぼみのみ丁寧に加工する。石質は閃緑岩である。2区井戸5665の石組に転用されていた。7段階以前に属する。

石71は半分の破片で、くぼみのみ丁寧に加工する。石質は花崗岩である。3区井戸6125の石組に転用されていた。10段階以前に属する。

6. ガラス製品

ガラス製品にはガラス玉がある。所属時期については共伴する出土土器の年代、遺構の層位に基づいて記述した。

ガラス玉（図16 ガラス1～ガラス5） ガラス1は、小さな球形で半分を欠き、中央に孔が貫通する。透明な黄色の鉛ガラスである。2区土坑2501から出土した。7段階の遺構である。

ガラス2は、小さなやや扁平な球形の完形品で、中央に孔が貫通する。水色で微量の銅・鉄を含む鉛ガラスである。3区第1面検出中に出土した。

ガラス3は、ほぼ球形で半分を欠き、中央に孔が貫通する。白色と青色の部分が混じり、微量の銅・鉄を含む鉛ガラスである。1区第2面検出中に出土した。

ガラス4は、ほぼ球形で半分を欠き、中央に孔が貫通する。透明な水色で表面の一部が白濁し、微量の銅・鉄を含む鉛ガラスである。1区柱穴474から出土した。7～8段階の遺構である。

ガラス5は、大ぶりの球形の完形品で、中央に孔が貫通する。半透明の黄色で表面の一部が白濁し、微量の銅と鉄を多く含む鉛ガラスである。2区第1面検出中に出土した。

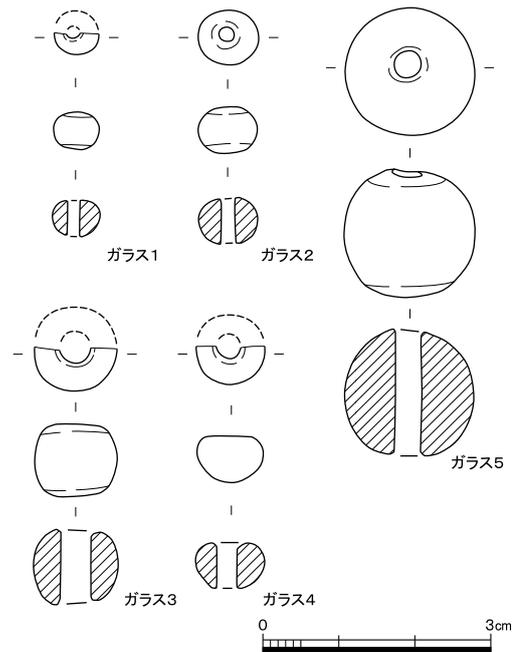


図16 ガラス製品実測図（1：1）

7. 金属製品

金属製品には銅製品・鉄製品・金属滓がある。所属時期については共伴する出土土器の年代、遺構の層位に基づいて記述した。なお、銅製品及び金属滓の分析成果については、付章2に北野信彦氏による論考を掲載している。

(1) 銅製品

銅製品には鋌・飾金具・針金・金具・刀子柄・蠟燭立て・容器・香炉・托・輪形金具・板状金具・棒状製品・銭貨などがある。小型で破損している個体多いため、用途不明品が多い。

鋌（図版180・253 金1～金5） 金1は、笠部は薄く、笠部周縁は欠損しており、本来の平面形は楕円形もしくは丸菱形と推測する。軸部は断面円形で先端は欠損する。文様は不明瞭であるが、羽を広げた鳥を陽刻しているようである。鍍金は確認できない。3区土坑8020から出土した。7A～B段階の遺構である。

金2は、笠部は肉厚で湾曲し、軸部は断面円形で根元から欠損する。鍍金は確認できない。2区柱穴4111から出土した。7A段階の遺構である。

金3は、笠部は肉厚で湾曲し、軸部は断面方形で先端は欠損する。軸部には厚さ約5mmの板材が付着する。鍍金は確認できない。2区柱穴5571から出土した。5～6段階の遺構である。

金4は小型の完形品で、笠部は凸レンズ形で、軸部は断面方形で先端は尖る。笠部のほぼ全面に鍍金もしくは金箔貼りを施す。2区土坑5728から出土した。5段階の遺構である。

金5は完形品で、笠部は肉厚で、平面形は丸菱形である。軸部は断面方形で長く、先端はやや細くなる。鍍金は確認できない。3区第2面検出中に出土した。

飾金具（図版180・253 金6～金11） 金6は4弁の花弁形の薄板で、中央に隅丸方形の穿孔が

ある。全面に鍍金もしくは金箔貼りを施す。鋌頭を受ける座金と推測する。2区第1面検出中に出土した。

金7は円形の薄板で、中央がくぼみ方形の穿孔がある。周縁の一部は欠損しており、穿孔の周りには円形の圧痕がある。鍍金は確認できない。鋌頭を受ける座金と推測する。2区第1面検出中に出土した。

金8は円柱状で、頭部上端は括れて宝珠状になる。頭部には沈線が1条巡り、下端は括れて、先端部は根元から欠損する。鍍金は確認できない。細長い金具あるいは火箸の頭部と推測する。3区第1層から出土した。

金9は円筒形の頭部上端に楕円形の環が付く。下端は欠損する。鍍金は確認できない。釣金具の一部と推測する。3区第1面検出中に出土した。

金10・金11は小破片で、接合できないが同一個体である。薄板を成形して宝相華文を表現しており、片面に鍍金もしくは金箔貼りを施す。瓔珞あるいは仏像の宝冠の一部と推測する。2区土坑3196から出土した。5～6段階の遺構である。

輪形金具（図版180・253 金12・金13） 金12は両端が欠損するが、一端の幅が広がるので正円形ではない。片面の外縁部に鍍金を施す。用途は不明である。2区土坑2645から出土した。7～8段階の遺構である。

金13は中央が盛り上がる肉厚の環状で、両端が欠損する。鍍金は確認できない。2区地業2700から出土した。7B段階の遺構である。

針金（図版180 金14） 全長は約30cmの針金を捩り合わせており、両端は尖る。環状になることから円柱状のものに括り付けたことがわかる。2区第1面検出中に出土した。

金具（図版180・253 金15・金16） 金15は完形品の鉤形の金具である。断面長方形の銅材を「コ」字形に折り曲げており、先端部はわずかに外反する。基部は段を形成して先細る。2区第1面検出中に出土した。

金16は完形品で、軸部は断面がほぼ円形で先端は「L」字形に屈曲する。基部は環状で、同じく環状に成形した釘部と連結する。鉤による留金具である。2区溝2075から出土した。8段階の遺構である。

棒状製品（図版180 金17～金23） 金17は薄い板状で、一部が剥離している。中央部は断面「く」字形で、両端は緩く括れて細くなる。用途は不明である。2区柱穴2110から出土した。6～7段階の遺構である。

金18は板状で、一端は丸みをおびてヘラ状となり、もう一端は欠損する。用途は不明である。3区土坑7335から出土した。8～9段階の遺構である。

金19は薄板状の環を捩じって棒状にする。用途は不明である。3区第2層から出土した。

金20は完形品で、両端が針状に細く尖る。用途は不明である。2区井戸4342から出土した。6C段階の遺構である。

金21は完形品で、細長い円柱形である。用途は不明である。3区溝7750から出土した。7段階

の遺構である。

金22・金23は完形品で、細長い角柱形である。金23は一端が尖る。用途は不明である。ともに2区土坑3501から出土した。6段階の遺構である。

刀子柄（図版180 金24） 薄い銅板を折り曲げて成形する。表面には文様はなく、わずかに黒漆が残存する。茎が遺存するが、柄に包まれているため詳細は不明である。3区土坑8172から出土した。7～8段階の遺構である。

板状金具（図版180 金25・金26） 金25は薄い銅板を折り曲げて成形する。角部の金具と推測する。3区土坑8627から出土した。6段階の遺構である。

金26は、一端は隅丸形に整えて中央に釘穴を穿孔する。もう一端は2箇所突起を作るが、先端は欠損する。開閉部の金具と推測する。3区第1層から出土した。

蠟燭立て（図版180・253 金27） 完形品で、細長い方柱形の材で環状の基部を成形し、軸部は折り曲げて高く立ち上がり、先端は尖る。3区第1層から出土した。

香炉（図版180 金28） 牙をむいた獣面を表現する。香炉脚の接合部の破片と推測する。銅・鉛を主成分とする青銅製の铸造品である。3区第1面検出中に出土した。

容器（図版180・253 金29） 完形品の小型の瓶である。体部は扁平で肩が張り、口縁部は短く直立して端部は肥厚する。3区井戸6992から出土した。7段階の遺構である。

托（図版180 金30） 欠損部が多いが、直径7cmに復元できる托である。高台は高く直立し、受部は断面三角形で小さく、端部は肥厚する。接合技法は不明である。3区土坑8172から出土した。7～8段階の遺構である。

銅銭（図版181 金31～金84） 銅銭はほとんどが中国の銭銘、国内で製作された皇朝十二銭は金32・金65・金66の3点のみである。

2区土坑5040から須恵器甕に埋納されて1049枚以上が出土した。多くは繒銭の状態で癒着している。6段階の遺物である。土坑5040から出土した銅銭を銭銘ごとに紹介する。

金31は唐の開元通寶である。初鑄は621年。重さ3.50 g。

金32は皇朝十二銭の神功開寶である。初鑄は765年。別の銅銭に癒着しているため、裏面及び単体の重さは不明である

金33は前蜀の光天元寶である。初鑄は918年。別の銅銭に癒着しているため、裏面及び単体の重さは不明である。

金34は北宋の淳化元寶の行書体である。初鑄は990年。重さ4.18 g。

金35は北宋の至道元寶の行書体である。初鑄は995年。重さ4.01 g。

金36は北宋の天禧通寶である。初鑄は1017年。重さ3.98 g。

金37は北宋の天聖元寶の真書体である。裏面に型ずれがある。初鑄は1023年。重さ3.66 g。

金38は北宋の天聖元寶の篆書体である。初鑄は1023年。重さ3.71 g。

金39は北宋の明道元寶である。初鑄は1032年。別の銅銭に癒着しているため、裏面及び単体の重さは不明である。

金40は北宋の皇宋通寶の真書体である。初鑄は1039年。重さ3.71 g。

金41は北宋の景德元寶である。初鑄は1044年。重さ3.87 g。

金42は北宋の至和元寶の真書体である。初鑄は1054年。重さ3.73 g。

金43は北宋の嘉祐通寶の篆書体である。初鑄は1056年。別の銅錢に癒着しているため、裏面及び単体の重さは不明である。

金44は北宋の治平元寶である。初鑄は1064年。重さ3.55 g。

金45は北宋の治平元寶の篆書体である。初鑄は1064年。別の銅錢に癒着しているため、裏面及び単体の重さは不明である。

金46は北宋の熙寧元寶の真書体である。初鑄は1068年。重さ3.68 g。

金47は北宋の熙寧元寶の篆書体である。初鑄は1068年。重さ3.97 g。

金48は北宋の熙寧元寶の篆書体である。金47とは字体が異なる。初鑄は1068年。重さ3.79 g。

金49は北宋の元豊通寶の真書体である。初鑄は1078年。重さ4.66 g。

金50は北宋の元豊通寶の真書体である。金49とは字体が異なる。初鑄は1078年。重さ4.07 g。

金51は北宋の元豊通寶の真書体である。金49・金50とは字体が異なる。重さ2.15 g。小さく軽いことから確実な模鑄錢である。

金52は北宋の元祐通寶の真書体である。初鑄は1086年。重さ3.57 g。

金53は北宋の元祐通寶の篆書体である。初鑄は1086年。重さ3.71 g。

金54は北宋の元祐通寶の篆書体である。金53とは字体が異なる。初鑄は1086年。重さ3.90 g。

金55は北宋の紹聖元寶の篆書体である。初鑄は1094年。重さ3.74 g。

金56は北宋の聖宋元寶の真書体である。初鑄は1101年。重さ3.14 g。

金57は北宋の聖宋元寶の篆書体である。初鑄は1101年。重さ3.48 g。

金58は北宋の政和通寶の真書体である。初鑄は1111年。重さ3.57 g。

金59は北宋の政和通寶の篆書体である。初鑄は1111年。重さ3.75 g。

金60は南宋の淳熙元寶である。初鑄は1174年。重さ3.77 g。

金61は南宋の紹熙元寶である。初鑄は1190年。別の銅錢に癒着しているため、裏面及び単体の重さは不明である。

金62は南宋の慶元通寶である。初鑄は1195年。別の銅錢に癒着しているため、裏面及び単体の重さは不明である。

金63は南宋の開禧通寶である。初鑄は1201年。別の銅錢に癒着しているため、裏面及び単体の重さは不明である。

次いで土坑5040以外の遺構から出土した異なる錢銘・字体の銅錢を紹介する。

金64は南宋の嘉定通寶である。裏面に「十」「一」の陽刻がある。初鑄は1208年。重さ4.10 g。2区柱穴4224から出土した。6～7段階の遺構である。

金65は皇朝十二錢の富寿神寶である。初鑄は818年。重さ2.29 g。2区柱穴3944から出土した。5～6段階の遺構である。

金66は皇朝十二銭の承和昌寶である。初鑄は835年。重さ1.75 g。2区土坑4637から出土した。2～3段階の遺構である。

金67は唐の乾元重寶である。初鑄は759年。重さ2.72 g。2区土坑2825から出土した。8～9段階の遺構である。

金68は唐の乾元重寶である。金67とは字体が異なる。初鑄は759年。重さ2.21 g。2区土坑5738から出土した。6～7段階の遺構である。

金69は北宋の太平通寶である。初鑄は976年。重さ3.11 g。2区土坑5738から出土した。6～7段階の遺構である。

金70は北宋の咸平元寶である。初鑄は998年。重さ3.96 g。2区第1面検出中に出土した。

金71は北宋の祥符元寶である。初鑄は1008年。重さ3.27 g。2区土坑5738から出土した。6～7段階の遺構である。

金72は北宋の天禧通寶である。金36とは字体が異なる。初鑄は1017年。重さ2.62 g。2区柱穴3127から出土した。6～7段階の遺構である。

金73は北宋の景祐元寶である。初鑄は1034年。重さ3.04 g。2区土坑2525から出土した。7 B段階の遺構である。

金74は北宋の皇宋通寶の篆書体である。初鑄は1039年。重さ3.83 g。2区第1面検出中に出土した。

金75は北宋の至和通寶である。初鑄は1054年。重さ3.36 g。2区土坑5738から出土した。6～7段階の遺構である。

金76は北宋の至和元寶の篆書体である。初鑄は1054年。重さ3.40 g。2区土坑5738から出土した。6～7段階の遺構である。

金77は北宋の嘉祐通寶の篆書体である。金43とは字体が異なる。初鑄は1056年。重さ3.47 g。2区土坑5738から出土した。6～7段階の遺構である。

金78は北宋の治平元寶の篆書体である。金45とは字体が異なる。初鑄は1064年。重さ4.06 g。3区第1面検出中に出土した。

金79は北宋の熙寧元寶の真書体である。金46とは字体が異なる。初鑄は1068年。重さ4.21 g。2区柱穴4224から出土した。6～7段階の遺構である。

金80は北宋の元豊通寶の真書体である。金49～金51とは字体が異なる。初鑄は1078年。重さ3.06 g。2区土坑3612から出土した。6段階の遺構である。

金81は北宋の元豊通寶の篆書体である。初鑄は1078年。重さ2.77 g。2区第1面検出中に出土した。

金82は北宋の元符通寶の篆書体である。初鑄は1098年。重さ2.63 g。1区土坑177から出土した。7段階の遺構である。

金83は北宋の大觀通寶の真書体である。初鑄は1107年。重さ3.17 g。2区第1面検出中に出土した。

金84は北宋の宣和通寶の真書体である。初鑄は1119年。重さ2.99 g。2区土坑2525から出土した。7 B段階の遺構である。

(2) 鉄製品

鉄製品には鋏・釘・鋸・金具・把手・刀子・又鋏・板状製品などがある。錆により破損・変形した個体が多いため、形状がわかる遺物を掲載した。

鋏(図17 金85・金86) ともに笠部は分厚く、軸部は断面方形で先端が細くなる。金85は3区土坑8733から出土した。3段階の遺構である。金86は3区柱穴7408から出土した。6～7段階の遺構である。

釘(図17 金87・金88) 金87は、頭部は環状で、軸部は断面方形で先端が欠損する。3区井戸8917から出土した。6段階の遺構である。

金88は、頭部は折り曲げて扁平となり、軸部は折れ曲がっているが、断面長方形で先端が尖る。3区柱穴7612から出土した。7段階の遺構である。なお、この形状の鉄釘は平安時代から江戸時

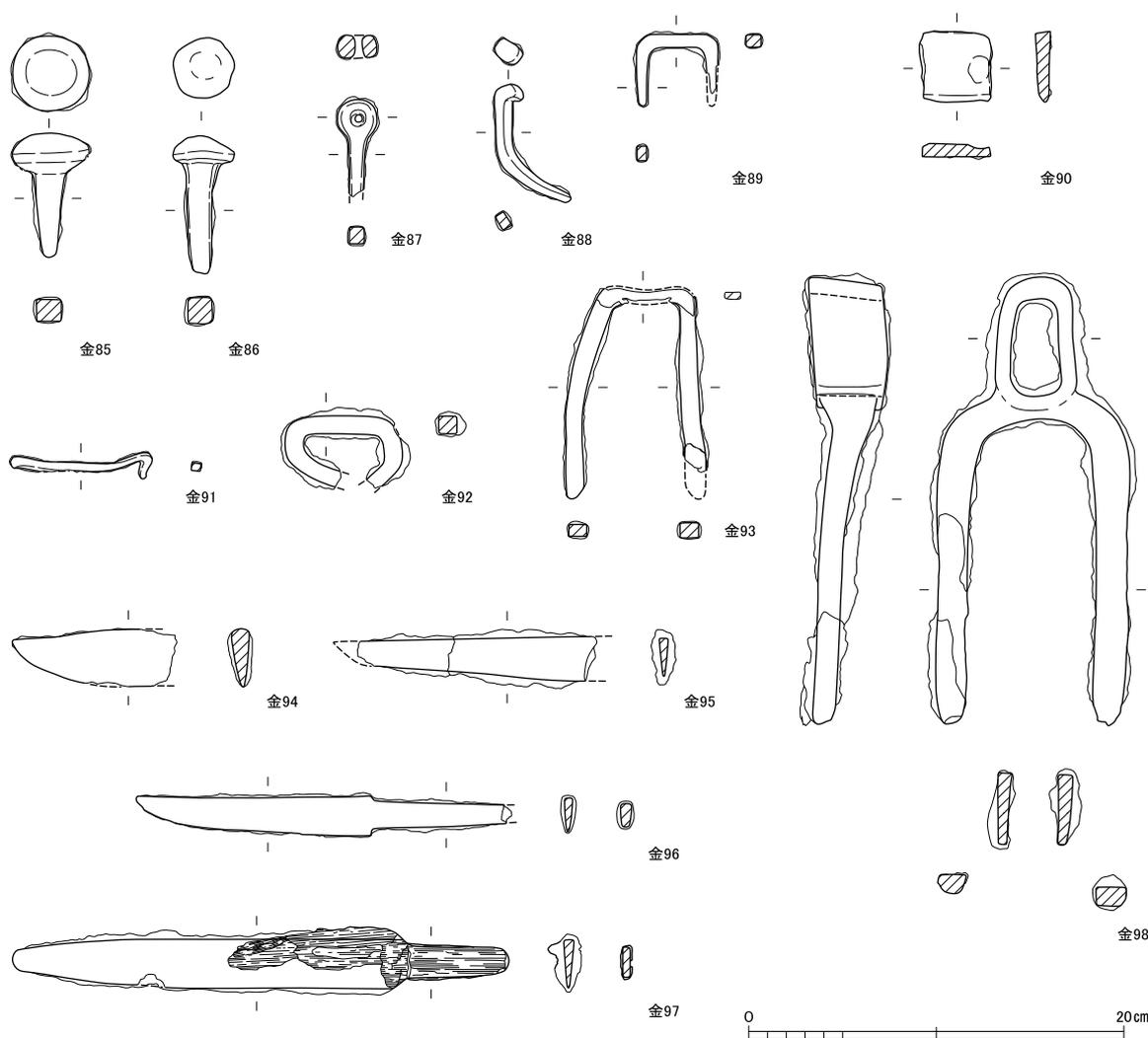


図17 鉄製品実測図 (1 : 4)

代の遺構から多数出土している。

鋸（図17 金89）小振りの鋸である。断面長方形の鉄材を「コ」字形に折り曲げており、両端は尖る。3区土坑7691から出土した。6～7段階の遺構である。

板状製品（図17 金90）ほぼ正方形で一辺が尖る。楔の可能性ある。3区土坑8458から出土した。5段階の遺構である。

金具（図17 金91）軸部は断面方形で先端は強く屈曲して尖る。鉤による留金具としての用途を考えている。3区井戸7334掘形から出土した。7段階の遺構である。

把手（図17 金92・金93）金92は断面方形で、楕円形に屈曲する。2区土坑4239から出土した。6～7段階の遺構である。

金93は断面長方形の鉄材を「コ」字形に折り曲げており、一端は欠損する。3区土坑9379から出土した。1段階の遺構である。

刀子（図版253、図17 金94～金97）金94は先端部の破片である。刃幅・峰幅が広いので、刀の切っ先の可能性ある。2区柱穴3606から出土した。6段階の遺構である。

金95は先端・基部を欠損する。1区土坑493から出土した。5～6段階の遺構である。

金96は、茎は長い。3区柱穴6789から出土した。共伴遺物が少ないが、7～8段階の遺物と推測する。

金97は切っ先の反りが無い。1区井戸517井戸枠内から出土した。付着している木質は最下部の横棧である。出土状況から祭祀に使用された可能性が高い。5～6段階の遺構である。

又鋤（図版253、図17 金98）刃部は二又で柄に対してやや鋭角となり、先端は尖る。3区井戸7240から出土した。江戸時代の遺構である。

（3）金属滓

金属滓には、銅滓・鉄滓がある。銅滓の多くには微量の鉛・ヒ素が含まれる。鉄滓は鉄の純度が高く、不純物は少ない。

銅滓（図18 金99～金105）金99は金が付着する銅滴である。3区土坑7602から出土した。7段階の遺構である。

金100～金104は小粒の塊状である。金103は銅の純度が高い。金100は2区土坑4383から出土した。7～8段階の遺構である。金101は2区土坑3252から出土した。6～7段階の遺構である。金102は3区井戸8413から出土した。5段階の遺構である。金103は1区土坑17から出土した。6段階の遺構である。金104は3区第1層から出土した。

金105は気泡が多い個体である。銅以外に鉛・鉄の割合が多い。3区第2層から出土した。

鉄滓（図19 金106～金111）いずれも塊状である。金111は椀形滓の可能性ある。金106は2区土坑3196から出土した。5～6段階の遺構である。金107は2区土坑3414から出土した。6～7段階の遺構である。金108は2区土坑2692から出土した。8段階の遺構である。金109は2区柱穴4593から出土した。6段階の遺構である。金110は2区柱穴3881から出土した。5～6段階

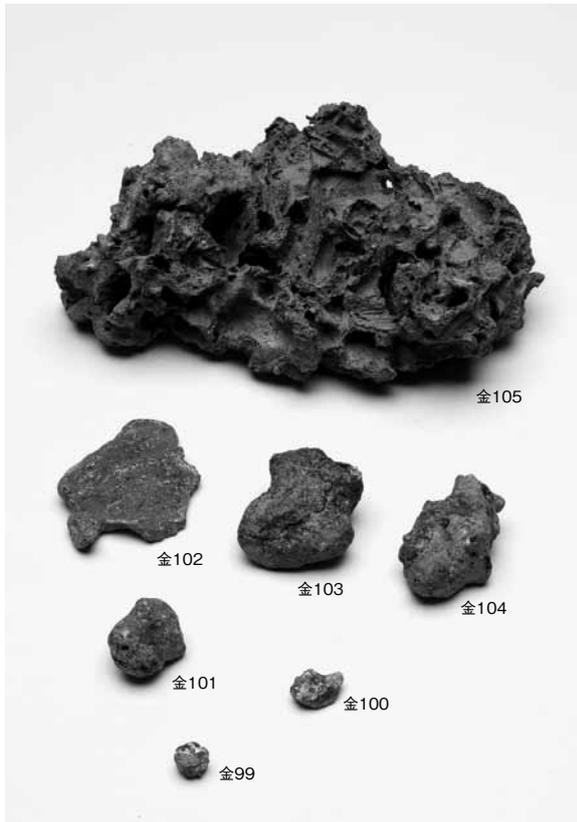


図18 銅滓

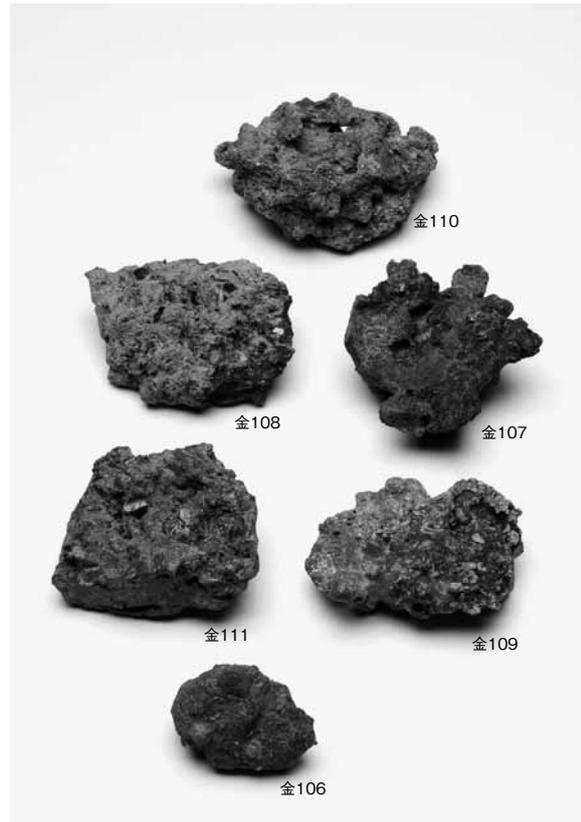


図19 鉄滓

の遺構である。金111は2区土坑3150から出土した。6～7段階の遺構である。

8. 木製品

木製品には人形代・塔婆・曲物・漆器椀・箸・付木・加工材・柱根・柱材・井戸枠・焼け材・杭などがある。木製品は腐朽のため遺存状況はよくない。また、漆が付着した布や紙もこの項で報告する。所属時期については共伴する出土土器の年代、遺構の層位に基づいて記述した。

人形代（図版182・254 木1） 人物の側面像をかたどった板状の人形代である。首は細くくびれ、鼻・あごは鋭く、頭には烏帽子をかぶっているのが男性を表現していることがわかる。烏帽子部分には墨が残る。下部には切込みを入れるが、用途は不明である。樹種はスギである。2区土坑5227から出土した。5B段階の遺構である。

塔婆（図版182・254 木2） 薄い板状の小型の塔婆である。基部は尖り、長側面両側から欠き込みを入れて五輪塔を表現しようとするが、加工は稚拙で左右非対称である。樹種はヒノキである。2区土坑5227から出土した。5B段階の遺構である。

木簡（図版182・254 木3） 薄い板状の木簡である。樹種はヒノキである。2区土坑5227から出土した。両面に墨痕があるが判読できない。5B段階の遺構である。

曲物（図版182 木4） 小型で深めの曲物である。底板表面・裏面は割ったままで、端寄りの1箇所には削り込みと穿孔がある。側面の加工は粗く、少し傾きを付けて円形に仕上げる。目釘穴はな

い。側板は破損しており、底板と分離している。厚さ約1mmで、板材を曲げるための切目はない。底板の加工痕から柄杓と推測する。樹種は底板がヒノキ、側板がスギである。3区井戸8496から出土した。5段階の遺構である。

漆器椀（図版182、図20 木5・木30～木32） 木5はロクロ成形で、底部外面を除く内外面に黒漆を塗る。木地は厚めで、漆は薄くロクロ目が目立つ粗製品である。樹種はケヤキである。2区土坑5227から出土した。5B段階の遺構である。

木30～木32は漆膜のみが残る。いずれも内面に朱漆、外面に黒漆を塗り、高台内に朱漆で文字を書く。木32は「黄」と読めるが、ほかの2点は判読できない。木30が3区土坑6653、木31・木32が3区井戸8480から出土した。いずれも9段階の遺構である。

箸・付木（図版182・253 木6～木11） 木片を粗く割った細長い棒状の製品である。木9以外は両端もしくは一端が欠損するが、端部を細く成形することから箸と判断した。木10は一端が炭化して焦げていることから火種として使用したことがわかる。樹種は木6・木8・木10・木11がヒノキ、木7がヒノキ科、木9がスギである。木6・木7は3区土坑7518から出土した。5段階の遺構である。また、木8～木11は3区井戸8551から出土した。8段階の遺構である。

加工材（図版182・254・255 木12～木14） 木12は湾曲する角柱状の加工材である。片面は平坦、上面・側面の仕上げは丁寧で、稜を緩く面取りして断面半円形状に仕上げるが、一端に向けて厚みが薄くなる。2箇所穿孔があることから平坦な面を別の部材と結合したと考えられる。引戸の把手のような使用法を推測する。樹種はヒノキ科である。3区井戸6375から出土した。10段階の遺構である。

木13は上面の一辺を断面半円形に盛り上げた板状の加工材である。下面は平坦な割目のままで、両小口面は鋸による切断痕が残るが、仕上げの加工はない。上面は平滑に仕上げる。何かの部材の一部と考えるが、用途は不明である。樹種はスギである。3区井戸8400から出土した。2段階の遺構である。

木14は板状の加工材角部の破片である。下面の加工は粗く、小口面の稜は面取りする。上面・側面は平滑に仕上げる。上面には木目に直行して幅4.3cmの浅い溝を加工し、溝幅中央を穿孔して楕円形の木釘を斜めに打ち込む。下面を別の部材と結合したと考えるが、用途は不明である。樹種は



図20 漆器椀

スギである。3区井戸8454から出土した。4段階の遺構である。

柱根(図版182・255 木15・木16) 木15は、底面・上面は手斧ではつった粗い加工痕、側面は1面のみ平滑に仕上げるが、他の3面は割目のままである。大きな角材を切断したものと推測する。樹種はヒノキである。

木16は、底面は鋸による切断痕、側面は直径約12cmの円柱を割った状態であるが、全体に焼損して炭化している。樹種はアスナロである。木15・木16は、ともに3区土坑8458の柱材である木29の南側に並べて据えた状態で出土した。5B段階に属する。

柱材(図版255 木28) 土坑8458に据え付けられた柱材である。長径約32cm、短径約27cmで、底面は手斧ではつって丸底状に加工する。側面には加工痕はなく、腐朽により上端は先細りし、芯は中空となる。樹種はヒノキ属で、共伴する土器は5B段階である。表皮は残存していなかったが、酸素同位体比年輪年代分析及び放射性炭素年代測定を実施したところA.D.800頃という成果を得た。¹⁶⁾

井戸枠(図版183 木17～木21) 最も遺存状態が良かった3区井戸8474の部材を報告する。木17・木18は横棧である。木18は直径約7.5cmの樹皮を剥いた丸木を半裁して、両端に柄を加工する。一方の小口面は鋸で切断、もう一方の小口面は鉋で切り落としており、側面には2次加工はない。柄は側面より鋸で切目を入れて縦方向に割り取って成形する。樹種はスギである。

木18は歪みが大きい角材で、一端の柄受けが遺存する。側面は方形に割ったのみで2次加工はない。柄受けは鑿による加工痕が残る。樹種はモミ属である。

木19は隅木である。断面はほぼ正方形の角材で側面の2方向から柄穴を穿つ。腐朽により上端は先細りする。小口面は鋸で切断、4側面は割ったあとを手斧で粗く成形する。柄穴は鑿で加工する。樹種はコウヤマキである。

木20・木21は縦板である。細長い板材で下部には方形の穿孔がある。腐朽により上端は先細りする。表裏面は割ったあと手斧で粗く加工、側面は比較的丁寧に手斧で加工、小口面は鉋で切り落とす。穿孔は両面から鑿によって小刻みに加工する。樹種はともにヒノキである。井戸8474から出土した土器は少ないが、重複する他の遺構との関係から5段階の遺構と推測する。

なお、遺構実測図を掲載した他の井戸の一部で、井戸枠の樹種を同定することができたので分析結果を合わせて報告する。

3区井戸8421では、横棧・縦板ともスギである。5B段階の遺構である。

3区井戸8436では、側板がスギである。5～6段階の遺構である。

3区井戸8242では、縦板がコウヤマキである。6～7段階の遺構である。

3区井戸8460では、横棧がスギ、縦板がヒノキである。5段階の遺構である。

3区井戸8470では、横棧・縦板がスギ、隅木がコウヤマキである。4段階の遺構である。

3区井戸8480では、横棧・隅木・縦板いずれもスギである。9段階の遺構である。

3区井戸9207では、横棧・縦板ともスギである。2～3段階の遺構である。

3区井戸9215では、東西南北4辺の縦板はいずれもモミ属である。6段階の遺構である。

焼け材（図版256 木29） いずれも原形を留めない状態まで焼損して炭化している。火災の痕跡を如実に示す遺物である。樹種は広葉樹で、細目の同定は不能であった。3区土坑7415から出土した。8A段階の遺構である。

漆が付着した布や紙（図版254 木22～木27） 木22～木26は漆が付着した麻布である。木22～木24は漆を濾すために絞ったもので、木22は棒を通して振じった状態がよくわかる。木25は折りたたまれた状態、木26は平坦な状態である。木27は漆が付着した紙で、漆の乾燥を防ぐ落し蓋に使用された可能性がある。墨書痕は認められなかった。木22は3区土坑8627から出土した。6B～C段階の遺構である。木23～木27は3区土坑8852から出土した。同じく6B～C段階の遺構である。

杭 3区土坑8409周辺で流路9400埋土に刺さった状態の杭を6点採集した。樹種は5点がヒノキ科・ヒノキ属、1点がスギである。

9. 動植物遺体（図版256）

動物遺体 動物遺体の同定や分析については、付章3に丸山真史氏による論考を掲載している。

哺乳類ではウマ・ウシ（骨1）・シカ・イヌ（骨2）・ネコ（骨3）・サル（骨4）の骨、鳥類ではニワトリ（骨5）の骨、魚類ではマダイの骨、貝類ではサザエ・アカニシ（骨6）・ハマグリ（骨7・8）の貝殻が出土している。

植物遺体 木製品と同様、遺存状況がよくない。土壌サンプルとして井戸の埋土など採集して水簸したが、少量のモモの種子を確認したのみである。

10. その他の出土遺物

上記以外の出土遺物として焼土塊・焼土粒と炭片がある。

焼土塊・焼土粒 橙色から黄橙色、にぶい赤褐色の色調を呈する。大きなものは握り拳程度の大きさがありスサに用いられた植物体の痕跡が観察できる。蛤御門の変（1864）にともなう大火の火災処理土坑から出土した。しかし、大部分は直径1cm以下の細粒に砕けていた。

炭片 各時代の遺構・包含層から出土した。細片のため樹種の同定は実施していない。

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年。

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B

- 2) 平安時代中期から後期以降、灰釉陶器は施釉される個体が減少し、自然釉がかかるだけの無釉化が進む。これらは「山茶碗」と呼称されるが、灰釉陶器との系譜関係を明確にするため本書では「灰釉系陶器」の用語を使用する。鎌倉時代以降、意図的に灰釉・鉄釉を施釉する個体については「施釉陶器」とする。
- 3) 森島康雄「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年。以下、瓦器碗の分類については、これに依拠する。
- 4) 尾野善裕氏に御教示いただいた。
- 5) 中野晴久「国産陶器の系譜と歴（ママ）年代－常滑・渥美窯を中心として－」『第36回中世土器研究会 国産陶器の系譜と暦年代』日本中世土器研究会 2018年。以下、常滑産焼締陶器の分類については、これに依拠する。
- 6) 中世土器研究会による検討会で御教示を受けた。
- 7) 重根弘和「備前－分類と分布－」『第36回中世土器研究会 国産陶器の系譜と暦年代』日本中世土器研究会 2018年。以下、備前産焼締陶器の分類については、これに依拠する。
- 8) 續伸一郎氏に御教示いただいた。
- 9) 畑中英二「信楽－系譜と暦年代－」『第36回中世土器研究会 国産陶器の系譜と暦年代』日本中世土器研究会 2018年。
- 10) 853～855の産地については續伸一郎氏に御教示いただいた。
- 11) 『平安京左京八條三坊二町 平安京跡研究調査報告第6輯』財団法人古代学協会1983年。
加島進編『日本の美術 No.64 刀装具』至文堂 1971年。
日本刀匠会『写真で覚える日本刀の基礎知識』テレビせとうちクリエイト 2006年。
杉浦良幸『日本刀ハンドブック』里文出版 2010年。
- 12) 網伸也「和鏡鑄型の復元的考察－左京八条三坊三町・六町出土例を中心に－」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 13) 「鑄造遺跡研究会2019」にて参加者から御教示いただいた。
- 14) 『平安京左京八條三坊二町－第2次調査－ 平安京跡研究調査報告第16輯』財団法人古代学協会 1985年。
- 15) 木戸雅寿「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年。松尾秀昭『石鍋が語る中世 ホゲツト石鍋製作遺跡』新泉社 2017年。
- 16) 中塚武氏に分析していただいた。

第5章 まとめ

1. 遺跡の変遷

今回の調査では、調査地が所在する平安京左京八条四坊一町の歴史的な変遷について非常に多くの知見を得ることができた。

平安京造営前（図21） 調査で検出した最も古い遺構は3区流路9400である。1区・2区の堆積層の観察においても流路9400が第4面の下層に広がっていることを確認している。流路の底部は東に向けて緩やかに傾斜していることから鴨川の主流路西側の澱みの一つと考えられる。埋土下半部の堆積物の年代測定結果では4世紀なかば頃から6世紀はじめに堆積したことが明らかになった。流路9400の地理学的な観察結果については、付章1に小野映介氏の論考を掲載している。

流路9400埋土上半部の整地層や平安時代以降の遺構に混入して、微量ながら弥生時代から古墳時代中期の土器が出土しているが、注目すべき遺物に3区で出土した埴輪片（土1～4）がある。あまり摩耗しておらず、また、鱗付円筒埴輪片が含まれていることから、調査地の上流域に古墳時代前期の古墳の存在が推測できる。流路9400埋土を切り込む3区土坑8409は、機能は不明であるが、この時期の唯一の遺構である

流路9400が埋没する6世紀中頃以降になると各調査区で出土遺物が増加する。古墳時代後期の2区土坑1213からは、完形に近い須恵器杯類や土師器碗・甕などが出土した。奈良時代後期の3区土坑9379からは、土師器碗皿類・甕・鍋、須恵器杯類などが出土した。調査地を含めた周辺地域で奈良時代の遺構が見つかることは珍しい。また、遺構でまともまっているものの飛鳥時代の土器も一定の量が出土している。この時期の遺物には3区で出土したカマド片があることから、竪穴建物など直接の居住の痕跡は見つからなかったが、流路が埋没する地形環境の変化に合わせて近隣に集落が形成されたことがうかがえる。

平安時代前期から中期（図22） 延暦13年（794）、桓武天皇による平安京への遷都が行われた。調査地は平安京左京八条四坊一町の北半部にあっており、平安京の中では南東隅に近い位置になる。平安京の条坊復元では、3区北端部が七条大路南築地芯、3区西壁が東洞院大路東築地芯にあたるが、調査では側溝・築地・築地内溝といった条坊街路に関わる遺構や四行八門の区画に一致する遺構を検出することはなかった。

左京八条四坊一町北側を画する七条大路は、平安京の重要街路の一つとして平安時代前期から整備されていたことが明らかとなっているが、従来の見解では、平安京南東部周辺は鴨川の氾濫などによる地理的環境が悪いこともあって、居住地としての開発は平安時代後期頃にまで下がることも考えられていた。調査地周辺の調査成果をみても約150m西に位置する左京八条三坊九町南東部の調査（図10-32）で平安時代の園池が見つかった以外は、全体的に平安時代前期の遺構は少ない。

ところが、各調査区では流路9400埋土を母材とする厚さ約30cmの平安時代前期の整地層を広い

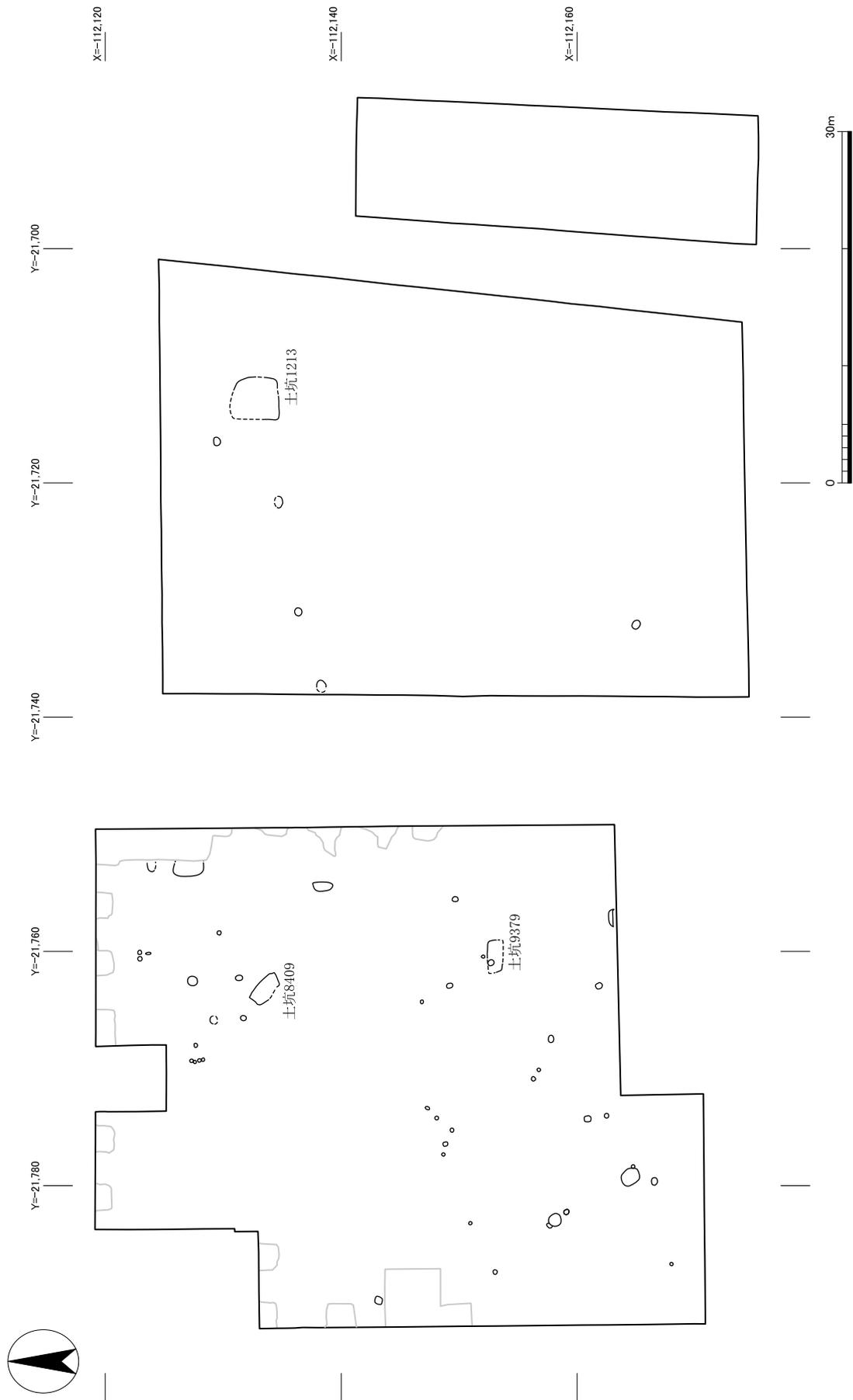


图21 遺構概要図1 (平安京造宮前 1 : 500)

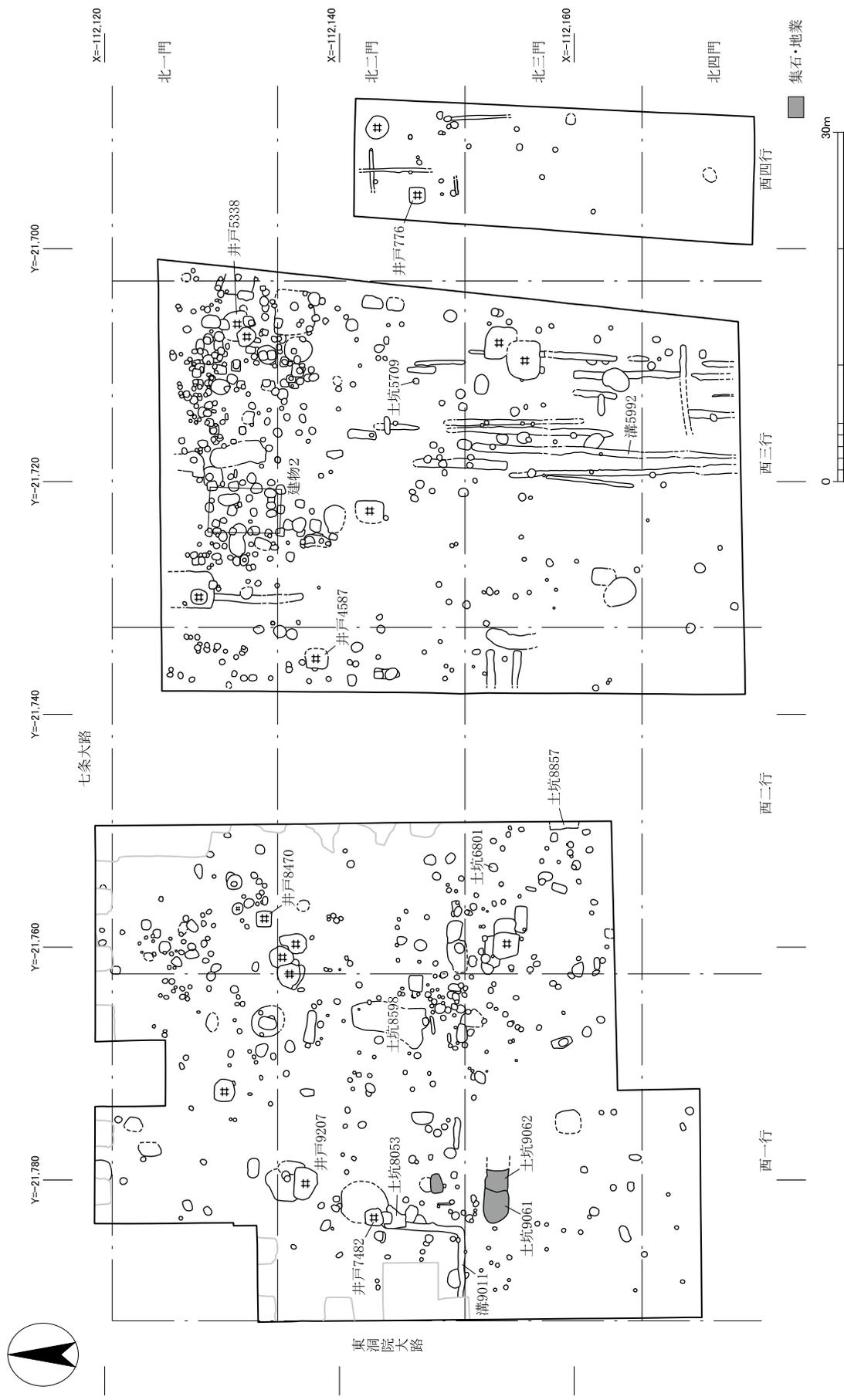


図22 遺構概要図2 (平安時代前期から中期 1 : 500)

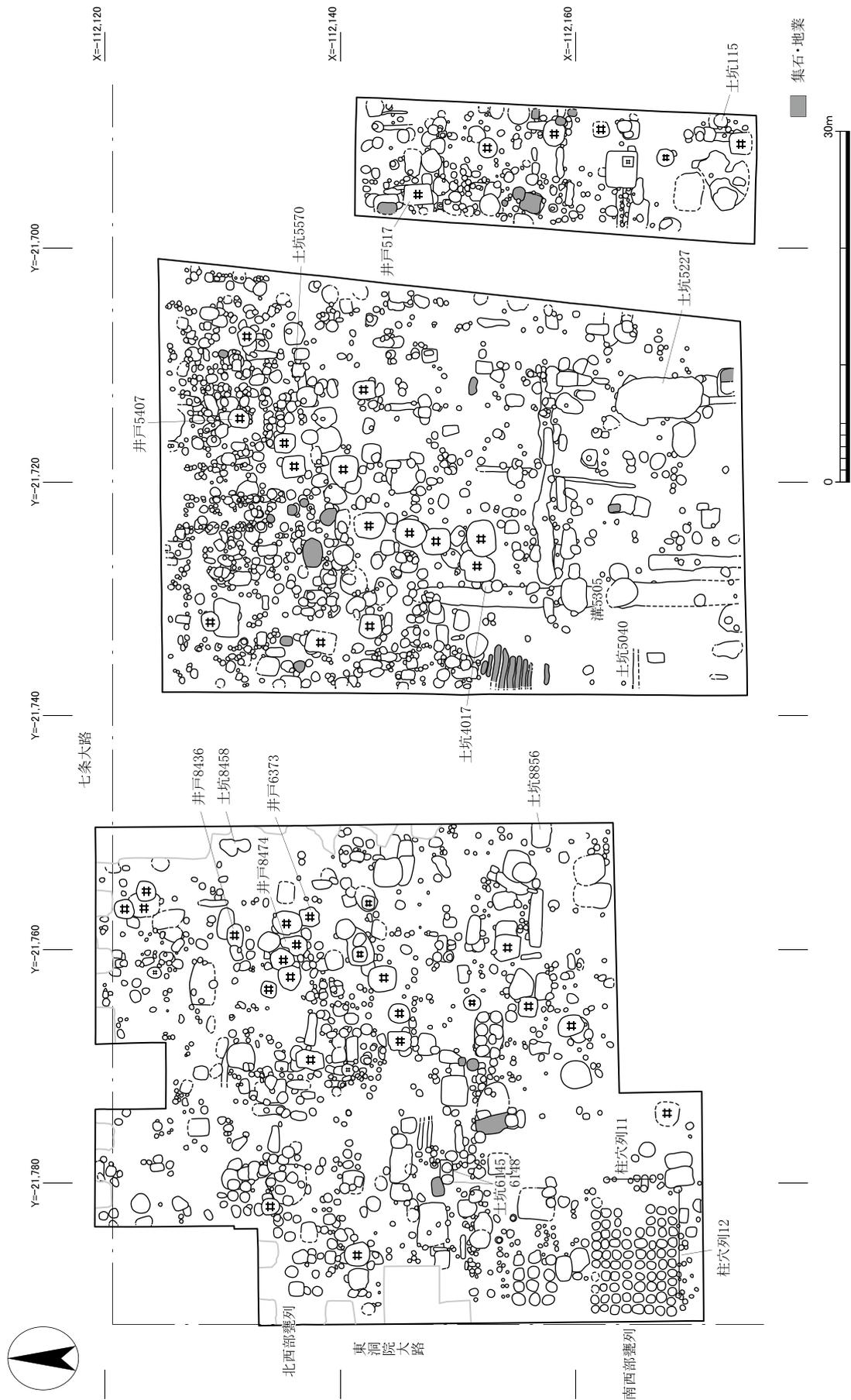


図23 遺構概要図3 (平安時代後期から鎌倉時代前半 1 : 500)

範囲で確認した。3区土坑8598からは9世紀前半の遺物がまとまって出土した。2区ではこの整地層上面で桁行3間×梁行2間の掘立柱建物2を検出しており、建物2東側にも多数の柱穴があることから、さらに複数の建物の存在を推測できる。柱穴からの出土遺物は9世紀後半が中心であることから、七条大路が構築されたのち街路近くに小規模な建物が造られたことになる。また、建物に付属する井戸は七条大路から約10～15mの位置に分布している。

平安時代中期にかけては礫を集積した3区土坑9061・9062や組み合わせて機能した3区井戸7482・土坑8053・溝9011のように東洞院大路近くでも建物に関連する遺構があらわれ、かつ、1区井戸776や埋納遺構である2区土坑5709、3区土坑6801など街区中心部分にも遺構がみられるようになる。2区南半部では溝5992の周辺に平行・直交する複数の溝を検出しており、これらは耕作地にもなう遺構の可能性もある。このように左京八条四坊一町では平安時代前期から中期にかけて継続して居住が行われており、時代が下がるにつれて街区中心部分へも土地利用が進展していく様子を知ることができる。

また、遺物に関しては周辺の調査と比較して、土師器の鍋釜類や軒瓦の出土量が多いこと、3区を中心にして「大伴」(瓦13)・「修」(瓦14・瓦15)の銘や「木工」(瓦114)の刻印を含む軒瓦が出土していることなど特徴的な状況を示している。これらについては十分な解釈ができていないが、何らかの遺跡の性格を反映している遺物であろう。

平安時代後期から鎌倉時代前半(図23) 調査で最も多くの遺構を検出、遺物が出土した時期である。調査地全体に1区・2区で第3層、3区で第2層とした厚さ20～40cmの大規模な整地が行われる。上面の標高は1区で約28.5m、3区で約28.4mで、ほぼ平坦にかさ上げが行われ、左京八条四坊一町の街区内部にまで遺構が高い密度で分布する。

とりわけ七条大路近くには小型の柱穴が多く分布しており、一棟一棟の建物の復元はできていないが、七条大路沿いに小規模な掘立柱建物が建ち並んでいた状況を推測できる。『年中行事絵巻』に描かれた景観を彷彿とさせる。ただ、この時期の七条大路に関連する遺構を検出していないことから、路面は調査区の北側に位置していたことになる。一方、東洞院大路沿いでは、3区南西部甕列が成立する。また、3区北西部甕列からこの時期の焼締陶器大甕が出土しており両者は併存していたことになる。酒屋の遺構と考えられ、東洞院大路沿いで大規模な酒の醸造が行われていたことが明らかとなった。なお、井戸は街路沿いだけではなく街区中心部にも分布しており、3区井戸6373・井戸8436・井戸8473のように近接して重複しているところもある。井戸の多くは流路9400の深部に位置しており、井戸の選地に旧地形の水脈が影響を与えたことがわかる。

また、2区土坑5227など2区を中心として金属製品生産に関連する鋳型・坩堝・鞆羽口・炉壁などが出土した。調査地西側の平安京左京八条二坊・三坊では平安時代後期から室町時代前期にかけて金属製品生産が活発に行われ、日本各地へ製品が供給されたことが推測されている。これら中心地から東側にあたる調査地周辺にまで金属製品生産が広がっていたこととなり、調査地東隣接地に推定されている七条仏所との関連も興味深い。このように調査地は平安京内の商工業地として活況を呈しており、2区土坑5040から出土した多量の銅銭は活発な経済活動を裏付ける遺物



図24 遺構概要図4 (鎌倉時代後半から室町時代前期 1 : 500)

である。

このほか3区土坑8856から多量の瓦や炭が出土したことにも注目できる。小振りな山城産の瓦で、二次焼成を受けて変色している(瓦71～75)。鎌倉時代前期に属することから、次に述べる金光寺が創建される前に小規模ながらも瓦葺きの建物があったことが推測できる。ほぼ同時期の播磨産、2区に多い讃岐産をはじめとする多数の瓦が出土しており、七条仏所との関わりを示唆する遺物として評価できるかもしれない。

鎌倉時代後半から室町時代前期(図24) 正安3年(1301)、当地に時宗の金光寺が創建される。この時期の寺域の範囲や建物の配置などについての記録はないため詳細な状況は不明である。しかしながら、この時期までに3区南西部の甕倉が廃絶していることや3区土坑8856から火災の痕跡を示す二次焼成を受けた瓦がまとまって出土していることなど、土地利用に変動があったことが推測できる。

金光寺の遺構としては、まず、2区地業2700がある。平面形が方形で入念な地盤改良を行っていることから中心となる基壇建物であろう。北西側で重複する位置にある2区建物1は、亀腹を構築して縁の束柱に礎石を据えた建物で、平面形の規模はほぼ一致している。一部の柱穴が地業2700を掘り込んでいるので基壇建物が建て替えられたと考えられる。2区地業2777や2区地業4900は、地業の構造は異なるが、いずれも創建後に造営された基壇建物であろう。地業2700南側では大型のカマド3065・カマド4840を検出しており台所と考えられる。また、これらのさらに西側には3区建物3があり調査区南部を中心に複数の建物が建ち並ぶ境内の様子を推測できる。

遺物からみると、鎌倉時代の特徴をもつ軒平瓦(瓦90・瓦91)は複数の同範瓦が出土していることから創建時の瓦の可能性が高く、基壇建物は瓦葺であったことがわかる。また、室町時代後期の遺構の石組などに転用されて扉の軸石(石69～石71)が出土した。いずれも大型製品であることから重厚な建物であったことが推測できる。

この時期には2区柱穴列1～柱穴列6、2区溝5845・溝5846、3区柱穴列7～柱穴列9・柱穴列13・柱穴列14が成立する。寺域の周囲や内部を区画する施設もしくは建物の一部であったと考えられる。また、2区土坑4638は確実な墓壇であった。近接する2区西部や3区南東部には墓壇の可能性のある方形や細長い形状の土坑があり、ここに小規模ながらも墓域が形成されていたことが明らかとなった。

そのほか、この時期には土坑埋土に礫を詰めた集石遺構を多く検出している。規模や平面形からは建物の地業と認めることはできないが、近隣の調査例から見て排水処理坑など生活に関わる遺構であったことが考えられる。また、2区土坑2525・土坑4274・土坑4478・土坑4804、3区土坑6188のように4基から8基の大型の甕を並べて据えた土坑がある。1区土坑115をはじめとして単体で大型の甕を据えた土坑も多い。貯蔵施設の可能性が高いが、例えば2区土坑2525では2基の甕は倒立して据え付けられており、一律には評価できない複雑な状況を示している。

室町時代中期から後期(図25) 引き続き金光寺が調査地の広い範囲を占めている時期である。『洛中洛外図屏風上杉本』に描かれた段階で、境内東部の瓦葺本堂や檜皮葺・柿葺の堂宇、周囲の

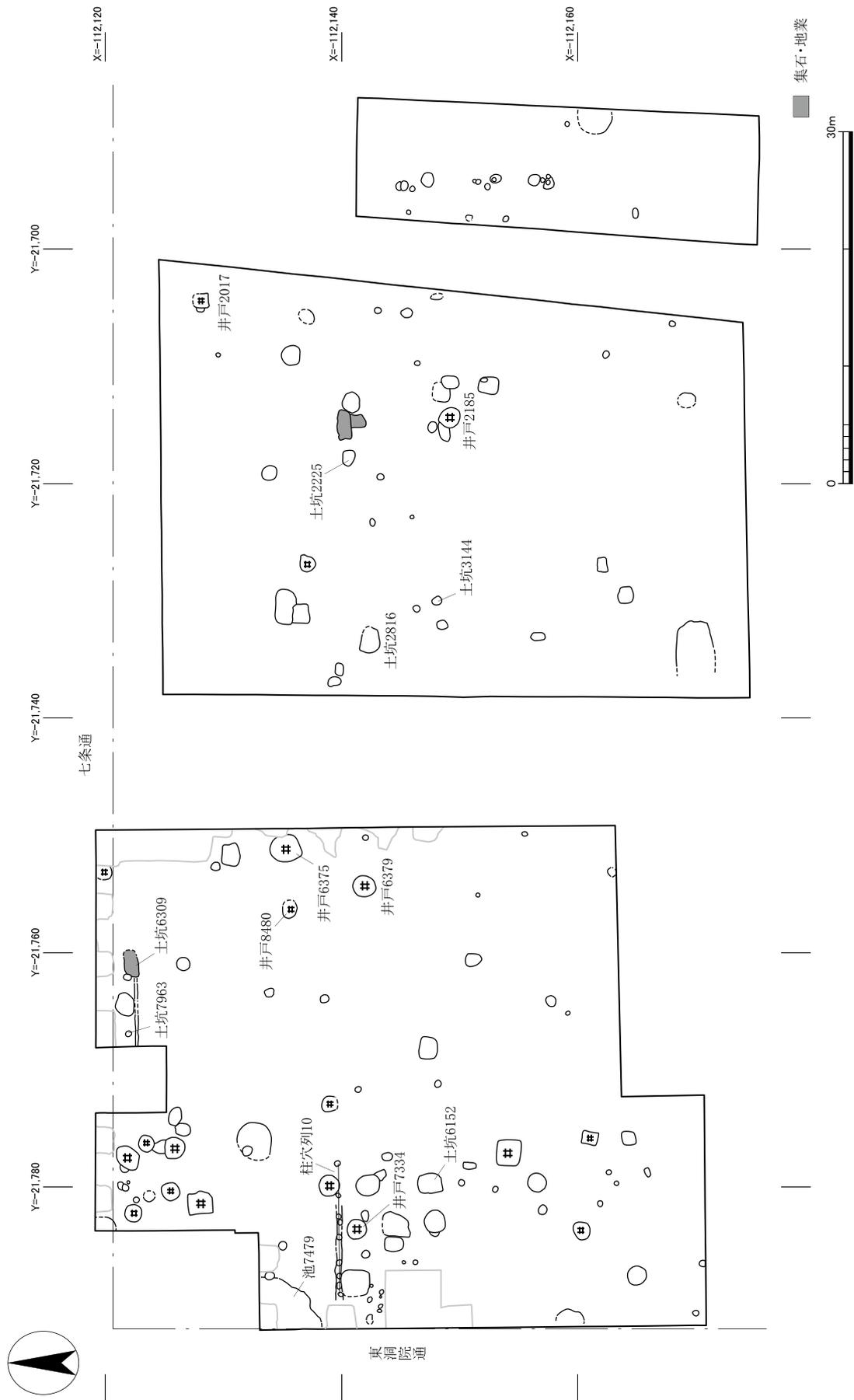


図25 遺構概要図5 (室町時代中期から後期 1 : 500)



図26 遺構概要図6 (安土桃山時代から江戸時代 1 : 500)

築地塀を見ることができる。複数の建物で構成される状況は、鎌倉時代後半から室町時代前期に検出した遺構の分布と合致する。しかしながら、後世の攪乱のため検出することができたこの時期の遺構は大きく減少しており、遺跡から境内の詳細を復元することは難しい。ただ、2区土坑2816からは火災の痕跡を示す二次焼成を受けた丸瓦（瓦112）・平瓦（瓦113）・雁振瓦（瓦102～104）がまとまって出土した。室町時代前期から中期の遺物であることから、康正2年（1456）の火災にともなう遺物の可能性が高く、瓦葺建物が焼失したことを示している。各調査区では柱材が焼失した痕跡を残す石材を確認している。

3区北東部では、庭石・洲浜状の汀を備えた庭園の一部である3区池7479を検出した。本堂などの主要建物の位置からは遠く、景石の向きや洲浜の石の密度から見ると視点場は本堂とは逆方向の北西側にある。江戸時代の境内図では、ここに金光寺の塔頭が描かれており、3区池7479は塔頭に付属する庭園の一部と考えたい。

さて、3区池7479重複する3区北西部甕列では、据え付け穴に甕の底部が残されているものが多く、また、埋土には炭・焼土を含んでいる。3区土坑7415の甕埋土から室町時代前期の土器が出土したことから、この時期の火災によって北西部甕列にみられた酒屋が廃絶したと推測できる。3区池7479は北西部甕列を壊して構築されていることから、塔頭は酒屋の廃絶後に成立したことになる。3区池7479南側で検出した3区柱穴列10は、溝底面に礎石をともなう柱穴が並ぶことから塔頭南限の土塀と考えられる。

安土桃山時代から江戸時代（図26） 調査地東端に推定される南北方向の御土居については、関連する遺構を認めることができなかった。この時代の遺跡は安政の大火・蛤御門の変にともなう大火の後片付けの土坑や近代の攪乱により残存状況が悪いため、検出できた遺構はさらに少なくなる。

3区北部では、七条通に平行する溝6250・溝6249・溝7774・溝6288がある。ほぼ同じ位置を踏襲しており金光寺寺域内の区画施設として機能したと考えられる。また、鬼瓦をはじめとする様々な飾瓦からは、壮麗な建物の姿を想像することができ、江戸時代の金光寺の隆盛を偲ぶことができる。しかしながら、幕末の大火にともなう瓦礫層や後片付けの土坑が広がっている状況から金光寺の被害が甚大であったことも明らかとなった。

2. 遺構の検討

金光寺の構造 前項でも概観したが、改めて調査地に営まれた金光寺の構造について検討したい。明治年間の金光寺の状況を描いた絵図では、敷地は街区の中心部分を占地しており、七条通・東洞院通沿い及び南側は、畑地・荒地・ヤブ・人家に囲まれている。また、東側は御土居に区画されている（図27）。天明8年（1788）の境内絵図では、敷地東部には南北方向の御土居を挟んだ東側に法事場・火屋が造られている。中心建物は敷地南半部に東側から本堂・客殿・庫裏が並んでおり、本堂東側には経堂・鐘撞堂と小さな社がある。また、七条通沿いには8院の塔頭、東洞院通沿いには「衆寮」の長屋が南北に2棟並んでおり、七条通側に表門、東洞院通側に通路がある（図

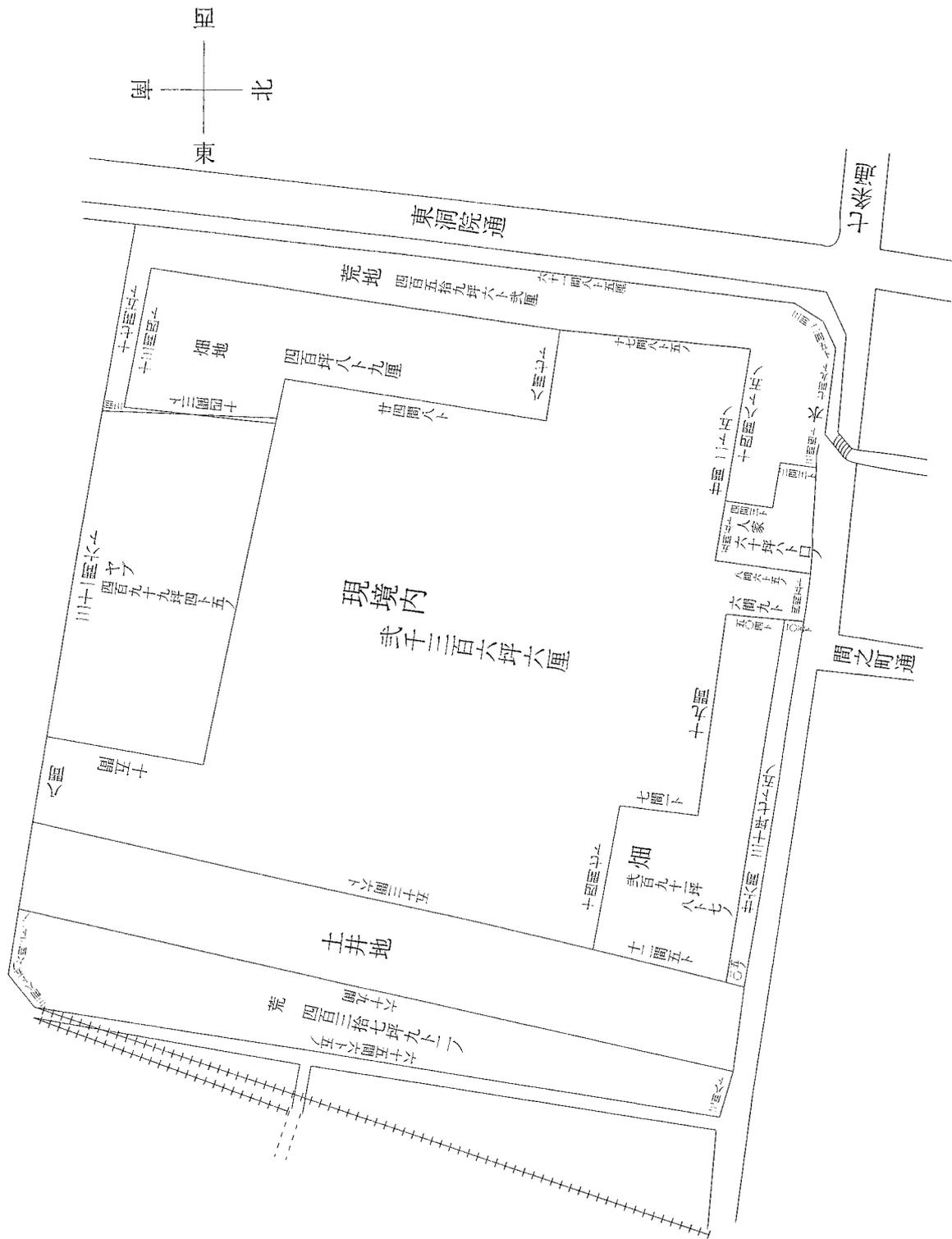


図27 七条道場金光寺全図（明治年間）

28)。嘉永2年（1848）の境内絵図では、七条通に面した塔頭の一つ（宗哲院）がなくなったあとに七条通からの「表仮門」が設けられたり、「衆寮」の位置が移動したりしているが、主要な建物配置に大きな変化はない。

これらを調査区に当てはめると、敷地南部は調査区外となるが、おおよそ1区が本堂東側、2区が本堂と客殿及び北側の塔頭の一部、3区が庫裏と北西側の塔頭になる。金光寺が創建された段階

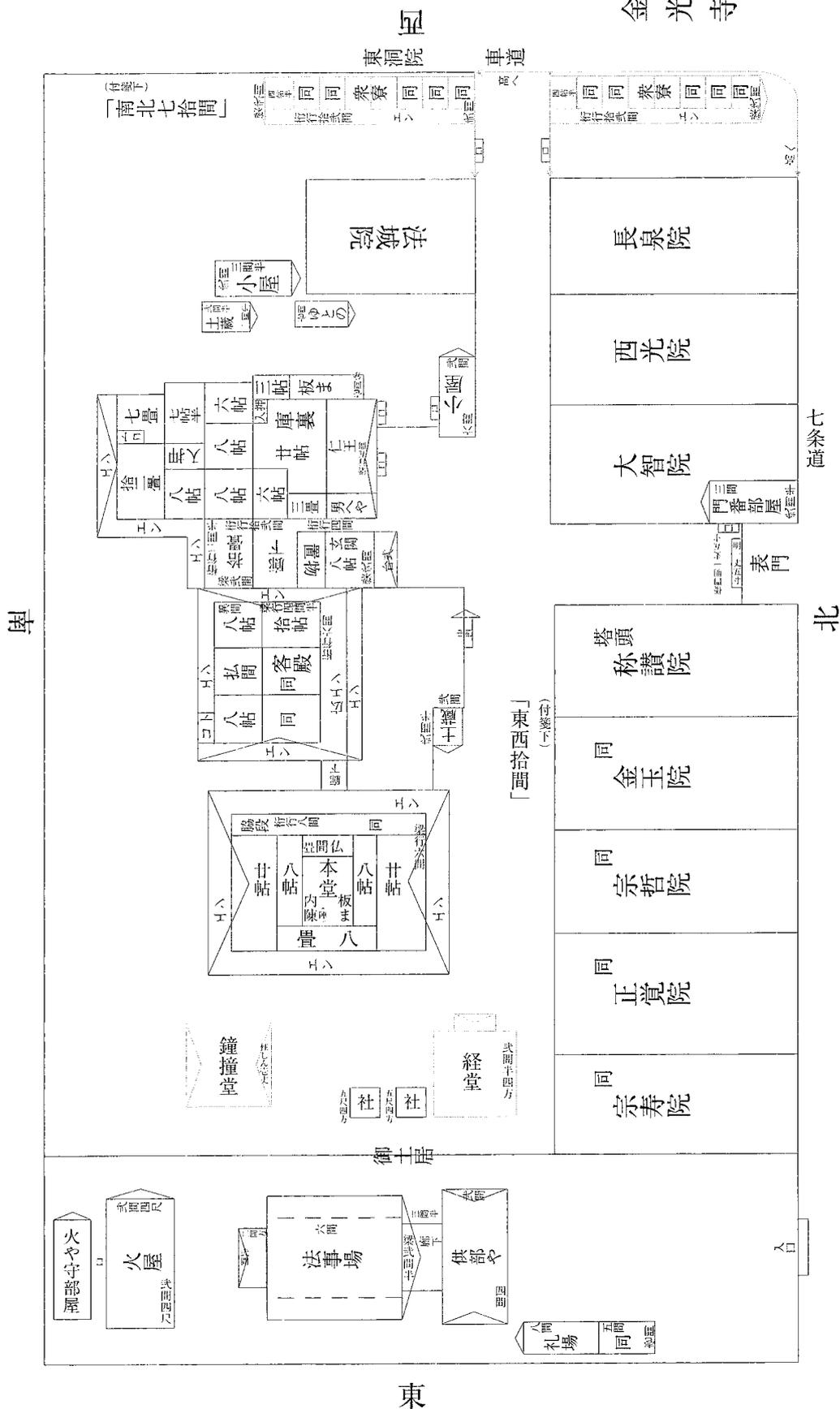


図28 境内諸堂建物絵図 (天明八年)

の寺域の範囲や建物の配置などについての記録はないが、2区地業2700・2区建物1を本堂とすると敷地南東部に本堂が配置される状況が江戸時代まで踏襲されたことになる。また、2区地業2777・2区地業4900から地業を備えた主要な建物は本堂西側や南西側に配置されたことがわかる。さらに地業2777西側には掘立柱建物である3区建物3があった。一方、本堂の南側では2区カマド3065・2区カマド4840を検出している。攪乱のためカマドの構造の詳細や建物との関係は不明であるが、大型のカマドであることから、ここに台所を備えた庫裏があったと推測でき江戸時代の絵図とは配置が異なることとなる。あるいは康正2年(1456)の焼亡を契機として本堂以外の建物配置が変更されたのかもしれない。

次に塔頭について検討する。3区池7479が塔頭(江戸時代の絵図では長泉院)に付属する庭園の一部とすると、その成立は3区北西部甕列が廃絶する室町時代前期まで年代が下がることになり、3区池7479埋土から室町時代中期の遺物が出土していることとも合致する。塔頭南側を区画する土堀である3区柱穴列10は、3区北西部甕列の南側を区画する3区柱穴列14と重複しており土地区画が踏襲されていた。この部分については金光寺の境内は創建以降に拡大したことになる。

一方、他の塔頭の状況については詳らかでない。2区柱穴列3、2区柱穴列12、2区溝5845・溝5846、3区柱穴列7は七条通付近から南北方向に延びる遺構なので、七条通沿いに建ち並ぶ塔頭の敷地を区画する施設の可能性がある。ところが、これらと直交する2区柱穴列4、3区柱穴列13、特に3区柱穴列13は江戸時代の区画溝である3区溝7774の位置と重複している。七条通からの奥行きは約12mとなり塔頭内部をさらに細分して利用していたことも考えられる。

甕列の構造 3区では北西部と南西部で大型・中型の焼締陶器甕を並べる遺構を検出した。3区北西部甕列で40基以上、3区南西部甕列で少なくとも89基の焼締陶器甕を据え付けた土坑を検出しており、全体ではおそらく一時期に最大130基以上の甕が並んでいた状況になる。甕を据え付けた土坑の数では、京都市内の調査では3番目の多さである。多数の甕を並べている状況から大規模な酒の醸造を行った中世京都の「酒屋」の遺構と考える。

3区南西部甕列の存続期間は、据え付け穴から出土した遺物などから平安時代後期から鎌倉時代前半と考えている。甕の底部が残存していたのは北東部の5基の土坑のみであり、また、遺構周辺からこの時期の甕の破片がほとんど出土していないことから、甕の多くは取り外して運び去られたのであろう。金光寺の創建と連動していた可能性がある。

3区北西部甕列の存続期間は平安時代後期から室町時代前期と考えている。上限は3区土坑7145に据え付けられた常滑産焼締陶器甕の製作年代、下限は同じ甕内部から完形で出土した土師器皿の年代から判断した。南西部甕列よりも操業期間は長い。また、製作年代が鎌倉時代後半に属する甕が多いことから甕列の造り替えが行われたと推測できる。甕を据え付けた土坑の並びに不規則な箇所が見られることの原因であろう。なお、甕の底部が残されている土坑が多く、また、埋土には炭・焼土を含んでいることから、火災を契機として廃絶したと考えられる。廃絶は金光寺の創建後のこととなり寺域の拡大との関連が注目できる。

3区北西部甕列では、南側を区画する3区柱穴列14を検出した。それ以外の区画施設は不明で

ある。また、3区南西部甕列では3区柱穴列11が東側、3区柱穴列12が南側を区画していた。北側の区画は大型甕を据えた土坑が並ぶ箇所北側で柱穴が集中する位置を想定できる。西側は調査区外であろう。これらの柱穴列は柱穴の規模が小さく、間隔が不揃いであることから簡易な塀のような施設であったと推測している。

また、甕を据えた土坑が密に並んでいるが、復元できた甕肩部の最大径は約80cmあり、ほぼ隙間なく甕が並んでいた状況になる。3区南西部甕列の中型甕を据えた範囲は東西約9.2m、南北約7.4mに広がる。甕列の間に柱穴を検出していないことと考え合わせると、甕列を覆う屋根は痕跡を残さないほどの簡素な施設で、あるいは露天で醸造が行われた可能性も考えられる。

なお、酒の醸造には必須の井戸・カマド・麴室などを備えた酒造場が近隣にあったことは確実であるが、残念ながら今回の調査では確認することができなかった。調査区外西側もしくは南側に推定したい。

3区土坑8458について 3区第2面北東部で検出した特殊な形状の遺構である。平安時代後期の遺物が出土しており、年代が下がったとしても鎌倉時代までの遺構である。形状については第3章で紹介しており、その要点をまとめると、くびれのある長円形の土坑の片側に太い柱材を据え、反対側には2基の平坦な石と柱根を組み合わせた何らかの機構を作る施設である。柱材と石材及び柱根間を結ぶ軸線は土坑東辺の方向に一致しており、これが遺構の主軸と考えられる。また、柱材は主軸方向に傾いており、強い力が加わったことを示している。

類似する遺構には江戸時代の酒搾り装置がある。これは太い柱材を支点として、柱材に挿し込んだ長い天秤棒の先端に錘をぶら下げることで、梃子の原理を利用して作用点に設置した槽に圧力をかけて醪から酒を搾る仕組みである。しかしながら、酒の醸造の歴史において醪から酒を搾るようになるのは室町時代になってからであり、遺構の年代とは合わない。

そこで注目したいのが油商人の信仰を集めた離宮八幡宮に伝わる油搾り装置の絵図である。錘の代わりに横軸轆轤を使用する点など違いはあるが、太い柱材を支点として長い天秤棒を備える構造は共通する。長木搾油機と呼ばれるこの装置は、平安時代後期には使用されていたと伝えられ、遺構の年代に矛盾はない。検出した遺構と絵図の形状は必ずしも完全に一致しないが、柱材は装置の支点、柱材両側の浅い土坑は柱材を固定するための添え柱、平坦な石の部分は搾った油を受けるための容器を据える位置に当てはめることが可能である。京都で初めて油搾り装置が見つかったと評価したい。

3. 遺物の検討

土器・陶磁器の変遷 調査では整理用コンテナで合計1,573箱もの膨大な量の遺物が出土した。遺構の変遷でも紹介したように平安時代前期から江戸時代初頭にかけて、各時代の遺物がほぼ途切れることなく出土した。京都出土の遺物は土師器皿の変化・変遷を編年の基準資料としている。今回の調査では井戸や土坑からの一括資料として土師器皿とともに黒色土器、瓦器、白色土器、須恵器、焼締陶器、灰釉陶器・灰釉系陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器などの焼物が出土したことから、

各時期における器種構成の変化やそれぞれの器種における器形の変化を跡付けるができる。また、京都以外の各地の生産地から搬入された製品、例えば大量に出土した常滑産・備前産焼締陶器の大甕や播鉢、楠葉産・和泉産瓦器の椀や播鉢、彼杵半島産石鍋などとの年代的な併行関係を検討するうえでも貴重な資料となった。

焼締陶器大型甕の使用法 今回の調査では、常滑産・備前産を中心とする鎌倉時代から室町時代の焼締陶器大型甕が多数出土した。その多くは3区北西部甕列、3区南西部甕列とした酒屋で酒の醸造に使用されたものである。しかし、このほかにも各調査区で単体もしくは2基一組、4基一組、6基一組、8基一組で大型甕を据え付けた土坑を検出した。これらの遺構は物資の貯蔵あるいは生産活動に使用されたものと推測できる。また、据え付け方にも底部・下半部を埋めて固定したもの、口縁部まで深く埋めたもの、上下を倒立させたものがあり、用途の違いを示している。他の類例との検討が必要である。

焼締陶器大型甕の中には、1区土坑115に据え付けられた甕のように整った形態の製品がある一方で、歪んだ個体も多く出土した。例えば3区土坑8357は、3区北西部甕列で使用されていた大型甕の体部や口縁部を廃棄した土坑と考えているが、出土品には著しく歪んだ口縁部や底部の破片がある(531～533)。歪みを気にせずに酒の醸造を行っていたものであろうか。

別の遺構からは、底部に焼台の陶片や粘土塊が付着したままの破片が出土している(911～915)。底部を埋めて据え付ける場合には、陶片や粘土塊が付着していても問題がなかったのであろう。また、割れ目を漆で補修した破片も出土している(909・910)。いわばB級品ともいべき製品が受け入れられていたこととなり、中世京都における需要と供給の関係に現れる商品流通を考える手がかりの一つとなる。

手工業生産関連遺物 出土遺物の中でも特徴的なものとして金属製品生産関連遺物をあげることができる。鋳型・坩堝・鞆羽口・炉壁などの土製品があり、2区土坑5227からはこれらが一括して出土したことから一連の生産活動で使用されたことがわかる。鋳型には刀金具・鏡・不明品があり確実な仏具の鋳型はない。坩堝は付着した金属滓を分析したところ大部分が銅を主体とするが、銀が付着した個体4点が認められた。金が付着した銅滴も出土していることから、銅製品の他に銀・金という貴金属を使用した金属生産が行われていたことが明らかとなった。容量が少ない小型の坩堝が多いことから小型製品を主体とする鋳造生産が行われていたのであろう。金属生産関連遺物は平安時代後期から鎌倉時代の遺構から出土しており、調査地西側の左京八条二坊・三坊での金属生産の盛期と時期を同じくする。しかし、室町時代以降はほとんど出土例がないことから、金光寺の創建を契機として当地での金属製品生産はいったん途絶えたこととなる。

一方、3区を中心に口縁部や底部に銅滓が付着した土師器皿が出土した。破片で出土することや被熱により変形・変色していることから1回の使用で使い捨てられたものである。口縁部に銅滓が付着する個体は溶解した金属を掬い取った可能性、底部内面に銅滓が付着する個体は溶解した金属を注ぎ受けた可能性などが考えられるが、用途の特定はできていない。平安時代後期の1点を除くと他は室町時代後期に属する。鋳型などの遺物をとまなわれないことから、金光寺境内において平

安時代後期から鎌倉時代とは別の形で銅製品生産が行われていたことがうかがえる。なお、鉄滓が出土していることから何らかの鉄製品生産が行われていたことは確実であるが、詳細は不明である。

そのほか金属製品生産関連遺物が出土した2区土坑5227からは、1点のみであるが、切断痕があるウシの中手骨（骨1）が出土しており、平安時代後期に骨製品加工が行われていたことを示唆する。

3区では土坑や柱穴から漆を絞った布（木22～木26）や落し蓋に使用した紙（木27）、漆が付着した土師器皿（904～907）が出土した。平安時代後期から鎌倉時代前半に漆製品の生産・加工が行われていたことがわかる。

また、朱が付着した灰釉系陶器皿（802）・鉢（813）が出土しており、鎌倉時代に朱を使用した製品の加工が行われていたことがわかる。

調査地では、金属製品生産以外にも様々な手工業製品生産が行われており、その最盛期は平安時代後期から鎌倉時代に位置付けることができる。

金光寺の遺物 最後に金光寺に関わる遺物を紹介する。建物に関わる遺物には瓦がある。鎌倉時代から室町時代の瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦に加えて鬼瓦・鳥衾があり屋根を飾っていた。雁振瓦や輪違瓦は大棟を重厚に装飾する道具瓦で、室町時代中期から後期に属する。特に雁振瓦は康正2年（1456）の火災で焼失していることから、京都市内では最古の出土例になる。また、小振りな宝珠が出土しており、境内には宝形造の祠のような小規模な建物があったことが推測できる。

江戸時代の建物については、境内絵図が残されているものの遺跡から詳細を復元することは難しい。鬼瓦・鳥衾・菊丸瓦や軒丸瓦・軒平瓦・軒棧瓦など棟や軒先を飾る多様な瓦が出土しており、装飾豊かな屋根の建物であったことがわかる。

土器・陶磁器類では豊富な中国製陶磁器類をあげることができる。また、瀬戸美濃産施釉陶器の大型の花瓶、中国製青磁の大型の壺・花瓶、銅製品の蠟燭立て・香炉などは仏堂内の仏前を飾った遺物と考えられ、財力がある寺院であったことを反映している。出土数は少ないがガラス玉は数珠の一部あるいは仏堂内の荘厳品として使用されたものであろう。

石製品では溝状の窪みがある砥石が注目できる。玉を丸く仕上げるための砥石であることから、数珠玉の製作が行われていたことがわかる。最も寺院らしい遺物としては江戸時代の遺構から出土した墓石（石66）や五輪塔（石53～55）がある。しかしながら、点数が少ないことから、金光寺の廃絶にともない墓地が整理され、墓石は運び去られたのであろう。

今回の調査は、京都に営まれた大規模な時宗寺院の初めての調査であった。他宗派の寺院の調査成果との比較検討は今後の課題である。

付章 1 平安京左京八条四坊一町跡におけるトレンチ断面の観察結果

小野映介（駒澤大学文学部）

当遺跡は、京都盆地を流れる鴨川の新規扇状地に位置する。この扇状地の詳しい形成過程は不明であるが、今回のトレンチ断面の観察及び採取試料の年代測定結果により、その一端が明らかになった。以下、トレンチ東側断面の層相・層序と試料の放射性炭素年代測定結果を報告する。

遺跡のトレンチ北東部からは、河道が検出されている。今回設定した断面は、この河道に位置し、主に河道を充填する堆積物を観察の対象とした（図1）。トレンチの最下部の標高は26.93～27.00mで、礫混じりの中粒砂の堆積が認められる。その上位には層厚約0.1mの黒色泥層が堆積している。同層は0.3～0.4mの砂層によって覆われており、下位の黒色泥層と上位の砂層との境界には一部で波状の形状が見られる。標高約27.1～27.4mに堆積している砂層には上方細粒化が認められ、下部は粗粒砂で上部は中粒砂によって構成される。なお、中粒砂の堆積部分には、黒色を呈する極細粒砂が薄い層を成している。

標高約27.4～27.5mは主に極細粒砂層と泥層から構成されており、有機物を含み黒色を呈する層と有機物を含まない層が互層を成す。なお、所々に薄い粗粒砂層や中粒砂層も認められる。27.35mには炭化物が認められ、その年代を測定した（表1）。年代測定は株式会社パレオ・ラボに依頼し、加速器質量分析（AMS法）が行われた。得られた年代値はOxCal v4.2 (Bronk Ramsey, 2009) を用いて暦年較正した。暦年較正にはIntCal13 (Reimer et al., 2013) の較正曲線が用いられた。その結果、1,607-1519 cal BP及び1,460-1,419 cal BPの値が得られた。

標高約27.5m以上では砂層の堆積が卓越しており、最下部には層厚0.1～0.2mの中粒砂層の堆積が認められる。その上位には極細粒砂層～細粒砂層が堆積しており、それらには薄い粗粒砂層が所々に狭在している。砂層の上部は人為的かく乱を受けており、標高約27.8mより上位は遺物混じりの砂礫層となっている。この砂礫層は約28.2mまで見られ、この標高で平安時代後期の遺構検出面となる。

このように、観察断面は標高約27.8mより下位の自然堆積層と、それより上位の人為堆積層に大別できる。自然堆積層は、主に泥層や砂層の互層から成り、河川の堆積作用によって形成されたものと考えられる。河川の活動は、堆積物中の炭化物の年代測定値から、4世紀半ばから6世紀のはじめであったと考えられる。当遺跡の東側の隣地からは、4～6世紀に堆積したと推定される河成の砂礫層が検出されている。したがって、当地ではこの頃に鴨川による扇状地の形成が進んでいたと考えられる。

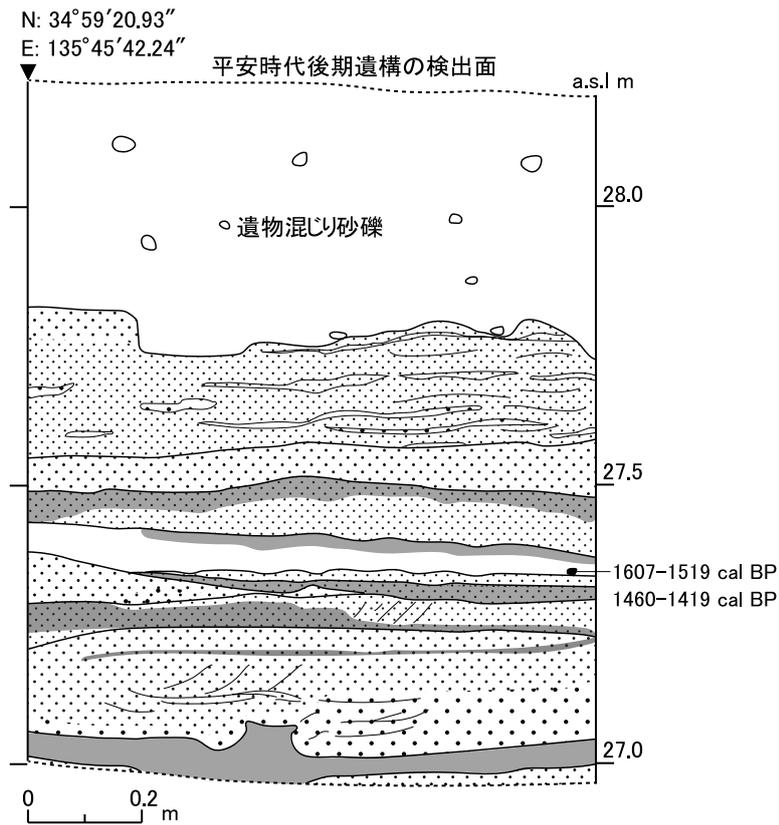


図1 東側断面観察結果

表1 年代測定値

標高 (m)	試料	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	同位体分別補正 ^{14}C 年代(yrs BP)	暦年代(cal BP) (2σ)	暦年代(cal AD) (2σ)	ラボNo.
27.35	炭化物	-25.8	1,640±20	1,607-1,519 (85.3%) 1,460-1,419 (10.1%)	343-431 490-531	IAAA-180611

【引用文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M. and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.

付章2 平安京左京八条四坊一町跡出土の金属製品及び 鑄造関連資料分析調査

北野信彦（龍谷大学）

1. はじめに

今回の調査では、平安時代後期から室町時代の遺構から鑄型・金属滓が付着した土師器皿・埴塼・鞆羽口・炉壁や鉄滓・銅滓・銅滴などの鑄造関連資料がまとまって出土している。遺跡は平安時代後期から室町時代に活躍した七条仏師工房跡周辺に所在しており、この工房との関連性も想定される出土資料群である。

また、この遺跡からは平安時代から江戸時代に至る各時期の金属製品やガラス玉なども出土している。本報では、これらの分析調査を実施したので、結果を報告する。

2. 調査対象試料

調査対象試料は、①鍍金もしくは金箔貼りを含む金属製品、②鉄滓や銅滴片、③内・外・縁面にガラス釉化した滓物質が付着した薄手の土師器皿破片や厚手の埴塼破片、土製の鞆破片、④小型ガラス玉、などの合計244試料である。これらは共伴する土器の年代などから、平安時代から鎌倉時代、室町時代、江戸時代の京都市中における各時代の鑄造関連資料群や金属・ガラス製品であると考えられている。

3. 調査方法

本調査では、滓物質に関する色相や表面状態の観察、非破壊の分析を実施した。以下、調査方法を記す。

3.1 ガラス釉化した滓物質の色相や表面状態の観察

調査対象試料の色相や表面状態は、まず目視観察したのち、(株)スカラ製のDG-3型デジタル顕微鏡を用いて50倍の倍率で観察した。引き続き、一部の代表的な試料については、1,000倍から2,500倍の高倍率観察を(株)ハイロックス社製のVH-7000S型デジタルマイクロ스코プを使用して行った。

3.2 無機元素の定性分析

調査対象試料である滓物質の無機元素の定性分析は、(株)リガクのNiton XL3t-700携帯型のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を調査対象箇所注意深く近接させて大気中で分析した。設定条件は、測定視野は直径8.0mmスポット、管球は対陰極Agターゲット、管電圧は50kV、大気圧で分析設定時間は60秒である。なお本試料群の滓物質が付着した土師皿や銅滴、鉄滓などは、いずれも比較的小さい破片資料である。そのため本学の文化財科学研究室設置の掘付型蛍光X線分析装置の試料室内で分析することも可能なサイズの資料も存在するため、これらは取鍋皿表面の胎土

表1 分析遺物一覧表

試料番号	内容	調査区	遺構・層位	年代	分析結果	遺物番号	
(金属製品)	金属001	鉄刀子	1区	土坑493	平安後期		金95
	金属002	不明銅製品	2区	土坑2645	鎌倉後半～室町前期	Cu(主)・Pb(微)・Au(主)・Ag(従)・Hg(微)	金12
	金属003	不明銅製品	2区	地業2700	鎌倉後半	Cu(主)・Pb(微)・Fe(微)・Ca(微)	金13
	金属004	不明銅製品	2区	土坑3196	鎌倉前半	Cu(主)・Pb(従)・Au(主)・Ag(従)・Hg	金10
	金属005	鉄刀子?	2区	土坑4848下層(炭層)	鎌倉		B金1-11
	金属006	銅鉾	2区	柱穴4111	室町前期	Cu(主)・As・Fe	金2
	金属007	銅鉾(金付着)	2区	土坑5728下層	平安後期	Cu(主)・Fe・Au(主)・Hg	金4
	金属008	銅鉾	2区	柱穴5571	平安後期～鎌倉前半	Cu(主)・Fe(微)・Pb(微)	金3
	金属009	鉄刀	1区	井戸517枠内下層	鎌倉		金97
	金属010	銅製かんざし	2区	遺構検出中	不明	Cu(主)	B金2-07
	金属011	銅金具	2区	遺構検出中	不明	Cu(主)	金15
	金属012	銅金具	2区	遺構検出中	不明	Cu(主)・Pb(微)・As(微)・Au(主)・Ag(従)	金6
	金属013	銅針金	2区	遺構検出中	不明	Cu(主)	金14
	金属014	銅金具	2区	遺構検出中	不明	Cu(主)	金15
	金属015	筒状銅製品	2区	遺構検出中	不明	Cu(主)・Zn・Pb(微)・Fe	B金2-10
	金属016	銅金具	2区	検出中	不明	Cu(主)	金7
	金属017	銅金具	2区	溝2075	室町前期	Cu(主)	金16
	金属018	銅片	2区	土坑2696セクション上層	鎌倉後期～室町前期	Cu(主)・Fe(微)・Ca(微)	B金2-14
	金属019	銅金具	2区	柱穴2110	鎌倉	Cu(主)・Fe(微)	金17
	金属020	鉄針?	2区	土坑3279上層	鎌倉		B金2-16
	金属021	鉄刀子	2区	柱穴3606	鎌倉前半		金94
	金属022	鉄把手	2区	土坑4239	鎌倉		金92
	金属023	銅針?	2区	井戸4342木枠内	鎌倉前半	Cu(主)	金20
	金属024	棒状銅製品	2区	土坑3501	鎌倉前半	Cu(主)・Pb(微)・Fe(微)・Ca(微)	金23
	金属025	棒状銅製品	2区	土坑3501	鎌倉前半	Cu(主)・Fe・Au・Ag・Hg・Pb(微)	金22
	金属026	鉄釘	2区	溝5316	鎌倉前半		B金1-23
	金属027	鉄鉾?	2区	溝1015	平安中期		不明
	金属028	鉄刀子	2区	土坑4620	鎌倉後半		B金1-24
	金属029	鉄刀子	2区	土坑4870	鎌倉後半		B金1-25
	金属030	銅金具	3区	第1層掘下げ	不明	Cu(主)・Pb・As(微)・Fe・Ca(微)	金26
	金属031	銙金具	3区	土坑6788	江戸後期	Cu(主)	B金2-29
	金属032	銅金具	3区	第1層掘下げ	不明	Cu(主)・Pb(微)・Fe・Au(主)・Ag(従)	金8
	金属033	棒状銅製品	3区	土坑7335	室町中期	Cu(主)	金18
	金属034	輪形銅製品	3区	第1面面下げ	不明	Cu(主)・Sn(微?)	金19
	金属035	銅製椀	3区	井戸6382上層	江戸中期	Cu(主)	B金2-30
	金属036	パイプ	3区	井戸6374	近代	検出せず(セルロイド?)	B金2-31
	金属037	鉄製鉤金具	3区	第1面遺構精査	不明		B金2-28
	金属038	銅金具	3区	第1面遺構精査	不明	Cu(主)・Pb・Fe	金9
	金属039	鉄刀子	3区	柱穴6798	平安後期		金96
	金属040	銅製ロウロク立て	3区	第1層掘下げ	不明	Cu(主)	金27
	金属041	板状銅製品	3区	第2層掘下げ	不明	Cu(主)	B金2-33
	金属042	鉄鉾?	3区	柱穴7408	鎌倉		金86
	金属043	鉄錠	3区	土坑7691	鎌倉		金89
	金属044	銅製香炉の足	3区	第1面遺構精査	不明	Cu(主)・Pb(主)・Sn(微?)・As(微)・Fe	金28
	金属045	鉄釘	3区	柱穴7612	鎌倉後半		金88
	金属046	銅小瓶	3区	井戸6992	鎌倉後半～室町前期	Cu(主)・Sn・Pb・Fe	金29
	金属047	鉄金具	3区	井戸7334掘形	鎌倉後期		金91
	金属048	鉄くさび	3区	井戸6321	江戸中期		B金1-35
	金属049	銅鉾	3区	第2面遺構精査	不明	Cu(主)	金5
	金属050	鉄板	3区	土坑8518	平安中期～後期		B金1-36
	金属051	不明銅製品	3区	土坑8627	鎌倉前半	Cu(主)・Pb(主)・Sn・As(微)・Fe	金25
	金属052	銅鉾	3区	土坑8733	平安中期	Cu(主)	金85
	金属053	鉄刀子	3区	土坑8019	鎌倉	Fe(主)	B金1-38
	金属054	銅鉾	3区	土坑8020	鎌倉後期	Cu(主)・Pb・Au・Ag(微)・Fe・Ca(微)	金1
	金属055	銅製刀子の柄	3区	土坑8172	鎌倉後期～室町前期	Cu(主)	金24
	金属056	メガネ釘	3区	井戸8917	鎌倉前半		金87
	金属057	銅椀	3区	土坑8172	室町前期～中期	Cu(主)・Pb(主)・Fe	金30
	金属058	方形板状鉄製品	3区	土坑8458	平安後期		金90
	金属059	鉄製把手	3区	土坑9379	平安前期		金93
	金属060	円盤形銅製品	3区	井戸6654	江戸後期	Cu(主)・Fe・Sn(微)・Pb(微)	B金2-41
	金属061	棒状鉄製品	3区	井戸8460	平安後期	Fe(主)・Zn・Ca	B金1-41

	試料番号	内容	調査区	遺構・層位	年代	分析結果	遺物番号
(金属製品)	金属062	又鋏	3区	井戸7240	江戸中期		金98
	金属063	鉄釘(平たい)	3区	土坑7312	室町前期～中期		B金1-43
	金属064	不明鉄製品	1区	土坑362	室町中期		B金1-44
	金属065	筒状鉄製品	2区	土坑3133	鎌倉後半～室町前期		B金1-48
	金属066	鉄刀子	2区	柱穴3312	鎌倉前半		B金1-49
	金属067	棒状銅製品	3区	溝7750	鎌倉後半	Cu(主)	金21
	(金属滓)	金属滓001	鉄滓	2区	土坑2692下層	室町前期	Fe(主)
金属滓002		銅片	2区	土坑2397	鎌倉後半～室町前期	Cu(主)・Fe	B金2-02
金属滓003		鉄滓	2区	土坑3414	平安後期～鎌倉前半	Fe(主)・Fe・Pb(微)	B金1-08
金属滓004		鉄滓	2区	土坑3414	平安後期～鎌倉前半	Fe(主)	金107
金属滓005		銅滓	1区	土坑17	鎌倉前半	Cu(主)・Fe(微)	金103
金属滓006		銅片	2区	溝2126	鎌倉後半～室町前期	Cu(主)・Fe(微)	B金2-11
金属滓007		銅滓	2区	土坑2643	室町前期～中期	Cu(主)・Fe(微)・Sn(微?)	B金2-12
金属滓008		鉄滓	2区	土坑2945	鎌倉	Fe(所)	B金1-15
金属滓009		銅滓	2区	柱穴3252	鎌倉	Cu(主)・Fe・Pb(微)・As(微)	金101
金属滓010		鉄滓	2区	土坑3810	鎌倉前半	Fe(主)	B金1-16
金属滓011		鉄滓	2区	柱穴3881	平安後期～鎌倉前半	Fe(主)	金110
金属滓012		鉄滓	2区	土坑3344	平安後期～鎌倉前半	Fe(主)・Cu(微)・Pb(微)	B金1-18
金属滓013		鉄滓	2区	土坑3196	平安後期～鎌倉前半	Fe(主)	金106
金属滓014		鉄滓	2区	検出中	不明	Fe(主)	B金2-17
金属滓015		鉄滓	2区	土坑3494	鎌倉前半	Fe(主)・Ca(微)・K(微)	B金2-18
金属滓016		銅滓	2区	土坑4383	室町前期～中期	Cu(主)・Fe・Pb(微)・As(微)・Ca(微)	金100
金属滓017		銅滴?	2区	検出中	不明	Cu(主)・Pb・Fe	B金2-19
金属滓018		銅滓	2区	井戸4342木枠内	鎌倉前半	Fe(主)・Cu(主)・K(微)	B金2-20
金属滓019		鉄滓	2区	検出中	不明	Fe(主)・Mn(微)	B金1-19
金属滓020		鉄滓	2区	検出中	不明	Fe(主)・K(微)・Ti(微)	B金1-20
金属滓021		鉄滓・銅滓	2区	土坑4399	平安後期～鎌倉前半	Fe(主)・Cu(主)・Pb(微)・As(微)	B金2-23
金属滓022		鉄滓?	2区	土坑4962	鎌倉後半～室町前期	Fe(主)	B金1-21
金属滓023		鉄滓	2区	写真清掃(土坑4420)	鎌倉後半	Fe(主)・Cr(微)・K(微)	B金1-22
金属滓024		銅滓	2区	第2面掘下げ	不明	Cu(主)・Fe(微)・Pb(微)	B金2-24
金属滓025		鉄滓	2区	柱穴4593	鎌倉前半	Fe(主)	金109
金属滓026		銅滓	3区	第1層掘下げ	不明	Cu(主)・Fe・Pb(微)・As(微)	金104
金属滓027		銅滴? 金箔	3区	土坑7602	鎌倉後半	Cu(主)・Pb(微)・Fe・Au(主)・Ag(微)	金99
金属滓028		銅滓	3区	第1面遺構精査	不明		B金2-32
金属滓029		銅滓	3区	第2面遺構精査	不明	Fe(主)・Ti・K(微)	B金2-38
金属滓030		銅滓	3区	第2面遺構精査	不明	Fe(主)・K(微)	B金2-39
金属滓031		鉄滓?	3区	土坑8019	鎌倉		B金1-37
金属滓032		銅滓	3区	井戸8204枠内	鎌倉		B金2-40
金属滓033		鉄滓	1区	土坑362	室町中期	Fe(主)	B金1-44
金属滓034		鉄滓	1区	集積土坑274付近	鎌倉	Fe(主)	B金1-45
金属滓035		鉄滓	1区	柱穴293	室町中期	Fe(主)	B金1-46
金属滓036		鉄滓	1区	溝501	鎌倉後半	Fe(主)	B金1-47
金属滓037		鉄滓	2区	土坑3150	鎌倉	Fe(主)	金111
金属滓038		鉄滓	2区	土坑3306	鎌倉	Fe(主)・Cu(主)・(Pb・Mn・Ca・K・Ti(微))	B金2-42
金属滓039		鉄滓	2区	柱穴3458	鎌倉	Fe(主)	B金2-43
金属滓040		鉄滓	2区	土坑6682	鎌倉後半	Cu(主)・Pb(主)・Fe・Zn(微)	B金2-44
金属滓041		銅滓	3区	第2層掘下げ	不明	Pb(主)・Cu(主)・Fe(主)・Ca(微)	金105
金属滓042		銅滓	3区	土坑8019	鎌倉	Cu(主)・Fe(微)	B金2-45
金属滓043		銅片	3区	井戸8413	平安後期	Cu(主)・Fe(微)・Pb(微)・As(微)	金102
(取鍋?)	取鍋001	取鍋?	2区	検出中	不明	Cu	B土1-22
	取鍋002	取鍋?	2区	土坑2577	鎌倉前半	Cu・Zn(微?)	B土1-23
	取鍋003	取鍋?	2区	土坑2241	鎌倉後半	Cu・Pb(微?)	B土1-24
	取鍋004	取鍋?	2区	土坑2502	室町後期	Cu・Pb(微)	B土1-25
	取鍋005	取鍋?	2区	柱穴2111	鎌倉	Cu・Pb(微?)	B土1-26
	取鍋006	取鍋?	3区	土坑6111	室町前期	Cu・Pb(微?)	土51
	取鍋007	取鍋?	3区	土坑6134	鎌倉	Cu・Pb(微)・As(微)	B土1-27
	取鍋008	取鍋?	3区	土坑6143	室町前期～中期	Cu・Pb(微)・As(微)	B土1-28
	取鍋009	取鍋?	3区	土坑6200	室町中期	Cu・Zn(微?)	B土1-29
	取鍋010	取鍋?	3区	土坑7335	室町前期～中期	Cu・Zn(微?)	B土1-30
	取鍋011	取鍋?	3区	土坑7335	室町前期～中期	Cu・As(微)	土54
	取鍋012	取鍋?	3区	土坑6653北端下層	鎌倉～室町	Cu・Pb	B土1-31

	試料番号	内容	調査区	遺構・層位	年代	分析結果	遺物番号	
(取鍋?)	取鍋013	取鍋?	3区	土坑7335	室町前期～中期	Cu・As(微)	土52	
	取鍋014	取鍋?	3区	土坑7335	室町前期～中期	Cu	B土1-32	
	取鍋015	取鍋?	3区	土坑7335	室町前期～中期	Cu・As(微)	B土1-33	
	取鍋016	取鍋?	3区	土坑7463	鎌倉	Ca	B土1-34	
	取鍋017	取鍋?	3区	第1面遺構精査	不明	不明	B土1-35	
	取鍋018	取鍋?	3区	土坑6271	江戸後期	Pb(主)・Cu	B土1-36	
	取鍋019	取鍋?	3区	溝6249	江戸中期～後期	Cu	B土1-37	
	取鍋020	取鍋?	3区	第1面面下げ	不明	Cu・Zn(微?)	B土1-38	
	取鍋021	取鍋?	3区	井戸7802上層	室町前期～中期	Cu・Pb(微)・As(微)	B土1-39	
	取鍋022	取鍋?	3区	土坑7721	室町前期	Cu・Pb(微)	B土1-40	
	取鍋023	取鍋?	3区	土坑7721	室町前期	Cu・Pb(微)	土53	
	取鍋024	取鍋?	3区	土坑7721	室町前期	Cu	B土1-41	
	取鍋025	取鍋?	3区	土坑8170	平安後期	Pb(主)・Cu・Zn(微?)	B土1-42	
	取鍋026	取鍋?	3区	土坑8156	鎌倉後半	Cu・Zn(微?)	B土1-43	
	取鍋027	取鍋?	3区	土坑8157	鎌倉前半	Cu	B土1-44	
	取鍋028	取鍋?	3区	土坑8961	鎌倉前半	Cu・As(微)・Pb(微)	B土1-45	
	取鍋029	取鍋?	3区	井戸8551	室町前期	Cu	B土1-46	
	取鍋030	取鍋?	3区	井戸8551	室町前期	Cu	土56	
	取鍋031	取鍋?	3区	井戸8551	室町前期	Cu・Zn(微?)	B土1-47	
	取鍋032	取鍋?	3区	井戸8551	室町前期	Cu	B土1-48	
	取鍋033	取鍋?	3区	井戸8551	室町前期	Cu	土55	
	取鍋034	取鍋?	3区	井戸8551	室町前期	Cu・Pb(微)	B土1-49	
	取鍋035	取鍋?	3区	井戸8551	室町前期	Cu・As(微?)	B土1-50	
	取鍋036	取鍋?	3区	土坑9342	室町中期	Cu	B土1-51	
	(埴塼)	埴塼001	埴塼	1区	土坑210東半	鎌倉後半～室町前期	Cu・Pb(微)	B土2-01
		埴塼002	埴塼	1区	土坑215	鎌倉前半	Cu・Pb・As(微?)	B土2-02
		埴塼003	埴塼	1区	柱穴209東半	鎌倉	Cu・Pb	B土2-03
		埴塼004	埴塼	1区	土坑356	鎌倉	Cu・Pb	B土2-04
		埴塼005	埴塼	1区	土坑215セクション南	平安後期～鎌倉前半	Cu	B土2-05
		埴塼006	埴塼	1区	土坑215セクション南	平安後期～鎌倉前半	Cu・Pb	B土2-06
		埴塼007	埴塼	1区	柱穴374柱あたり	鎌倉	Cu	B土2-07
		埴塼008	埴塼	1区	柱穴216	鎌倉	Cu・Pb・As(微?)	B土2-08
		埴塼009	埴塼	1区	柱穴282	鎌倉	Cu・Fe	B土2-09
		埴塼010	埴塼	1区	土坑580	鎌倉	Cu・Fe	B土2-10
		埴塼011	埴塼	1区	井戸726枠内中層	平安後期～鎌倉前半	Cu・Pb・As(微)	B土2-11
		埴塼012	埴塼	2区	柱穴2019	鎌倉前半	Cu・Pb(微)	B土2-12
埴塼013		埴塼	2区	柱穴2113	鎌倉後半	Cu	B土2-13	
埴塼014		埴塼	2区	柱穴2298	鎌倉	Cu・Pb・As(微)	B土2-14	
埴塼015		埴塼	2区	検出中	不明	内面Ag(主)、外面Cu(主)・Pb(主)・Au(微)	土58	
埴塼016		埴塼	2区	土坑2501	鎌倉	Cu(主)・As・Pb	B土2-15	
埴塼017		埴塼	2区	柱穴3110	鎌倉	Cu(主)・Pb(主)・As(微)	B土2-16	
埴塼018		埴塼	2区	柱穴3121	平安後期～鎌倉前半	Fe(主)・Cu(微)	B土2-17	
埴塼019		埴塼	2区	土坑2301	鎌倉	Cu(主)・Pb(主)・As	B土2-18	
埴塼020		埴塼	2区	土坑2945	鎌倉	Cu	B土2-19	
埴塼021		埴塼	2区	柱穴2094	鎌倉	Cu(主)・As・Pb	B土2-20	
埴塼022		埴塼	2区	土坑3175南半	鎌倉後半	Cu(主)	B土2-21	
埴塼023		埴塼	2区	第2面検出中	不明	Cu(主)・As・Pb	B土2-22	
埴塼024		埴塼	2区	柱穴2259	鎌倉	Cu(主)・Pb(主)・As・Sn	B土2-23	
埴塼025		埴塼	2区	第2面検出中	不明	Cu(主)・Pb(主)・As・Au(微)・Hg(微)	B土2-24	
埴塼026		埴塼	2区	土坑3805	鎌倉後半	Ag(主)・Au(微)	土60	
埴塼027		埴塼	2区	柱穴3815	鎌倉前半	Cu(主)	B土2-25	
埴塼028		埴塼	2区	第2面検出中	不明	Cu(主)・Pb・As・Zn(微)・Au(微)・Hg(微)	B土2-26	
埴塼029		埴塼	2区	土坑3765	平安後期	Cu(主)・Pb・As・Au(微)・Hg(微)	B土2-27	
埴塼030		埴塼	2区	土坑3930	鎌倉	Ag(主)	土57	
埴塼031		埴塼	2区	柱穴3848	鎌倉前半	Fe(主)?	B土2-28	
埴塼032		埴塼	2区	柱穴3881	平安後期～鎌倉前半	Ag(主)・Cu・Au(微)・Hg(微)	土59	
埴塼033		埴塼	2区	土坑3414	平安後期～鎌倉前半	Cu	B土2-29	
埴塼034		埴塼	2区	柱穴3458	鎌倉	Cu(主)	B土2-30	
埴塼035		埴塼	2区	第2面検出中	不明	Cu(主)・As(微)・Pb(微)・Ag(微)	土65	
埴塼036		埴塼	2区	土坑3434	鎌倉	Cu	B土2-31	
埴塼037		埴塼	2区	柱穴3491	鎌倉後半	Cu(主)・As・Pb(微)	B土2-32	

	試料番号	内容	調査区	遺構・層位	年代	分析結果	遺物番号
(埴塙)	埴塙038	埴塙	2区	柱穴3514	鎌倉前半	Cu(主)・Pb(主)・Sn	B土2-33
	埴塙039	埴塙	2区	柱穴4269	鎌倉前半	Cu(主)・Pb(主)・Sn(微)・Au(微)・Hg(微)	B土2-34
	埴塙040	埴塙	2区	土坑4366	平安後期～鎌倉前半	Cu(主)	B土2-35
	埴塙041	埴塙	2区	土坑4366	平安後期～鎌倉前半	Cu(主)・Pb(主)・As	B土2-36
	埴塙042	埴塙	2区	土坑4325	鎌倉	Pb(主)・Cu・As・Zn(微)	土61
	埴塙043	埴塙	2区	土坑4328	鎌倉前半	Ag(主?)・Au(微)・Hg(微)	土62
	埴塙044	埴塙	2区	柱穴4417	鎌倉前半	Cu(主)・Pb(主)・As・Sn・Au(微)	B土2-37
	埴塙045	埴塙	2区	溝5007	鎌倉	Cu(主)・Pb・As・Au(微)・Hg(微)	B土2-38
	埴塙046	埴塙	2区	土坑4638上層	鎌倉	Cu(主)・Pb・As・Sn(微)	土64
	埴塙047	埴塙	2区	溝5305	鎌倉前半		B土2-39
	埴塙048	埴塙	2区	柱穴5363	平安後期		B土2-40
	埴塙049	埴塙	2区	土坑5407	鎌倉前半	Cu(主)・Pb・As	B土2-41
	埴塙050	埴塙	2区	土坑5603	鎌倉前半	Cu(主)・Pb・As(微)	B土2-42
	埴塙051	埴塙	2区	柱穴5763	鎌倉前半	Cu(主)・Pb(主)・As	B土2-43
	埴塙052	埴塙	2区	土坑5607	鎌倉	Cu(主)・Pb・As・Sn(微)・Au(微)・Hg(微)	B土2-44
	埴塙053	埴塙	3区	第1面面下げ	不明		B土2-45
	埴塙054	埴塙	3区	土坑7424	鎌倉	Cu(主)・Pb(主)・As・Sn	土63
	埴塙055	埴塙	3区	土坑6226	江戸中期～後期	Cu(主)・Pb・As	B土2-46
	埴塙056	埴塙	3区	土坑7502	室町前期～中期	Cu(主)・Pb(主)・As	B土2-47
	埴塙057	埴塙	3区	第1面遺構精査	不明	Cu(主)・Pb(主)・Sn(主)・As・Au・Ag・Zn(微)・Hg(微)	B土2-48
	埴塙058	埴塙	3区	土坑7369	鎌倉	Cu(主)・Pb(主)・As・Zn	B土2-49
	埴塙059	埴塙	3区	土坑6537	鎌倉後半～室町前期	Cu(主)・Pb・Zn	土69
	埴塙060	埴塙	3区	土坑7496	鎌倉後半～室町前期	Cu(主?)・Pb(主)	B土2-50
	埴塙061	埴塙	3区	柱穴8802	鎌倉後半	Cu(主)・Pb(主)・Sn・As	B土2-51
	埴塙062	埴塙	3区	土坑8042	鎌倉前半	Cu(主)・Pb(主)・As・Sn・Zn(微)	B土2-52
	埴塙063	埴塙	3区	土坑8019	鎌倉		B土2-53
	埴塙064	埴塙	3区	土坑8020	鎌倉後半	Cu(主)・Pb(主)・Sn(微)	B土2-54
	埴塙065	埴塙	3区	土坑8088	平安後期	Cu(主)・Pb(主)・As・Zn(微)	B土2-55
	埴塙066	埴塙	3区	土坑8088	平安後期	Cu(主)・Pb(主)・As	土66
	埴塙067	埴塙	3区	土坑8019	鎌倉	Cu(主)・Pb(主)・As	B土2-56
	埴塙068	埴塙	3区	土坑8804	鎌倉前半		土68
	埴塙069	埴塙	3区	土坑9061	平安中期?	Cu(主)・Pb(主)・As・Ag(微)	B土2-57
埴塙070	埴塙	3区	土坑9333	平安後期	Cu(主)・Pb・As	B土2-58	
埴塙071	埴塙	3区	土坑9333	平安後期		土67	
埴塙072	埴塙	3区	土坑7414	鎌倉	Cu(主)・Pb(主)・As	B土2-59	
(鞆羽口)	鞆羽口001	鞆羽口	1区	柱穴216	鎌倉	Cu(微)・Fe	B土2-60
	鞆羽口002	鞆羽口	1区	柱穴209東半	鎌倉	Fe	B土2-61
	鞆羽口003	鞆羽口	1区	土坑356	鎌倉	Pb(主)・Cu(微)・Sn(微)・Fe	B土2-62
	鞆羽口004	鞆羽口	1区	土坑580	鎌倉前半	Cu(微)・Fe	B土2-63
	鞆羽口005	鞆羽口	1区	第4面掘下げ	不明	Fe	B土2-64
	鞆羽口006	鞆羽口	2区	遺構検出中	不明	Cu・Sn・Pb・As(微)・Fe	土73
	鞆羽口007	鞆羽口	2区	写真清掃中	不明	Cu・Sn・Pb・Fe	B土2-65
	鞆羽口008	鞆羽口	2区	土坑2266	鎌倉	Pb・Cu(微)・Fe	B土2-66
	鞆羽口009	鞆羽口	2区	柱穴3458	鎌倉	Fe	B土2-67
	鞆羽口010	鞆羽口	2区	井戸4287木枠内	鎌倉	Fe	土72
	鞆羽口011	鞆羽口	2区	南東部掘下げ	不明	Fe	B土2-68
	鞆羽口012	鞆羽口	2区	土坑5227粘土層上層	平安後期	Fe・Pb(微)	B土2-69
	鞆羽口013	鞆羽口	2区	土坑5227粘土層上層	平安後期	Fe・Pb(微)	B土2-70
	鞆羽口014	鞆羽口	2区	土坑5227粘土層中層	平安後期	Cu・Pb(微)・Sn(微)・Fe	土70
	鞆羽口015	鞆羽口	2区	土坑5227粘土層中層	平安後期	Fe	土71
	鞆羽口016	鞆羽口	2区	井戸5829木枠内	平安後期	Fe	土74
	鞆羽口017	鞆羽口	3区	土坑7963	鎌倉後半	Fe	B土2-71
	鞆羽口018	鞆羽口	3区	土坑7108	鎌倉後半	Fe	B土2-72
	鞆羽口019	鞆羽口	3区	土坑9076	鎌倉後半	Cu・Pb・Sn・As(微)・Fe	B土2-73
	鞆羽口020	鞆羽口	3区	土坑8019	鎌倉	Cu(微)・Fe	B土2-74
	鞆羽口021	鞆羽口	3区	土坑8019	鎌倉	Cu・Pb・Fe	B土2-75
	(ガラス玉)	ガラス1	ガラス玉(黄色)	2区	土坑2501南半	鎌倉	Pb(主):鉛ガラス
ガラス2		ガラス玉(水色)	3区	第1面遺構精査	不明	Pb(主)・Ca(微)・Fe(微):鉛ガラス	ガラス2
ガラス3		ガラス玉(青・白)	1区	(第3面?)	不明	Pb(主)・Cu(微)・Fe(微):鉛ガラス	ガラス3
ガラス4		ガラス玉(水色)	1区	柱穴474	室町	Pb(主)・Cu(微)・Fe(微):鉛ガラス	ガラス4
ガラス5		ガラス玉(黄色)	2区	遺構検出中	不明	Pb(主)・Fe(やや主)・Ca(微):鉛ガラス	ガラス5

※ 遺物番号B〇〇は、本稿未掲載のBランク遺物。

表2 坩堝分析結果

試料番号	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ag	Sn	Ba	Pb	Au	Co	Hg	備考
坩堝015①	1019	5829	7557	523	838	76.8K	12.2K	110	834	50.2K	688	320	3684	341	277		白緑釉
坩堝015②	1102	5355	14.6K	497	764	57.8K	9442	99	489	37.4K	797	393	2195	273			赤色釉
坩堝015③	3063	12.7K	12.7K	998	787	27.2K	50.6K	216	2147	544	391	1278	10.1K	25		13	赤色釉
坩堝016①	1624	46.6K	38.6K	2350	2520	21.9K	20.2K	59	1547	51	322	1467	1512	27			赤色釉
坩堝016②	10.2K	23.5K	15.4K	2192	3562	61.9K	103.0K	268	11.7K	183	1713	2690	63.4K	17		1	赤色釉
坩堝017①	3676	27.8K	24.7K	1091	5088	27.3K	181.1K	16	3922	171	1176	3081	19.1K	66	422		赤・銅 胎土箇所
坩堝017②	462	36.4K	6509	4350		7776	481	25	118	16	42	706	27		20	8	胎土箇所
坩堝018①	925	8883	14.3K	1927	2422	204.9K	6158	65	91	70	61	1378	117	20		27	白赤・灰 胎土箇所
坩堝018②	560	31.0K	3156	3188	547	19.2K	264	58		16	37	638	38	1	177		胎土箇所
坩堝019①	32.5K	8627	4190	1039	1143	47.2K	216.2K	144	26.7K	294	7099	2490	160.3K		8		胎土箇所
坩堝019②	7967	15.6K	5185	2658	487	20.0K	19.1K	85	2410	57	5351	376	29.4K	15	46		胎土箇所
坩堝020①	385	14.4K	1296	5047	303	16.9K	183	92	20	89	24	708	124	1		13	胎土？
坩堝020②	614	17.7K	1333	5311	277	14.0K	440	102	10	22	27	955	51	4	8	4	胎土？
坩堝021①	4386	19.3K	11.5K	1922	2347	69.5K	190.5K	324	10.2K	424	461	2212	9757	284	212	2	黒釉・緑 胎土箇所
坩堝021②	319	19.6K	11.3K	3109	649	18.5K	476	70	49	30	47	679	103	7			胎土箇所
坩堝022①	1231	31.0K	26.2K	1978	1933	25.0K	4060	45	972	73	254	1152	1061	11		4	白灰色 赤色釉
坩堝022②	845	58.4K	39.9K	2356	2090	16.0K	22.7K	6	736	28	109	1424	140	5			赤色釉
坩堝023①	613	32.6K	26.7K	1902	2065	17.7K	19.0K	25	621	52	114	1309	128	14			胎土箇所
坩堝023②	11.1K	20.3K	18.5K	1731	2104	21.2K	49.6K	124	13.9K	131	227	2320	12.2K			35	胎土箇所
坩堝023③	528	25.2K	12.2K	6231	633	17.8K	627	88		12	41	735	220	2		3	胎土箇所
坩堝024①	4925	41.0K	35.8K	2022	2828	37.8K	106.0K	104	3096	148	2788	2040	10.8K	25	103		赤色釉
坩堝024②	9020	17.3K	22.3K	2082	2675	85.9K	214.5K		22.1K	207	22.5K	2253	56.9K	69			胎土箇所
坩堝024③	15.5K	33.8K	20.3K	4811	1216	16.3K	1444	146	1189	21	146	796	2875	1		5	胎土箇所
坩堝025①	7313	11.5K	8947	2386	1620	91.7K	67.3K	239	11.3K	486	2205	2019	21.6K	174		37	胎土箇所
坩堝025②	334	44.6K	2713	4809	345	13.2K	119	90		24	26	649	79	10	9	5	胎土箇所
坩堝026①	1135	11.1K	29.6K	1290	1496	44.3K	1105	79	415	37.6K	156	632	450	214			白色 胎土箇所
坩堝026②	639	16.6K	5626	5908	546	17.4K	229	173	26	180	22	586	20	6	16		胎土箇所
坩堝027①	5762	26.6K	24.6K	2781		61.9K	76.5K	186									黒色釉 赤色釉
坩堝027②	1455	25.6K	13.1K	1805	1965	48.0K	69.8K	99	2490	248	373	1353	1011	193	294	1	胎土箇所
坩堝027③	470	20.8K	3690	2066	468	20.1K	921	37	107	37	48	783	30	3		1	胎土箇所
坩堝028①	7168	16.0K	7031	2571	1051	59.4K	107.6K	8	6936	224	504	1773	11.8K				黒色釉 赤色釉
坩堝028②	2656	28.5K	15.0K	1806	2815	52.5K	104.5K	135	2052	225	225	1417	2307	101			胎土箇所
坩堝028③	659	31.7K	4062	6226	473	21.5K	1038	123	79	24	23	654	63	15		2	胎土箇所
坩堝029①	5282	17.5K	26.7K	1778	2174	124.0K	17.3K	107	3575	150	440	2283	10.3K	237		59	黒色釉 胎土箇所
坩堝029②	711	37.7K	2817	5215	344	14.9K	381	35	46	19	32	726	124	10	73		胎土箇所
坩堝030①	531	10.7K	6166	1943	2166	130.1K	891	134	106	15.2K	253	851	253	57	521		胎土箇所
坩堝030②		28.8K	6701	4996	386	14.5K	103	41	2	92	27	748	14	9	63	3	胎土箇所
坩堝031①	6398	18.3K	12.6K	2903	575	18.3K	6421	49	1987	48	55	775	1309			7	海老茶釉 胎土箇所
坩堝031②	556	22.6K	3976	5174	163	7999	596	64	15	31	20	799	25	9	40	3	胎土箇所
坩堝032①	1217	10.6K	3384	1870	696	258.9K	1838	146		22.3K	229	1152	482	143	1137	179	灰黒釉 黒色釉
坩堝032②	1219	21.2K	15.1K	2307	941	156.0K	4780	110	75	8397	29		519	318			胎土箇所
坩堝032③	552	17.9K	2794	5489		13.2K	537	42	28	34	26	855	181			1	胎土箇所
坩堝033①	793	19.1K	5193	4067	550	22.5K	527	103	56	28	117	1099	743	9	61		胎土箇所
坩堝034①	762	8293	2515	1000	585	19.8K	119.5K	190	714	151	88	1388	567	45			胎土箇所
坩堝034②	398	25.7K	3778	4050	338	9511	271	39	10	20	22	664	8		50		胎土箇所
坩堝035①	2430	44.1K	36.8K	2120	1449	14.3K	15.1K		526	382	52	1318	352	51			胎土箇所
坩堝035②	1393	20.9K	7979	888		29.6K	180.6K		3438	952	162	2173	1380	43	327		胎土箇所
坩堝035③	559	39.4K	7972	4992	793	15.3K	618		6	52	28	769	48	1			胎土箇所
坩堝036①	532	18.3K	3875	3751	406	24.0K	35	98		15	33	772	27	2		5	胎土箇所
坩堝037①	2054	21.6K	25.2K	3398	698	16.3K	6377	135	2196	28	61	885	609			4	白色 灰色釉
坩堝037②	1584	18.9K	35.8K	2252	1238	30.1K	7430	275	1167	67	233	1277	2247	49	153	14	胎土箇所
坩堝037③	418	37.6K	2088	4740	327	12.9K	169	99	2	21	29	725	174	7	101	1	胎土箇所
坩堝038①	12.4K	30.4K	13.5K	1601	1796	19.2K	10.2K	260	4334	109	6146	1672	78.6K	62	85		胎土箇所
坩堝038③	607	29.8K	3329	7091		14.5K	445	186	9	19	48	550	519	12			胎土箇所
坩堝039①	8284	13.1K	7676	2474	6767	84.8K	85.5K	277	9667	267	931	2799	43.2K	262		23	黒・赤釉 銅釉
坩堝039②	1651	12.9K	22.6K	1088	2272	28.8K	54.7K	70	3066	80	329	849	7947				胎土箇所
坩堝039③	700	28.1K	3368	5505	297	10.3K	380	106	29	7	27	618	328	11	17		赤色釉 胎土箇所
坩堝040①	841	19.6K	46.2K	1303	425	7761	12.7K	64	364	2		171	258	8	77		赤色釉
坩堝040②	5535	13.2K	15.4K	3192	2143	103.2K	43.9K	319	8269	147	593	1786	21.3K	117		15	緑・赤・銅
坩堝041①	14.3K	24.3K	23.8K	3920	1393	29.8K	20.3K	153	4570	83	276	1188	10.9K	10		8	灰赤黒釉 胎土箇所
坩堝041②	776	30.6K	5173	5542	381	14.4K	290	98	52	25	35	679	326		8		胎土箇所
坩堝042①	30.6K	6958	3364	1234	2140	87.7K	7228	646	9224	149	270	2234	194.0K				白 胎土箇所
坩堝042②	729	14.6K	3001	4345	427	16.4K	294	109	8	39	33	654	803				胎土箇所
坩堝043①	869	15.7K	13.9K	2147	1020	175.8K	559	71		1484	519	1299	141	28			胎土箇所
坩堝043②	642	5845	5504	802	531	114.4K	1695	144	60	3807	989		175	70	1078		胎土箇所
坩堝043③	942	24.0K	26.5K	1771	1188	24.2K	1406	31		1042	579	1423	779	163		24	胎土箇所
坩堝043④	376	23.5K	3805	8109	321	13.5K	175	131		64	26	669	63				胎土箇所
坩堝044①	1982	25.2K	27.6K	2026	4003	149.2K	76.1K	289	4722	396	4626	1896	10.1K	195			赤・灰色釉 胎土箇所
坩堝044②		36.8K	5605	4740	409	13.6K	177	32	44	20	88	687	52		33	3	胎土箇所

試料番号	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ag	Sn	Ba	Pb	Au	Co	Hg	備考
坩堝045①	2407	22.1K	42.8K	2341	1562	28.9K	16.0K	62	3321		303	1823	2778	153		27	
坩堝045②	5093	21.1K	24.6K	1995	1501	29.0K	18.6K	85	3206	83	169	1810	6319	30		9	
坩堝045③			14.9K		31.4K				635		157		28	29		1	取口垂れ
坩堝046①	2223	34.2K	49.0K	1960	2253	39.6K	58.8K	117	2338	158	1076	1710	5473				
坩堝046②	1687	4432	7149	582	1192	19.9K	12.3K	91	4491	136	685	1991	7533	83	160	24	
坩堝046③	685	30.6K	4895	5606	344	11.0K	806	119	52	20	29	883	169	5			胎土箇所
坩堝047①	346	26.7K	10.0K	1588	1298	34.6K	28	29		33	46	872	10	7		1	黒灰釉 黒色釉
坩堝047②		34.9K	7553	2486	568	14.0K	41	25		15	25	498	7	1			
坩堝048①	523	27.2K	5419	3970	1333	22.5K	42	100		11	25	752	38	3	36	4	胎土箇所
坩堝049①	19.4K	19.6K	5331	2682	242	12.0K	4249	53	1457	34	55	792	3337	44			
坩堝049②	19.5K	13.2K	4628	1770	376	12.0K	10.1K	99	2711	47	96	1061	7090				
坩堝049③	875	20.0K	2350	7100	192	12.8K	235	68	37	11		747	103	2	114		胎土箇所
坩堝050①	10.1K	19.6K	21.8K	5756	1298	38.7K	16.0K	87	1464	39	117	1008	6489	5			黒色釉
坩堝050②	485	30.4K	2388	7012	544	26.2K	94	134	6	26	16	672	60	2	5		胎土箇所
坩堝051①	21.3K	12.8K	7924	2492	1173	66.3K	73.5K		7578	155	575	2279	33.2K	43			黒・赤釉
坩堝051②	437	20.0K	8442	4246	562	20.0K	815	97	20	48	36	883	23	8		12	胎土箇所
坩堝052①	3264	18.5K	22.6K	1790	2439	62.8K	55.5K	208	5884	326	1299	2171	7101	327		9	赤・銅釉
坩堝052②	331	26.8K	3899	6229	401	15.4K	155	153	19	18	31	717	186	2	76		胎土箇所
坩堝053①	906	37.0K	34.2K	4296	3902	71.2K	77	33	6	24	38	1032	27	8		6	灰黒釉
坩堝053②	429	14.5K	2504	4152	893	31.7K	97	98	2	16	25	612	35	6			胎土箇所
坩堝054①	2461	6467	10.9K	1138	2445	60.3K	71.8K	234	7192	324	1122	2555	12.8K	37	2860		
坩堝054②	7128	9591	16.4K	3349	4919	287.5K	166.7K	291	18.5K	49	3717	3215	20.8K	49	2248	11	
坩堝054③	4474	29.6K	11.2K	5542	873	19.6K	1854	129	781	44	138	775	1288	10			胎土箇所
坩堝055①	2825	27.5K	24.4K	3230	3105	19.6K	264.5K		1360	257	296	1801	2842	215	165		赤色釉
坩堝055②	716	25.2K	4846	4172	460	10.6K	108	44		15	35	627	44	8			胎土箇所
坩堝056①	4861	14.2K	32.5K	2533	1956	45.8K	24.6K	223	2268	150	221	1604	17.2K	18		14	黒灰釉
坩堝056②	409	16.1K	2431	4793	533	15.4K	121	132	22	8	30	734	67	4	71	2	胎土箇所
坩堝057①	10.2K	29.4K	19.3K	1698	1433	31.6K	157.3K	101	14.3K	365	11.9K	1061	30.3K	110	89	5	赤色釉
坩堝057②	6214	6723	8312	539	1180	34.4K	892.0K	1298	21.0K	2986	15.7K	485	29.0K	3678	122	328	緑材料
坩堝057③	832	12.3K	3224	2466	488	26.7K	4255	112	822	92	112	699	126	11			胎土箇所
坩堝058①	75.5K	10.9K	3948	1660	3593	419.8K	181.9K	6038	35.5K	380	1825	4185	213.9K				黒色釉
坩堝058②	20.3K	19.3K	7611	5059	1723	100.4K	3215	631	6055	48	1104	2179	63.4K		82		胎土箇所
坩堝059①	1345	60.9K	32.6K	1848	2746	22.2K	44.6K	1129		39	164	1405	467	11			
坩堝059②	2233	51.6K	46.4K	3849	2281	31.2K	23.2K	2509	3	33	106	1376	759				黒垂れ
坩堝059③	3711	29.9K	33.4K	3980	2228	34.3K	23.2K	2228	123	26	118	1271	931	6			白
坩堝059④	20.2K	5732	16.7K	1095		11.4K	754	5216	590	36	64	1075	3339	4	189		胎土箇所
坩堝060①	10.9K	18.7K	23.7K	2899			8132	76	2964	79	741	1446	13.6K			9	
坩堝060②	996	52.1K	14.3K	6539		18.8K	751	198	9	45	47	801	379				
坩堝060③	812	21.2K	4581	5553		16.3K	735	123	54	28	26	938	190				
坩堝061①	14.4K	15.2K	12.8K	1977	1521	37.4K	72.9K	70	8107	166	8186	3010	51.7K	27	112		赤色釉
坩堝061②	17.9K	9327	7956	1118	1559	109.0K	43.6K	249	8763	176	9213	3405	66.1K	36	83		黒色釉
坩堝061③	1609	24.8K	2712	7533	222	17.5K	264	114	122	20	61	749	967	2	55		胎土箇所
坩堝062①	20.5K	12.5K	4868	1548	1845	88.5K	43.3K	412	9800	239	1389	4059	136.4K			38	
坩堝062②	1801	78.8K	42.7K	3157		21.4K	28.1K	69	201	90	351	1582	1182	34	123		垂れ
坩堝062③	942	18.3K	4428	6275	368	15.0K	598	250	65	39	30	696	322			5	胎土箇所
坩堝063①	1977	14.5K	8852	2793	1622	16.1K	1826	156	791	39	41	791	636	9		10	
坩堝063②	859	25.2K	8017	6217	450	13.9K	734	156	60	25	28	1023	328	13		2	胎土箇所
坩堝064①	1327	7037	4023	1408		61.1K	17.8K	315		279	1051	976	6778	4		14	
坩堝064②	2180	10.7K	4993	1937	1149	50.2K	13.5K	247		197	669	675	6657	12			
坩堝064③	19.9K	15.6K	21.1K	4111	3101	87.9K	101.5K	211	2574	130	901	2438	33.7K	57			緑青付着
坩堝064④				349	18.0K	1181	82					1495					胎土箇所
坩堝065①	3211	9129	9018	1421		57.9K	351.0K		40.4K	191	75	1048	8549		428		緑
坩堝065②	25.8K	12.3K	7208	2197	1341	190.6K	73.7K	900	33.3K	90	1917	700	142.5K	57			
坩堝066①	21.0K	3524	2328	492	2201	108.6K	36.3K	450	108.3K	236	1569	3689	269.1K		2184		
坩堝066②	6047	11.2K	7882	1894	791	44.3K	235.1K	216	14.2K	186	118	402	10.8K		103		
坩堝066③	1323	23.6K	4640	6588	363	15.2K	7653	131	812	9	22	1304	628	2			胎土箇所
坩堝067①	18.8K	14.7K	9984	1915	2088	38.9K	16.6K	115	3729	305	420	2071	20.5K	24	339		
坩堝067②	22.5K	14.2K	8880	2062		38.8K	15.1K	139	4661	212	395	2040	22.2K	10	59	5	
坩堝067③	840	26.6K	4612	7289	630	21.3K	610	183	15	74	27	705	265			4	胎土箇所
坩堝068①	442	25.0K	2967	5120	332	9333	71	89	19	10	28	793	37	5			胎土箇所
坩堝069①	90.5K	5440	3128	1082		89.8K	81.7K	315	90.4K	859	615		772.1K				
坩堝069②	12.3K	17.6K	2225	6303	546	31.7K	1635	159		31	52	594	26.9K	17			胎土箇所
坩堝070①	7512	12.3K	20.3K	2591	1127	28.7K	74.9K	184	5942	507	219	1257	6348	114			
坩堝070②	2975	17.6K	12.7K	2531	949	22.8K	20.9K	178	2887	97	159	1135	3515	7	26		
坩堝070③	3919	13.0K	10.7K	2084		25.0K	23.1K	166	2978	108	246	1393	5855	23		18	
坩堝070④	1259	18.9K	13.3K	5538	4509	20.7K	2023	185	148	21	36	856	774	3			胎土箇所
坩堝071①	702	16.5K	1706	3387	290	8253	519	111	134	96	38	753	834	1	33		
坩堝071②	1568	24.4K	4135	4820	231	9682	363	132	348	36	49	691	1534	1	4	5	胎土箇所
坩堝072①	10.1K	14.8K	14.1K	1702	1953	12.2K	14.7K	80	5077	81	1924	1591	19.7K				赤色釉
坩堝072②	49.1K	15.5K	13.2K	2844	2284	27.2K	29.1K	199	16.3K	158	1130	3606	87.2K			2	黒色釉
坩堝072③	3260	21.4K	4993	9332	696	13.8K	421	180	385	18	115	815	2894	1		7	

表3 韃羽口分析結果

試料番号	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ag	Sn	Ba	Pb	Au	Co	Hg	備考
韃羽口001①	1330	21.0K	13.9K	4761	513	14.8K	863	235	44	1006	26	713	139			31	
韃羽口001②	1200	23.7K	16.9K	4653	804	21.6K	1084	260	77	896	20	523	312			39	
韃羽口002①	5819	17.5K	2660	3018			583	88	908	49	86	892	2967				
韃羽口002②	13.7K	29.8K	4412	4312	794	18.8K	580	117	1764	43	146						
韃羽口003①	4770	25.4K	17.3K	797	1071	34.2K	7740	37	321		3059	898	10.6K		112		
韃羽口003②	5598	32.9K	20.2K	1106	1242	45.0K	9995	85	440	92	3763	816	13.2K				
韃羽口004①	955	22.3K	6085	2817	418	10.2K	1248	62	228	80	48	858	152	4			
韃羽口004②		25.0K	7544	3345	397	10.2K	1242		250				156				
韃羽口005①	751	22.7K	4681	7406		18.3K	127	160	21	13	57	716	192				
韃羽口005②		18.5K	4604	5016	844	97.4K	177	130	96	18	51	1110	123				
韃羽口006①	11.1k	46.9K	26.7K	2730	2936	47.3K	36.7K	81	2015	75	3335	1852	20.0K				
韃羽口006②	16.0K	44.3K	32.7K	1749	2583	78.7K	301	80	4615	1290	51.5K	1966	95.2K	156	1002		
韃羽口006③	7632	17.6K	11.3K	1553	1522	36.5K	116.0K	61	1118	89	13.4K	1810	27.4K	66	132		
韃羽口006④	63.4K	12.9K	225K	2389	581	13.4K	1562	199	3661	83	453	1255	12.5K			56	胎土箇所
韃羽口007①	58.6K	12.9K	7152	2101	1987	155.4K	954	409	73.0K	951	32.6K	2748	435.5K				
韃羽口007②	63.2K	11.4K	6655	1603	1912	131.2K	102.4K	605	87.1K	1387	39.5K	4470	505.8K				
韃羽口007③	19.9K	29.2K	8330	5891	607	21.7k	2656	165	1828	64	114		10.0K				胎土箇所
韃羽口008①	860	16.3K	4802	3513	740	21.8K	787	145	1316	34	231	846	2633				
韃羽口008②	488	3766	1923	723	443	16.5K	610	168	931	74	157	678	1743				
韃羽口008③	1453	17.6K	5076	3432		20.8K	1105	193	1955		269	885	3390			7	
韃羽口009①		12.9K	1658	4321		13.7K	275	84	10	187	46	847	95		114		
韃羽口009②	1149	28.5K	9305	4014	460	12.7K	668	162	95	236	34	761	183				
韃羽口010①		7528	56.5K	2787	3380	133.1K	210	94		82	65	1930	50				
韃羽口010②		38.2K	23.2K	3578	2921	103.9K	153	84	13	28	59	1876	31				
韃羽口010③	1078	25.4K	6424	5433	313	10.7K	117	180	23	11		984	59				胎土箇所
韃羽口011①	347	21.5K	2963	3725	277	14.1K	155	123	77	29	44	832	100				
韃羽口012①	933	15.2K	49.9K	2369	2033	318.9K	178	123	89	36	70	2733	56				
韃羽口012②	1025	24.3K	4260	3723	304	18.1K	89	251	11	12	30	856	50				
韃羽口013①	1143	26.9K	16.7K	3231		57.7K	127	119	17	15	51	1189	59				
韃羽口013②	1745	15.8K	30.7K	2270	1408	239.5K	181	115	199	29	180	1831	1088				
韃羽口013③	610	11.2K	7189	1899	1483	98.9K	191	296	32		70	1449	140				
韃羽口014①	9366	30.1K	13.9K	2238	1749	103.5K	14.8K	42	281	52	1884	1558	2485				
韃羽口014②	3229	16.4K	17.4K	3452		878.6K	8322	112	180	37	217	2430	131		3217		
韃羽口014③	9100	23.7K	10.8K	4111	1710	139.3K	32.0K	100	652	40	1232	1643	618		702		
韃羽口015①	1827	20.5K	15.6K	1456	1504	123.1K	145	62	4	45	87	1886	61				
韃羽口015②	8179	30.3K	13.6K	5092	653	15.3K	126	148	41	12	29	1110	211	2			
韃羽口016①		18.4K	1762	5179	251	24.1K	111	50		7	26	886	58	7			
韃羽口017①	599	21.1K	4927	5775		12.4K	93	67	11	10	23	887	46				
韃羽口018①		28.8K	4265	4151	496	69.6K	51	137	15	19	32	947	20			8	
韃羽口019①	13.9K	25.2K	16.9K	1497	1812	68.1K	149.2K	607	4184	272	64.3K	1665	101.4K	69			
韃羽口019②	16.3K	48.2K	23.7K	3550	1517	63.6K	69.5K	185	2692		14.0K	1441	73.0K			24	
韃羽口020①	996	52.1K	14.3K	6539		18.8K	751	198	9	45	47	801	379				
韃羽口020②	812	21.2K	4581	5553		16.3K	735	123	54	28	26	938	190				
韃羽口021①	13.5K	33.3K	24.1K	4037	2420	84.5K	10.8K	212		84	7101	1419	38.7K				
韃羽口021②	1352	13.1K	2525	3485	1738	18.3K	561	64	104	36	43	901	776				

箇所と内面及び縁面の試料付着箇所のそれぞれの箇所に関する詳細な定性分析を実施し、その比較差で滓物質の無機元素の同定を行った。分析は(株)堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析時間は600秒、試料室内は真空、X線管電圧は15kV及び50kV、電流は240μA及び20μA、検出強度は200.0～250.0cpsである。

4. 調査結果

各種の観察及び分析調査を行った結果、以下のような基礎的データの蓄積を得た(表1)。なお本試料群のうち、坩堝・韃破片に付着したガラス質釉試料の詳細な分析値は表2・3に掲載する。

① 金属製品のうち、緑青サビが目視観察された金属製品は分析調査の結果、銅(Cu)のみの強いピークが検出される試料、銅(Cu)の強いピークとともに鉛(Pb)のピークが同時に検出される

試料、銅 (Cu)・鉛 (Pb) にスズ (Sn) のピークが伴う試料 (図1) の3つのグループに分類された。一部の試料ではこれらに微量のヒ素 (As) が確認される試料も存在するが、これは原材料の銅 (Cu) 鉱物に当初から共存しているものであろう (図2)。また、銅 (Cu) に極めて微量な亜鉛 (Zn) のピークが共存する試料も確認された。

② 金属製品のなかには金鍍金もしくは金箔貼りが施された資料も存在している。目視観察では金の発色が良好な資料とやや青金に近い色相を呈する資料が存在していたが、分析調査の結果、試料金属002・金属004・金属012・金属025・金属032・金属滓027・金属054は金 (Au) とともに若干の銀 (Ag) のピークが検出された (図3～8)。一方、試料金属007は金 (Au) のみのピークが検出された (図9)。このなかで、試料金属007や金属025からは微量の水銀 (Hg) のピークも同時に確認されたため、これらは水銀鍍金の可能性も指摘される。

③ 小型ガラス玉資料は、ガラス胎のなかに細かい気泡が確認された。色相は透明感が強い青色系、黄色系、白濁した空色系などであるが、いずれも強い鉛 (Pb) のピークが検出される鉛ガラスであった (図10～14)。

④ 各試料の付着滓物質の色相は、黒色系・赤色系・茶色系・灰色系・淡黄系・白色系、さらには原材料と考えられる銅のメタル状態が反映していると想定される光沢がある茶銅系・この銅がサビ化したと想定される緑青色系など、色相は比較的多岐におよんでいた (図15～24)。

⑤ 本試料群である滓物質の表面状態を拡大観察した結果、黒色系・灰色系・赤色系滓の試料箇所では、被熱による沸騰泡痕跡が確認された。一方、白色系・淡黄系物質の箇所では、このような沸騰泡痕跡は確認されなかった。また多くの試料では高温被熱に伴うシリカ成分溶融固化に伴う透明感があるガラス釉化物質が被膜付着した状態が観察された。この状況から、本報では本試料群を「ガラス釉化した滓物質」と呼称している。

⑥ 土師器取鍋皿の外表面など、各試料の滓物質が付着していない箇所を蛍光X線分析した結果、いずれも試料においても強い鉄 (Fe) のピークとともに、シリカ (Si)、カリウム (K)、チタン (Ti)、微弱なカルシウム (Ca)、マンガン (Mn) などのピークが検出された。このピークの検出状況は、すべての試料ではほぼ同様である。そのため、本試料群の土師質皿の胎土は、基本的にはほぼ同質であると理解した (図25・26)。

⑦ ガラス釉化した滓物質箇所を蛍光X線分析した結果、いずれの滓物質ともに鉄 (Fe) と銅 (Cu)、さらにはカルシウム (Ca) の強いピークが検出された。さらに試料によっては、鉄 (Fe) と銅 (Cu)、カルシウム (Ca) の強いピークとともに鉛 (Pb) のピークが同時に検出されるもの (図27)、比較的強い鉛 (Pb) とヒ素 (As) が共存して検出されるもの (図28)、微弱な鉛 (Pb) とヒ素 (As) のピークが共存して検出されるもの、極めて微弱なヒ素 (As) のピークが検出されるものなどが存在していた。またごくわずかの試料には銅 (Cu) とともに極めて微弱な亜鉛 (Zn) のピークが共存するものもあった。

⑧ いずれの試料においても、鉄 (Fe) のピークは銅 (Cu) のピークとともに強く検出されているが、胎土箇所でも鉄 (Fe) の強いピークが検出されている。そのため、銅素材と鉄素材を混和し

てそれが溶融しているのではなく、基本的には純銅もしくは鉛添加の銅の什器生産に伴う滓であると理解した。また、一部の試料で微量に検出されるヒ素 (As) は、鑄造過程において意識的に添加したものではなく、基本的に素材である銅鉱石自体に含まれていたものであろう (図29)。

⑨ 本試料群のうち、付着占有率が高い黒色系・赤色系・灰色系の滓箇所では、特に銅 (Cu) のピークが強く、この点では原材料と考えられる銅のメタル状態を反映した光沢がある茶銅系滓箇所や、この銅滴素材がサビ化したと想定される滓箇所と類似した分析結果であった。その一方で、白色系や淡黄系箇所ではカルシウム (Ca) もしくは鉛 (Pb) のピークがやや高い傾向が認められた。以上の点から、同じ埴塙破片や薄手の土師器皿破片などの内面や縁面に付着したガラス釉化した滓物質であっても、銅に意識的に混和したと考えられる鉛 (Pb) や、銀 (Ag) のピークが認められるものもあった (図30)。また、滓物質に意識的に高温沸騰の消泡材料として添加した可能性がある石灰などのカルシウム (Ca) は、常に均一に溶融混合した状態ではなく、偏在化が存在したようである。

⑩ 本試料群は、薄手の土師器皿破片と厚手の埴塙破片といった異なる用途・器種の鑄造容器に付着していた滴物質であるが、双方の分析結果は類似したものであった。そのため、これらの土器資料は一連の銅関連の器種生産の鑄造工程で使用された一連資料であろう。

⑪ 本資料群のうち土製の鞆破片に付着したガラス釉化した滴物質も黒色系・赤色系・灰色系を呈するものも多い。分析調査の結果、いずれも鉄 (Fe) のピークが強く検出された。これは鉄冶金の痕跡を示す可能性もあるが、一部ではあくまでも土製埴塙の胎土の性質を反映している可能もある。そしてこの鉄 (Fe) とともに銅 (Cu)・スズ (Sn)・鉛 (Pb) が同時に検出される試料、これに微量のヒ素 (As) が確認される試料、鉄 (Fe) の強いピークとともに微量の鉛 (Pb) が確認される試料なども存在していた。

⑫ 鉄滓試料からは鉄 (Fe) の強いピークが検出されたため、比較的純度が高い鉄滓であると理解した (図31)。また銅滴試料は、銅 (Cu) のみのピークが検出される試料 (図32) と、これに鉛 (Pb) や微量のヒ素 (As) のピークが確認される試料なども確認された。

(参考文献)

「飛鳥池遺跡の性格をめぐって」『文化財論叢 Ⅲ 奈良文化財研究所創立50周年記念論文集』、p157-170、吉川弘文館

杉山洋 (1990) 「奈良時代の金属器生産 - 銅器生産遺跡を通して見た考古学的素描 -」『仏教芸術 第190号』、p47-72、東京文化財研究所

京都市埋蔵文化財研究所 (2005) 『平安京左京八条三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-10』

鈴木正貴・蔭山誠一 (2004) 「清須城下町における銅製品生産 - 愛知県における金属器生産 (7)」『研究紀要 第5号』、p47-62、愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

大阪文化財協会 (1998) 『住友銅吹所跡発掘調査報告:住友銀行鰻谷新システムセンター建設に伴う発掘調査報告書』、大阪文化財協会

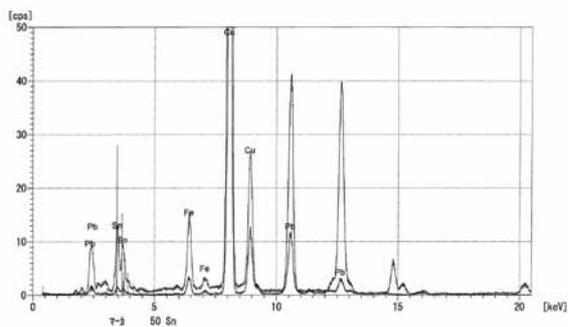


図1 金属製品の蛍光X線分析結果①（試料金属046）

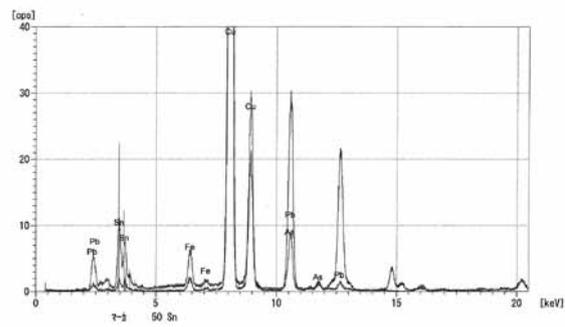


図2 金属製品の蛍光X線分析結果②（試料金属051）

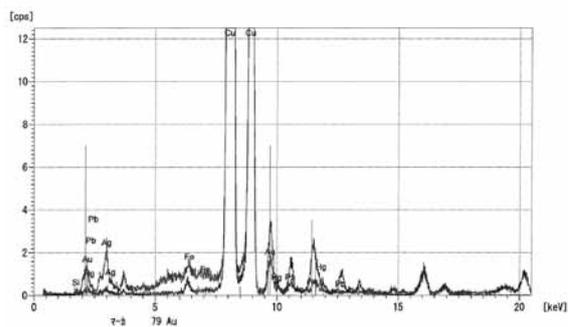
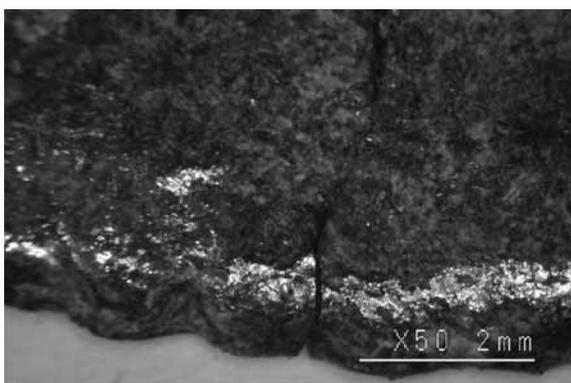


図3 試料金属002の金塗装拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

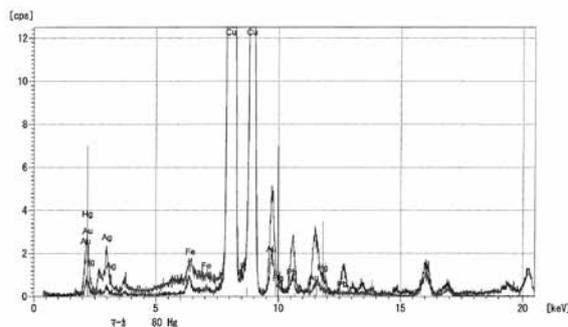
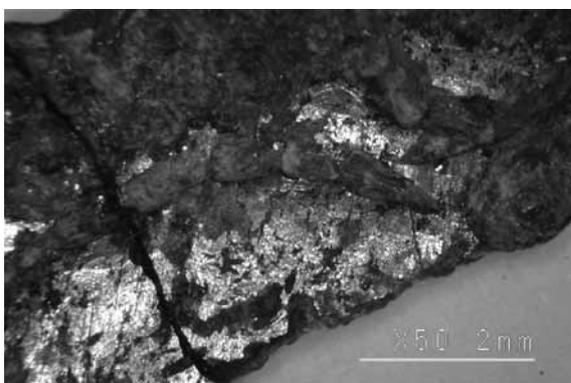


図4 試料金属004の金塗装拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

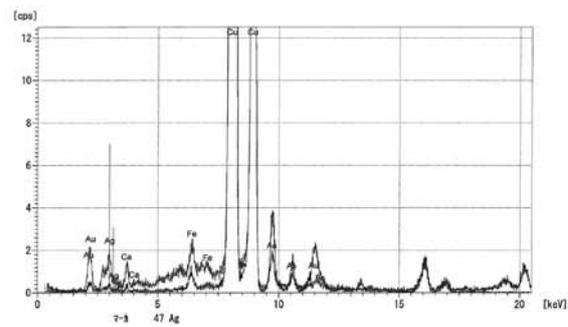
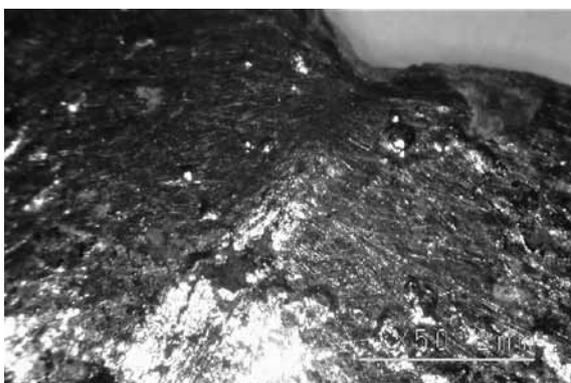


図5 試料金属012の金塗装拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

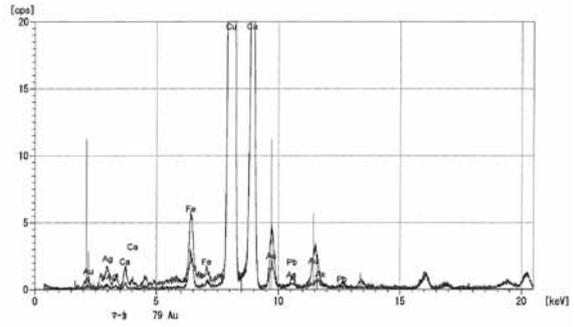
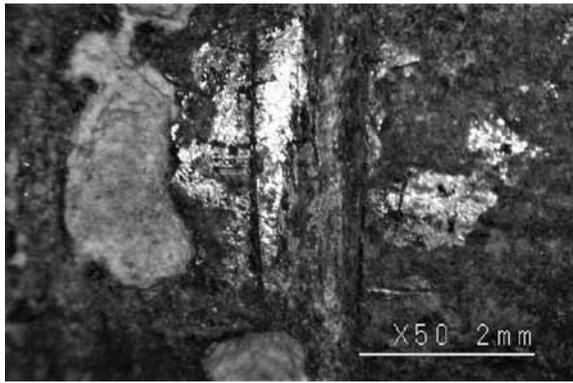


図6 試料金属032の金塗装拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

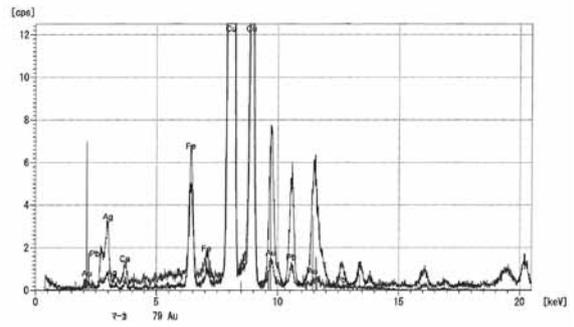
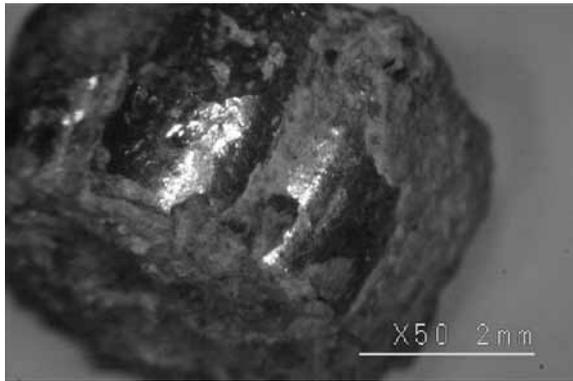


図7 試料金属027の金塗装拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

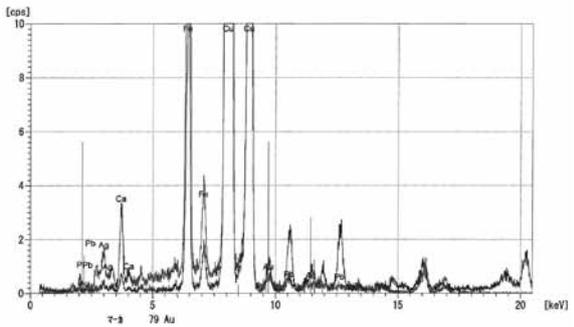
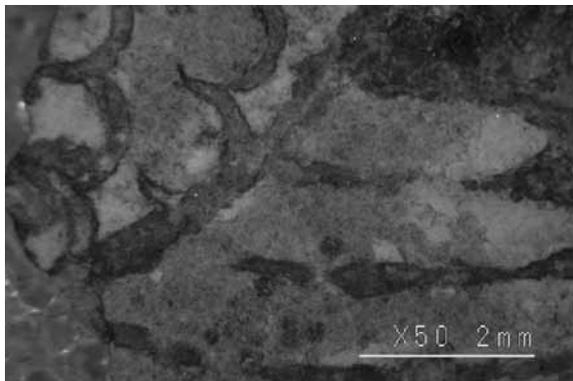


図8 試料金属054の拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

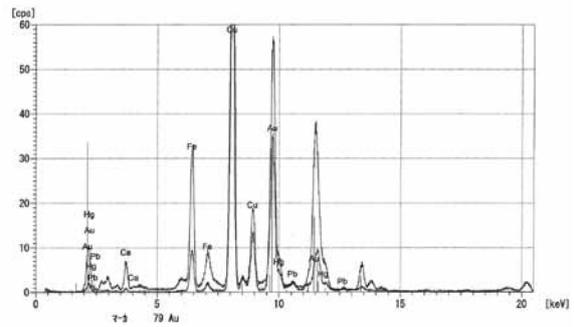
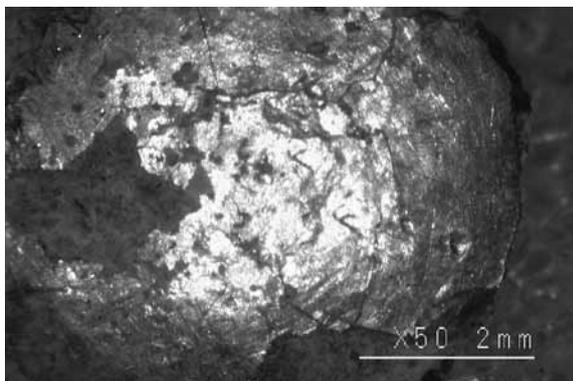


図9 試料金属007の金塗装拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

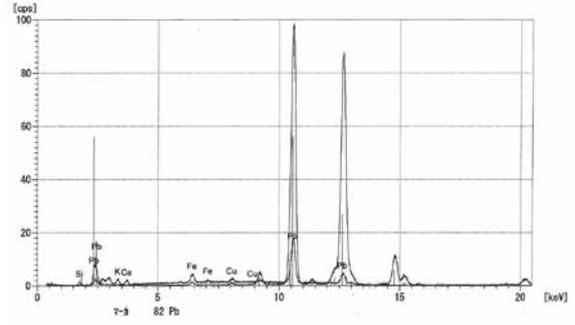
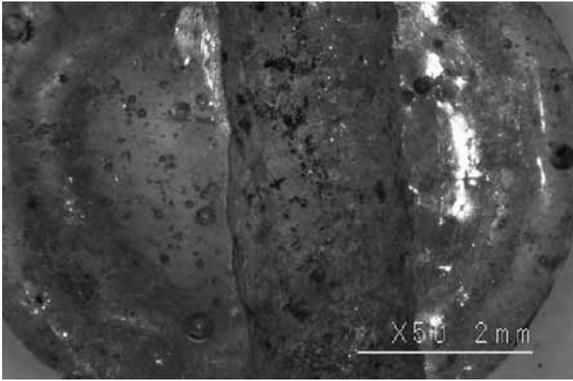


図10 試料ガラス1の拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

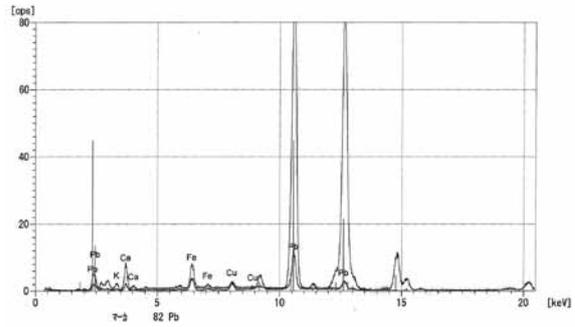
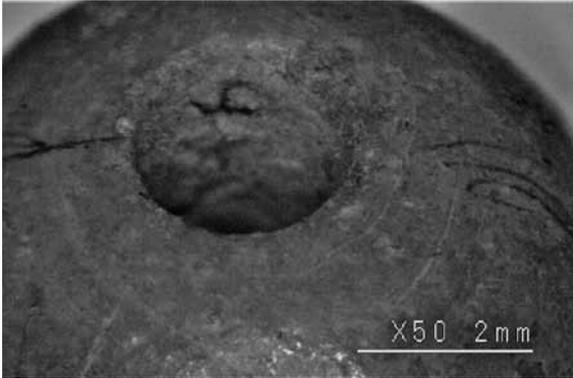


図11 試料ガラス2の拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

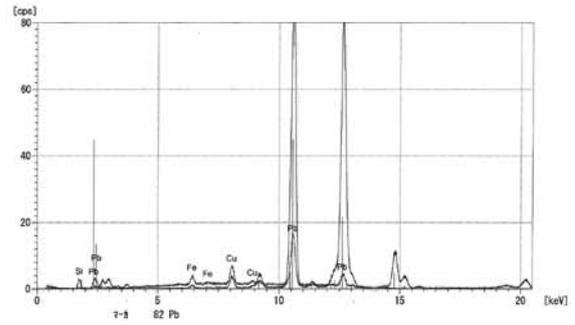
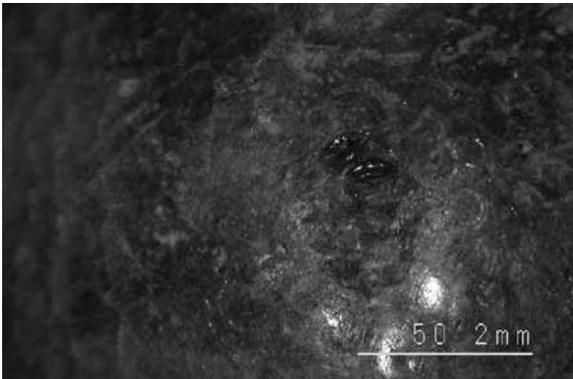


図12 試料ガラス3の拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

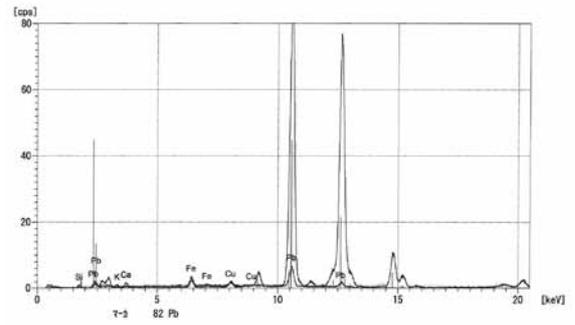
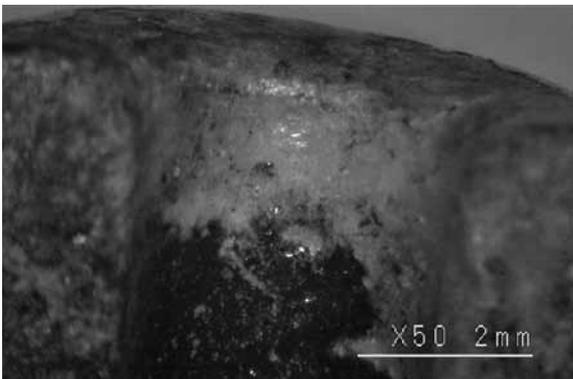


図13 試料ガラス4の拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）

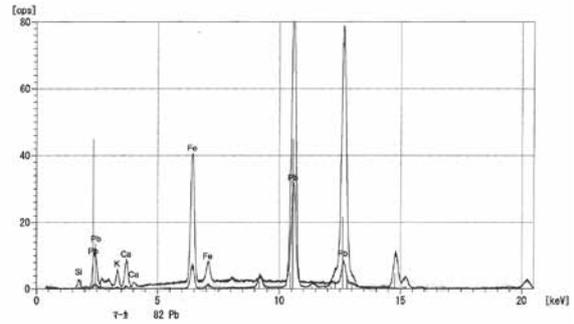
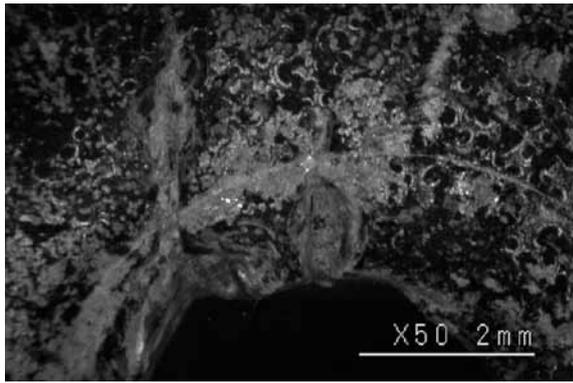


図14 試料ガラス5の拡大観察（左）と蛍光X線分析結果（右）



図15 緑色ガラス滴物質の付着状態（試料取鍋018）

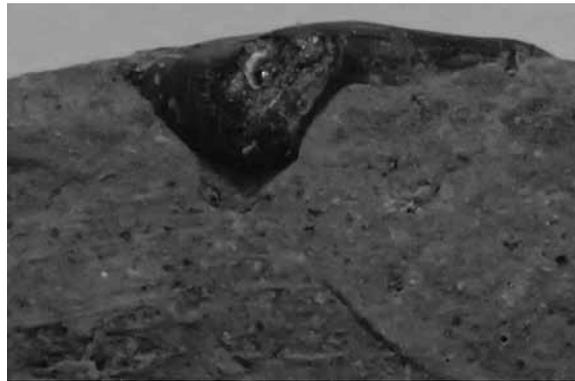


図16 黒色系滴物質の付着状態（試料取鍋024）

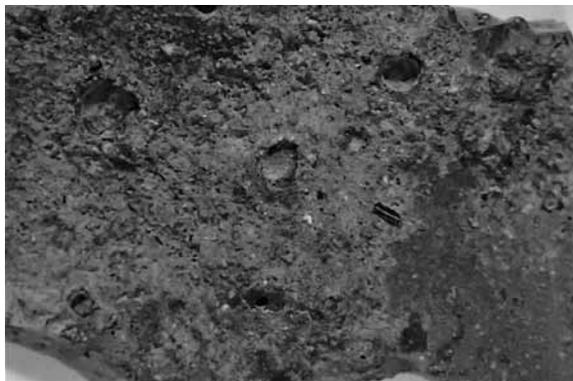


図17 赤・緑色系滓物質の付着状態（試料取鍋028）



図18 赤・黒色系滓物質の付着状態（試料取鍋033）



図19 白緑色系滓物質の付着状態（試料取鍋035）



図20 赤色系滓物質の付着状態（試料取鍋035）

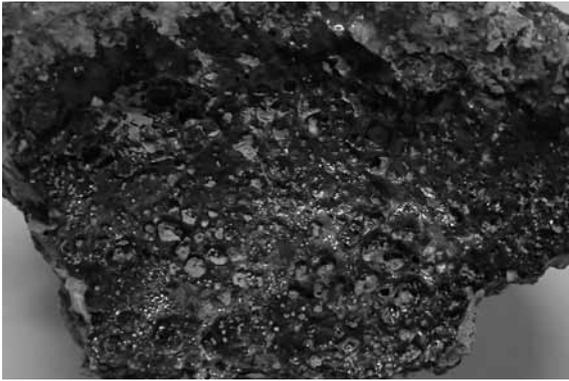


図21 黒色系滓物質の付着状態（試料取鍋008）

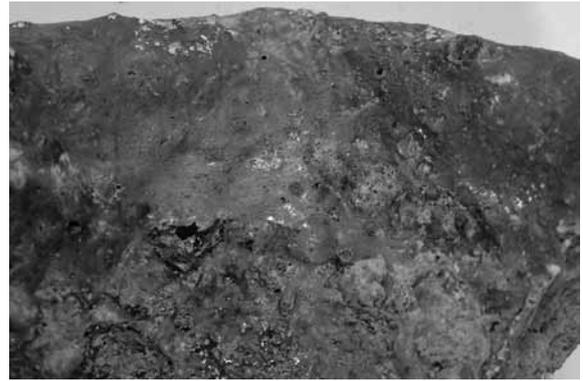


図22 赤・灰・緑色系滓物質の付着状態（試料坩堝035）

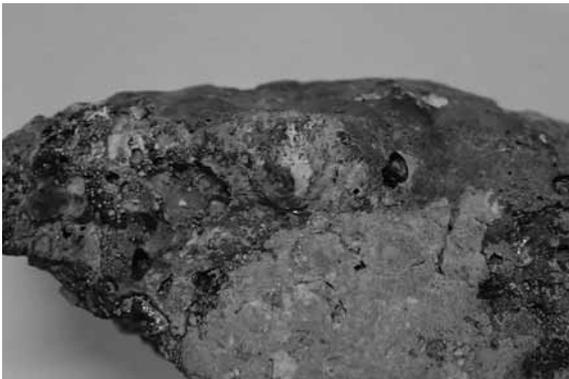


図23 赤・緑色系滓物質の付着状態（試料坩堝057）

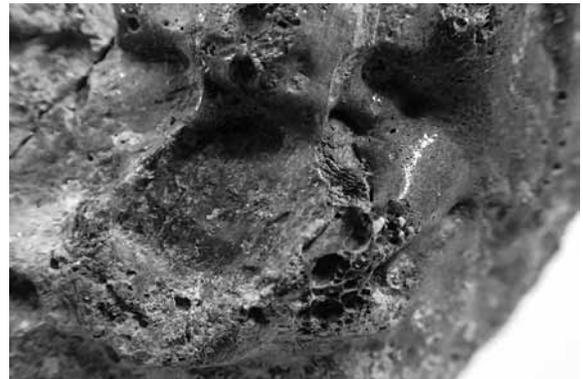


図24 赤色系滓物質の付着状態（試料坩堝059）

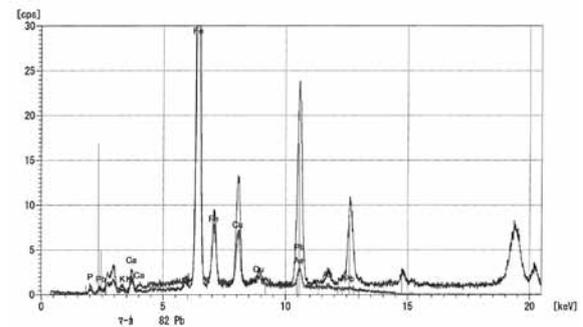
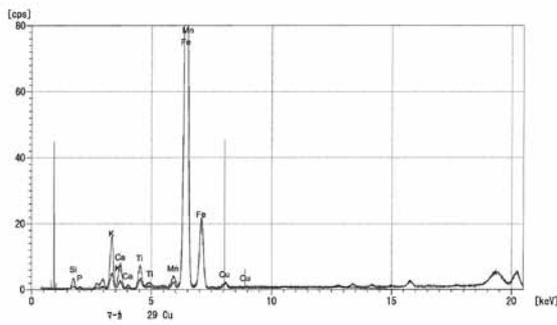


図25 試料取鍋007の蛍光X線分析結果（左：胎土、右：滓物質）

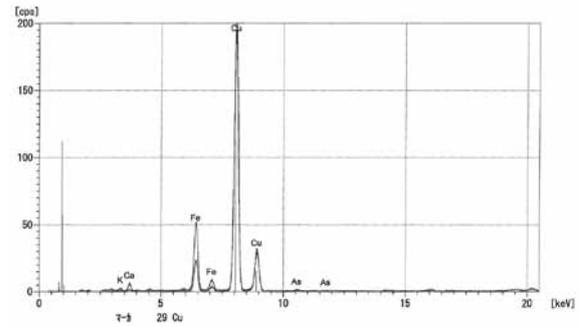
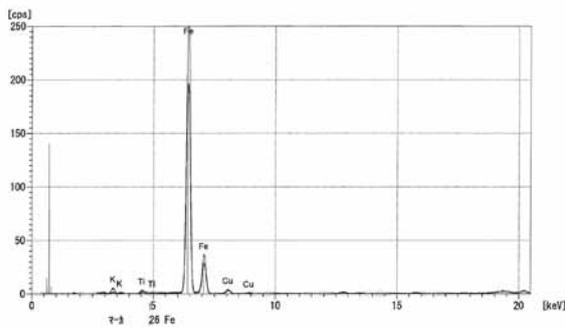


図26 試料取鍋014の蛍光X線分析結果（左：胎土、右：滓物質）

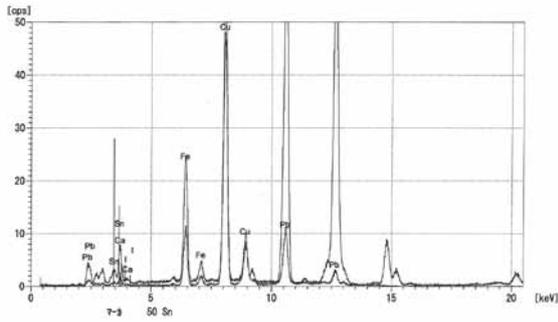


図27 滓物質の蛍光X線分析結果①（試料金属滓040）

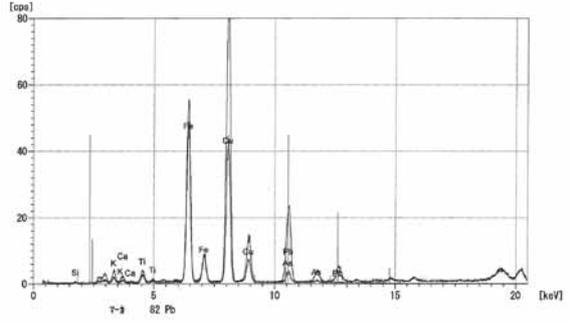


図28 滓物質の蛍光X線分析結果②（試料坩堝011）

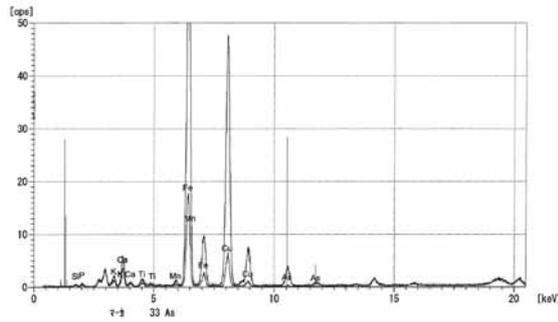


図29 滓物質の蛍光X線分析結果③（試料取鍋013）

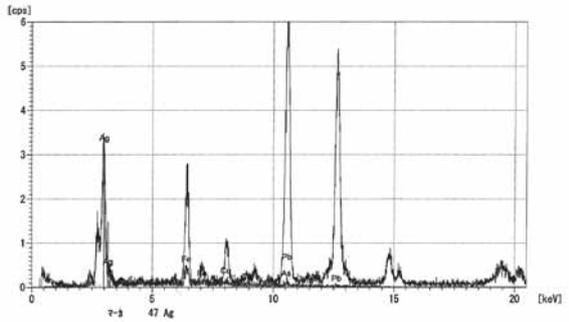


図30 滓物質の蛍光X線分析結果④（試料坩堝069）

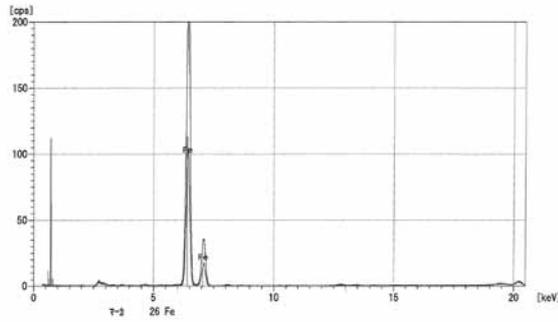


図31 鉄滓の蛍光X線分析結果（試料金属滓039）

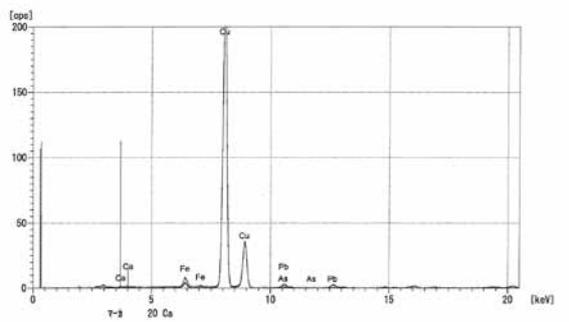


図32 銅滴の蛍光X線分析結果（試料金属滓024）

付章3 平安京左京八条四坊一町跡出土の動物遺存体

丸山真史（東海大学）

はじめに

これまでの平安京跡の発掘調査では、平安時代前期から近代までの動物遺存体が多数出土している。今回の調査で出土した動物遺存体は、破片数にして46点を数え、それらのうち種類や部位などを同定したものは24点である。そのなかでも近世の魚貝類の出土量は膨大であるのに対して、中世の動物遺存体は少ないことが特徴的であった。それに対して今回の調査では、出土量は少ないにしても、平安時代後期から室町時代までの動物遺存体が出土しており、中世京都における動物利用を明らかにする資料としても重要である。

1. 種類別の特徴

a) 貝類

サザエ? 2区土坑2477から1点出土している。殻軸の破片であり、同定には至らない。

アカニシ（図版256-6） 2区井戸4342から1点、2区土坑2346から1点、2区土坑3144から1点、2区土坑5227から5点出土している。これらのほか、アカニシと思われる破片が2区井戸4292、2区井戸5665、2区土坑2643、2区土坑2525、2区土坑2389から1点ずつ、2区土坑5227で2点出土している。

ハマグリ（図版256-7・8） 2区土坑2502から4点（左1右3）が出土している。

b) 魚類

マダイ 2区土坑3810から角骨（左）、口蓋骨（左）が1点ずつ、計2点が出土している。被熱して白色を呈し、体長30~40cmと推定される。2区土坑3505と2区土坑4383から、それぞれ前頭骨1点が出土している。いずれも被熱して白色を呈し、体長30cm以上と推定される。

種不明 1区土坑193から椎骨（尾椎）が1点出土しており、被熱して白色を呈する。

c) 鳥類

ニワトリ（図版256-5） 1区第1面検出中に大腿骨（左右?）1点が出土している。ほぼ完形であり、最大長（GL）79.0mm、近位端最大幅（Bp）17.7mm、遠位端最大幅（Bd）12.1mmを測る。

d) 哺乳類

ニホンザル（図版256-4） 2区土坑5227から上腕骨（左）1点が出土している。

イヌ（図版256-2） 3区土坑8545から下顎骨（左）が1点出土している。被熱して白色を呈する。

ネコ（図版256-3） 2区土坑4383から大腿骨（左）が1点出土している。

ウマ 2区土坑3652から遊離歯（上顎I 2、右）が1点出土している。歯の咬耗状態から、若齢ないし壮齢と推定される。2区溝5305から遊離歯（上顎臼歯、右?）が1点出土している。表面

表1 動物遺存体一覧表

遺構・層位	時代	大分類	小分類	部位	左右
1区第1面検出中	室町時代	鳥綱	ニワトリ	大腿骨	左右
1区第1面検出中	室町時代	哺乳綱	不明	不明	-
1区土坑193	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	不明	椎骨	-
1区土坑246	鎌倉時代前半	哺乳綱	不明	長管骨	-
1区第4面検出中	平安時代	哺乳綱	シカ	枝角	-
1区井戸452	平安時代後期～鎌倉時代前半	哺乳綱	ウマ/ウシ	長管骨	-
2区土坑2477	室町時代中期～後期	腹足綱	サザエ?	殻質	-
2区土坑2502	室町時代後期	哺乳綱	ウマ/ウシ	遊離歯	-
2区土坑2502	室町時代後期	斧足綱	ハマグリ	殻質	左
2区土坑2502	室町時代後期	斧足綱	ハマグリ	殻質	右
2区土坑2502	室町時代後期	斧足綱	ハマグリ	殻質	右
2区土坑2502	室町時代後期	斧足綱	ハマグリ	殻質	右
2区土坑2643	鎌倉時代後半～室町時代前期	腹足綱	アカニシ?	殻質	-
2区土坑2346	室町時代前期～中期	腹足綱	アカニシ	殻質	-
2区土坑3150	鎌倉時代	哺乳綱?	不明	不明	-
2区土坑3144	鎌倉時代	腹足綱	アカニシ	殻質	-
2区土坑2525	鎌倉時代後半	腹足綱	アカニシ?	殻質	-
2区土坑2389	鎌倉時代後半	腹足綱	アカニシ?	殻質	-
2区土坑2755	鎌倉時代後半	哺乳綱	不明	不明	-
2区土坑3810	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	マダイ	角骨	左
2区土坑3810	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	左
2区柱穴3476	平安時代後期	哺乳綱	不明	不明	-
2区土坑3505	鎌倉時代後半	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	-
2区井戸4292	鎌倉時代後半	腹足綱	アカニシ?	殻質	-
2区土坑4383	鎌倉時代後半～室町時代前期	哺乳綱	ネコ	大腿骨	左
2区土坑4383	鎌倉時代後半～室町時代前期	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	-
2区土坑3652	室町時代前期	哺乳綱	ウマ/ウシ	遊離歯	右
2区土坑4213	室町時代前期	哺乳綱	不明	遊離歯	-
2区井戸4342	鎌倉時代前半	腹足綱	アカニシ	殻質	-
2区溝5305	鎌倉時代前半	哺乳綱	ウマ	遊離歯	右?
2区土坑5505・5506	平安時代後期	哺乳綱	ウマ/ウシ	遊離歯	-
2区第3面検出中	平安時代	哺乳綱	不明	不明	-
2区井戸5665	鎌倉時代後半	腹足綱	アカニシ?	殻質	-
2区土坑5227	平安時代後期	腹足綱	アカニシ?	殻質	-
2区土坑5227	平安時代後期	腹足綱	アカニシ	殻質	-
2区土坑5227	平安時代後期	腹足綱	アカニシ	殻質	-
2区土坑5227	平安時代後期	腹足綱	アカニシ	殻質	-
2区土坑5227	平安時代後期	腹足綱	アカニシ	殻質	-
2区土坑5227	平安時代後期	腹足綱	アカニシ	殻質	-
2区土坑5227	平安時代後期	腹足綱	アカニシ?	殻質	-
2区土坑5227	平安時代後期	哺乳綱	サル	上腕骨	左
2区土坑5227	平安時代後期	哺乳綱	ウシ	中手骨	左?
3区土坑8545	鎌倉時代前半	哺乳綱	イヌ	下顎骨	左
3区土坑8852	鎌倉時代前半	不明	不明	不明	-

に付着した泥が固く、歯冠高の計測が困難であるが、咬耗が一定進んだ壮齢と推定される。

ウシ（図版256-1） 2区土坑5227から中手骨（左?）が1点出土している。遠位端最大幅（Bd）59.2mmをはかり、体高は120～125cmと推定される。日本在来の口之島牛に相当する大きさである。遠位部が切断されており、切断面には平行条線が多数みられ、鋸によって切断したものと考えられる。

ウマ/ウシ 1区井戸452から部位不明の四肢骨、2区土坑2502と2区土坑5505・5506から遊離歯（臼歯）が1点ずつ出土している。

ニホンジカ 1区第4面検出中に枝角（左右不明）が1点出土している。自然に頭部から脱落した落角であり、表面は摩滅している。

2. 動物利用の特徴

同定した動物種は貝類、魚類、鳥類、哺乳類であり、貝類の出土量が最も多い。貝類はアカニシとハマグリ、魚類はマダイ、鳥類はニワトリ、哺乳類はニホンザル、イヌ、ネコ、ウマ、ウシ、ニホンジカ、計10種を同定した。現代ではサルやネコを食用とする習慣はないが、食用とならないわけではない。平安時代、鎌倉時代、室町時代の遺構から動物遺存体が出土しており、時期別にみれば鎌倉時代のものが多い。平安時代後期の遺構で海産のアカニシが出土しており、続く鎌倉時代でもアカニシのほかマダイが出土している。京都の中世遺跡でアカニシが出土することは珍しくないが、魚骨の出土は稀であり、今回のマダイの出土は、中世京都における海産物流通を具体的に証明するものとして貴重である。貝類は平安時代後期から鎌倉時代はアカガイだけであったのが、室町時代になるとハマグリがとって代わる。出土量が少数であり、具体的な要因は明らかではないが、当地における食材利用の相違を反映していると考えられる。

獣類のウマやウシは使役されたものが、最終的に京内で解体、投棄されたことを示唆する。なかでも平安時代後期の土坑5227出土のウシの中手骨は鋸で切断されており、近世遺構から出土する骨製品の廃材と類似する。近畿地方では骨製品の素材に牛馬骨を一般的に使用するの近世以降であり、当資料は平安時代後期まで遡る貴重な例である。しかしながら、1点のみの出土であり、大規模な骨細工工房を想定することは難しく、屋敷地内における小規模な製作とみられる。

特筆されるのはネコの出土であり、鎌倉時代後半から室町時代前期の遺構から出土している。現在は、長崎県壱岐島のカラカミ遺跡で出土した弥生時代後期のネコが最古級と位置づけられ（宮本編2008）、その後の平安時代の遺跡から少数の出土が確認できる程度である（西本2007）。平安京跡では近世の遺構からネコが出土することは珍しくないが、中世に遡るネコは稀である。出土状況から埋葬とは考えられず、どのような経緯で投棄されたのかは明らかでないが、愛玩用、ネズミ除けなどが考えられる。あるいは散乱状態で部分骨だけの出土であることから、他の獣類とかわらず食用（薬用含む）となった可能性もある。

3. まとめ

当遺跡では、平安時代後期、鎌倉時代、室町時代の中世の動物遺存体を同定した。内陸に位置する京都において海産物が流通していたことを実証するものを含み、中世都市としての物資の集散を窺うことができる。平安時代後期にはウシを骨製品の素材としており、近世に先駆けて牛馬骨利用が明らかになった。また、中世の京内にネコが存在しており、絵巻物などにも登場するネコについて考古学的な研究は不十分であり、平安京における人とネコの関係にも注目する必要がある。

参考文献

西本豊弘2007「観音寺遺跡出土の動物遺体」『観音寺遺跡（Ⅳ）』第2分冊観察表・写真図版編 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター pp.203-219

宮本一夫編2008『壱岐カラカミ遺跡Ⅰ』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうしぼういっちょうあと・おどいあと							
書名	平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2018-13							
編著者名	山本雅和							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2019年12月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 おどいあと 御土居跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 しちじょうどおりあいのまち 七条通間之町 ひがしいるざいもくちょう 東入材木町 ばんちほか 503番地他	26100	1 149	34度 59分 20秒	135度 45分 42秒	2015年5月 7日～2015 年11月24日、 2018年2月 1日～2018 年9月30日	4,050㎡	開発計画
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 御土居跡	都城跡 土塁跡	弥生時代 ～奈良時代 平安時代前期 ～中期 平安時代後期 ～鎌倉時代前半 鎌倉時代後半 ～室町時代前期 室町時代中期 ～後期 安土桃山時代 ～江戸時代	土坑、流路 建物、井戸、土坑、 溝 甕列、井戸、土坑 建物、地業、柱穴 列、甕列、井戸、 土坑、竈 池、井戸、土坑 井戸	土器類、土製品、石製 品 土器類、瓦、土製品、 石製品、金属製品、木 製品 土器類、瓦、土製品、 石製品、金属製品、木 製品 土器類、瓦、土製品、 石製品、ガラス製品、 金属製品、木製品 土器類、瓦、土製品、 石製品、金属製品、木 製品 土器類、瓦、土製品、 石製品、金属製品		平安時代前期の建物を 検出した。 酒の醸造や金属製品 生産などの商工業に 関連する遺構・遺物 を確認した。 金光寺の遺構を検出 し、その変遷が明らか となった。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-13

平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡

発行日 2019年12月27日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961